

聖闘士星矢 x 戦姫絶唱シンフォギア 13番目の黄金聖衣

アンドロイドQ14

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

冥王ハーデスとの壮絶な戦いから1年が経過した星矢達は敵の襲撃に備えて己を鍛えつつ、平和な一時を過ごしていた。

しかし、人類の敵ノイズ、第13番目の黄金聖衣、蛇遺座の黄金聖衣の存在、そして謎の存在ファイネの出現により、戦姫達と共に新たな戦いの中へ飛び込んでいく事となった。

## 目次

プロローグ	13	番目の黄金聖衣	1
1話	12	戦姫と聖闘士の共同戦線	12
2話	27	新たな戦姫	27
3話	40	戦士達の遭遇	40
4話	56	亀裂	56
5話	73	暴走する撃槍、砕ける絶剣	73
6話	84	響の決意	84
7話	97	デュランダル	97
8話	116	すれ違い	116
9話	132	イチイバルの少女	132
10話	149	親友	149
11話	166	翼の復帰ライブ	166
12話	181	手と手を取り合って	181
13話	198	フイーネの正体	198
14話	213	カ・ディングル発射!	213
15話	225	不屈の闘志	225
16話	243	最終決戦	243
エピローグ	260	新たなる黄金聖闘士	260

## プロローグ 13番目の黄金聖衣

ギリシャ 古代遺跡

それは、12年も前の事だった。とあるギリシャの古代遺跡で調査をしていた調査隊は遺跡を調査していた所、あるものを発見した。

調査員A「おい、これは何だ!？」

調査員の1人があるものを発見した事を仲間に報告し、調査隊が集まっていた。

調査員B「綺麗だ…。まるで、太陽のように輝いている黄金の箱だ…」

それは、誰もが見とれるほどの眩い輝きを持つ黄金の箱だった。その箱を調査隊のリーダーが見つめていたのであった。

聖域

そして、時が流れて冥王ハーデスとの戦いから1年が経過した聖域では、現代のアテナ、城戸沙織は今までの出来事を思い出しながら入浴していた。

沙織「(あれから1年経過したのですか…。楽しい時はあつという間に過ぎ、辛い戦いは長く感じるのが不思議ですね…)」

一方、生き残った白銀聖闘士の魔鈴とシャイナは空を眺めていた。

シャイナ「魔鈴、あの激しい戦いの数々からもう1年も経つのか…」

魔鈴「そうね。そして、戦いによって多くの聖闘士が命を落とした…」

シャイナ「黄金聖闘士が全滅した以上、新しい黄金聖闘士は誰にするのやら…」

魔鈴「今の状況での新しい黄金聖闘士の候補は星矢達しかいないよ」

シャイナ「星矢達が黄金聖闘士の候補というのはあたしも同じだよ。実力も申し分ない。壊された黄金聖衣の修復もぼちぼち進んでるようだし、後はセブンスセンスとやらを完全にものにしてしまえば、黄金聖衣も正式な持ち主と認めてくれるだろうよ。魔鈴も自慢の

弟子がそろそろ黄金聖闘士になるのがうれしいだろう?」

魔鈴「それについては否定しないよ。それに、星矢も自分なりにセブンセンスズをものにしてようと自主練をしてるみたいさ」

クールながらも、温かく弟子の成長を見守る魔鈴であった。一方、星矢はセブンセンスズを完全にものにすべく、目隠しをして走り込みなどをしていた。その様子を紫龍達は見ており、瞬は何かの勉強をしていた。

氷河「星矢の奴、また目隠しをして走り込みをやってるな」

紫龍「俺は何度も目が見えなくなったからな。目が見えなかった時の苦しみを忘れないように、そしてセブンセンスズをものにするためにも、目隠しして日常生活を送ったりするっていうのもいいアイデアだと思うな」

瞬「僕もそう思うよ。シャカも目を閉じて小宇宙を高めていたし、感覚の一つを閉じて修行するのは、目隠しをするというのが一番やりやすい方法だよ」

氷河「そういう瞬は何の勉強だ?」

瞬「医者になるための勉強だよ。僕達は戦う事やそれに関する事しか学んでないから、小宇宙を使って敵を倒すだけでなく、何か人の命を救う事ができたらって思ってる…」

紫龍「瞬の性格的には医者は向いているだろう。それに、一輝も医者勉強に関しては文句を言うどころか、勧めそうだよ」

瞬「(兄さん、今はどこにいるのかな…?)」

目隠しをしていた星矢だが、数々の激戦や戦いが終わってから1年間の間に徐々にセブンセンスズを常に維持する事ができるようになっていたため、目隠しをしても周りが見えていた。

星矢「(目隠しをしてもだいたい見えるようになってきたぞ。シャカの天舞法輪で五感を剥奪されたサガ達もこんな感じで十二宮を進んでいたのか…?)」

そう考えながら星矢は聖域内を走っていたが、その際に沙織が入浴していた建物の上を走って通り過ぎようとした時、偶然崩れかけていた所に足を踏み入れてしまい、落っこちてしまった。

星矢「どわあああつ!!」

急に誰かが落ちてきたため、沙織は敵が侵入したと判断し、警戒した。

沙織「誰ですか!?!」

落ちてきたのが星矢である事に沙織は安心したものの、星矢は沙織の裸を見てしまい、沙織は星矢に裸を見られて互いに気が動転していた。

星矢「さささささ、沙織さんの…裸…!!!」

ただでさえ沙織に想いを寄せていた星矢は沙織の美しい裸を見てしまい、鼻血を吹いて倒れてしまった。同じように星矢に想いを寄せる沙織も裸を見られ、顔が真っ赤になって倒れてしまった。ちょうど沙織の様子を見に来た秘書の美衣は鼻血を吹いて倒れた星矢と赤面して倒れた沙織に驚愕した。

美衣「沙織様、どうなされたのですか!?!」

その後、互いに気を失って倒れていた星矢と沙織は目を覚ました。目を覚ました星矢の目の前にいたのは、いかにも怒っている美衣であつた。

美衣「星矢さん、あなたは沙織様の裸が見たくて突入したのでしよう!?!」

星矢「違う違う!あれは事故なんだ!」

沙織「美衣さん、星矢は器用な嘘はつけません!それに、あれは本当に事故なので許してあげてください」

美衣「…まあ、星矢さんの言ってる事も嘘ではないようですし、今回は沙織様に免じて許しましょう。ですが、次やったら命はないと思いなさい!」

沙織に免じて星矢を許す事にしたが、美衣の警告は星矢をビビらせるのに十分であつた。

星矢「沙織さん…、その…」

沙織「あれは事故なので、あなたを責めません。星矢こそ、いつもの目隠しをしての走り込みなのですか?」

星矢「ああ。もうアイオリア達もいなくなつた今、俺達が中心に

なつて邪悪な敵と戦わなくちゃいけないんだ。だから、セブンセンスを完全にものにするためにも、さっきのをやってたんだ」

沙織「星矢にしては考えましたね」

星矢「いつも感覚の一つを閉じておけば早くものにできるんじゃないかと思つてな」

互いにひかれあつている星矢と沙織の様子を紫龍達と美衣は見ていた。

紫龍「沙織さんと星矢は小さい頃は反発し合つていたが、今となつては、星矢は沙織さんのお気に入りであると共に、神と人間の立場を超えて想いを寄せ合う仲になつたな…」

美衣「この光景を邪武が見ていたら、大いに嫉妬していただしようね」

瞬「小さい時から邪武は沙織さんに従順だつたから、反発気味の星矢が気に入られた事に凹んでると思うよ」

その話をしているのと同時に別の場所にいた邪武はくしゃみをした。

氷河「そういう紫龍だつて、春麗というとびっきりの彼女がいるじゃないか」

その指摘には紫龍は嫌な顔をするどころか、笑みを浮かべた。恋の話で盛り上がつてる時に辰巳が来た。

辰巳「お嬢様、1週間後は特異災害機動部二課との話し合いとなっております。護衛の星矢達を連れて城戸邸に戻つて支度をしましなう」

沙織「そうですね」

星矢「辰巳、沙織さん、その特異災害機動部二課と何か話し合いをするのか？」

沙織「はい。実は、以前からある事で二課から協力の要請が来ていたのです」

瞬「その特異災害機動部二課って、何なのですか？」

沙織「二課はとある特異災害に対処するために作られた組織です。星矢、あなた達はその二課と共にその人類を脅かす特異災害、ノイズ

と戦わなくてはなりません」

氷河「ノイズだっ!?」

紫龍「ノイズ…。今は亡き老師から聞いた事がある。人間だけを襲い、接触した人間を炭素の塊に変えて殺してしまう化け物だと」

星矢「そんな化け物を野放しにできねえな…!」

ノイズへの闘志を燃やす星矢達であった。

辰巳「それとお嬢様、気になるニュースが…」

そのニュースと言える新聞を辰巳が見せた。

沙織「…『またしても蛇遺座の黄金聖衣強奪未遂!聖衣の呪いは未だ消えず…!』またですか…!」

深刻な様子になっていいる沙織が気になった星矢達は新聞を見た。すると、星矢達は『蛇遺い座の黄金聖衣』に反応した。

星矢「蛇遺座の黄金聖衣!?なんで13番目の黄金聖衣があるんだ!?そもそも蛇遺座は白銀聖衣で、今の蛇遺座の聖闘士はシャイナさんのはずだ!」

紫龍「…俺は修行していた頃に一度だけ、老師から蛇遺座の黄金聖闘士の伝説を聞いた事がある。かつて神話の時代、聖域には第十三番目の宮があり、天蠍宮と人馬宮の間に蛇夫宮と呼ばれる宮があった。その宮を守護した黄金聖闘士は13人の黄金聖闘士の中でも最も仁智勇に優れ、気高い行いと全ての傷ついた者達を癒し、病に苦しむ人々を救い、いつしか神と呼ばれるようになった。だが、やがて本当に人から神になろうとした増長した蛇遺座の黄金聖闘士は神々の怒りを買う、聖域を覆われてその存在さえも消された…」

氷河「神話の時代には蛇遺座の黄金聖闘士がいたとは…」  
13番目の黄金聖衣があった事自体、星矢達には驚きの事実であった。

星矢「沙織さん、その聖衣について何か知ってるのか?」

沙織「申し訳ありません。私はその事に関しては何も知らないのです…」

紫龍「なら、辰巳は何か聞いているのか?」

辰巳「蛇遺座の黄金聖衣は今から12年前、光政様がアイオロスか



らお嬢様を託されて2年経った後にギリシャの古代遺跡の発掘調査をしていたグールド財団の調査団が発見したものだ」

氷河「13番目の黄金聖衣が見つかったのに、よく聖域は動かなかったな」

紫龍「蛇遣座の黄金聖衣が実在している事を知っていたのは恐らく、老師とシオンぐらいだろう。シオンを暗殺して教皇に成り代わったサガは両方の人格がそんな話なんて信じていなかったから、見つけた聖衣は偽物だと思って動かなかったのだろう」

瞬「蛇遣座の黄金聖衣が見つかった時はニュースになったの？」

辰巳「当時はまだギャラクシアンウォーズは企画されておらず、聖闘士も世間に知られていなかったから、蛇遣座の黄金聖衣は公には未知の秘宝という形で大きなニュースになったんだ」

星矢「そんな時は未知の秘宝って言われた割に、辰巳が持つてる新聞には『聖衣の呪いは未だ消えず…!』ってあつたけど、その原因は何だ？」

辰巳「…この聖衣が見つかったから、光政様はギャラクシアンウォーズを企画する際、景品として決勝に進んだ2人の聖闘士に片方に射手座の黄金聖衣を、もう片方に蛇遣座の黄金聖衣を与えようと企画した。だが、蛇遣座の黄金聖衣を悪用しようとする国家の工作員達や特殊部隊、犯罪組織が聖衣を盗み出そうとしたんだ」

紫龍「それで、聖衣は盗まれたのか？」

辰巳「いや、盗もうとした者達は全員不審な死を遂げた。おまけに、蛇遣座の黄金聖衣を調べようとした科学者までもが不可解な死に方をしたんだ。そういった事件が多発した挙句、いつしか蛇遣座の黄金聖衣は関係者の間で『呪われた聖衣』と呼ばれるようになり、その事に頭を悩ませた光政様は苦渋の決断として蛇遣座の黄金聖衣をギャラクシアンウォーズの景品にするのはやめ、調査隊のリーダーの櫻井了子女史に渡して調べさせる事にした。この噂が一気に世間に広まったのがギャラクシアンウォーズが開催されてからだ。だが、不思議な事に櫻井女史だけは噂されている呪いによって死亡せず、今に至っている」

紫龍「我が物にしようとした輩や、調べようとした人はみんな死んでしまう…。呪われた聖衣と言われてもおかしくないな…（しかし、調査隊のリーダーの櫻井了子だけはなぜ噂されている呪いで死なないんだ…？何か、その奪おうとした奴等や科学者達の不審な死と何か関わりでも…）」

関わりと不可解な死に方をする蛇遺座の黄金聖衣に星矢達はぞつとしていた。

星矢「聖衣を悪用しようとする国とか言ってたけど、世界の国々のお偉いさんはギャラクシアンウォーズ以前に聖闘士を知ってるのか？」

沙織「知っています。サガとの戦いの後、関係者から聞いた話では、ずつと以前から世界各国の政府は聖闘士の存在を知っていて、秘密裏に処理できない事件が起こった際は聖域からの避難誘導等の依頼を政府や政府関係者が引き受けたり、逆に各国政府が事件解決の依頼をする事もあるそうです」

氷河「これほど聖闘士が世界各国の政府と繋がりがあつたのは意外だな」

沙織「第二次世界大戦の時でも独裁者のヒトラーやスターリンでさえ、聖闘士が介入してくるのを非常に恐れて動向を常に伺っていたそうで、世界各国の表舞台への影響力もあつた事が伺えます。アメリカをはじめとする大国は聖衣の悪用により、聖闘士が襲ってくるのを恐れて聖衣を盗まないようにしているようですが、軍事力を欲する国は聖衣を悪用しようと考えているのでしよう」

星矢「けど、暗黒聖闘士の時とは事情が違うんだ。小宇宙を燃やせない奴等が聖衣を手にしたって、宝の持ち腐れになるのがオチさ。聖衣を盗もうとする国のお偉いさんは途方もないバカだな」

美衣「確かに暗黒聖闘士などと違って小宇宙を燃やせない人では黄金聖衣を持っていても宝の持ち腐れです。ですが、油断は禁物です。例えば小宇宙を燃やせずとも、何かしらの形で力を引き出し、悪用するかも知れません」

星矢「その線もあり得そうだな…」

紫龍「美衣の言う通りだ。天才科学者辺りは何かやらかす可能性も否定できない」

紫龍の言った事に一同は頷いた。

沙織「蛇遣座の黄金聖衣が呪われているかどうかは定かではありませんが、未だに悪用されていないのは事実です。それでは皆さん、支度をして日本へ赴きましょう」

星矢「久しぶりの日本だ。姉さんや美穂ちゃん達は待ちわびてるだろうなあ」

星矢にとつて、たった一人の肉親である姉や幼馴染との再会にワクワクし、仲間達と共に日本に向かう支度をした。

日本

一方、日本では私立リディアン音楽院という学校の周辺でノイズが出現し、特異災害機動部二課が対処にあたっていた。そして、シンフォギア適合者の風鳴翼が現場に来た。

翼「♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪」

翼が歌い始めると光輝き、蒼と白の鎧を纏い、刀を持って次々とノイズを切り捨てていった。そして、ノイズを殲滅したのであった。

??? 『ご苦労だったな』

翼「これより、帰還します」

ノイズを殲滅した後、翼は特異災害機動部二課の本部に帰還した。そこには、司令の風鳴弦十郎と腹心の緒方慎次をはじめとするメンバーがいた。

慎次「この所、リディアン周辺にノイズが出没するようになりましたね」

翼「ノイズがどれだけ現れようとも、私が倒します」

弦十郎「だが、翼だけではいずれ限界が来る」

慎次「そのため、司令は助っ人を呼ぶ事にしました」

翼「ノイズに対抗できるのはシンフォギアシステムだけです。他には対抗手段はありません！」

弦十郎「いや、シンフォギア以外にも古来よりノイズに対抗できる

希望がたった一つだが残されていた」

翼「シンフォギア以外にノイズに対抗できる希望…、ですか…？」

弦十郎「それは…アテナの聖闘士だ！」

突拍子もない事を言われても、翼は聖闘士がノイズに対抗できる希望だとは思えなかった。

翼「しかし、聖闘士は伝説の存在。実在しているわけがありません！」

弦十郎「いや、聖闘士は実在している。歴史上においてもナポレオンの挫折、元寇の敗北、古代ローマ帝国の崩壊、これらは全て歴史の影で聖闘士が成し遂げた事だ。それに、近頃でも世界的な大洪水や日食が止まったのも聖闘士のお陰だ。聖闘士はノイズに対抗できたという古来の文書さえも残っているほどだ。後、翼はライブとか戦いで忙しくて知らないだろうが、聖闘士による格闘技、ギャラクシアンウォーズが開催されてから、世間でも認知度は高くなったんだ」

慎次「それに、聖闘士を束ねる女神アテナは日本のある人物に育てられたので、そこをあたれば協力の要請も可能です」

翼「…古来より聖闘士が歴史の影で世界の平和を守ってきたというのはわかりました。ですが、聖闘士がどういった戦士なのか、実力はどれほどのものかをこの目で見るまでは助っ人として信用できません。私を話し合いに同行させていただけませんか？」

弦十郎「いいだろう。話し合いは1週間後だ」

翼「櫻井女史は今日はお休みなのですか？」

弦十郎「ああ。プライベートの用事があるそうだ」

???

星矢達の仲間にしてアンドロメダ瞬の兄、一輝は聖衣箱を背負っていつもの単独行動を行っており、夜になったため、近くの森で野宿していた。

一輝「(星空も綺麗だな…。俺は群れるのは嫌いだ、たまには瞬に会いに行くとするか)」

???'「うわああああっ!!」

星空を眺めながら寝ようとしていた一輝だったが、突然の悲鳴に跳ね起きた。

一輝「何だ!？」

急いで駆け付けたが、そこで一輝が見たものは、ノイズに襲われて逃げている特殊部隊だった。

兵士「死にたくないよ〜!」

兵士の悲鳴に意も介さずにノイズは次々と兵士達を炭素の塊に変えて殺していった。

兵士「ひ、ひいいいっ!!」

仲間が全滅し、1人残った兵士にノイズが襲い掛かろうとした。

???「とああああっ!!」

しかし、ノイズは一輝に倒された。

一輝「大丈夫か？」

兵士「あ、ああ……」

あまりの恐怖に兵士は答える事さえできなかった。

一輝「ノイズか……」

いつの間にか、一輝はノイズに取り囲まれた。

一輝「貴様らが束になってかかろうとも無駄だ。一気に片付ける!」

不死鳥のように一輝は手を羽ばたかせるような動きをした。

一輝「鳳翼天翔!!」

鳳翼天翔により、ノイズ達は全滅した。

一輝「もう大丈夫だ。それより、何があつた？」

兵士「ファイ……ファイネ……」

一輝「ファイネ？」

そう言っって恐怖のあまり、兵士は気を失った。

一輝「(ファイネ……。一体、何なんだ?)」

疑問に思う一輝だったが、何かいる事に気付いた。

一輝「そこにいるのはわかってる。隠れてないで出てこい」

一気に呼ばれ、鎧を纏った少女が出てきた。

一輝「あの鎧は聖衣はおろか、今まで見てきた神闘士や海闘士、冥

闘士の鎧とは全く異なる鎧だ。一体、何だ?」

少女「オツサンが1人で何やってんだ?」

一輝「…生憎だが、俺はまだ10代だ」

少女「10代!? そんな面を見て信じられるわけねえだろ! とにかく、ぶっ飛びな!」

少女は鎧の鞭で一輝を攻撃しようとしたが、全で一輝に掴まれた。

少女「攻撃を全部受け止めやがった!」

一輝「そんな武器では俺は倒せん!」

そう言つて一輝は拳圧だけで少女を上空に高々と吹っ飛ばした。

少女「うわあああつ!!」

一輝「俺は例え女が相手でも容赦しない」

そう言つた後、高々と吹っ飛ばされた少女は頭から地面に落つこちた。

少女「いててて…。今日は挨拶代わりにここで帰らせてもらうよ」

一輝との絶大な力の差を感じ取つた少女は逃走した。

一輝「(あいつは何者だ?あの兵士が言つていたファイネについて調べれば、何かがわかるかも知れん。そして、ある程度調べたら星矢達と合流しよう)」

1人生き残つた兵士を上司の元に帰した後、兵士の言つていた『ファイネ』について一輝は調べる事にした。そんな一輝の姿を遠くから望遠鏡でプラチナヘアアの大人の女性がみつめていたのであつた。

???「やるじゃない、フェニックス。聖衣なしで赤子の手をひねるよ  
うにネフシユタンの鎧を纏つたクリスを一蹴するなんて。でも、冥王  
ハーデスとの戦いでもう黄金聖闘士はいない。例え伝説の青銅聖闘  
士が邪魔をした所で、私の野望は止められないわよ」

そう言つて女は去つたのであつた。呪われた蛇遺座の黄金聖衣、ノ  
イズ、ファイネ、星矢達の新たな戦いの幕開けと共にこれらの謎が入  
り混じろうとしていた。

# 1話 戦姫と聖闘士の共同戦線

リディアン

私立リディアン音楽院では、入学式を控え、少女2人が引越しの準備をしていた。

響「待つてよく、未来!!」

未来「響が寝坊するのが悪いじゃない!」

そう言いながらも2人は微笑ましい様子で準備をしていたが、途中で響は転んでしまった。

響「いてっ!」

転んだ響はペガサスのタグを落としたりした。

響「よかつた、あの人にもらったタグが壊れてなくて!」

未来「このタグをくれた人って、あの人達だよね?」

響「うん。私を地獄の日々から救ってくれた人...!」

回想

それは、2年前のツヴァイウィングのライブの際、ノイズ襲撃から生き延びた響は激しいバッシング等を受けるといふ、地獄の日々を過ごしていた。それからしばらく後、バッシングをする人々の姿を偶然通りかかった星矢と沙織が目撃した。

沙織「車を止めてください」

運転手は車を止め、星矢と沙織は降りてバッシングを浴びせる人々の所へ来た。そこには、バッシングを受けて泣いている響の姿があった。

星矢「あいつら...、何の罪もない女の子を泣かせやがって...!」

人々に激怒した星矢と沙織は響を庇うように立ち上がった。

民衆「なんだ、てめえは!そいつを庇い建てるのか!」

星矢「ああ、そうだぜ。こんな人数で何の罪もない女の子をいじめるなんて、性根が腐ってるんじゃないのか?」

民衆「何の事情も知らない奴が口を挟むんじゃない!」

沙織「皆さん、このようなみつももない事をして恥ずかしくないの

ですか!?この子には何の罪もないのです!この子を責め立てるのであれば、私にバッシングをしなさい!」

沙織の一喝で民衆は怯むと共に、顔を見て驚いた。

民衆A「あの女、グラード財団の総帥、城戸沙織じゃないのか!」

民衆B「だとしても、あいつを庇い建てするのなら、誰であろうと許すな!」

結局、民衆は沙織の話を書き聞かなかった。それどころか、暴徒化した1人が沙織に殴りかかったが、星矢にボコボコにされた。

民衆「こ、こいつ、強え…!」

沙織「先に手を出した以上、あなた達には容赦はしません!星矢、恥ずべき行為を行う彼等を懲らしめなさい!」

星矢「任しとけて、沙織さん!」

数で民衆は星矢と沙織に襲い掛かったが、星矢によつてあつけなく返り討ちにあつた。

民衆「ば、化け物だ…!」

星矢「この子をいじめるのをやめるなら、これくらいで勘弁してやるぜ。どうする?」

民衆「くそっ!!」

星矢に恐れをなした民衆は逃げていった。

響「助けてくれて…、ありがとう…!その…:どうして私を…。私を庇ったらあなた達が…」

星矢「あんな風にひどい事をされてる人を助けるのに理由があるのか?」

沙織「あなたが気にする事はありません。私達は人として当然の事をしたまです。あなたにバッシングする人々の矛先が私達に向けられるのは迷惑ではなく、好都合です」

星矢「それじゃ、俺達は帰るぜ。もし、またいじめられでもしたら、沙織さんの家に遠慮なく電話してくれよ。俺達も力になるからさ」

沙織の家の電話番号を書いた紙を響に渡した後、星矢と沙織は帰ったのであつた。そして翌日、響を庇った沙織はマスコミやツヴァイウィングのライブの際のノイズ襲撃事件の遺族などからのバッシング



の矛先が向けられた。

遺族「なんであいつを庇い建てしたんだ！俺達の怒りや悲しみを金と力で踏み躪る気か！」

沙織「踏み躪っているのはあなた達の方です！彼女は何の罪も犯していません！なのに、その理不尽な怒りと憎しみをぶつけるあなた達は何なのですか!?!その姿勢を改めないのであれば、私は断固として法廷の場でも戦います！」

激しい言い争いになったものの、結局は忽然とした態度を貫き、響を庇い続けた沙織の勝利に終わった。自分を地獄の日々から救ってくれた星矢と沙織に大きな恩を抱いた響は未来と共に城戸邸に来た。

沙織「あなたは、あの時の……」

響「私、立花響と言います！星矢さん、沙織さん……私を助けてくれて、ありがとうございます！その……どんなお礼をしたらいいのかな……」

星矢「お礼なんていらないよ。君がこうやって来てくれただけでもお礼も同然さ」

沙織「遠い所からわざわざ来たので、あなたにこれをお渡しします」  
わざわざお礼を言いに来た響に沙織はペガサスのタグを渡した。

未来「これは何ですか？」

星矢「これは俺達からのお守りさ。大事にしろよな？」

響「はい！」

お守りをもらった響は嬉しそうに未来と共に帰ったのであった。

未来「あの人達のお陰で地獄の日々が終わってよかったね」

響「うん。星矢さんと沙織さんには私じゃどう頑張っても返しきれない恩があるよ。星矢さんは王子様みたいだし、沙織さんは女神様みたい……」

未来「確かに、星矢さんは王子様みたいで、沙織さんは女神様みたいだったね。でも、きちんと勉強しなきゃね」

その言葉に響は苦い顔をしたのであった。

## 城戸邸

星矢達は沙織がグレード財団総帥の仕事で特定災害対策機動部二課との話し合いがあるために日本の城戸邸に滞在する事となったため、護衛も兼ねて同行し、星矢は目隠しをしてマラソンをやり、マラソンが終わって屋敷に戻ってきた。

二百数十年周期で行われた冥王ハーデスとの戦いは遂に星矢達の代でアテナと星矢達が冥王ハーデスを倒し、長きに渡る因縁の聖戦は終わった。しかし、その聖戦の前に起こった双子座のサガによる内乱や聖戦の際の嘆きの壁の破壊による黄金聖闘士の全滅などがあり、内乱の被害や長きに渡る聖戦を終わらせた代償はあまりにも大きかった。黄金聖闘士の全滅により、事実上の聖域最高戦力となった星矢達の責任は以前にも増して重大となった

星矢「あれから、もう1年か…。激しい戦いも今になればあつという間だったな…」

瞬「うん…。十二宮での戦いも、海底神殿での戦いも、冥界での戦いも何日も経ったようで、あつという間だったよ…」

氷河「因縁の敵は葬られたが、その代償はあまりにも大きかった…。紫龍「今度は残された俺達がこの世の邪悪な敵と戦うなり、新たな若き聖闘士達を鍛え上げるなりしていかなければならない」

星矢「それより、俺達の聖衣の修復はどうなんだ？」

紫龍「貴鬼の修行が終わる前にムウは死んでしまったからな。まだ未熟ながらも、貴鬼は全力で修復技術を覚えて修復しようとしている。俺達と同行したから聖衣の修復状況を聞いてみたが、俺達の聖衣の修復はもう99%終わっているが、黄金聖衣の修復の方は1年経っても射手座と天秤座、水瓶座が70%といった所で、乙女座と獅子座はまだだそうだ」

氷河「完全に碎かれた黄金聖衣に必要な血は俺達が提供するしかないか…」

???「私をお忘れですか？」

星矢達が話している所に沙織と秘書の美衣が来た。

星矢「沙織さん！」

沙織「無理に星矢達が命に係わるほどの血を提供しなくても、私の血ならちよつとだけで大丈夫なのですよ。既に射手座と天秤座と水瓶座の黄金聖衣へ私の血を提供しました。聖衣を蘇らせるのに必要であれば、私は献血など躊躇いません」

星矢「そういう沙織さんこそ、無茶も程々にしてくれよ。沙織さんは俺達を気遣って1人で敵の本拠地に突撃してピンチに陥る事はよくあったからな」

瞬「これからは僕達の事も頼っていいんですよ」

沙織「うふふつ、1本取られてしまいましたね」

星矢の指摘に沙織も笑ったのであった。

美衣「沙織様、今日は特異災害対策機動部二課の方々との話し合いがありますよ。そろそろこちらにお見えになります」

沙織「わかりました、美衣さん。皆さん、私は特異災害対策機動部二課と話し合いをしますよ」

美衣と共に沙織は話し合いに行った。

瞬「もし、この状況でポセイドンやハーデスみたいな新たな敵が出てきたら、聖衣を修復に出している僕達は生身で戦わなくてはならない。星矢やみんなも聖衣を着けている状態のような無理はできないよ」

星矢「確かにやばいけど、そういった時に敵が出てくるかも知れないんだぞ。そんな時はそんな時だ」

瞬「それはそうだけど…」

城戸邸の別の部屋では、師のムウが亡くなってから貴鬼は必死で聖衣の修復の仕方を学んでいた。

貴鬼「もうムウ様はいないんだ…。星矢達の聖衣やタナトスにぶつ壊された黄金聖衣を元通りにするためにも、そしてムウ様の聖衣を継ぐのに相応しい聖闘士になるためにも、泣き言は言ってられないぞ！」

そう言ったものの、戦闘面での修行は星矢達がつけてくれるが、聖闘士として、修復師としての修行を終える前にムウが亡くなったショックは大きかった。

貴鬼「ムウ様…」

???「坊や、泣いたって何も始まらないのよ」

そんな貴鬼を励ますかのような温かい声が聞こえた。その声の主は科学者のような女性だった。

貴鬼「おばさん、誰？」

了子「お、おば…?! 私は出来る女、櫻井了子よ！次からはおばさんじゃなくて、お姉さんというのよ」

おばさんと言われた事に了子はショックを受け、二度とおばさんと言われないように自己紹介したのであった。

貴鬼「おいら、貴鬼。今、聖衣の修復の仕方を学んでる所」

了子「黄金聖衣…」

修復している最中の射手座の黄金聖衣を見た了子は何やら笑みを浮かべた。

貴鬼「どうしたんだ？」

了子「あ、いや、何でもないわ！つい、完全聖遺物と勘違いしちゃって…！」

貴鬼「その完全聖遺物って何だよ。おいら、知らねえぞ」

了子「ま、教える機会があったら教えるわ。それと、聖衣を修復したいのなら、気持ちを一ラックスさせ、精神を集中してやるのよ」

貴鬼「聖衣、修復できるのか？」

了子「ちよつと道具を貸して。やり方のコツを教えるから」  
適当に誤魔化した後、了子は貴鬼から修復用の道具を借りた。

了子「こんな風に…ね！」

精神を集中させて了子が聖衣の修復のやり方の手本を見せたが、その挙動はムウにも匹敵するものだった。

貴鬼「す、すげえ！ムウ様と同じぐらいすげえや！」

了子「ま、ざつとこんな風にやるのよ。さ、坊やもやってごらんなさい」

了子の手本を見せてもらった貴鬼は早速、同じように始めた。すると、聖衣を修復できた。

貴鬼「ほんとに聖衣の修復ができた！このペースなら、星矢達の聖

衣は今日中に修復が終わりそうだな。ありがとう、お婆…いや、お姉さん！」

了子「いいねえ！筋がいいわよ！それじゃあ、私は沙織お嬢さんに用があるから、ここで失礼するわねえん！」

微笑んで貴鬼のいる部屋を後にした了子だが、部屋を出てからは貴鬼と一緒にいた時とは違う笑みを浮かべた。

了子「坊や、私が聖衣の修復のコツを教えたから、頑張つて黄金聖衣を修復するのよ。そうしたら…」

???「櫻井女史、どこをほつつき歩いているんですか!?!あなたが来なかったら特異災害対策機動部二課と沙織お嬢様との話し合いが始まりませんよ！」

了子「すみません、辰巳さん！今から行きます〜！」

辰巳に呼ばれて了子は慌てて沙織の部屋に来た。その場には二課の司令官である風鳴弦十郎とその腹心の緒川慎次もいた。

弦十郎「グラード財団の総帥が代替わりされてから初めてお会いになれて光栄です、沙織お嬢様。私は特異災害対策機動部二課司令、風鳴弦十郎です」

慎次「自分は緒川慎次です」

了子「私は櫻井了子よおん」

沙織「あなた達の事はお爺様から聞いております」

弦十郎「光政様ですか。我々に様々な資金を支援して下さったあなたの方が亡くなられた事は遺憾に思います…」

沙織「そうですか。弦十郎さんがこちらに来られたのはどのような要件ですか？」

弦十郎「実は…特異災害であるノイズの対策のために、聖闘士の力を貸していただけじゃないでしょうか？沙織お嬢様。いえ、女神アテナ」

沙織「なぜ…、私がアテナだと知っているのですか？」

慎次「我々の捜査力と情報収集能力を侮つてはいけませんよ。それに、既にお気づきだと思いますが、聖闘士の存在はギャラクシアンウォーズ以前から各国政府も知っているのです」

弦十郎「あなた方は冥王ハーデスとの聖戦の後で壊滅的被害を受けて余裕がないのは知っております。ですが、ノイズも放つてはおけない人類の敵なのです。どうか、力を貸してください」

弦十郎からの頼みに沙織の答えは既に決まっていた。

沙織「わかりました。ノイズの存在は人類の敵だとお爺様から聞いております。私達も協力しましょう」

弦十郎「ありがとうございます、沙織お嬢様」

星矢達の方はゆっくりしていた。そこへ、ある人物が入ってきた。

星矢「あんたは…?」

翼「私は風鳴翼。あなた達に聞きたいのですが、伝説の青銅聖闘士の星矢、瞬、氷河、紫龍の4人はどこに待機しているのですか?」

星矢「聖闘士?俺達を探してるのか?」

翼は目の前にいる自分と同じぐらいか、19か20ぐらいに見える星矢達が聖闘士だという事に驚いていた。

翼「こ、この4人が…かつて海神ポセイドンや冥王ハーデスの軍勢をことごとく打ち倒した伝説の青銅聖闘士なのか?!?だが、報告ではあと一人、一輝という男がいるようだ…」

瞬「僕達をじつと見つめているのはどうしてかな?」

翼「い、いえ、私はポセイドンやハーデスを打ち倒した聖闘士は歴戦の勇士だと聞いて、てっきり私達の二課の風鳴司令のような屈強な男の集まりではないかと思っていたから、想像とのギャップに拍子抜けしてしまつて…」

氷河「こう見えても、俺達は非常に強いぞ。勝負は顔で決まるつて市が言っていたが、人を見た目だけで判断するのはよくないからな」

翼「は、はあ…」

翼から見たら、星矢達の見た目は同年代の男子に比べると屈強ではあるものの、とても歴戦の勇士とは思えなかった。

星矢「それに、俺達は堅っ苦しいのは苦手なんだ。砕けた感じで話してくれよ」

翼「わかった。星矢達に聞きたいのだが、年齢はいくつなんだ?」

紫龍「年齢は俺と氷河は今年で15、星矢と瞬は14歳になる。あ

と、単独行動をしている一輝は16歳だ」

翼「じゅ、10代半ば!？」

どう見ても自分と同じぐらいか、20歳ぐらいにしか見えない星矢達が自分より年下だという事実には翼はまたしても驚き、今度は表情さえ崩した。

氷河「何を勝手に驚いてるんだ？翼」

翼「すまん。ところで、お前達は星座を象る聖衣という鎧を纏うそうだが、その鎧はどこにあるんだ？」

星矢「冥王ハーデスとの戦いで、損傷が激しくて、今は修復中。貴鬼の話じゃ、俺達の聖衣はあと少しで修復が終わるって言ってたぜ」

翼「そうか…」

瞬「翼さん、もしかして聖衣を見たかったんじゃない？」

翼「そ、それもあるが、修復中なら仕方あるまい」

そう言うてはいたが、本心では一目でも見たかったようであった。しかし、ある知らせが翼に入った。

翼「これは…!」

その知らせは話し合いをしていた沙織達にも入った。

美衣「グラード財団秘密基地より緊急連絡です!この街にノイズ出現との報告です!」

弦十郎「ノイズがこの街に現れただど!？」

慎次「座標を特定します!」

手持ちのノートパソコンで慎次はノイズの出現ポイントを特定した。

弦十郎「この近くには星の子学園があるぞ!」

??「そこには美穂ちゃんや姉さんがいるんだ!」

声と共に星矢達が入ってきた。

弦十郎「君はあの…」

星矢「沙織さん、すぐに俺達を出撃させてくれ!このままだと、姉さんや美穂ちゃん達が!」

沙織「わかりました。ですが、今の星矢達は聖衣は修復中です。くれぐれも無理をはいけませんよ」

星矢「サンキュー！」

翼「では、私も出撃します！」

弦十郎「よし！奏者、及び聖闘士、出撃！」

指揮を弦十郎がとる事となり、翼と星矢達は出撃した。翼はバイクで向かったが、星矢達は自分の足で走って向かった。

翼「まだ聖衣は修復中なのだぞ！生身で大丈夫なのか？」

星矢「あんた、俺達を聖衣がなきや、何もできない一般人だと思いだんでないか？そうだと思ったら大間違いだぜ」

翼「それはどういう…」

紫龍「俺達の戦いを見ればわかる。だが、今は現場に急行するのが先だ！」

翼「(どうなっているんだ？この4人は乗り物に乗っていないのに車より速く走れるなんて…。やはり、聖闘士は生身の状態でも拳は空を裂き、大地を割る事が可能なのか…?)」

翼は聖闘士はシンフォギア適合者の自分のように特殊な力を秘めた鎧を纏って戦う戦士だと思っていたが、星矢の言った事はホラ吹きではないと思い始めたのであった。

#### 星の子学園

星矢の我が家ともいえる星の子学園では、ノイズが襲撃していた。

美穂「みんな、急いで逃げて！」

美穂と星華は子供達の避難誘導を行っていたが、最後の1人の誘導が終わろうとしていた時にノイズが襲撃してきた。

星華「きやあああつ!!」

??「ペガサス、流星拳!!」

ノイズの群れが触れようとしたその時、無数の光速のパンチでノイズの群れは倒された。その攻撃をしたのは、星矢であった。

星華「星矢！」

美穂「星矢ちゃん！」

星矢「姉さんと美穂ちゃんは急いで避難するんだ！こいつらは俺と仲間達がやっつける！」



星華と美穂はそのまま避難した。そして、仲間達が遅れて到着した。

氷河「姉さんの危機とあらば、星矢は光の速さで駆け付けたな」

翼「(ひ、光の速さ!?)」

瞬「こいつらがノイズなんだね?翼さん」

翼「ああ。こいつらは災害でしかない。止めに躊躇などいらんぞ!」

そうやって、翼は歌で変身し、次々とノイズを切り捨てていった。

瞬「うん!僕も人を脅かすノイズには一切の情けはかけない!最初から全開で行くよ!」

???'『みんな、聖衣の修復が終わったから、すぐに送るぞ!』

貴鬼からのテレパシーが星矢達に聞こえ、星矢達の前に修復が終わった聖衣が転送された。

翼「これが聖衣!」

星矢「サンキュー、貴鬼!ペガサス!」

紫龍「ドラゴン!」

氷河「キグナス!」

瞬「アンドロメダ!」

星矢達が叫ぶとそれぞれのオブジェ形態の聖衣がバラバラになり、装着された。

瞬「ネビュラチェーン!」

ネビュラチェーンで次々とノイズを一掃していった。

紫龍「俺達も星矢や瞬に負けてられないぞ!」

そうやってノイズを何体か倒した後、紫龍はいつもの癖で聖衣を脱ぎ、本気の際の上半身裸のスタイルになった。逞しい体を露わにした上半身裸の紫龍の肉体美は翼にとっては毒も同然だった。

翼「(な、何?!なぜ裸になったんだ!?)」

紫龍の脱ぎ癖には幼い頃から防人としての訓練を受け、抑え込んで来たはずの翼の思春期の心呼び覚まし、紫龍の上半身裸に仰天して顔を赤くし、顔を背けてしまった。

紫龍「廬山、龍飛翔!!」

紫龍の技を受けたノイズ達は盛大に吹っ飛び、頭が地面にぶつかってから消滅した。

翼「氷河、紫龍はなぜ脱いだんだ？」

氷河「紫龍の師からの教えだ。紫龍は本気になる際は必ずといっていい程、聖衣を脱ぎ、上半身裸になって自らを追い込み、戦うんだ」

翼「は、はあ…」

氷河「おっと、呑気に話をしている場合ではないようだ」

迫るノイズを見た氷河は小宇宙を高め、ダイヤモンドダストを放つ際に翼からしたら奇妙な踊りにしか見えない動きをした。

氷河「ダイヤモンド、ダストオ!!」

放たれた凍気でノイズたちは凍って消滅した。氷河の技を出す前の動きに翼は戦いを忘れ、見とれていた。

翼「(氷河は技を出す前にこんなにも奇妙な踊りをするのか!?)というか、星矢達はハチャメチャだし、年長2人が特にまともじゃない!!)」

星矢達のトンデモ戦闘力と紫龍の脱ぎっぷり、そして氷河の奇妙な踊りに翼はあつけにとられていた。そして、星矢達がノイズを殲滅して一切の犠牲を出さずに星の子学園を救った。

美穂「ありがとう、星矢ちゃん」

星矢「ここは我が家みたいな所だからな。身近な人や大切な人を守れないようじゃ、地上の愛と平和を守れはしない」

翼「(大切な人…か…)」

その言葉を聞いた翼は2年前に死亡した相棒の奏の事を思い出していた。

星華「星矢、世界の平和を守るために戦うのはいいけど、たまにはここにも顔を出しなさいよ」

星矢「わかつてるよ、姉さん。姉さんや美穂ちゃん達も、ノイズに気を付けるんだぞ」

戦いが終わり、城戸邸へ帰る星矢達を星華と美穂は見送った。

翼「あの人が星矢のお姉さんなのか？」

紫龍「ああ、そうだ。星矢が聖闘士になったのも、沙織さんの育て

の祖父である城戸光政に引き取られて姉と引き離された際に『聖闘士になってペガサスの聖衣を日本に持って帰れたら姉と再会させる』という条件で聖闘士になったんだ」

氷河「だが、星矢の姉は星矢がギリシャに出発した際に後を追ってギリシャに向かったが、事故で記憶を失い、聖域の近くの村で過ごしていたんだ。ハーデスとの戦いの際に星矢の師の魔鈴さんが見つけて無事に再会できたという訳だ」

翼「大切な人とまた会うために聖闘士になった…か…。聖闘士になるための修行は想像を絶する程厳しいと聞いている。そんな厳しい修行を耐え、聖闘士となって数々の悪と戦い抜いてきた星矢達はやはり、歴戦の勇士そのものだ…」

初めは星矢達を歴戦の勇士だと思えなかった翼だったが、星矢達の戦いぶりや星矢が聖闘士になった理由を聞き、歴戦の勇士だと認めたのであった。

瞬「翼さん、これからも僕達と一緒にノイズから人々を守るために戦おう」

翼「…ああ（奏、急に脱いだり、変な踊りをしたりとおかしな所はあるが、死んだお前と同じぐらい頼りになる仲間ができた。これからも、私は防人として、ノイズと戦う。だから、見守っていてくれ…）」  
すぐに上半身裸になる紫龍や奇妙な踊りにしか見えない動きをする氷河など、奇抜な所はあるが実力は確かな星矢達を仲間と認めたのであった。

## 城戸邸

沙織達の方は専用のドローンで星矢達の戦いの一部始終を見ていたのであった。

弦十郎「やはり、伝説の青銅聖闘士は伊達ではないな。あつという間にノイズを一掃した」

沙織「当然です。彼等は私と共に様々な強敵を相手に戦い抜いてきたのですから」

弦十郎「この世に邪悪が蔓延る時、必ず現れる希望の闘士とはまさ

にこの事だ」

了子「あの紫龍つて子、とつても逞しい体を晒してるわね。私も対抗して脱いじゃおうかしらあ？」

戦闘の際に上半身裸になる事が多い紫龍への対抗心を燃やした了子はなんと上着を脱いで自慢のボディラインを晒し、上半身裸になろうとした。しかし、それらは他のメンバーに阻まれる事となった。

慎次「了子さん、いけません！」

美衣「こんな場所で上半身裸になるなんてみつともないですよ！」

了子「あら、残念……」

お茶目に凹む了子だったが、沙織に冷たい視線を一瞬だが浴びせた。その視線に沙織も気付いた。

沙織「(あの人……)」

弦十郎「まあ、伝説の青銅聖闘士の実力は見せてもらった。これなら、翼の心強い助っ人になるだろう」

沙織「了子さん、お爺様から託された蛇遺座の黄金聖衣は何かわかった事がありましたか？世間では呪われた聖衣と言われているので、神話の時代の時の装着者の怨念が残っていたりとか……」

了子「う〜ん……、何年も調べてみたんだけど、呪いとかは特になかったわ。ただの思い違いじゃないかしら？」

沙織「だといいのですが……」

弦十郎「(呪われた聖衣か……。聖衣は完全聖遺物のリストにも入っている上、他の聖遺物と違い、特定の修復師による修復も可能な珍しい代物だ。神話の時代から存在している代物だから、俺達じゃどう調べてもわからん事が多いだろうな……)」

慎次「しかし、司令が聖闘士は古来からのノイズに対抗できる希望と言っていたのですが、今回の戦いでそれが確信できました。櫻井女史は科学的に考えてどのようにして聖闘士はノイズを倒したのかわかりましたか？」

了子「ノイズは位相差障壁で通常兵器は全くといっていい程効かないから、それを無効化するシンフォギアシステムが唯一の対抗策だけど、聖闘士は小宇宙という力で炭素化を防ぎ、小宇宙による攻撃で無

理矢理位相差障壁破っているのよ。つまり、ノイズの特性を無効化するシンフォギアシステムとは真逆で力押ししてわけ。しかも、通常の青銅聖闘士レベルの攻撃力や防御力では小型ノイズはともかく、大型のノイズ相手だと下手をしたら返り討ちに遭うのがオチよ」

弦十郎「流石は了子君だな」

そう言っていると、星矢達が帰ってきた。

星矢「あんたがその2課ってとこのリーダーか？」

美衣「星矢さん、礼儀が」

弦十郎「堅つ苦しい話し方はしなくていい。ドローンを通して星矢達の活躍を見せてもらった。これからもノイズ討伐を頼むぞ」

星矢「任せとけて！」

氷河「俺達がいれば百人力、いや、千人力だろうな」

こうして、星矢達と特異災害対策機動部二課の共同戦線が張られる事となった。そして、複数の歯車もまた、組み合わさろうとしていた。

## 2話 新たな戦姫

リディアン

城戸邸に訪問した弦十郎達は翌日、星矢達を特異災害対策機動部2課の本部へ案内した。

星矢「ここって、学校じゃねえか」

瞬「ここにあなた達の基地があるのですか？」

弦十郎「ああ。意外だと思ったか？そういう星矢達の秘密基地こそ、俺は驚いたぞ。まさか、グラードコロッセオが秘密基地になっていたとはな」

沙織「はい」

星矢達はリディアンに入ろうとしたが、リディアンの生徒は星矢達に釘付けだった。

女子A「ねえ、あの人達って、グラード財団総帥の城戸沙織お嬢様とギヤラクシアンウォーズに出た聖闘士じゃないの!?!あのイケメン達をボディガードとして連れてくる沙織お嬢様って、イケメンハーレムが好きなのかしら？」

女子B「私、瞬様が好き!あの顔立ち男の人とは思えない美しさよ!」

女子C「私は氷河様よ!あのクールさがいいわ!」

女子D「あたしは紫龍様!あの肉体美は素敵よ!」

星矢達に釘付けになっている生徒達に響と未来も加わった。

響「あの人って：星矢さんと沙織さんだ!」

未来「こんな所でまた会えるなんて思ってたね、響!」

響「星矢さくん!沙織さくん!」

手を振っている響に星矢と沙織は反応し、手を上げた。

女子A「ねえ、響は星矢さんと沙織お嬢様に直接会った事があるの?」

響「うん。あの人達は私を助けてくれた恩人なの。このお守りもあの人達からもらったんだ」

そう言って響は1年前に沙織からもらったお守りを見せた。

女子B「私もあんな感じのお守りをもらいたいなあ。私は白鳥のお守りがほしい！」

騒ぐ中、星矢達はリディアンの下にある特異災害対策機動部二課の本部へ向かった。

#### 特異災害対策機動部二課

案内されて来た本部に星矢達は驚いた。

星矢「へえー、学校の真下にあんた達の基地があつたのか」

弦十郎「まあな。それと、昨日は城戸邸に来ていなくて紹介していなかったメンバーを紹介しよう。オペレーター藤堯朔也と友里あおいだ」

朔也「よろしく」

あおい「まさか、アテナの聖闘士とご対面できるなんて光栄です！握手をしてください！」

二課の女性隊員達は美形揃いの星矢達に握手を求め、星矢達はそれに応じた。

氷河「あんた達が俺達に協力を要請したのは、やはり翼だけでは厳しいからか？」

弦十郎「ああ、そうだ。それに、聖遺物やシンフォギアの適合者というのは簡単に見つかるものはない。だからこそ、シンフォギアシステム以外でノイズと対抗できたというアテナの聖闘士に協力を依頼せざるを得なかったからだ」

紫龍「今まではノイズはどれぐらい発生したんですか？」

慎次「通常、ノイズとの遭遇率は通り魔に遭遇するよりも低いとされています。しかし、リディアンの辺りでの発生数は明らかに異常です」

慎次の説明に合わせ、モニターで発生が示された。

沙織「明らかに異常としか言いようがありませんね」

瞬「あなた達だけでは対処しきれないから、僕達に協力を依頼したのがわかります」

星矢「後、俺と沙織さんは1年前に何かよくわからん理由でバツシ

ングを受けている女の子を助けたんだけど、何が原因だったんだ？」  
弦十郎「…あれは、今から2年前に遡る。翼を始めとする我々にとっても、非常に嫌な惨劇だった…」

## 回想

2年前の事だった。響はツヴァイウイングのライブに来ており、翼達はライブの準備をしていた。

弦十郎『それは、翼と今は亡き翼の相棒、奏のユニット、ツヴァイウイングのライブとそれと並行して行っていた完全聖遺物、ネフシユタンの鎧の起動実験の際に起こった』

奏「間が持たないっていうか、何ていうかさ、開演するまでのこの時間が苦手なんだよねえ」

翼「うん…」

奏「こちとら、さっさと大暴れしたいのに、そいつもままならねえ」

翼「そうだね…」

奏「ん？もしかして翼、緊張とかしちやったり？」

翼「当たり前でしょ!?!櫻井女史も今日は大事だって…」

弱気な翼に奏はデコピンした。

奏「かあくくつ、真面目がすぎるねえく！」

弦十郎「奏、翼、ここにいたのか？」

その場に弦十郎が来た。

翼「司令！」

奏「これまた弦十郎のダンナ！」

弦十郎「わかってると思うが今日は…」

奏「大事だつて言いたいだろう? わかってるから、大丈夫だって！」

弦十郎「わかってるなら、それでいい。今日のライブが、人類の未来をかけてる。つてな」

ライブの準備と共に、ネフシユタンの鎧の起動実験の準備も整いつつあった。

了子『まいど、櫻井了子です! こちらの準備は完了よ』

弦十郎「わかった。すぐに向かおう」



奏「ステージの上は、任せてくれ！」

そして、響は会場に入り、翼と奏はライブの準備をしていた。

奏「さて、難しい事はダンナや了子さんに任せてさ、あたしらはパートと！」

しかし、ライブ前の翼は弱気だった。そんな翼を奏は抱き締めた。

奏「真面目がすぎるぞ、翼。あんまりガチガチだと、そのうちポツキリいつちやいそうだ」

翼「…奏…」

奏「私の相棒は翼なんだから、翼までそんな顔をしてると、あたしも楽しめない」

翼「………うん。私達が楽しまないと、ライブに来てくれたみんな

も、楽しめないよね…」

奏「わかってるじゃねえか」

翼「奏と一緒になら、何とかかなりそうな気がする！」

奏「うん」

翼「行こう、奏」

奏「ああ！あたしと翼、両翼揃ったツヴァイウイングなら、どこへでも飛んでいける！」

翼「どんなものでも、越えてみせる！」

そして、ライブが始まり、会場の観客のボルテージは上がっていった。

翼&奏「♪~~~~♪~~~~♪」

響「(ドキドキして、目が離せない！凄いよ、これがライブなんだ！)」

一方、ネフシユタンの鎧の起動実験の方も順調だった。

朔也「フォニツクゲイン、想定内の伸び率を示しています」

了子「成功、みたいね。お疲れ様！」

ネフシユタンの鎧の起動実験が成功したと思い、一同はほっとした。

奏「まだまだ行くぞ〜っ！」

ライブは続いた。しかし、成功したと思ったら、異常が発生し始め

た。

弦十郎「どうした!？」

朔也「上昇するエネルギー内圧に、セーフティが持ちこたえられませんでした!」

あおい「このままだと聖遺物は起動、いえ、暴走します!」

結局、セーフティはエネルギー内圧に耐え切れずにネフシユタンの鎧は暴走してしまい、ライブ会場は大爆発を起こした。

奏「ノイズが来る!」

突如、ノイズがライブ会場に襲来した。

観客「ノイズだあ~~~~っ!!」

急なノイズの襲来に観客たちは逃げ惑い、逃げ遅れた観客から次々とノイズに炭素化され、殺されていった。

奏「飛ぶぞ、翼!この場に槍と剣を携えているのは、あたし達だけだ!」

翼「で、でも司令からは何も。奏!」

翼の制止も聞かず、奏は飛び出した。

奏「♪~~~~♪~~~~♪」

戦いの歌を歌い、ギアを纏って槍を手にノイズへ向かっていった。翼もギアを纏い、ノイズと戦い始めた。一方、鎧が暴走した事で、起

動実験に携わった二課の生き残りは弦十郎と了子ぐら이었다。

弦十郎「了子君…、無事か…?」

そんな弦十郎の目に起動したネフシユタンの鎧の姿があった。

弦十郎「ネフシユタンの…」

その頃、奏と翼は戦い続けていた。人々は逃げる中、響はツヴァイウイングの2人に見とれて逃げていなかった。

響「あれは……」

奏と翼はノイズを倒し続けていたが、素から高い適合率を誇る翼と違い、薬で無理矢理ギアと適合した奏はライブの日はあまり薬を服用していなかったため、いつもより短時間で稼働時間も終わってしまった。

奏「時限式はここまでかよ……!」



紫龍「だが、もう翼は1人ではない。俺達が新しい仲間なのだから。あんまり1人で抱え込むな」

翼「わかっている…」

氷河「(翼は奏の死を乗り越える事ができていないから、どこか影のある態度をとるのか…)」

7歳の頃に事故により、目の前で母親のナターシャを失い、そして聖闘士になってからシベリアでサガの幻隴魔皇拳によって洗脳された水晶聖闘士と、聖域でカミュと、そして海底神殿でアイザックと戦わなくてはならなくなり、かけがえのない師や兄弟子を自分の手で葬った氷河には翼の相棒である奏を失った心境が嫌というほど理解できた。

リディアン 寮

今日の入学式が終わり、響と未来は寮に帰ってきた。

響「ぶは〜っ、疲れた〜！星矢さんと沙織さんにまた会えて最高の日になると思ったけど、入学初日からクライマックスが百連発気分だよ〜！私、呪われてる〜？？」

未来「半分は響のドジだけど、残りはいつものお節介でしょ？」

響「人助けと言つてよ、人助けは私の趣味なんだから…。星矢さんと沙織さんみたいにかっこよく」

未来「響の場合、度が過ぎてるの。あの時、響を助けてくれた沙織さんや星矢さんでもそこは弁えているのよ。同じクラスの子に自分の教科書貸さないでしょ？普通」

響「私は未来から見せてもらうからいいんだよ〜」

未来「…バカ」

響の態度に未来は呆れていると、響はあるものを拾った。

響「おお!!CD発売はもう明日だっけ!?ほっほ〜、やっぱり翼さんは星矢さんや沙織さんと同じぐらいかっこいいなあ…!」

未来「…翼さんに憧れて、リディアンに進学したんだもんね。大したものだよ」

響「だけど、影すらお目にかかれなかった…。そりゃあ、トップア―

テイストなんだから、簡単に会えるなんて思っていないけどさ……」

それから、響は2年前にできた胸の古傷を見た。

響「あの日、私を助けてくれたのは、ツヴァイウイングの2人之間違ひなかつた……。だけど、退院してから聞いたニュースは、奏さんや多くの人が世界災厄であるノイズの犠牲になつた事だけ。戦つていくツヴァイウイング、あれは幻……？ 私が翼さんに会いたいのは、あの日、何が起こっていたのか、わかるような気がしていたから……」

そして、夜になり、響は未来と一緒に寝たのであつた。

リディアン周辺

その夜、リディアン周辺の街でノイズが出現したため、翼と星矢達が出撃する事となつた。

隊員「おお、風鳴翼にアテナの聖闘士だ！」

翼「♪♪♪♪♪」

グラード財団所有のヘリで翼と星矢達は降り、それぞれの鎧を纏つた。

弦十郎『みんな、連携して被害を最小限に留め、ノイズを殲滅せよ！』

星矢「まかしとけ！」

翼「行くわよ、みんな！」

星矢達はノイズの大群に向かっていった。

星矢「ペガサス、流星拳！」

一番先に先陣を切つたのは星矢であり、星矢は流星拳で早速ノイズの群れをあっという間に消滅させた。翼もそれに遅れて蒼ノ一閃等の技でノイズをなぎ倒していった。

翼「昨日もだけど、星矢の流星拳という技はあまりにもスピードが速すぎて、何が起こつたのかわからないわ……！」

もともと流星拳はマツハの拳の連打で翼には速すぎて見えないのだが、セブンセンシズの常時維持が可能になりつつある星矢の流星拳は普段でも光速に近づきつつあつて更にスピードが速すぎるため、聖闘士ではない翼は何が起こつたのかわからなかつた。

瞬「ネビユラチエーン！」

瞬は次々とチェーンで倒していき、翼が死角からノイズの不意討ちを受けそうになった時は、そのノイズをチェーンで弾いて翼を守った。

翼「援護、感謝する…！」

瞬「翼さんもあまり無理をしないで、仲間になった僕達をもう少し頼ってもいいんだよ」

翼「…わかつている…」

翼は瞬と共にノイズの群れに突っ込んでいった。

紫龍「廬山、龍飛翔！」

氷河「ダイヤモンド、ダストオ！」

紫龍と氷河は広域の敵をなぎ倒すのにつけてつけの技で次々とノイズを倒していき、ものの数分程度で出現したノイズは全滅した。

隊員「なんという戦闘力だ…。これほどの数のノイズを赤子の手を捻るように倒してしまうとは…。これが…アテナの聖闘士なのか…？」

慎次『お疲れ様です。皆さん、帰投してください』

翼「了解」

星矢「そんじゃ、帰ってから飯にでもするか！」

氷河「戦闘でまだ晩飯も食べてないし、腹も減ったからな」

星矢達は夕食をまだ食べていないため、帰投と共に夕食をとる事にした。

食堂

戦いが終わった星矢達は沙織があらかじめ予約を入れていた食堂で夕食をとっていた。そこには思わぬ人もいた。

紫龍「春麗も来ていたのか」

春麗「老師もいなくなったから、紫龍と一緒にいようと思って…」

紫龍「ありがとう。俺の隣に座るといい」

早速、春麗は紫龍の隣の席に座った。

美衣「この食堂はお勧めだったので、予約を入れておきました。い

かがでしたか？皆さん」

星矢「この飯、うまいな！事前にここに予約入れといてくれてサンキュー、沙織さん！」

沙織「いえ、星矢達がおいしく食事をとっているだけでも私は嬉しいのです。しつかり食べて戦いに備えましょう」

微笑ましく食事をとる星矢達に沙織は微笑んで星矢の隣の席に座り、一緒に食事をとった。そんな中、星矢達とある程度離れた席で食べている翼は楽しく食べている星矢達を凝視していた。

翼「：私も、奏が生きていた頃は星矢達のように2人で楽しく食べてたな…。もう、あの頃には戻れない…」

楽しかった過去の思い出を思い出し、翼の目に涙が溜まっていた。そんな翼の様子に瞬は気付いた。

瞬「翼さん、泣いているのですか？」

翼「私は泣いてなどいない！防人は、涙など流さない…！」

翼の様子に瞬はそれ以上聞くような事はしなかった。

リディアン

そして翌日…、昼食の際に未来はスマホでニュースを見ていた。

未来「自衛隊、特異災害対策機動部により避難誘導は完了しており、被害は物的被害、人的被害共にゼロになった、だって。ここからそう離れていないね」

響「うん…」

女子生徒A「風鳴翼よ！」

女子生徒B「芸能人オーラ出まくりで近寄りたくて、孤高の歌姫といった所ね！」

翼が来たという事に気付いた響は翼に会おうとしたが、翼は目前におり、響は緊張してろくに話せなかった。

響「あ、あの…」

響の顔を見た翼はジェスチャーで響の頬にご飯粒がついている事を教えた。それから夕方…

響「ああ…、ダメだ…。翼さんに完璧おかしな子だと思われた…」

未来「間違っていないからいいんじゃない?」

響「それ、もう少しかかりそう…?」

未来「ん?ああ、そっか。今日は翼さんのCD発売の日だったね。でも、今時CD?」

響「うるさいなあ。初回特典の充実度が違うんだよ、CDは!」

未来「だとしたら、売り切れちゃうんじゃない?」

響「えっ!」

リディアン周辺

慌てて響はCDを買いに行った。

響「CD、特典!CD、特典!」

CDを買いに急ぐ最中、響はノイズによって炭素分解されて殺された人々の姿を目の当たりにしてしまった。そして、悲鳴が聞こえた。

響「……ノイズ!」

特異災害対策機動部二課

星矢達はいつでもノイズの出現に備えて指令室で待機していた。

そして、ノイズ出現により、翼も来た。

あおい「状況を教えてください」

朔也「現在、反応を絞り込み、位置の特定を最優先としています」

星矢「またお出ましか…!」

氷河「出ても俺達が倒すまでだ…!」

星矢達のコンディションは万全であり、闘志も燃えていた。

リディアン周辺

その頃、響は逃げ遅れた子供と共にノイズから逃げていた。しかし、抜けた通路の先にはノイズが挟み撃ちにして待っていた。

子供「お姉ちゃん…!」

響「大丈夫、お姉ちゃんが一緒だから…!」

逃げ場がなかったため、響は水の中に飛び込み、別のルートから逃げた。



響「シエルターから離れちゃうけど…！」

走り続けていたが、疲労で転んでしまった。

奏『生きるのを諦めるな！』

2年前の奏の言葉を思い出し、星矢と沙織からもらったお守りに目を通した響は必死で逃げ続けた。

響「あの日、あの時、間違はなく私はあの人に救われた。私を救ってくれたあの人は、とても優しく、力強い歌を口ずさんでいた」  
何とか屋上へ逃れる事に成功した。

子供「死んじやうの…？」

子供の問いかけに響は首を横に振って安心させようとしたが、既にノイズの群れは目の前におり、絶望的な状況だった。

響「(私にできる事は…、できる事がきつとあるはずだ！) 生きるのを諦めないで！」

すると、響は無意識に歌を口ずさんだ。

響「♪♪♪♪♪」

歌を口ずさんだ途端、オレンジの光が放出された。

特異災害対策機動部二課

そのエネルギー反応は二課でも探知された。

あおい「反応、絞り込みました！位置特定！」

朔也「ノイズとは異なる高出力エネルギーを検知！」

了子「波形の照合、急いで！」

波形を照合させた了子は驚いた。

了子「まさか、これって…！」

弦十郎「 GANG ニールだど!？」

弦十郎の話は星矢達にも聞こえていた。そして、翼は衝撃を受けていた。

氷河「紫龍、確かGANGニールは…」

紫龍「二年前のツヴァイウィングのライブの際のノイズ襲撃で奏の死と共に失われたはずだ！当事者の翼もいる以上、間違いはないはずだ！」

瞬「それなのに、何で聖遺物の GANG ニールの反応が!?!」  
星矢「とにかく、現場へ行ってみなきゃわかんねえだろ! 行くぞ、みんな!」

翼「……ああ!!」

驚きつつも、翼も星矢達と共に出撃した。

リディアン周辺

光が強くなるのと共に響にも変化が現れた。

響「うわあああつ!!」

翼の変身と同じように響も機械の鎧を纏ったのであった。今、新たな戦姫が誕生したのであった。

### 3話 戦士達の遭遇

リディアン周辺

突然の出来事に響は戸惑っていた。

響「えっ?えっ?なんで!?私、どうなっちゃってるの?」

子供「お姉ちゃん、かつこいい!」

響は無意識に歌いながら色々考えていた。

響「(そうだ、何だかよくわからないけど、確かなのは…私がこの子を助けなきゃいけないって事だよね!?)」

ギアの力を制御できず、響はジャンプしたのはよかったが、そのまま真つ逆さまに落っこちたが、無事に着地した。しかし、ノイズは追いかけてきたため、すぐに横によけた。だが、そこにもノイズがいたため、響は思わずパンチを打ち込み、ノイズを倒した。

響「私が…やったの…?」

だが、響は突然の出来事でギアの力を使いこなせていないため、まともな戦いができず、すぐにノイズの大群が一斉に襲い掛かってきた。

響「い…いやあああああつ!!」

???「ペガサス、流星拳!」

逃げ場がなく、響が思わず悲鳴をあげた途端、懐かしい声がした。そして、閃光と共にノイズ達は一斉に炭素化して消滅した。

響「えっ…?」

閃光が収まると、響は鎧を纏っている上、見覚えのある人物にお姫様抱っこされていた。

???「まさか、君が GANG ニールを受け継いでいたとは…。それに、君を助けたのはこれで二度目だな」

響「あ、あなたは…星矢さん!!」

そう、響を助けたのは、かつてバッシングする大衆から響を助けた男、星矢だった。

子供「お兄ちゃん、かつこいい!」

星矢「こんな状況で子供を守り続けた君はいい子だ。ここからは俺

達が戦うから、下がってるんだ！」

響「星矢さん、その鎧は…」

星矢「これは女神アテナを守護する戦士、聖闘士が纏う聖衣。そして、俺はペガサスの聖闘士、星矢だ！」

そして、星矢の仲間達も駆け付けた。

紫龍「星矢が先行して助けたかったのは、この子か」

星矢「まあな。響の小宇宙を感じたから、急いで来たんだ」

響「(小宇宙…?)あの…、あなた達って…、星矢さんのお友達なのですか？」

瞬「そうだよ。僕は瞬」

紫龍「俺は紫龍」

氷河「氷河だ。君は下がってこの子を守ってくれ。後は俺達がノイズを倒す！」

星矢達の足があまりにも速すぎるため、結果的に翼が一番最後に来る事となった。

響「翼さんまで!？」

翼「もう、私を置いて行かないで！」

星矢「だったら、俺達の誰かがあんたをお姫様抱っこして行こうか？それだったら、あんたも置いて行かれずに済むぜ」

翼「むう…!」

星矢のからかいに翼は顔を赤くした。

氷河「やっぱり、翼も防人という割には年頃の女の子だな」

翼「と、とにかく、ここは戦場！無駄口は叩かず、敵を倒すわよ！」  
気を取り直して翼は歌を歌って変身し、一同はノイズの群れに向かっていた。

星矢「ペガサス、流星拳！」

瞬「ネビュラチェーン！」

星矢と瞬はそれぞれの技でノイズを蹴散らした。

響「何かが光って、それからは何が起こったのかわからない…。でも、星矢さんの技はカッコいい…!」

紫龍「むううっ！」

紫龍は本気になるため、聖衣を脱いで上半身裸になった。

子供「髪の毛長いお兄ちゃん、ムキムキでかっこいい！」

響「な、何で急に裸になるの!? 見てる私がつっても恥ずかしいし、鎧を脱ぎ捨てたら危ないから、ちゃんと鎧を着ようよ！」

紫龍「悪いが、これが老師の教えなのでな」

子供の方は紫龍の上半身裸に見惚れていたが、思春期真っ盛りの響には紫龍の脱衣は刺激が強すぎた。

紫龍「廬山、龍飛翔！」

そのまま紫龍はノイズをなぎ倒していった。そして、今後は氷河が謎の踊りをしたため、その動きに響が反応した。

響「ひよ、氷河さん、ノイズが目の前に迫っているのに何でバレエなんか踊っているのですか!?! しょ、正気」

氷河「俺は至って正気だ！」

響「ええくっつ!!?」

氷河「ダイヤモンド、ダストオ！」

ダイヤモンドダストでそのままノイズ達は氷漬けになり、消滅した。翼の方も次々とノイズを切り捨てていき、あっという間にノイズは全滅した。

響「す、凄い…!」

星矢との再会に星矢達聖闘士の圧倒的強さ、そして紫龍の脱ぎ癖に氷河の謎の踊りと翼の登場に響の頭の中は混乱していた。そして、戦闘の現場は一課によって立ち入り禁止にされる事となった。

星矢「ほら、あつたかい飲み物だ」

戦闘が終わり、星矢は温かい飲み物を響に渡した。

響「あ、ありがとうございます！」

1年前と今回、二度にわたって助けてくれた恩人の星矢に温かい飲み物をもたらった響は喜んで飲んだ。気が緩んだためか、変身が解けてしまった。

響「翼さん！実は翼さんに助けられたのは、これで2回目なんです！」

翼「2回目…?」

そして、響は助けた女の子とその母親の再会、機密に関する事を傍で聞いていた。

響「じゃあ、私もそろそろ…」

星矢「それが、そうもいかないぜ」

帰ろうとした響だったが、翼と黒服とサングラスの男達に包囲されていた。

翼「あなたをこのまま帰すわけにはいきません」

響「何ですか!?!」

翼「特異災害対策機動部二課まで同行していただきます」

響は手錠をかけられた。

慎次「すみませんね、あなたの身柄を拘束させていただきます」

響「なああああああつ!!!なんでくくくくつ!!!」

そのまま響は車に押し込まれ、悲鳴が木霊したのであった。車内では、星矢達が同席し、話し相手になってくれた。

響「あの…、どうして星矢さん達が翼さんと行動を…?」

紫龍「目的地にいたら教える」

氷河「今から行く場所は君も毎日行く場所だ」

響「毎日行く場所?」

リディアン

車から降りた場所はリディアンだった。

響「な、何で学院に?」

星矢「それは行ってからの楽しみだ。見慣れない人とは緊張するだろうから、俺達が傍についてるぜ」

響「(こんな状態でも、星矢さん達と一緒になら安心する…)」

慣れない事が続く中、恩人の星矢とその仲間達が傍にいてくれて響は安心した。

響「あの…ここって先生達がりう中央棟、ですよね?」

瞬「ついて来ればわかるよ」

二課の人間は答えなかったが、星矢達の方は聞かれれば答えてくれた。7人はエレベーターに入り、慎次が端末をかざすと扉が閉まり、

他には取っ手が現れた。

紫龍「その取っ手に掴まれ」

響「えっ?」

翼「星矢達はともかく、あなたは危ないから掴まりなさい」

響「え?危ないって…?うぎやあああつ!!」

物凄い勢いでエレベーターは降りて行った。

響「(星矢さん達は取っ手にも掴まらずに平然としてるなんて…)」

翼「愛想は無用よ。ここから」

瞬「響は響らしくしてればいいよ。そろそろ着くから」

翼は言おうとした事を瞬に遮られてしまった。

### 特異災害対策機動部二課

着いた先にはクラッカーが作裂してラツパが鳴り、『熱烈歓迎!立花響さま☆』の看板と『ようこそ2課へ』の看板があり、色々な人達が待っていた。

弦十郎「ようこそ!人類最後の砦、特異災害対策機動部二課へ!」  
その様子に響は驚き、翼は呆れたが、氷河が翼の肩に手を置いた。  
氷河「戦場においてはクールに徹しなければならないが、こういった所では肩の力を抜くのも大事だぞ。張り詰めすぎると余計に疲れるだけだ」

瞬「せっかくだから楽しもうよ」

氷河の師であるカミュや水晶聖闘士からの教えである『クールに徹する』はあくまでも戦いの時ぐらいであり、こういった場所では肩の力を抜くように翼に語った。

了子「さあさあ、笑って笑って♪お近づきの印にツーショット写真♪」

スマホで響とのツーショット写真をとろうとした了子だったが、響に嫌がられた。

響「ええ!?嫌です!手錠したままの写真なんてきつと悲しい思い出として残っちゃいます!それに、どうして皆さんは私の名前を知ってるんですか?」

弦十郎「我々二課の前身は大戦時に設立された特務機関なのでね、調査などお手のものなのさ」

了子「はい、これ」

弦十郎を説明しながら手品をし、了子が響の鞆を持ってきた。

響「あああつ、私の鞆!?なくにが調査はお手のものですか!!鞆の中心、勝手に調べたりして!」

沙織「星矢、そろそろ響さんの手錠を外してあげなさい」

星矢「そうだな」

そう言つて星矢は力尽くで響にかけられた手錠を外した。

慎次「(力尽くで手錠を…)」

響「て、手錠を簡単に…!凄い力持ち…!」

紫龍「俺達聖闘士にとつてはそれくらい簡単な事さ」

響「あ、ありがとうございます…」

慎次「いえ、こちらこそ失礼しました」

弦十郎「では、改めて自己紹介だ。俺は風鳴弦十郎。こここの責任者をしている」

了子「そして私は…『できる女』と評判の櫻井了子、よろしくね」

響「ああ、こちらこそよろしくお願いします」

弦十郎「君をここに呼んだのは他でもない。君に協力を要請したいのだ」

響「協力って…あつ!」

響は自分の体から生まれた鎧の事や星矢達聖闘士の事を思い出した。

響「教えてください、あれは一体何なんですか?それに、聖闘士なんてよくわからないので、そっちも」

沙織「まず、聖闘士について教えましょうか。風鳴司令もよろしいですか?」

弦十郎「いいとも」

響「お願いします!沙織さんとあと…」

美衣「私は沙織様の秘書を務めさせて頂いております、アリシア・ベネトールと申します。以後、お見知りおきを」



響「よろしくお願いします、美衣さん！」

美衣「では、説明します。この世には、あなたが先程見たノイズを始めたとする人の理解の及ばぬ邪悪なるものが存在しています。そして…、神話の時代からその邪悪と戦い続けてきたアテナという1人の女神がいました。彼女は数百年に一度地上に降臨し、『アテナの聖闘士』と呼ばれる超人的な力を持つ戦士達を従えて、悪しき神々や邪悪から地上の愛と平和を守ってきたのです。それと、聖闘士の超人的な力の源は『小宇宙』と呼ばれる己の肉体に宿る力を使う事で生み出します」

響「アテナの聖闘士…！星矢さん達って、悪い神様やノイズなどから世界を守ってきた凄い人達だったんですね!？」

星矢「いやあ、そこまで言われると照れちゃうなあ…」

瞬「確かに僕達は悪い神とかと戦ってきたけど、ノイズと戦ったのはごく最近なんだ」

響「あの…聖闘士って、女の子でもなれるんですか？」

美衣「はい。本来、聖闘士になれるのは男子だけですけど、女子でも掟で仮面を着用し、女である事を捨てればなる事ができます。それと、アテナの侍女と戦士の役割を兼任する特別枠としてセイntyアというのがありますが、セイntyアには優れた素養を持つ純潔な女子だけがなれます。私は聖闘少女にして、いるか座、ドルフィン的美丽です」

響「女の子が聖闘士になるには仮面を被るか、特別枠のセイntyアにならなきゃダメなんですね…」

美衣「その通りです」

響「あ、あと女神アテナって言ってましたけど、アテナって本当にいるのですか？まさか、女神様みたいな沙織さんが神様なわけ…」

星矢「本物の神様さ」

その言葉に響は衝撃を受けた。

響「ええ〜っつ!!?!沙織さんが本物の女神様!!?!すごい財閥の総帥

で、おまけに女神アテナ様なんて凄すぎ〜!!」

紫龍「本当さ。沙織さんこそ、現代に降臨した女神アテナの化身だ」

氷河「グラード財団の総帥になったのは、今から14年前にギリシャの聖域に降臨した際、善悪強烈な二重人格の双子座の黄金聖闘士、サガによって暗殺されそうになった所を射手座の黄金聖闘士、アイオロスによって聖域から連れ出され、追っ手によって瀕死の重傷を負ったアイオロスが偶然先代のグラード財団総帥、城戸光政と出会い、そのアテナの化身を光政に託してアイオロスは息途絶えた。アテナの化身を託された光政はその子を自分の孫娘、城戸沙織と名付けて育てたから、沙織さんはグラード財団の総帥になれたんだ」

響「必死に赤ちゃんの時の沙織さんを守り続けたアイオロスさんって、凄すぎますよ……!」

星矢「アイオロスは死んだ後もその魂は射手座の黄金聖衣に宿って、度々俺達を助けてくれるんだ。でも、1年前の戦いで他の4つの黄金聖衣と一緒に射手座の黄金聖衣はぶっ壊されちまって、今は修復中だけだな」

響「あの…アテ…」

沙織「私が女神アテナだと知っても緊張する事はありません。いつものように、『沙織さん』でよろしいですよ」

響「さ、沙織さん…。雰囲気や接し方まで女神様そのもの…!!」

星矢「(小さい時は今と違って俺達を馬にしようとしたりするワガママ放題のお嬢様だったけどな)」

沙織の女神のような優しい態度に響は感激し、その姿に星矢と沙織は微笑んでいた。

響「年齢を聞くのは失礼だと思いますけど、年齢っていくつですか？」

沙織「星矢や瞬と同じ、14歳です。紫龍と氷河は15歳、あとこの場にはいませんが、瞬の兄の一輝は16歳です」

大人びてて憧れの星矢と沙織が自分より年下であり、他の3人もまだ十代半ばという事実には響はまた衝撃を受けた。

響「ええくっくっ!!! 沙織さんと星矢さんが私より年下くっくく!!!?」

星矢「びっくりしたか？」

沙織「それでは次、いいですよ」

了子「あなたの質問に答えるためにも、二つばかりお願いがあるの。最初の一つは今日の事は誰にも内緒。そしてもう一つは……」

そう言つて了子は響の腰に手を伸ばした。

了子「とりあえず脱いでもらおうかしら？」

響「え？だから…、なんでえくくっ!!」

エレベーターにまで響の悲鳴が木霊したのであった。

リディアン 寮

色々終わり、ようやく響は女子寮に戻ってきた。

響「ただいま…」

未来「響！こんな時間までどこ行つたの!？」

戻つてきて疲れが一気に出て、リビングで倒れた。

響「ごめん…」

未来「近くでノイズがまた現れたつて、ニュースで言つてたよ」

響「うん…。もう大丈夫だから…」

テレビで翼のニュースを見てから、響は未来と一緒に寝た。

響「あのね、未来…。ううん、何でもない」

帰る前に了子に言われた事を響は思い出した。

未来「私は何でもなくない。響の帰りが遅いから、本当に心配したんだよ」

疲れたため、響はそのまま熟睡してしまった。

一方、翼の方はシャワーを浴びながら響の前の GANG ニールの奏者であり、自分の相棒であり、片翼でもある今は亡き天羽奏の事を考えていた。

奏『2人一緒なら、何も怖くないな』

その言葉は翼にとつてうれしかった。

翼「あのギアは…奏のものだ…!」

しかし、奏のギアを響が受け継いでいるのをまだ翼は受け入れられなかった。

城戸邸

その後、星矢達は城戸邸に戻ってきた。

星矢「沙織さん、響の診察の結果はいつになったらわかるんだ？」

沙織「明日にはわかるそうです」

紫龍「それにしても、一体何が原因で響はあの力を得たんだ？その答えは2年前にあるとでもいうのか…？」

氷河「紫龍、何を考えているんだ？」

紫龍「響の力の事を考えててな」

瞬「どうして響は GANG ニールを受け継いだんだろう？」

紫龍「これは俺の推測なのだが、2年前のツヴァイウイングのライブの際のノイズ襲撃事件がきっかけではないかと思っている」

星矢「2年前だって!？」

氷河「その推測は正しいのかも知れん。そうでなければ、あのごく普通の生活を送っていた少女にあんな力が手に入れられるわけがない」

沙織「紫龍の推測は私も正しいと思います。それより皆さん、今はゆっくり休み、また明日考えましょう」

次の日に備え、星矢達は寝たのであった。

リディアン

翌日の放課後、響は未来と友達の安藤創世、寺島詩織、板場弓美の誘いを断り、教室に残っていた。

響「はあ…。私、呪われてるかも…」

???「キヤー、瞬様くく!!」

女の子達の声があったためそこを向くと、そこには星矢達が来た。

詩織「あなた、あの瞬様なの!？」

弓美「一緒に写真撮ろう!」

瞬「ちよつと待っててね」

女の子たちの対応は瞬が担当し、残りの3人は響の元に来た。

星矢「もう1回本部まで来いってさ。さ、行こうぜ」

今回は星矢達と一緒に二課へ向かう事となった。

星矢「どうしたんだ？翼。可愛い後輩に」

翼「黙りなさい！」

星矢としては響と翼の親睦を深め、打ち解けさせようとしたのだが、翼は拒絶していた。その様子を他の3人は察していた。

紫龍「(翼の奴、響が受け入れられないようだな…)」

氷河「(もう奏はいないんだ。それを受け入れろ、翼…)」

特異災害対策機動部二課

再び響は二課本部にやってきた。呼び出されたのは、メデイカルチエツクの結果発表で、壁に映された結果を見ていた。

了子「それでは、先日のメデイカルチエツクの結果発表！初体験の負荷は若干残っているものの、体に異常はほぼ見られませんでした♪」

響「ほぼ…ですか？」

了子「うん、そうね。あなたが聞きたいのはこんな事じゃないわよね？」

響「教えてください、あの力の事を」

紫龍「その前に、俺の推測を聞いてくれますか？」

弦十郎「何の推測なんだ？」

紫龍「響があの力を得たきっかけは2年前のあの事件がきっかけではないでしょうか？」

紫龍の推測にこれから響に説明しようとした了子ら二課の面々は衝撃を受けた。

翼「(あの時…、だと…!?)」

了子「(あの紫龍って子、もうここまで推測ができていたなんて…!)」

弦十郎「(流石はあの天秤座の童虎の弟子で、次期天秤座の黄金聖闘士とだけはある)」

了子「当たり前よ。そこも後で説明するわね。じゃあ、今度は私達の番よ」

改めて二課の面々が説明する事となり、翼が赤い宝石のネックレスを出した。

弦十郎「『天羽々斬』。翼の持つ第一号聖遺物だ」

響「聖遺物？」

星矢「何だ？そりゃ」

了子「聖遺物とは、世界各地の伝承に伝わる現代では生成不可能な異端技術の結晶の事。多くは遺跡から発掘されるんだけど、経年による破損が著しくってかつての力をそのまま秘めたものは本当に希少な。星矢君達聖闘士が纏う鎧の聖衣もそのリストに入っているわ」  
響は星矢達が纏う聖衣が入った聖衣箱を見ていた。

弦十郎「この天羽々斬も刃の欠片。ごく一部にすぎない」

響はもちろん、星矢達にもわかりやすいように了子はモニターで説明した。

了子「欠片にほんの少し残った力を増幅して、解き放つ唯一の鍵が、特定振幅の波動なの」

響「特定振幅の波動？」

弦十郎「つまりは歌。歌の力によって聖遺物は起動するのだ」

響「歌？そういえば、あの時も胸の奥から歌が浮かんできたんです」

瞬「(だから、翼さんは戦いの最中に歌を歌っていたんだ…)」

疑問がわかって納得した星矢達だが、翼の方は機嫌が悪そうだった。

了子「歌の力で活性化した聖遺物を一度エネルギーに還元し、鎧の形にして再構成したのが翼ちゃんや響ちゃんの纏う『アンチ・ノイズ・プロテクター シンフォギア』なの」

星矢「なんか難しいけど、それを聖闘士に例えるなら、歌が小宇宙、聖遺物が聖衣ってところか？」

了子「そゆこと」

沙織「星矢にしてはよく頭で考え、わかりやすく例えましたね」

沙織の微笑みに星矢も思わず笑った。

翼「だからとて、どんな歌、誰の歌にも聖遺物を起動させる力があるわけではない！」

機嫌の悪そうな翼に場の雰囲気が変わった。

弦十郎「聖遺物を起動させ、シンフォギアを纏う歌を歌える僅かな

人間の事を我々は『適合者』と呼んでいる。それが翼であり、君であるのだ」

了子「どうかしら？あなたの目覚めた力について少しは理解してもらえたかしら？質問はドシドシ受け付けるわよ♪」

響「あの…」

了子「どうぞ、響ちゃん！」

響「全然わかりません…」

響がそう答える事は星矢達や二課の面々の予想通りであった。

星矢「そりゃ、そうだろ。俺だつてあんまりわかんねえしな…」

了子「いきなりは難しすぎちゃいましたね。だとしたら聖遺物からシンフォギアを作り出す唯一の技術、『櫻井理論』の提唱者がこの私である事だけは覚えておいてくださいね♪」

響「はあ…。でも、私は聖遺物というものを持ってません。なのに、なぜ…」

そんな響の疑問に答えるべく、今度はモニターに響の胸のレントゲン写真を映した。

弦十郎「これが何なのか君ならわかるはずだ」

響「はい、2年前の怪我です！あそこに私もいたんです！」

了子「心臓付近に複雑に食い込んでいるため、手術でも摘出不可能な無数の破片。調査の結果、この影はかつて奏ちゃんが身に纏っていた『第三号聖遺物 ガングニール』の砕けた破片であると判明しました。奏ちゃんの置き土産ね」

その事実には翼は驚愕し、頭を押さえてその場を去って行った。一方の星矢達は紫龍の推測通りである事に納得していた。

氷河「(やはり、紫龍の推測は正しかった)」

響「あの…、この力の事、誰かに話しちゃいけないでしょうか？」  
沙織「それはいけません。あなたにその力を持っている事を誰かに知られてしまったら、あなたの家族や友人、周りの人々にも危害が及び、最悪の場合は命の危険にも晒されます」

響「命に係わる…」

弦十郎「俺達を守りたいのは機密ではない、人の命だ。そのために

も、この力の事は隠し通してくれないだろうか？」

了子「あなたに秘められた力はそれだけ大きなものだとかわかってほしいの」

沙織達の言葉に響は何も言えなかった。

弦十郎「人類ではノイズに打ち勝てない。人の身でノイズに触れる事は即ち、炭となって崩れる事を意味する。そしてまた、ダメージを与える事も不可能だ。例外があるとすれば、『シンフォギア』を纏った『戦姫』と古来より聖なる鎧『聖衣』と己の肉体に秘められし力『小宇宙』を駆使し、ノイズに立ち向かう事ができた『アテナの聖闘士』だけ。日本政府特異災害対策機動部二課として改めて協力を要請したい、立花響君。君が宿したシンフォギアの力を対ノイズ戦のために役立ててくれないだろうか？」

弦十郎の頼みに響は迷ったが：

響「私の力で誰かを助けられるんですよね？」

それに星矢達は頷いた。

響「わかりました！星矢さん、紫龍さん、氷河さん、瞬さん、よろしくお願いします！」

星矢「こちらこそよろしく頼むぜ、響」

紫龍「君はまだ戦闘の経験がない。だから、無理はせずにはわからない事があったら俺達に聞くんだ」

氷河「どうにもならない時は俺達も力になる」

星矢達の優しさに響は嬉しくなり、星矢達と握手した。そして、星矢達と一緒に翼の所に来た。

響「私、戦います！」

しかし、翼は何も返さなかった。その翼の違和感にはわからず、星矢達にしかわからなかった。

響「慣れない身ではありますが、星矢さん達と一緒に頑張ります！一緒に戦えればと思います！」

響は握手を求めたが、翼は険しい顔をしてそれに応じなかった。

響「あ、あの…一緒に戦えればと…」

そんな折、突如警報が鳴って通路が少し暗くなった。



瞬「現れたみたいだよ」

星矢「今日も返り討ちにしてやるぜ！」

星矢達は闘志を燃やし、奏者達は緊張して指令室に來た。そして、出現ポイントなどを聞いた。

翼「迎え撃ちます」

星矢「沙織さん！」

沙織「ええ。皆さん、ノイズを殲滅し、人々を救うために出撃してください！」

翼は出撃し、星矢達と一緒に響も出撃しようとした。

弦十郎「待つんだ！星矢達はともかく、君の力はまだ」

響「私の力が誰かの助けになるんですよね!?シンフォギアの力でないとノイズと戦えないんですよね!?だから行きます！」

沙織「：そこまで言うのなら、出撃を許可します。星矢、響さんを手助けしてあげてください」

星矢「まかすとけて、沙織さん！」

紫龍「では、出撃します！」

そう言つて響を連れ、星矢達は出撃した。

朔也「危険を承知で誰かのためになんて、響君はいい子ですね」

沙織「果たして、そうなのでしょうか？」

あおい「どうしてですか？」

弦十郎「翼や星矢達のように幼い頃から戦士としての鍛錬を積んで來たわけではない。ついこの間まで日常の中にその身を置いていた少女が『誰かの助けになる』というだけで命をかけた戦いに赴くのは『歪な事』ではないか？」

美衣「司令のおっしゃる通りです。星矢さん達や私は聖闘士となるため、数年かけて厳しい鍛錬を積んできました。ですが、あの子は戦士になるための鍛錬を積んでいません。なのに、そんな事に赴こうとするのは、前向きに自殺しに行くようなものです」

響の姿勢を美衣は『前向きな自殺衝動』と捉え、それに弦十郎や沙織達も同意したのであった。その『前向きな自殺衝動』は紫龍も気付いていた。

星矢「どうした？紫龍」

紫龍「星矢、響のあの姿勢は俺からしたらおかしいとしか思えな。俺達は数年もの修行を経て、戦士に相応しい力と心得を身に付けて聖闘士となった。だが、響は助けになるというだけで命をかけた戦いに赴く。それは異常ではないのか？」

その紫龍の推測には星矢達も同意した。

瞬「僕から見てもおかしいと思う」

氷河「普通、怖いという感情で即答できないはずだ」

星矢「俺達がフォローしなきゃならねえみたいだな…」

響の歪さに星矢達はフォローしなければならぬと思っていたのであった。

## 4話 亀裂

ハイウェイ

その頃、星矢達は道路にいるノイズの群れと戦いを繰り返して来た。ところが、ノイズの群れは星矢達の強さを感じ取ったのか、合体して数体の巨大ノイズとなった。

星矢「群れて勝てないから、合体して俺達に挑もうっていうのか……！」

紫龍「確かに、合理的な判断だ。だが、俺達に勝てはしない！」

星矢達は向かっていった。

星矢「こんなデカけりや、あれを使うぜ！ペガサス、ローリングクラッシュ！」

ノイズの1体を掴んだ後、星矢は一気に跳び上がり、錐もみしながら落下して勢いよくノイズを地面に叩きつけた。叩きつけられたノイズはダメージに耐えられず、消滅した。

紫龍「ふつ、こんなデカブツにはこのドラゴン紫龍最大の奥義をぶつけるのにうってつけだ！廬山、昇龍覇！」

師の童虎から授けられ、数々の強敵を葬ってきた奥義、廬山昇龍覇で巨大ノイズはあつけなく消滅した。

瞬「ノイズには一切手は抜かない！ネビュラストーム！」

普段は優しすぎる性格故に滅多な事ではネビュラストームを使わない瞬だが、ノイズ相手には何のためらいもなく使用し、複数の巨大ノイズを消滅させた。

氷河「この氷河最大の拳を受けるがいい、オーロラサンダーアタック!!」

猛烈な凍気で巨大ノイズをあつけなく完全に凍らせ、消滅させたのであった。そして、翼の方も蒼ノ一閃などの技でノイズを蹴散らし、あつという間に戦いは終わった。

響「(凄い……。星矢さん達はとっても凄い……)」

星矢達の戦いぶりをみた響は星矢達に近づいた。

響「星矢さん、戦いぶりはとっても凄かったですよ！私もペガサス

流星拳をいつか習得したいです！」

星矢「できないわけじゃないけど、習得の道のりはかなり険しいぜ」

響「翼さん！私、今は足手まといかも知れませんが、一生懸命頑張ります！だから私と一緒に戦ってください！」

翼「そうね……。あなたと私、戦いましょうか」

翼は返事をしたものの、その言い方や音色に違和感を感じた星矢達は警戒した。それに気づかない響は喜んだが、振り向いた翼は響の喉元に剣を突きつけた。

特異災害対策機動部二課

その様子は二課本部でも映されていた。

弦十郎「何をやってるんだ、あいつらは!?!」

了子「青春真っ盛りって感じね♪」

様子を見かねた弦十郎は指令室を出ようとした。

沙織「弦十郎さん、急いで行ってください。このままだと、星矢達は手加減なしの制裁を翼さんに与える可能性が高いです！」

弦十郎「わかってる！誰かがあのバカ共を止めなくてはな！」

そう言って弦十郎は現場に向かった。

了子「こつちも青春してるな♪でも、気になる子よね。放っておけないタイプかも」

そう言っている了子には怪しい光が走ったが、それには沙織と美衣以外は気づかなかった。

ハイウエイ

突然の出来事に響は戸惑っていた。

響「え？そういう意味じゃありません。私は翼さんや星矢さん達と力を合わせて……」

翼「わかっているわ、そんな事」

響「だったらどうして？」

翼「私があなたと戦いたいからよ」

響「え？」

翼の言葉に響はおろか、星矢達さえ驚いていた。

翼「私はあなたを受け入れられない。力を合わせあなたと共に戦うなど、風鳴翼が許せるはずがない！」

星矢「紫龍、氷河、どうす」

ところが、星矢は紫龍と氷河に声をかけようとしたものの、怒り狂う寸前の龍のような紫龍とクールを装いながらも激怒している氷河の様子に声をかけられなかった。

翼「あなたもアームド・ギアを構えなさい。それは常在戦場の意思の体現。いや、あなたが『何者をも貫く無双の一振り ガングニール』を纏うのであれば胸の覚悟を構えてみなさい！」

響「か、覚悟とかそんな…。私、アームド・ギアなんてわかりません。わかってないのに構えるなんて！そんなの全然わかりません！」

翼「覚悟を持たずにこのこと遊び半分で戦場に立つあなたは、奏の…奏の何を受け継いでいるというの!!」

遂に敵意を露わにした翼は行動に移そうとした。しかし、突如として拳圧に吹っ飛ばされてしまった。

翼「くっ、何を…!!」

紫龍「いい加減にしろ、翼！」

拳圧で翼を吹っ飛ばしたのは紫龍であった。しかも、紫龍の目は逆鱗に触れ、怒り狂った龍の目をしていたのであった。

翼「紫龍、なぜ私を吹き飛ばした!」

紫龍「簡単な事だ、まだ響は覚悟はおろか、戦い方さえわかってないんだぞ！覚悟や戦い方を知らないのなら、お前や俺達が響に教えるしかないだろ！それなのにお前はそれをしないでどころか、大儀なきつまらん怒りを響にぶつけているだけのバカだ！」

翼「バカ…つまらん怒り…!!お前達まで…彼女に味方するのか!!奏を失った私の気持ちも否定するのか!!」

紫龍「響にもいくらかは非はあるだろう。だが、今の時点ではお前の非の方が大きい！それに、いつまでも死んだ奴に未練がましく継ぎな!!」

翼「何だと!」

紫龍の響を庇う態度と『死んだ奴に縋るな』を翼は『奏を忘れろ』と解釈し、激怒して斬りかかろうとした翼だったが、『千の落涙』や『蒼ノ一閃』を放つても紫龍に軽くあしらわれ、逆に紫龍からの制裁のパンチを腹に受けた。

翼「うわっ!!」

怒りに任せて翼は立ち上がり、再び紫龍に斬りかかろうとしたが、今度は氷河の凍結リングで動きを封じられた。

翼「なんだ、この氷の輪っかは…!？」

氷河「凍結リングだ。お前の力では破る事はできん。そして甘ったれるな、翼！俺達だって大切な人を失っている。お前は、奏が敵になつたら討てるのか!？」

翼「お前達が…大切な人を失った…!？」

氷河の言葉に翼は動揺した。

氷河「俺は…修行地のシベリアで俺を聖闘士にしてくれた先生、水晶聖闘士と、十二宮での戦いで我が師カミュと、海底神殿で兄弟子アイザックと戦わなければならなくなり、3人を自分の手で葬った…。あの3人とは戦いたくなかった…。だが、俺は迷いぬいた末、己の使命を果たすためにクールに徹し、戦い抜いた…。お前は奏と戦わなくてはならなくなつたら、迷いながらもクールに徹して討つ事ができるのか?」

実際に師や兄弟子との辛い戦いを潜り抜けて成長し、カミュに母親の遺体が安置された沈没船を更に深く沈められた事もあって海に潜って最愛の母親の遺体の元にも行かず、母親との思い出も師や兄弟子の思い出と共に胸の奥にしまっている氷河の言葉に翼はまともな反論さえできなかった。

翼「そんなの…」

氷河「翼、世の中はお前の経験した出来事以上に残酷な出来事だっていっぱいあるんだ。そして頭が冷えないのなら、永遠に溶ける事のない氷の棺にぶち込んでやろうか?」

響「氷河さん…」

自分の思っていた以上に修羅場を潜り抜けていた星矢達に響は驚

くのと同時に、永遠に溶けない氷の棺を聞いてぞっとした。そして、奏が敵になつたら戦う覚悟は翼にはなかった。そんな折、弦十郎が来た。

弦十郎「どうやら、星矢達がこの場を鎮めてくれたようだな」

翼「叔父様…」

弦十郎「じゃ、この氷の輪っかを壊すぞ。うおおおっ!!」

そう言つて弦十郎は凍結リングを破壊し、翼を解放した。

瞬「(あの人、聖闘士じゃないのに凍結リングを破壊するなんて…。多分、白銀聖闘士ぐらいの強さはあると思うな。小宇宙を扱えたら、確実に黄金聖闘士になれそうだ…)」

弦十郎「ありがとな、紫龍、氷河。お前達が止めてくれたおかげで靴を台無しにする事がなくなつた上、何本も映画を借りられるからな」

紫龍「いえ、俺達は当然の事をしたまです」

氷河「(この人、映画を見るのが好きなのか…?)」

どうでもいい事を疑問に思う氷河だったが、翼の方は顔を伏せていた。その様子は星矢達も察していた。

弦十郎「らしくないな、翼。紫龍に対して怒りに任せてぶつ放したのか?それとも…、お前泣いて」

翼「泣いてなんかいません!涙なんて流していません。風鳴翼はその身を剣と鍛えた戦士です。だから…」

響「翼さん…」

その場の面々の雰囲気は静かに、重々しくなった。

響「私、自分が全然ダメダメなのはわかってます。だからこれから一生懸命頑張つて、『奏さんの代わり』になつてみせます!」

紫龍「な…!」

響の発言に星矢達は驚いた。そして、翼は響をひっぱたこうとしたが、星矢に止められた。

星矢「それくらいで止めたらどうだ?」

星矢は止める際、紫龍達や響と共に翼が泣いていたのを目撃した。翼は弦十郎に連れていかれ、暗い様子で星矢達も帰還する事となつ

た。

リディアン

星矢達は帰る支度をしていた。

星矢「響、帰る前に言っておくぜ」

響「何ですか？」

星矢「『奏の代わり』になろうとするなよ」

響「どうして…ですか…？」

沙織「簡単な事です。人は、別の人の代わりになどなれはしないからです。あなたはあなた、奏さんは奏さんです。だからこそ、あなたは奏さんの代わりとしてではなく、あなた自身としてノイズと戦うのです」

響「私は私…」

星矢「それと、響は何のため、誰のために戦う？それをはっきり決めるんだぞ」

星矢と沙織に言われた事は響にはわからなかった。そして、星矢達は城戸邸に帰ったのであった。

風鳴邸

翼は胴着を着て真剣の前に座って瞑想し、2年前の惨劇を思い出していた。

回想

そう、それは奏が最後の手段を使って己の命と引き換えにノイズ達を全滅させた時の事だった。

翼「奏！」

奏「どこだ？翼…。真っ暗でお前の顔も見えやしない…」

翼「奏！」

奏「悪いなあ…。もう一緒に歌えないみたいだ…。」

翼「どうして…。どうしてそんな事言うの…？奏は意地悪だ…」

奏「だったら翼は…。泣き虫で弱虫だ」

翼「それでも構わない！だから…。ずっと一緒に歌ってほしい！」



奏「…知ってるか？翼。思いつきり歌うとな…、すっげえ腹減るみたいだぞ…。」

そう言って奏は涙を流した後、塵となって消えていった。

翼「奏くくくっ!!!」

瞑想を終えた翼は目を開けて真剣を抜き、ろうそくの火を斬りつけたが、火は消えなかった。

翼「(全ては、私の弱さが引き起こした事だ…)」

新しい仲間だと思っていた星矢達と響の件での衝突もあり、翼の心は再び孤独と闇に覆われていた。

リディアン周辺

それから1か月経っても響と翼の関係は一向に良くならず、バラバラに戦っていた。そして、翼は一度は星矢達を仲間と認めたものの、響の一件で星矢達は響に味方したため、信用しなくなった。

翼「(所詮、聖闘士などただの助っ人。ノイズを倒すのは私がやらなければならぬのだ…!)」

翼の戦いを紫龍と氷河は見ていた。一方、響は星矢と瞬に助けられていた。

星矢「やつぱり、響には出撃を休ませて修行させた方がいいんじゃないか？」

瞬「僕もそう思うよ。戦い方がわからないようなら、誰かに指導してもらって戦い方を学ばないと」

まともな戦いができない響の様子を見た星矢と瞬は響には修行が必要なのではと思っていた。

???

星矢達がノイズと戦いを繰り返していた頃、一輝は『フィーネ』についての手掛かりを求めて世界各国の聖遺物の研究所を手当たり次第に訪ねていた。しかし、どこを当たってもフィーネに関する手掛かりは得られなかった。そんな中…、一輝はある場所を訪ね、少女2人

と対峙していた。

一輝「お前達、切歌と調と言ってたな。ここの責任者はいるか？」

切歌「何なのデスか!? あいさつもせずに急に入り込んできて!」

調「怪しい奴だから、許さない…!」

一輝「ふつ、貴様ら2人で俺に勝てるんでも思っているのか？」

調「切ちゃん、あんな奴は私達2人なら倒せるよ! (で、でも…怖い…)」

切歌「そうデス! 根拠もない自信を持つてる奴は弱いデス! (口ではそう言つても、あの男には勝てる気がしないのデス…!)」

口では強気な事を言っていたものの、一輝の威圧感に押しつぶされそうであった。

??? 「2人共、その人と戦ってはダメ!!」

睨み合いの中、大人の女性がやってきた。

調「マリア!」

切歌「どうしてデスか!」

マリア「ママからの伝言よ! その人は私達じゃ絶対に勝てない伝説の青銅聖闘士、フェニックス一輝なのよ!」

その言葉に調と切歌は驚いた。

調「せ、聖闘士!」

切歌「初めて見るデス!」

一輝「どうやら、俺の名を知ってるようだな。そのママとやらはこの責任者なのか?」

マリア「そうよ。話があるのなら、ついてきて (…この人、聖衣とかいう鎧を纏っていないのに威圧感が凄まじすぎる…!! ネフィリムがまるで赤子同然と思える程だわ…!)」

マリア達は小宇宙を知らないものの、一輝の凄まじい実力を本能で感じ取っていた。そして、一輝は研究所の責任者、ナスターシャ教授と対面した。

ナスターシャ「あなたがあの伝説の青銅聖闘士、フェニックス一輝ですね? 私はナスターシャ。マリア達にはママと呼ばれています」

一輝「用件を言う。フィーネに関して何か知らないか?」

ナスターシャ「残念ながら、フィーネに関する情報は何もありません」

一輝「そうか…。さつきは騒がせて済まなかったな。俺はここで帰る」

ナスターシャ「ですが、数年前から日本のとある科学者が所有している13番目の黄金聖衣、蛇遺座の黄金聖衣を盗もうとしたり、調べようとした人間の変死事件が相次いで起こっています。もしかすると、それがフィーネの手掛かりになるかも知れません」

一輝「何!?! 13番目の黄金聖衣だ?!」

13番目の黄金聖衣がある事に一輝は驚いた。

ナスターシャ「私が以前、ギリシャ旅行に行った時に13人目の黄金聖闘士に関する伝説を聞いた事があります。その黄金聖衣が見つかった以上、伝説は本当なのでしょう。それと、近頃はアメリカ政府の動きも活発になっています。日本へ行けば、フィーネに関する手掛かりが見つかるでしょう」

一輝「わかった。今から日本へ向かう」

一輝は目的地を日本に決めた。そして、研究所を出る際にマリアと遭遇した。

一輝「マリアと言ったな。恐らく、今後俺とは戦場で巡り会う事になるだろう。生半可な覚悟では生き残れはせんぞ」

自分の心を一輝に見透かされてしまい、マリアは衝撃を受けた。

一輝「凶星だったようだな。俺はここで…」

帰ろうとした一輝だったが、マリアとマリアにどこか似た少女が写った写真を見つけた。

一輝「写真に写っている奴は誰だ?」

マリア「…セレナよ。私の妹で、何年も前に死んだわ…」

一輝「そうか…。マリア、今の妹分達を大切にしろ…」

マリア「待つて! さつきは覚悟とか言ってたのに、何でセレナの事になったら私に対して『妹分達を大切にしろ』って言ったの!」

一輝「…俺には弟がいる。俺と違って泣き虫だが、誰よりも心優しい弟がな。お前は妹がいた身だから、俺もシンパシーを感じてし

まったのだろうか…」

一匹狼でクールぶつていながらも、マリアにシンパシーを感じて労いの言葉をかけ、一輝は去ったのであった。

マリア「あの人にも…弟が…?」

威圧感溢れる一輝に泣き虫の心優しい弟がいた事にマリアも一輝にシンパシーを感じ、驚いたのであった。

リディアン 寮

その頃、響は未だに翼の件で落ち込んでいた。そんな折、突然の二課からの招集を受けた。

未来「何?まさか、朝と夜、間違えてアラームセットしたとか?」

響「いやあ、えつと…」

未来「こんな時間に用事?」

響「えへへ…、星矢さんと沙織さん達に呼ばれて…」

未来に凶星を突かれて響は笑う事しかできなかった。

未来「夜間外出とか門限とか…」

響「沙織さんが連絡を入れてくれるだって。ごめんね…」

未来「こっちの方は何とかしてよね?」

そう言つてパソコンで流れ星の動画を見せた。

未来「一緒に流れ星を見ようと約束したの、覚えてる?山みたいにレポートを抱えてちゃ、それもできないでしょ?」

響「うん、何とかするから…ごめん…」

それから、着替えに手間取っている響の着替えを未来は手伝った。

響「私、このままじゃダメだよね…」

未来「ん?」

響「しつかりしないといけないよね…。今よりも…、ずっときつともつと…」

その様子に未来は何とも言えなかった。そして、星矢達が迎えに来た。

未来「それでは、響の事をお願いします」

沙織「わかりました」

そう言つて響を車に乗せ、星矢達は二課本部へ向かった。

特異災害対策機動部二課

響を連れ、星矢達も到着した。

響「すみません、遅くなりました！」

了子「うん。では、全員揃った所で仲良しミーティングを始めましょう♪」

翼は星矢達とは目も合わせなかった。そして、メインモニターにこれまでのノイズ出現ポイントが表示された。

弦十郎「どう思う？」

響「……いっぱいですね」

沙織「うふふっ、その通りですね」

弦十郎「これはここ一か月にわたるノイズ発生地点だ。ノイズに関して響君が知ってる事は？」

響「テレビのニュースや学校で教えてもらった程度ですが、まず無感情で機械的に人間だけを襲う事。そして襲われた人間が炭化してしまう事。時と場所を選ばずに突然現れて周囲に被害を及ぼす『特異災害』として認定されている事」

美衣「意外と詳しいですね」

響「今、まとめているレポートの題材なんです」

了子「そうね。ノイズの発生が国連の議題に上がったのは今から13年前だけど、観測そのものも一つと前からあったわ。それこそ、世界中に太古の昔から」

弦十郎「世界中に残る神話や伝承に登場する数々の異形は全てとは言えないが、ノイズ由来のもそれなりにあるだろうな」

了子「ノイズの発生率は決して高くないの。でも、近頃のこの発生件数は誰の目から見ても『異常事態』。だとするとそこに何らかの『作為』が働いていると考えるべきでしょうね」

響「作為……。という事は、誰かの手によるものなんですか？」

紫龍「その可能性の方が高い。問題はノイズを使っている何者かの目的だ」

翼「中心点であるここ、私立リディアン音楽院高等科。笑われの真

上です。『サクリストDデユランダル』を狙って何らかの意志がこの地に向けられていると照査となります」

響「あの…」

星矢「デユランダルって何だ？そんなに敵が欲しがる代物か？」

紫龍「確か、デユランダルは英雄ローランが使っていた聖剣だと、老師から聞いた事があつたな…」

あおい「ここよりもさらに下層、『アビス』と呼ばれる最深部に保管され、日本政府の管理下にて我々が研究している『ほぼ完全状態の聖遺物』それがデユランダルよ」

朔也「翼さんの『天羽々斬』や響ちゃん胸の『ガングニール』のような欠片は『奏者』が歌って『シンフォギア』として再構成させないとその力を発揮できないけど、『完全状態の聖遺物』は一度起動すれば常時100%の力を発揮し、更には『奏者』以外の人間も使用できるであろうと最近の研究でわかつたんだ」

氷河「要するに、完全状態の聖遺物は一度起動させれば誰でも扱える聖衣のようなものか…」

了子「氷河君達にはそつちの例え方がわかりやすいわよ。それが私が提唱した『櫻井理論』！だけど、『完全聖遺物』の起動には相応のフォニックゲイン値が必要なのよね。もしくは…」

了子は怪しげな視線で星矢達を見た。

了子「黄金聖闘士なき今、黄金聖闘士クラスの強大な小宇宙を扱える伝説の青銅聖闘士である星矢君達ぐらいね」

そんな了子の怪しげな雰囲気を見つめ、星矢達は感じ取り、紫龍は表には出していないものの、警戒していた。

紫龍「(あの女は油断のできない女だ…。呪われた聖衣と言われている蛇遺座の黄金聖衣を傍に置いているのに、なぜ不可解な死を遂げないんだ…?)」

弦十郎「あれから2年、今の翼の歌であればあるいは…」

あおい「そもそも、起動に必要な日本政府からの許可って下りるんですか？」

朔也「いや、それ以前の問題だよ。安保を盾にアメリカが再三の

デュランダルを引き渡しを要求してるそうじゃないか。起動実験どころか扱いに関しては慎重にならざるを得まい。下手を打てば国際問題だ」

星矢「全く、国のお偉いさんはとんだバカだな！」

沙織「アメリカ政府の目的としては、デュランダルを軍事利用しようとしているのでしよう。今はそんな事を言っている時ではないというのに……！」

瞬「僕だって許せないよ。強大な力を自分達のためにしか使わないなんて」

デュランダルを軍事利用しようとするアメリカ政府の態度に星矢達は不満だった。

紫龍「了子さん、あなたが個人で所有している蛇遺座の黄金聖衣に關しても引き渡しは……」

了子「アメリカ政府でもそれはできないわよ。蛇遺座の黄金聖衣は盗もうとしたりした人間はみんな死んでしまう呪いの聖衣だし、大国だって教皇にすり替わっていたサガが配下を使い、各国でやらかした事で聖闘士が牙を向いたらどれほど恐ろしいのかを改めて胸に刻んでいるの。だから、アメリカ政府も聖闘士に關しては手を出せないってわけ」

星矢「他の国から聖遺物を求めても、聖闘士の報復を恐れて聖衣に手が出せないってのは、アメリカのお偉いさんもとんだへっぴり腰だぜ。ざまあみろってんだ！」

紫龍「言い方は悪いが、星矢の言ってる事は間違いではない。政治家の大半は己の欲と面子ばかり優先し、己が傷つくのを恐れる臆病者に過ぎん」

聖遺物を軍事利用しようとする反面、聖闘士の報復を恐れて聖衣の引き渡し要求ができないアメリカ政府を星矢達は『へっぴり腰』、『臆病者』と罵ったのであった。

あおい「まさかこの件、米国政府が糸を引いてるなんて事は……？」  
その言葉に一同は沈黙した。

美衣「グラード財団の調査部と二課調査部の報告によると、ここ数

か月の間に1万回に及ぶ二課本部コンピュータへのハッキングを試みた痕跡が認められているそうです。アクセスの出どころは不明なので、短絡的にアメリカ政府の仕業とは断定できませんが……

弦十郎「だが、痕跡は辿らせている。本来こういうのこそ、俺達の本業だからな」

そんな中、慎次が前に出た。

慎次「風鳴司令」

弦十郎「ああ、そうか。そろそろ……」

慎次「今晚はアルバムの打ち合わせが入っています」

星矢&響「「は？」」

星矢と響は疑問に思った。

慎次「表の顔では、アーティスト風鳴翼のマネージャーをやっています」

そう言っつて慎次は眼鏡をかけ、名刺を響に渡した。

響「おお、名刺もこうなんて初めてです！これは結構なものをどうも」

名刺を渡した後、慎次と共に翼は出ていった。

響「私達を取り囲む脅威はノイズばかりではないんですね」

星矢「ノイズがいたって、あのバカ共にはわからんだろうぜ」

星矢のいうバカ共とは、アメリカ政府を始めとする大半の各国の政治家達の事であった。

響「どこかの誰かがここを狙ってるなんて、あんまり考えたくありません」

了子「大丈夫よ♪なんたつてここはテレビや雑誌で有名な天才考古学者、櫻井了子が設計した人類守護の砦よ。先端にして、異端なテクノロジーが悪い奴等なんか寄せ付けないんだから♪」

沙織「それに、今は私達も二課の手伝いをしているので、アテナの聖闘士も護衛についています」

響「よろしくお願いします」

別の通路では、慎次が翼の仕事の確認をしていた。

慎次「次に月末に予定しているライブですが、あまり時間がありません」



せん。後でリハーサルの日程表に目を通しておいてください。それから、例のイギリスのレコード会社からのお話ですが…」

翼「その話は断っておくように伝えたはずです。私は剣、戦うために歌っているにすぎないのですから」

慎次「翼さん、怒ってるんですか？」

翼「怒ってなどいません！剣に、そんな感情など備わってません！」

そんな事を口にしても、慎次にはわかっていた。

慎次「感情がなかったら、歌を歌えないと思うんだけどな…」

慌てて慎次もついていった。そんな中、響はある事を口に出した。

響「どうして私達はノイズだけじゃなく、人間同士でも争っちゃうんだらう？どうして世界から争いがなくならないんでしょうね…」

響の言葉に星矢達はサガの裏切りに端を発した聖闘士同士の争いを思い出したのであった。

了子「それはきつと……人類が呪われているからじゃないのかしら？」

了子は響の耳元で囁き、軽く耳を噛んだ。

響「ひゃああああっ!!」

了子「あーら、おぼこいわね。誰かのものになる前に私のものにしちやいたいかも」

了子のからかいに響は悲鳴をあげ、星矢達もそれに苦笑いした。

リディアン

そして翌日、星矢達は再びリディアンに来了。

星矢「この歌って…」

沙織「響さんの通っている学校の校歌だそうです」

星矢「音楽メインの学校とだけあって、通っている子達の歌声はいもんだな」

沙織「そうですね。聞いてるだけで心が癒されます…」

歌声に癒される星矢と沙織であったが、突如として歌が止まり、それから怒鳴り声が出た。

氷河「きつと、響が怒られたんだな…！」

美衣「あの子はおつちよこちよいですからね…」

推測通り、怒られたのは響であった。そして昼休み…。

響「人類は呪われている！むしろ私が呪われている！」

課題をやっていた響は友人の創世と弓美にご飯を食べさせてもらっていた。

未来「ほら、おバカな事やってないで、レポートの締め切りは今日の放課後よ」

響「だからこうして限界に挑んでるんだよ」

弓美「まあアニメじゃないんだし、こんな事して捗るわけないしね」  
そう言って弓美は立った。

響「え？手伝ってくれたんじゃないの？」

未来以外の友人は次々と立った。

詩織「これ以上お邪魔するのも忍びないので、屋上にてバトミント  
ン等どうでしょう？」

創世「お、いいんじゃない！ヒナはどうする？」

未来「うん。今日は響に付き合う。レポート手伝うってそう約束したし」

響「おお！」

創世「仲がよろしい事で♪ビツキー、あんた男とかいないの？」

響「男…？」

男と聞いて、響の頭には恩人である星矢の姿が思い浮かんだ。

弓美「もしかして、星矢さんかなあ？」

創世「あり得るよ。それに、ビツキーって年下好きだったのね」

響「いやいやいやいや、私が年下好きだなんて…」

からかわれ、顔を赤くした響をよそに弓美達はどこかへ行ってしまうった。

響「ありがとう、未来」

未来「ん？」

響「一緒に流れ星でも見よう」

そして放課後、教室から響が出てきた。

未来「先生、何って？」

響「……壮絶に字が汚いって……。まるで、ヒエロ何とかって言った……」

未来「そうじゃなくて、時間過ぎてたけど、レポート受け取ってもらえたの？」

響「……今回だけは特別だって！イエイ！」

ようやく流れ星を見られると浮かれる響であった。

未来「響はここで待ってて。教室から鞆取ってきてあげる」

響「いいよ、そんなの」

未来「響は頑張ったから、そのご褒美！」

そう言って未来は鞆を取りに行った。

響「未来は足が速いなあ。流石、元陸上部」

ところが、ノイズ出現の連絡が入り、響は向かおうとした。そこへ、星矢達 came。

星矢「響、ノイズは俺達が片付ける。だから、友達との約束を優先してくれ」

響「私、行くよ」

瞬「だけど、君はまだ」

響「ノイズを放置できないし、放置したら翼さんに……」

どうしても行くという響の態度に星矢達は行かせる事にした。

紫龍「……仕方がない、行かせよう」

氷河「星矢、瞬、お前達は響についてやってくれ。俺と紫龍は翼の方へ行く」

頷いた後、星矢達は響と共に出撃した。しかし、今回は恐ろしい事が待っているとも知らずに……

## 5話 暴走する撃槍、砕ける絶剣

リディアン周辺

未来への連絡は沙織が行い、紫龍と氷河は翼の元へ向かい、星矢と瞬は響と共にノイズが出現した現場に到着した。

星矢「行くぞ！」

出撃の際に聖衣を纏った星矢と瞬は身構え、響は戦いの歌を歌ってシンフォギアを纏い、歌いながら戦った。しかし、まだまともな戦いはできなかった。

星矢「とりやあつ！」

瞬「ふんっ！」

星矢と瞬は技さえ使わずにノイズを軽く蹴散らしていった。そして、弦十郎から連絡が入った。

弦十郎『小型の中に一際大きな反応が見られる。間もなく翼と紫龍達も到着する。くれぐれも無理はするな』

響「わかってます！私は…、私にできる事をやるだけです！」

星矢「さっさと片付けるぞ、響！」

響「はいっ！」

3人はノイズを蹴散らしていった。しかし、葡萄みたいなノイズが逃げる際に実を外して転がすと、爆発した。

響「うわっ！」

星矢「瞬！」

瞬「ローリングディフェンス！」

星矢の掛け声で瞬はネビュラチェーンで自分と星矢、響を爆発によって生じた天井の崩壊から守った。

瞬「大丈夫!？」

響「見たかった…。流れ星、見たかった！未来と一緒に、流れ星見たかった!!」

怒りに任せて響はノイズを蹴散らした。その様子を星矢達は傍観していた。

星矢「響…」

星矢達は地下鉄の方へ逃げた葡萄ノイズに追いついたが、響の怒りは収まらなかった。

響「あんた達が！誰かの約束を侵し、ウソのない言葉を！争いのない世界を！何でもない日常を、剥奪するというのなら!!」

怒りのあまり、響は壁を殴った上、目に危険な光が宿って葡萄ノイズは逃げようとしたが、響は襲い掛かるノイズを振り払い、獣のようにノイズを蹂躪していった。

星矢「落ち着け、響！余計な被害を出してどうするんだ!？」

星矢は止めようとしたが、怒りで我を忘れた響は星矢に襲い掛かった。しかし、瞬のネビュラチェーンで拘束された。

瞬「落ち着くんだ、響！怒りで我を忘れちゃダメだ!」

その間にも葡萄ノイズは爆弾をぶつけようとしたが、星矢の拳圧で全てぶつかる前に爆破された。

響「あ？あれ？私…」

瞬「正気に戻ったようだね」

星矢「急いでノイズを」

そんな折、沙織から緊急連絡が入った。

沙織『星矢、あなた達の所へ非常に大きな反応があるノイズが向かっています！注意してください!』

星矢「非常に大きな反応!？」

そう言っていると、巨大で黄金のノイズが数体現れた。

星矢「どうやら、これまでの奴より強いようだな」

瞬「響は急いであのノイズを追いかけて！僕達はこの黄金のノイズをやっつけてから来るよ!」

響「わ、わかりました！星矢さん、瞬さん!」

葡萄ノイズの追跡を響に任せ、星矢達はゴールドノイズと対峙した。

星矢「先手必勝だ！ペガサス、流星拳!」

これまでのノイズは流星拳1発で消滅したが、ゴールドノイズは所々にヒビが入った程度であまりダメージを受けていなかった。

星矢「このノイズ、相当頑丈だぞ!」

ゴールドノイズの特性を解析した了子が連絡を入れた。

了子『そのノイズはどうやら小宇宙への耐性に特化したノイズみたいよ。大きいからパワーはあるし、多少の小宇宙を使った攻撃ではビクともしないけど、逆に動きはノロくて人間を炭素分解する事もできないわ』

星矢「要するに、俺達聖闘士を足止めするためのノイズというわけか…」

瞬「星矢、一気に強力な技で決めよう！」

星矢「ああ！ああいったタイプには一点集中してやるまでだ！ペガサス、彗星拳！」

小宇宙を高め、流星拳を一点に集中させた彗星拳の前では小宇宙への耐性に特化したゴールドノイズさえもあっけなく倒されたのであった。

瞬「ネビュラストーム！」

ネビュラストームでゴールドノイズは消滅した。

瞬「行こう、星矢！」

ゴールドノイズを倒した星矢と瞬も響の元へ向かった。一方の響はノイズを追いかけていたが、流れ星のようなものが見えた。

響「流れ星…」

???「いや、あれは流れ星ではない！」

紫龍と氷河が現れ、紫龍が言った通りに響が見たものは流れ星ではなく翼で、そのまま翼は蒼ノ一閃で葡萄ノイズを撃破し、背を向けて降り立った。

響「私だって、守りたいものがあるんです！だから！」

自分も遊び半分で戦っていない事を翼に伝えようとした響だが、翼は目を向けずに剣を構え、紫龍と氷河は構えた。

紫龍「聞く耳持たずか…！」

氷河「どうやら、今度は…」

???「だから、んでどうすんだよ！」

突然の声一同は驚き、声ができる方へ向くと、そこには鎧を纏った少女の姿があり、その少女の姿を見て翼は驚愕した。

翼「ネフシユタンの…鎧…！」

そう、その鎧こそ2年前に起動させようとした完全聖遺物、ネフシユタンの鎧であった。

特異災害対策機動部二課

ネフシユタンの鎧の出現で指令室は騒然となっていた。

美衣「ネフシユタンですって!？」

弦十郎「現場に急行する！何としても鎧を確保するんだ！それと俺の不在時の指揮を沙織お嬢様、あなたに譲ります！」

沙織「わかりました。お気をつけて」

現場に急行するため、不在時の指揮権を沙織に譲って弦十郎は了子と共に現場に向かった。

沙織「皆さん、司令が現場に向かったためこの私、城戸沙織が司令代行として指揮をとります！敵の動向から目を離さないように！」

星矢達と共に戦った事で培われたカリスマ性で沙織は二課のメンバーをまとめ上げた。

リディアン周辺

ネフシユタンの鎧を纏った少女、クリスの登場に一同は驚いていた。

氷河「紫龍、あのネフシユタンの鎧は何だ？」

紫龍「老師から聞いた事がある。ネフシユタンの鎧は一輝のフェニックスの聖衣にもひけをとらない再生能力を持っていると」

氷河「再生能力か。だが、それも俺の凍気で止めてやるまでだ…！」  
紫龍と氷河はいつでも行動できるように構えた。

翼「ネフシユタンの鎧…！」

クリス「へえ〜。って事はあんた、この鎧の出自を知ってんだ？」  
翼「2年前、私の不始末で奪われたものを忘れるものか！何より、私の不手際で忘れた命を忘れるものか！」

双方とも武器を構えた。

翼「(奏を失った事件の原因と奏の残したガングニールのシンフォ

ギア、時を経て再び揃った巡りあわせ。だがこの残酷は、私にとって心地いい！」

ところが、響が翼を止めようとした。

響「やめてください、翼さん！相手は人です！同じ人間です！」

翼&クリス「戦場に何をバカな事を！あつ！」

氷河「初対面なのに、ハモったな」

響が訴えてもなお、翼とクリスは争おうとしたため、今度は紫龍と氷河に頼む事にした。

響「紫龍さん、氷河さん、やめさせてください！このままじゃ…」

紫龍「響、戦いたくなくても時には人間同士で戦わなければならぬ事も。現実から目を背けるな！」

都合の悪い現実を直視しない響に紫龍は無理にでも現実を直視させた。

翼「むしろ、あなたと気が合いそうね！」

クリス「だったら、仲良くじゃれ合うかい!？」

そう言つてクリスは鞭を振るい、翼はよけた。響の方は巻き添えにならないように紫龍と氷河が守っていた。翼は再び歌いながら蒼ノ一閃を放つが、クリスは鞭で斬撃を弾いた。攻撃を弾かれても翼は怯まずに振るい続けたが、全て防がれ、罅迫り合いになった際にクリスのキックを腹に受け、後ろに吹っ飛ばされた。

翼「(これが完全聖遺物のポテンシャル!?)」

クリス「ネフシユタンの力だと思わないでくれよな。あたしのてっぺんはまだまだこんなもんじゃねえぞ！」

再びクリスの攻撃が始まった。

響「翼さん！」

紫龍「(あの少女、どうやら鎧の力に慢心していないようだ…)」

氷河「(そして、あの鞭を使った戦い方は近距離戦主体の翼や響ではかなり苦戦するぞ…)」

響は人間同士の戦いに何もできず、紫龍と氷河は冷静に分析し、余程の事態になるまで翼の戦いには介入しようとしなかった。

クリス「お呼びじゃないんだよ！その聖闘士と一緒にこいつらと



でも相手してな！」

そう言ってクリスは杖を構えて響に向けてノツポで嘴のついたノイズ4体、紫龍と氷河に向けてゴールドノイズを12体も出した。

氷河「ノイズが操られているだど!？」

紫龍「恐らく、こいつがノイズを使っている奴だろう…!」

そう言っていると、星矢と瞬が遅れてやってきた。

星矢「紫龍、氷河、この黄金のノイズは小宇宙への耐性に特化したノイズだ！生半可な攻撃は通じない！」

紫龍「となれば、俺達を足止めするためのノイズといった所だろう」  
氷河「こいつらを片付けるぞ！」

星矢達は自分達に向けて進んでくるゴールドノイズと応戦したが、響はノツポのノイズの嘴から出された粘液に絡まれて動けなくなった。翼はクリスの隙を突き、再び鏢迫り合った。

翼「その5人にかまけて私を忘れたか!？」

足払いでクリスの体勢を崩し、追撃の蹴り技を繰り出したが、防がれた。

クリス「お高く止まるな！」

そのままクリスは翼の足を掴んで投げ飛ばしてから先回りし、横顔を踏みつけた。

クリス「逆上せ上がるな人気者！誰も彼も構ってくれると思うんじゃないぞ！」

翼「くっ！」

クリス「この場の主役と勘違いしてるのなら教えてやる。狙いは最初っからこいつをかつさらう事だ！」

響「えっ?」

クリスの狙いが響であった事に星矢達も驚いた。

瞬「(なんであの子は響を…?)」

クリス「鎧も仲間も、あんたには過ぎてんじゃないのか？」

翼「繰り返すものかと私は誓った！」

翼の闘志は折れておらず、剣を上に向けて千ノ落涙を放ってクリスを引き離し、起き上がってから再びぶつかり合った。一方の響は粘液

から脱出しようとしていた。

響「そうだ、アームドギア！『奏さんの代わり』になるには私にもアームドギアが必要なんだ！それさえあれば！出る、出てこい！アームドギア！」

アームドギアを出そうとしたが、出てこなかった。

響「何でだよ、どうすればいいかわからないよ」

星矢「響、沙織さんが言ったはずだ！『奏の代わり』になろうとするな！」

紫龍「そして、安易に武器に頼るな！武器に頼れば隙が生じる！己の肉体を武器に戦うんだ！」

すでに星矢達は半数ものゴールドノイズを蹴散らしていた。再び翼とクリスは罅迫り合いとなった。

翼「鎧に振り回されているわけではない。この強さは本物？」

クリス「ここでふんわり考え事か！」

クリスのキックを翼はかわしたが、その隙にクリスは杖を向けてノイズ軍団を召喚した。しかし、ノイズ軍団はあつけなく翼に蹴散らされ、お返しに翼は蒼ノ一閃でノイズもろともクリスに放ったが、クリスに大したダメージはなかった。そしてクリスは鞭で反撃し、接近戦を繰り返した。それから翼は小刀を3本投げたが、クリスに弾かれ、反撃にクリスは鞭を振るって先端から白黒のエネルギーボール、『NIRUBANA GEDON』を放った。それをすかさず翼は剣で受け止めた。

響「翼さん！」

しかし、NIRUBANA GEDONを受け止め切れずに翼は弾き飛ばされた。

クリス「ふん、まるで出来損ない」

翼「確かに…、私は出来損ないだ…」

クリス「はあん？」

翼「この身を一振りの剣と鍛えてきたはずなのに…、あの日無様に生き残ってしまった…。出来損ないの剣として恥を晒してきた…。だが…それも今日までの事…。奪われたネフシユタンを取り戻す事

で…、この身の汚名を注がせてもらおう！」

そう言つて翼は剣を地面に突き立てて立ち上がった。

クリス「そうかい。脱がせるものなら脱がしてっ？何!？」

急に動けなくなつた事に戸惑つたクリスが自分の後ろを見ると、そこには弾いた小刀の一本が自分の影に刺さつていた。それこそ翼の技、『影縫い』であつた。

クリス「こんなもんで私の動きを!?まさかお前…」

翼「月が覗いている内に決着を着けましょう」

クリスは翼の意図に気付いた。そして、翼の顔は穏やかだが、恐ろしい笑顔だつた。その様子を戦いながら紫龍は見ていた。

紫龍「(まさか翼、お前は…!?)」

星矢「どうしたんだ?紫龍!」

紫龍「…嫌な予感がする。みんな、急いであの金色のノイズを殲滅するぞ!さもないと、予想しない事が起こつて取り返しのつかない事態になる可能性がある!」

氷河「その方がいい!そうしないと、何が起こるのかわからんからな!」

星矢「だつたら行くぞ、ペガサス、彗星拳!」

紫龍「廬山、昇龍覇!」

氷河「オーロラサンダーアタック!」

瞬「ネビュラストーム!」

紫龍の嫌な予感に従い、星矢達は急いでゴールドノイズの殲滅にあつた。これまで、星矢と自分の聖衣を蘇らせるため、友の友情に報いるために致死量を超える己の血を提供し、己の目を潰すなどして友のために命をかけてきた紫龍には翼がこれから何をするのかが容易に予想できた。

クリス「歌うのか…?絶唱を」

響「翼さん!」

翼「防人の生きざま、覚悟を見せてあげる!あなたの胸に焼きつくなさい!」

その頃、弦十郎と了子は車で現場に向かつていた。



響と星矢達は駆け寄った。そして、弦十郎も到着したのであった。  
弦十郎「無事か!?翼!」

翼「私とて…人類守護の務めを果たす防人……。こんな所で折れる  
剣じゃありません!」

眩きながら振り向いた翼だが、その顔は目や口から大量の血を流し  
ているというあまりにも痛々しいものであった。

紫龍「この大バカが!!自分が出来損ないだからといって命を簡単に  
投げ出す奴がいるか!!命をかけるのなら、信じあえる友のために命を  
かける!」

翼「……また…、バカって…言われた…」

そう言うとき翼は糸が切れた人形のように崩れ落ちた。しかし、間一  
髪で紫龍が抱きかかえ、弦十郎と星矢達は慌てて翼と紫龍の元に駆け  
寄った。

響「あ…:あ…:あ…:」

あまりにも残酷な光景を見た響の目の前は真っ赤に染まっていた。

響「翼さああああああん!!」

残酷な光景に耐えられずに出した響の悲鳴は響いたのであった。

弦十郎「翼、しっかりしろ!」

了子「急がないと、助からないわ!」

弦十郎と了子は急いでバイタルチェックをしようとした。

紫龍「応急処置は俺がします」

弦十郎「だが、どうする?」

紫龍「むうううん!!」

紫龍は小宇宙を高めた。様々な激戦を通して少し小宇宙を高める  
だけでセブセンシズに達する上、黄金聖闘士昇格の条件ともいえる  
常時維持も可能になりつつあり、それに聖衣が応じるかのように金色  
に輝いた。

弦十郎「これは…?」

氷河「セブセンシズまで高めたからさ」

響「セブセンシズ…?」

瞬「簡単に言えば僕達人間にある五感、超能力などの六感のさらに

先にある第七の感覚の事だよ。ここまで達すれば僕達の小宇宙は途方もないほどにまで高められるんだ」

弦十郎「それが、お前達の強さの秘密か…」

星矢「俺達の聖衣は一度、黄金聖闘士の血によって蘇った事がある。だから、セブンスセンスまで高めれば俺達の聖衣は限りなく黄金聖衣にまで強度が近づくんのだ」

そして、紫龍は小宇宙を送り、翼の治療を始めた。すると、翼の出血が止まり、傷がみるみる消えていった。

響「翼さんが…」

瞬「僕達の小宇宙は破壊だけじゃなくて、色々な事に使えるんだ。その一つが、治療だよ」

弦十郎「聖闘士の扱う小宇宙っていうのは、高めればどんな事でもできてしまうから何でもありだな」

しばらく経つうちに粗方の翼の傷が塞がった。

響「治ったんですか…?」

了子「紫龍君が膨大な小宇宙で治療を行ったおかげで翼ちゃんの出血は止まったし、バイタルも安定してきたから、まずは一安心といった所ね」

紫龍「だが、これで傷が完全に塞がったわけではない。あくまでも応急処置に過ぎない。急いで翼を医療機関へ！」

弦十郎「わかってる！了子君、急いで翼を運ぶぞ！」

了子「ええ！」

急いで翼を車に乗せて弦十郎は出発し、星矢達は響を連れて二課本部へ帰還したのであった。

## 6話 響の決意

### 医療機関

絶唱による反動でボロボロになった翼は紫龍の小宇宙による応急処置が済んだ後、医療機関へ送られ、太陽が昇り始めた時に緊急手術が行われた。

医師「応急処置が早く、とても適切でしたね。一命はとりとめました。容態も安定してきてますが意識は戻らず、決して油断できない状態です」

膨大な小宇宙で治療する応急処置は効いていたが、意識までは戻らなかった。手術室に運ばれた翼は目まで包帯を巻かれて誰が見ても痛々しい姿だった。

弦十郎「よろしくお願いします!」

紫龍「(俺にできる事は尽くした。後は翼次第だ…!)」

弦十郎が頭を下げているのと同じく、曲がり角では紫龍が手術室を見ていたのであった。

弦十郎「俺達は鎧の行方を追跡する。どんな手掛かりも見逃すな!」

そう言つて諜報部と共に弦十郎は追跡に向かった。一方の響と慎次と星矢達は待合室にいて響は翼の事で落ち込んでおり、紫龍が戻ってきた。

星矢「どうなんだ?紫龍」

紫龍「俺の応急処置で一命はとりとめたが、まだ油断はできない状況だ」

氷河「よく絶唱という自爆技を発動する予兆を掴めたな」

紫龍「俺は友のために何度も命をかけてきたからな。不思議とそういう事は予想できてしまう」

響の落ち込み様に瞬は手を置いた。

瞬「君が翼さんの事を自分の責任のように感じる事はないよ。あの技を使ったのは彼女の判断だし、紫龍の制止にさえ耳を貸さずに使ったから」

響「瞬さん…、でも…私…」

慎次「瞬君の言う通りです。響さんが気に病む事ないですよ」

響「…緒川さん…」

慎次「ご存知とは思いますが、以前の翼さんはアーティストユニットを組んでおりまして、」

響「ツヴァイウイング…、ですよね…」

慎次「その時のパートナーが、天羽奏さん。今のあなたの胸に残るガングニールのシンフォギア奏者でした。2年前のあの日、ノイズに襲撃されたライブの被害を最小限に抑えるために奏さんは絶唱を解き放ったんです」

響「絶唱……。翼さんも言っていた…」

星矢「その絶唱というのは、自爆技みたいなものか？」

慎次「厳密には違いますが、あなた達が見た限りではそう思っても不思議ではないでしょう。奏者への負荷を厭わず、シンフォギアの力を限界以上に撃ちだす絶唱はノイズの大群を一気に殲滅せしめましたが、同時に奏さんの命を燃やし尽くしました」

響「それは…私を救うためですか…？」

慎次「奏さんの殉職、そしてツヴァイウイングの解散。1人になった翼さんは奏さんの抜けた穴を埋めるべく、がむしやらに戦ってきました。同じ世代の女の子が知って然るべき恋愛や遊びも覚えず、自分を殺し、一振りの剣として生きてきました。そして今日、翼さんは剣としての使命を果たすため死ぬ事すら覚悟して歌を歌いました。不器用ですよ？でも、それが風鳴翼の生き方なんです」

慎次の話には響は涙を流し、星矢達も何とも言えなかつた。

響「そんなの、酷すぎます…。…そして私は翼さんの事、何にも知らずに一緒に戦いたいだなんて、奏さんの代わりになるなんて…。」

泣きじやくる響の肩に星矢はそつと手を置いた。

星矢「…だから言っただろ？誰の代わりにもなれねえって。無論、俺達だって誰かの代わりになんてなれねえさ」

氷河「そんな事は誰も望んでいない。お前はお前らしくやるしかないんだ」



響「でも、私のせいで星矢さん達と翼さんが…」

紫龍「響、例え親しい奴にでもはつきり、厳しく言わなければならぬ時もある。あれくらいの事で壊れるような関係は偽りのものと言える」

瞬「本当の繋がりというのは、こういった厳しい状況で試されるのだと思うよ」

響「紫龍さん、瞬さん…」

慎次「ねえ、響さん、星矢君達。僕からのお願いを聞いていただけますか？」

星矢「そのお願いって？」

慎次「翼さんの事、嫌いにならないでください。翼さんを世界で一人ぼつちにしないでください」

響「……はい！」

紫龍「俺達も同感です。翼は対ノイズ戦で共に戦う仲間です」

響と星矢達の温かい視線に慎次は安心した。

???

翼は意識がなく、夢の中で大空を真つ逆さまに落ちていた。そんな翼の傍を奏が飛んでいた。

翼「片翼だけでも飛んでみせる！どこまでも飛んでみせる！」

しかし、奏の目は悲しそうだった。

翼「だから笑ってよ、奏！」

翼は海の底に沈むかのように落ちていった。

特異災害対策機動部二課

そして翌日、星矢達が来てこれからの事が話し合われていた。

星矢「そーいや、俺達は翼の相棒の奏の事について何も知らなかったな」

紫龍「司令、天羽奏の事について教えてくれませんか？翼と力を合わせてノイズと戦う上では俺達も奏の事を知る必要があると思います」

沙織「無理にとはいりません。話したくなければ、それでもいいのですが…」

弦十郎「…いや、お前達にも話した方が良さそうだ。奏君が奏者になった経緯などを。あれは、今から5年前になる…」

## 回想

弦十郎は5年前の事を話した。

弦十郎『連れてこられたばかりの奏君はまるで手負いの獣そのものだった』

連れてこられた奏は身体を拘束され、椅子に縛り付けられており、その姿はあまりにも痛々しかった。

奏「放せよ、クソツ！あたしを自由にしろ！」

弦十郎「その少女が報告書にあった」

1課のメンバー『天羽奏』14歳。ノイズに襲撃された長野県宮上山聖遺物発掘チーム唯一の生存者です。襲撃当時は休みだったので家族を発掘現場に連れてきていたのでしょう。そこを襲われたそうです」

奏「お前ら、ノイズと戦ってんだろ！だったらあたしの武器をよこせ！奴等をぶつ殺す力をくれ！」

奏の目はノイズへの怒りと憎しみの炎で燃えていた。

弦十郎「辛いだろが、ノイズに襲われた時の事を教えてくれないか？我々が君の家族の仇をとってやる」

奏「ねむてえ事言つてんじやねえぞ、オツサン！あたしの家族の仇はあたししか取れないんだ！あたしにノイズをぶち殺させろ！」

弦十郎「それは、君が地獄に堕ちる事になってもか？」

奏「奴等を皆殺せるなら、あたしは望んで地獄に落ちる！」

弦十郎はそんな奏の頭をなでた後、抱き締めたのであった。

弦十郎『それから、奏は厳しい訓練と薬物の投与を繰り返す事で聖遺物第3号、ガングニールへの試みた』

戦う力を得るために奏は薬物投与を試みたが、現実には上手くいかないものであった。



美衣「恐ろしい執念ですわ…」

氷河「力というのは手に入れようと思っても簡単に手に入るものではない。瞬、聖闘士になるために修行を積んだお前にもわかるだろう…?」

数年間もの厳しい修行を経て聖闘士の力を身に着けた星矢達だが、それは本人の努力や素質にそれぞれの師である魔鈴、童虎、水晶聖闘士、アルビオレの指導の優秀さもあつた。しかし、弦十郎から聞かされた奏が訓練以外にも薬物投与という危険な橋を渡って奏者になつた経緯を知って驚いたのであつた。

紫龍「翼の響に対する態度は理不尽だと思つたが、あんなのを目撃してはそうならざるを得ないな…」

弦十郎「予想以上に暗い話で済まなかつたな…」

星矢「いや、今更どうという事はないぜ」

沙織「司令、麻森博士からお届け物です」

美衣に持たせている鞆を弦十郎に渡した。

朔也「それ、何ですか?」

弦十郎「以前から注文していた護身用の代物さ。使う機会がなければいいんだがな…」

あおい「そう言えば、麻森博士は鋼鉄聖衣の開発者よ」

慎次「それだけではありません。シンフォギアシステム開発のお手伝いをしてくれた事もありますし、何より了子さんの恩師でもあります」

氷河「麻森博士も櫻井理論を?」

了子「完全つてわけじゃないけど、およそ7割以上は理解しているわ。流石は私の恩師といった所ね」

星矢「響は俺達が鍛えるか?」

沙織「いえ、あの人に鍛えてもらいましょう」

星矢「あの人? そうか、魔鈴さんか!」

紫龍「響が修行を始めてからは、俺達が交代でノイズ退治をやるう」

氷河「そうした方がいい」

当面の間、ノイズ退治は星矢達が担当する事となつた。

リディアン

同じ頃、響はリディアンの屋上のベンチに座っていた。

響「翼さんの代わりだなんて…」

回想

それは、昨日の会議の事だった。

弦十郎「気になるのは、ネフシユタンの鎧を纏った少女の狙いが響君だということ」

了子「それが何を意味してるのかは全くの不明」

星矢「ほんと、何考えてんだ？あいつ」

弦十郎「いいや、個人の特定しているのなら、我々二課と聖闘士の存在も知ってるだろうな」

朔也「内通者ですか？」

沙織「そう考えた方が自然です。誰なのかは特定できませんが…」

あおい「なぜこんな事に…」

響「私のせいです…。私が悪いんです…。2年前も、今度の事も…。私が…いつまでも未熟だったから翼さんが…。シンフォギアなんて強い力を持っていても…私自身が至らなかつたから…」

紫龍「それ以上は言うな。お前が未熟なのは俺達も承知している。だからこそ、お前には近いうちに俺達が正しい力の使い方や戦い方を教え、お前を徹底的に鍛え上げる」

氷河「言っておくが、俺達の修行はかなり厳しく、お前では想像もつかないほどの地獄がまっているぞ。それでもいいか？」

紫龍と氷河の言葉に響は頷いた。

響「翼さん、泣いてました…。翼さんが強いから戦い続けたんじやありません…。ずっと泣きながらもそれを押し隠して戦ってきました…。くやしい涙も…、覚悟の涙も…、誰よりも多くの涙を流しながら…強い剣であり続けるために…、ずっとずっと、1人で…。私にだって守りたいものがあるんです！だから…！」

それと同時に響の目が覚めた。

??? 「響」

後ろから声をかけたのは未来であった。

響「未来」

未来「最近、1人になることが多くなつたんじゃない?」

響「そうかな? そうでもないよ。私1人じゃ何もできないし。あ、ほらこの学校にだって未来が進学するから私も一緒について決めたわけだし。あ、いや、なんていうかここって学費がびつくりするくらい安いんじゃない? だったらお母さんやおばあちゃんに負担かけずすむかな? って、あははははっ」

しかし、未来には響の空元気ぶりはバレバレであり、手を握った。

響「やつぱり、未来には隠し事できないな」

未来「だって響、無理してるんだもの」

響「うん、でもごめん。もう少し1人で考えさせて。これは私が考えなきゃいけない事なんだ」

未来「わかった」

響「ありがとう、未来」

2人はお互いの手を握り合った。

未来「あのね、響。どんなに悩んで考えて出した答えで一步前進したとしても、響は響のままできてね」

響「私のまま……(それ、星矢さんや沙織さんからも言われた……)」

未来「そう。変わってしまうんじゃない、響のまま成長するなら私も応援する。だって、響の代わりはどこにもいないんだもの。いなくなつてほしくない」

響「私、私のままでいいのかな……?」

未来「響は響じゃなきゃ嫌だよ」

未来の言葉だけでなく、星矢と沙織の言葉が、そして紫龍と氷河と瞬の言葉が響の心に響いた。そして、響から迷いが消え、立ち上がつて翼が入院する病院に目を向けた。

響「ありがとう、未来。私、私のまま歩いていけそうな気がする」

未来「そうだ。琴座流星群見る? 動画で録っておいた」

響「え〜〜!」

見てみたが、何も映らなかった。

響「ん? 何にも見えないんだけど?」

未来「うん…、光量不足だって…」

響「ダメじゃん!」

お互いに笑いあった。だが、響の頬に涙が流れていた。

響「おつかしいなあ? 涙が止まらないよ。今度こそは一緒に見よう」

未来「約束。次こそは約束だからね」

ようやく響から迷いが消えたのであった。

響「私だって守りたいものがある! 私に守れるものなんて、小さな約束だったり、何でもない日常かも知れないけど、それでも守りたいものを守るように、私は私のまま強くなりたい!」

弦十郎の家

そして、響は弦十郎の家を訪ねた。

響「たのもー!!」

弦十郎「うわっ、何だいきなり」

響「私の戦い方を教えてください!」

弦十郎「この俺が? 星矢君達ではダメなのか?」

響「それが…小宇宙とかよくわかんなくって、弦十郎さんならきつとすごい武術とか知ってるんじゃないかと思ってましたし!」

弦十郎「…俺のやり方は厳しいぞ」

響「はい!」

???「私も指導をやらせてくれないかい?」

声が出たためにその方を向くと、そこには魔鈴や星矢達がいた。

響「うわっ、仮面を被った女の人がいる〜!!」

星矢「驚くなよ。この人は魔鈴さんで、俺の師匠さ。言っとくけど、

魔鈴さんの指導はめちゃくちゃ厳しいぞ」

魔鈴「星矢じゃ師匠は務まらないだろうから、頼まれて来たよ。さつき星矢が言った通り、私の指導は厳しいから、覚悟しときな。星

矢、お前はノイズが現れてから出撃する時以外は手本やサポーターを頼むよ」

星矢「わかったぜ」

弦十郎「時に響君、君はアクション映画とかを嗜むのか？」

響「はい？」

それから、弦十郎と星矢達との特訓が始まった。まずはアクション映画鑑賞から始まり、映画のアクションのポーズをマネし、次に魔鈴による指導が始まった。それは、適度に大きな木の枝に足を引っかけ、その体勢で逆さ腹筋二百回する事だった。

弦十郎「星矢君、これに似た修行を6年間の間にやったのか？」

星矢「ああ。正直言つて、メチャクチャきつかったぜ。でも、魔鈴さんの指導のお陰で今の俺があるんだ！」

響「ぎよええくくっ!! 厳しすぎるくく!!」

魔鈴「喚いても仕方ないわよ。そこで腹筋二百回やるまでは誰も助けちゃくれない! さあ、あとたったの99回!」

響「せ、星矢さんはどれぐらいやっただんですか〜!!」

魔鈴「修行していた頃の星矢は千回やってたよ。二百回でも軽い方にしかならないさ。さあ、きつちり二百回やらないと天馬の王子様の星矢も助けてくれないよ!」

星矢「力は楽して身に付くもんじゃないぜ、響。さあ、俺が見てるからきつちり二百回やって降りるぞ!」

響「はい!」

どんなに厳しい修行でも恩人の星矢がいてくれるお陰で響は続けられた。そして、マラソン、腕立て伏せ、ミット打ち、サンドバッグ打ちなど、中には効果的とはいいがたいものもあったが、響はそれらをこなしていった。

城戸邸

響の訓練が終わり、星矢と魔鈴は屋上から夜空を眺めていた。

魔鈴「あの子、なかなかのものだね。星矢達と同じく数年ぐらい修行に専念すれば、小宇宙の扱い方を身に付ける事も可能だろうよ」



星矢「確かに。あんまり物覚えがいいとは言えない俺なんかよりも早く身に付くかも知れない…。それに、響の守護星座があるのなら、何になるんだ？」

夜空を眺め、魔鈴はピンときた星座を見つけた。

魔鈴「あの子は聖闘士を指しているわけじゃないから確証は持てないけど、あの子の守護星座は恐らく…、乙女座だよ」

魔鈴は夜空に浮かぶ乙女座を指差した。

星矢「乙女座？あのシャカと同じ乙女座なのか!？」

同じ頃、城戸邸で響は夕食を食べていた。

響「うくん、おいしい!!」

美衣「褒められて光栄です」

沙織「響さん、たくさん食べて訓練に備えてくださいね」

満腹になり、寮に帰るために城戸邸を出ようとした響だったが、偶然貴鬼が聖衣を修復する所を目撃した。

響「何をやってるの？」

貴鬼「おいら、貴鬼。何をやってるって、黄金聖衣を修復してる所なんだよ」

響「黄金聖衣？」

部屋に入ると、修復中の射手座、天秤座、水瓶座の黄金聖衣を見つけた。

響「かっこいいし、金ぴかでもって綺麗…!」

貴鬼「この聖衣はメチャクチャ強くて正しい心を持った12人の聖闘士にしか授けられない黄金聖衣さ!かっこいいだろ？」

響「うんうん!ところで、聖衣の修復はいつ終わるの？」

貴鬼「今のペースでいけば…この3つは数週間が目安ってところかな?あの二つはまだ修復にすら入ってないけど」

目線の先にタナトスとの戦いで砕けた獅子座と乙女座の黄金聖衣があった。そんな乙女座の黄金聖衣に響は見とれていた。

貴鬼「どうしたんだ?乙女座の黄金聖衣に見とれたりなんかして」

響「あ、何でもないよ!それじゃ、帰るね!」

慌てて響はその場を去り、車で送迎してもらって帰った。

響「何だったんだろう…？あの鎧を見てたらなんか…」

その感覚は響自身にもわからなかった。そして、沙織は麻森博士を呼び出していた。

麻森博士「どうされましたか？沙織お嬢様」

沙織「麻森博士、了子さんはあなたの教え子だそうですけど、学生時代はどうでしたか？」

麻森博士「了子は私がこれまでみてきた教え子の中でも破格の才能を持った科学者でした。それは私さえも超え、聖遺物に関しては私でさえ彼女には及ばないほどの知識を持った天才科学者です。現に私が鋼鉄聖衣の開発で悩んでいた際、無断で忍び込んで来た彼女に助けられた事も多くあり、何とか鋼鉄聖衣の開発に成功したほどです。そして、彼女のシンフォギアシステムに関しても、開発を手伝いました」

沙織「そうでしたか…」

美衣「という事は、麻森博士が開発した鋼鉄聖衣と櫻井女史のシンフォギアシステムはどちらも双方の手が入っているのです、開発時期的に兄妹ともいえる存在ですね」

麻森博士「了子は自分が倒れた際の保険として、私にシンフォギアシステムのメンテナンスのやり方などを公表してくれました。仮に了子に万一の事があった場合は私がシンフォギアシステムの改良やメンテナンスを行います」

沙織「ありがとうございます」

美衣「それで、彼女は近頃、何か変わった事とかはございませんでしたか？」

麻森博士「変わった事ですか…。彼女は学生時代からお茶目な性格でしたが、12年ぐらい前から表面的には昔のままではあるんですが…、時折怪しげな顔や態度を見せる事があるんです」

美衣「沙織様、これは何かの前触れではないのでしょうか？」

沙織「恐らく…」

麻森博士「生前の光政翁は私にこうおっしゃっていました。『櫻井了子に気を付けろ』と。何を伝えたかったのかは今でもわかりませんが、ですが、彼女には我々の知らない裏の顔があるのは間違いないで

しょう」

沙織「(お爺様、お爺様は直感で了子さんの何を見抜いたのですか？)」

了子の怪しげな様子は沙織も不穏に思っていた。

リディアン

そして翌日…。

響「ねえ、未来。また流れ星の動画を見せてよ」

未来「何にも映ってないの？響は変わった子」

響「変わった子とつるんでる未来はもっと変わった子♪」

リディアンに登校中、未来は立ち止まった。

未来「あのね響、流れ星の動画を録っていた事、響に黙ってるのは少しだけ苦しかったんだ。響にだけは二度と隠し事したくないな」

響「わ、私だって、未来に隠し事なんて…：…しないよ…：…」

しかし、それは2人の絆に亀裂を入れてしまう引き金になる事であった。その様子を星矢と沙織は車の中から目撃していた。

星矢「響の奴、友達に隠し事してるのが辛そうだったな…」

沙織「そうですね。彼女の性格は隠し事をするのに向いていません。友達との絆を捨ててでも隠し事を隠し通すなんてできはしないでしょう。場合によっては、未来さんにも事情を話す必要もありそうです…」

星矢「そうだな…」

星矢と沙織は響がシンフォギアを纏ってノイズと戦っているのを見ずには未来に話さなければならぬと思ったのであった。

## 7話 デュランダル

リディアン 寮

朝になり、未来は起きた。

未来「響…？」

修行を始めてから、響は朝早くにマラソンをするようになったため、未来はそんな響の行動を疑問に持つようになった。

弦十郎の家

その頃、響は修行のために学校を休み、サンドバッグ打ちをしていた。

弦十郎「そうじゃない。稲妻を喰らい、雷を握り潰すように打つべし！」

響「言ってる事、全然わかりません！でもやってみます！」

とても常人には理解できないアドバイスをする弦十郎の言葉に響はよく理解していないものの、気合で言われた事を実行した。サンドバッグを見据え、全神経を集中させて心臓の鼓動に合わせて拳を打ち込むと、サンドバッグは吹っ飛んで支えていた枝も折れた。

弦十郎「こちらも、スイツチを入れるとするか！」

次はミット打ちを始めた。星矢達は響の修行を見ていた。

星矢「もうこんなにできるようになったのか」

氷河「そう言えば星矢、魔鈴さんはどうしたんだ？」

星矢「響が修行を始めてしばらくしてから、連絡があつて聖域へ帰ったんだ。なんか、ジャミールで保管されていた全ての黄金聖衣のうち、双子座の聖衣がなくなったとか…」

氷河「しまった！貴鬼はこっちにいるからきつと、敵に奪われてしまったんだ！」

紫龍「奪うにしても、聖衣を全部奪う方がメリットが大きいのに、なぜ他の聖衣を盗まなかった？そこが引つかかる…」

双子座の聖衣だけが盗まれた事に敵にどういった意図があるのか悩む星矢達であった。

???

そこは、森と湖に面した建物だった。そこに以前、一輝を望遠鏡で見っていたプラチナヘアアの女性はその芸術ともいえる豊満な裸体のままで電話に出ていた。

???'『ソロモンの杖…、我々が譲渡した聖遺物の起動実験はどうなっている?』

女「報告の通り、完全聖遺物の起動には相応レベルのフォニックゲインか、膨大な小宇宙が必要になってくるの。簡単にはいかないわ」  
???'『ブラックアート展、失われた先史文明の技術を解明し、ぜひとも我々の占有物としたい』

女「ギブ&テイクね。あなたの祖国からの支援には感謝しているわ。今日の鴨撃ちも首尾よく頼むわね」

???'『あくまでも便利に使うハラか。ならば、見合った働きを見せてもらいたいものだな』

女「もちろん理解しているつもりよ。従順な犬ほど長生きするとうしね(そして、ヘマをやらかして情報を奴等に掴まれそうになつたら…口封じのために死んでもらうわ)」

そして、電話を切った。

女「野卑で下劣、生まれた国の品格そのままで辟易する…。そんな男に『ソロモンの杖』が既に起動している事を教える道理はないわよね?クリス」

クリスの方は装置に磔にされていた。

女「苦しい?可哀想なクリス。あなたがグズグズ戸惑うからよ。誘い出されたあの子をここまで連れて、城戸邸にある黄金聖衣を奪って来ればいいだけだったのに。手間取ったところか空手で戻ってくるなんて」

クリス「これで…いいん…だよな…?」

女「何?」

クリス「私の…望みをかなえるためには…お前に従っていればいいんだよな…?」

女「そうよ。だから、あなたは私の全てを受け入れなさい。でない  
と嫌いになっちゃうわよ」

そう言っただけはレバーを引き、装置に磔になっているクリスに電流  
を流した。

クリス「ぐあああああつ!!」

女「かわいいわよクリス。私だけがあなたを愛してあげる」

ある程度電流を流した所で女は装置を停止させ、クリスに体を密着  
させて囁いた。

女「覚えておいてね、クリス。『痛みだけが人の心を繋ぎ、絆と結  
ぶ』、世界の真実であることを。さ、一緒に食事をしましょうね」

クリス「…なんで、あんな黄金の鎧を求めらんだ…?そもそもあ  
んたが持つてるあの鎧だって、置物以外に何の価値が」

女「…今、なんつて言った?クリス」

クリス「え…?あんなの、置物にしか」

女の『黄金聖衣を奪ってこい』というのに疑問を抱いていたクリス  
は思わずそれを口に出した途端、女の表情は歪んだ笑みから憤慨に染  
まり、乱暴にクリスの顔を掴んで怒りの表情を見せた。

女「あの黄金聖衣が置物だ?!?ふざけるな!逆上せ上がるな!!あの  
忌々しい奴等に追われた挙句、何もかも失った私を守ってくれたあの  
聖衣を、私が唯一、心から信じられる相棒をお前如きの価値観で置物  
呼ばわりするな!!」

クリス「ぐあ、ぐあああああつ!!!」

傍にある黄金聖衣に異様な愛着を示す女はクリスが黄金聖衣を『置  
物』と言った事で声も態度も荒々しくなり、電圧を更に上げてクリス  
への電流でのお仕置きを厳しくしたのであった。

リディアン

修行中の響は学校を休んでいた。

教師「立花さん!立花響さんはいつもの『お節介』でまた遅刻です  
か!?!」

未来「先生!響、いえ、立花さんは今日は風邪でお休みするそうで

す！」

教師「ほんとにしようがないですね…」

未来「…嘘つき」

響の行動に以前から教師は頭を悩ませており、未来はつぶやいたのであった。

特異災害対策機動部二課

その頃、その日の響の修行が終わり、ソファアの上でぶっ倒れていた。

響「はあ…、朝からハードすぎますよ…」

星矢「お疲れさん」

弦十郎「頼んだぞ、明日のチャンピオン」

そして、響はスポーツドリンクをもらった。

響「あの…、自分でやると決めた癖に申し訳ないんですけど、何も聖闘士やうら若き女子高生に頼まなくてもノイズと戦える武器って他にないんですか？外国とか」

氷河「そんなものがあるなら、とつくの昔に導入しているはずだ」

弦十郎「公式にはないな。日本だってシンフォギアは『最重要機密』として完全非公開だ。聖闘士に関しても、大きな事件の解決の依頼はしても、聖闘士の行動に一切の干渉はしないというのが各国の暗黙の了解だ。もし、そんな事をすれば聖闘士から悪と断じられ、途方もない報復を受ける事になるからな」

響「ええ〜！私、あんまり気にしないで結構派手にやらかしてるかも…」

あおい「情報封鎖も二課の仕事だから」

朔也「だけど、時々無理を通すから今や我々の事をよく思っていない官僚や省庁だらけだ。特異災害対策機動部二課を縮め『突起物』つて揶揄されてる」

あおい「情報の秘匿は政府上層部の指示だったのにな。やりきれない…」

星矢「あんなバカ揃いの官僚共に何を言っただって無駄だぜ。自分の

事しか考えてねえ奴等だからな」

紫龍「俺も星矢に同感だ。馬の耳に念仏というのは、まさにこの事だ。奴等もノイズに命の危険に晒されなければ、考えを変えはしないだろう」

二課をまともに理解しようとしないう官僚を星矢達ははつきりと『自分達の事しか考えていないバカ』と逆に揶揄したのであった。

朔也「いずれシンフォギアを有利な外交カードにしようと目論んでいるんだろう」

あおい「EUや米国はいつだって改定の機会をうかがっているはず。シンフォギアの開発は基地の系統とは全く異なる所から発動した理論と技術で成り立っているわ。日本以外の国では到底真似できないから、尚更ほしいのでしょうね」

朔也「その点、聖闘士の方はどこの国だって敵に回したくないから、事件解決を依頼する以外は基本的に放置という形で落ち着いている」  
瞬「各国の政府がそうしてくれる方が僕達も動きやすいので、助かります」

響「結局、色々ややこしいという事ですよね…?」

沙織「その通りです…」

響「あれ? 師匠、そう言えば了子さんは?」

弦十郎「永田町さ」

響「永田町?」

弦十郎「政府のお偉いさんに呼び出されてね。本部の安全性、及び防衛システムについて関係閣僚に対し、説明義務を果たしに行っている。仕方のない事さ」

星矢「ほんと、色々ややこしいぜ」

弦十郎「ルールをややこしくするのはいつも責任を取らずに立ち回りたい連中なんだが、その点、広木防衛大臣は…了子君の戻りが遅れているようだが…?」

その噂に了子はくしゃみをしたのであった。



翼は未だに生死の境を彷徨っていた。

翼『(私、生きているの？違う、死に損なっただけ。奏はなんのために生きて、なんのために死んだのだ?)』

そんな翼を奏が抱き締めた。

奏『真面目が過ぎるぞ、翼。あんまりガチガチだとその内、ポツキリいつちまいそうだ』

翼『1人になって私は一層の研鑽を重ねてきた。数えきれない程のノイズを倒し、死線を超えそこに意味など求めずただひたすら戦い続けてきた。そして気付いたんだ。私の生命には意味や価値がないって事を。でも、紫龍にそれをバカつて否定されてしまった…』

奏『戦いの裏側とか、その向こう側にまた違ったものがあるんじゃないかな？あたしはそう考えてきたし、そいつを見てきた』

翼『それはなに?』

奏『自分で見つけるもんじゃないかな?』

翼『奏は私に意地悪だけど、私に意地悪な奏はもういないんだよね?』

奏『そいつは結構な事じゃないか?』

翼『私はいやだ！奏は傍にいてほしいんだよ』

奏『あたしがそばにいるか、遠くにいるかは翼が決める事さ』

翼『私が？だったら私は…』

そんな時、翼の意識が戻った。そして、翼にはリディアンの校歌が聞こえていた。

翼「(不思議な感覚…。まるで世界から切り抜かれて私だけ時間がゆっくり流れているような…。ああそうか私、仕事でも任務でもないのに学校休むのは初めてなんだ。聖金賞は絶望的か…。心配しないで、奏。私、あなたが言うほど真面目じゃないから、ポツキリ折れたりしない。だからこうして今日も無様に生き恥を晒している…。いや、紫龍に言わせれば生き恥とは言えないかも知れまいが…)」

日本

フィーネに関する手掛かりを探しに一輝は日本に来た。

一輝「(フィーネ、俺はお前の手掛かりを見つけてお前を追い詰めるまでは地獄の果てまでも追い続けてやるぞ……)」

そう思つて櫻井了子のいる場所を目指す一輝であったが、突如として銃撃音がした。

一輝「何が起こつたんだ!?!」

何かが起こつたと判断した一輝はその現場に向かった。そこでは、広木防衛大臣がアメリカ政府の作業員達に暗殺された光景を目の当たりにしてしまった。

作業員A「リーダー、この現場を他人に見られたようです!」

作業員B「あ、あの男……!」

作業員の1人は一輝の聖衣箱を見て、一輝が聖闘士だとわかった。

作業員B「リーダー、あの男には絶対に他言無用と言いましよう! 彼は大統領から直々に……」

リーダー「構うな! 女子供であつても、この現場を見た奴を1人たりとも生かして帰すな!」

一輝「ほう、都合の悪い所を見られたら、地上の愛と平和を守るこのアテナの聖闘士にも容赦しないのか?」

リーダー「貴様が聖闘士だと? はっはっはっ、こんな場所に聖闘士がいるはずがない。こいつは聖闘士を語るガキだ! こんなガキなんざ、ぶっ殺してしまえ!!」

作業員のリーダーは一輝が米国政府から手出し無用と言われているアテナの聖闘士である事を認めずに現実逃避し、ただのガキとして一輝を殺そうと部下に命令した。

一輝「ふっ、数と武器を頼りに俺に挑むとは、懦弱な……」

リーダー「何だ?! その身一つで我らに」

言い終わる前に一輝は一瞬で作業員リーダーの前に来た。そして、それと同時に部下達は豪快に高々と吹っ飛ばされた。

作業員達「うわあああっ!!」

吹っ飛ばされた作業員達は大の字の状態や顔面から地面に激突したのであつた。

リーダー「な、一瞬で……! いや、これは幻だ! 俺はきつと幻を見て

いるんだ！」

一輝「これは幻ではない、現実だ。さあ、フィーネに関して教えてもらおうか」

リーダー「そ、それは知らん！」

完全に現実逃避し、しらばつくれる工作員のリーダーに一輝は鳳凰幻魔拳を叩き込んだ。

一輝「鳳凰<sup>フェニックス</sup>幻魔拳。さあ、フィーネに関する事を洗いざらい話してもらおうぞ」

リーダー「わ、わかった。フィーネは……」

幻魔拳を受け、フィーネに関する情報を話そうとしたリーダーだったが、突如としてノイズが襲ってきた。

リーダー「うわああああっ!!」

そのままリーダーはノイズによって炭素分解され、死亡した。そして、部下達もノイズに炭素分解されて殺された。

一輝「口封じか……!」

口封じされて情報を掴み損ねた一輝はその場を後にした。そして、その光景を例のプラチナヘアの女が見ていたのであった。

特異災害対策機動部二課

そして、了子は帰ってきた。

了子「大変長らくお待たせしました♪」

美衣「了子さん、無事だったのですね？」

了子「何よ。そんなに寂しくさせちゃった？」

弦十郎「広木防衛大臣が殺害された」

了子「え!?!ほんと!?!」

そして、沙織は端末を見せた。

沙織「しかも、グランド財団情報網によれば実行犯は直後に現れたノイズによって殺されてしまったようです」

弦十郎「だが、生き残りがいると判断して目下全力で捜索中だ」

響「了子さんにも連絡もとれないからみんな心配してたんです!」  
瞬「それで、何かありましたか？」

了子「え？」

念のため、了子は自分の端末を見た。

了子「壊れてるみたいね♪でも、心配してくれてありがとう。そして、政府から受領した機密資料も無事よ。任務遂行こそ、広木防衛大臣の弔いだわ」

ケースからメモリー端末を見せた了子であったが、そのケースの死角には血痕がついていた。それには聖闘士だけが気付いたのであった。

紫龍「了子さん、この血痕は何ですか？」

了子「え？やだ、血痕がついちやってたの!？」

紫龍「この女、広木防衛大臣暗殺に何か関わっているのではないのか…?）」

黒幕とまでは突き止められなくても、了子が広木防衛大臣暗殺に関わっていると推測した紫龍であった。

それから、作戦会議となった。

了子「私立リディアン音楽院高等科。つまり、特異災害対策機動部二課を中心に頻発しているノイズ発生事例から、その狙いから本部最奥区画アビスに厳重保管されている『サクリストDデュランダル』の強奪目的であると政府は結論付けました」

響「デュランダル…」

星矢「沙織さん、デュランダルってそんなに凄い代物なのか？」

沙織「私は聖遺物に詳しくないので、凄い代物としか言えません…」

了子「EU連合が経済破綻した際、不良債権の一部肩代わりを条件に日本政府が管理・保管する事になった完全聖遺物の一つ」

朔也「移送するつたって、どこにですか？ここ以上の防衛システムなんて…」

弦十郎「永田町最深部の特別電算室、通称“記憶の遺跡”そこならばという事だ。どのみち俺達が木っ端役人である以上、お上の威光には敵わないのさ。」

沙織「司令、防衛大臣殺害の犯人がアメリカ政府の息のかかった者

達であれば、私が証拠等をアメリカ政府に提示し、余計な行動をしないように警告を行います」

弦十郎「そんな事をして大丈夫なのか？」

沙織「私が現代に降臨した女神アテナだとお忘れなのですか？それに、彼等も聖闘士と事を構えたくないはずです」

地上の愛と平和を守るためならば、大國政府にも文句を言う沙織に弦十郎は笑った。そして、デュランダル of 移送作業が始まった。

了子『『デュランダル』の予定移送日時は明朝15:00、詳細はメモリーチップに記載されています』

響「あそこがアビスですか」

氷河「どれだけ深いんだ？」

了子「東京スカイタワー三本分。地下1800mにあるのよ♪」

その途方もない深さに響はおろか、星矢達も驚いていた。

了子「予定時間まで休んでなさい。あなた達のお仕事はそれからよ♪」

リディアン 寮

星矢達は二課で待機し、響は寮に戻っていたが、未来にお説教されていた。

未来「朝からどこ行ってたの!?!いきなり修行とか言われても」

響「ああー、えっと…つまりですね…」

未来「ちゃんと説明して!」

響「ああ、ごめん!もう行かなくっちゃ!」

慌てて響は部屋から出ていき、未来は寂しそうに見ていた。

未来「何も心配させてくれないの…?」

特異災害対策機動部二課

響は二課本部のソファで待機していた。

響「絶対未来怒らせちゃったよね…」

沙織「そうですね。近いうちに、彼女にも事情を話さなければならぬでしょう…」

響「こんな気持ちじゃ眠れないよ…」

そう言った後、沙織や美衣と一緒にテーブルに置かれた新聞を読んだが、その開いたページにはセクシーな下着姿の美女の写真があった。それに響はかなり驚いた。

美衣「まあ、随分とセクシーな写真ですわね」

響「2人共驚かないのですか!？」

沙織「実は私、事故で星矢に裸を見られてしまいましたから」

響「じ、事故で星矢さんに裸を見られたくく!!？」

美衣「あと、沙織様は気を失っている星矢さんにキスしようとした事もあるそうです」

響「キスしようとしたくく!!? 大胆すぎるくく!」

星矢に裸を見られたり、キスしようとした沙織に響は驚いた。流石にこの二つを話す際は沙織自身も少し恥ずかしそうにしていた。だが、次のページには『風鳴翼、過労で入院』と書かれていた。

慎次「情報操作も僕の役目でして…」

響「緒川さん」

慎次「翼さんですが、危険な状態を脱しました。ですが、しばらくは二課の医療施設にて安静が必要です。月末のライブも中止です。さて、フアンの皆さんにどう謝るか、響さんも一緒に考えてくれませんか？」

その言葉に思わず響は自分のせいだと受け取った。

慎次「あ、いや、そんなつもりは…」

美衣「緒川さん、もう少し話す言葉を考えてください」

響「ふふふっ…」

慎次「ごめんなさい、責めるつもりはありませんでした。伝えなかったのは、何事もたくさんの人間が少しずついろんなところでバックアップしているという事です。だから響さんももう少し肩の力を抜いても大丈夫じゃないでしょうか？」

響「優しいんですね、緒川さんは」

慎次「怖がりなだけなんです。本当にやさしい人は他にいますよ」

響「少し楽になりました。ありがとうございます」

沙織「時間までゆっくり休んでください」

響はゆつくりしに行った。

慎次「翼さんも響さんぐらい素直になつてくれたらな」

そして、未明……。整列する黒スーツの面々と響と聖衣を纏った星矢達に弦十郎から指示が出た。

弦十郎「防衛大臣殺害犯の生き残りを検挙する名目で検問を配備！

記憶の遺跡まで一気に駆け抜ける！」

了子「名付けて、『天下の往復独り占め作戦』♪」

作戦開始しようとした途端、緊急連絡が入った。

弦十郎「ノイズか……！」

紫龍「司令、ここは俺と星矢と氷河が向かいます！」

星矢「瞬は響と一緒にデュランダルの移送を頼むぜ」

瞬「うん、わかったよ」

氷河「では、行くぞ！」

星矢達3人はノイズ退治に出撃し、残る瞬は響と共に了子の車に乗って移動した。

## 道路

上空を弦十郎が乗ったヘリコプターが飛び、黒い車4台と了子の車でデュランダルの移送任務が開始された。瞬は何が起こっても大丈夫なようにネビュラチェーンで気配を探っていた。

瞬「了子さんは蛇遺座の黄金聖衣を持つてるそうですけど……、その呪われた聖衣を持つてて大丈夫なんですか？」

了子「平気よ、平気。むしろ、あの聖衣は私と巡り会う運命にあった聖衣だと思っっているわよ」

響「運命……ですか……？」

了子「実をいうと、蛇遺座の黄金聖衣はもう何千年も前の黄金聖闘士であった私のご先祖様が纏っていた聖衣よ。ご先祖様には大好きな神様がいたんだけど、人と神は交われないという理由で振られちゃったの。でも、それを諦めきれないご先祖様は自分も神になるために修行を積んで聖闘士になり、人々を救って更に精進して神様にな

ろうとしたの。だけど、それを色々な神様は許してくれなくてご先祖様は聖衣と共に聖域から追われ、元仲間にと討たれて死んでしまったの。仲間から追われて誰も信じる事ができず、死ぬまでずっと守ってくれた聖衣だけが唯一の相棒だった。…っていう悲しい話なの…」

響「あの…聖衣を相棒だなんて…」

瞬「聖衣には意志があるんだ。だから、聖域から追われた自分をずっと守ってくれた聖衣を了子さんのご先祖様は相棒と言ったんじゃないかな？」

響「そうなんですか？」

了子「そうなるわね…。でも、何千年もの時を経て、私のご先祖様の遺した聖衣と巡り会うなんて、運命を感じるわ」

そう言っていると、突如として道路の片側車線が崩れた。

瞬「了子さん！」

すぐに一列に並んだが、1台並びきれずに落ちた。

了子「しっかり掴まってね。私のドラテクは凶暴よ」

響「えっ？」

瞬「望むところです！」

市街地

市街地に入った所で、通信が入った。

弦十郎『敵襲だ！まだ目視で確認していないが、ノイズだろう！』

瞬「僕のチェーンに反応がありました！間違いない、ノイズです！」

了子「この展開、想定していたより早いかも！」

今度は一番後ろの車がマンホールの蓋が吹っ飛ぶのと同時に吹っ飛んだ。

弦十郎『下水道だ！ノイズは下水道を通ってきている！』

瞬「やはり…！」

次は前の車が吹っ飛ばされて了子の車に落ちてきた。

響「わわわっ！」

しかし、瞬はすぐにネビュラチェーンで車を弾き了子のドラテクで完全回避したが、路上のゴミを撥ね飛ばしていた。



了子「ナイスよ、瞬君！おかげで助かるわ！」

瞬「まだ油断は禁物です！」

了子「弦十郎君、ちよつとやばいんじゃない!?この先の薬品工場でも起きたらデュランダルは」

弦十郎『わかっている！さつきから護衛車を的確に狙い撃ちしてくるのは、ノイズがデュランダルを損壊させないよう制御されているとみえる！』

了子「ちっ！」

弦十郎『狙いがデュランダルの確保なら、あえて危険な地域に滑り込み、攻め手を封じるって算段だ！』

了子「勝算は!?!」

弦十郎『思いつきを数字で語れるものかよ!』

今度はナメクジ型のノイズが護衛車を襲い、ドライバー達は脱出したが車は工場のタンクに激突して爆発した。

響「狙い通りです！」

しかし、突如として車はひっくり返った。

弦十郎『南無三!』

慌てて3人は車から出たが、その場には大量のノイズが出現した。

そして、瞬はケースに入ったデュランダルを車から出した。

瞬「デュランダルは回収しました！」

了子「うーん…。いっそ、ここに置いて私達は逃げましょ」

響「そんなのダメです！」

瞬「敵に奪われたら大変な事になりますよ！」

了子「そりやそうね〜」

そうしているうちにノイズの攻撃で車が爆発し、3人は吹っ飛ばされた。瞬はすぐに受け身をとったが、響はとれずにケースが近くに落ちた。爆発の際の煙で弦十郎は現場が見えなくなった。その後もノイズ達が襲い掛かってきた。

瞬「ネビュラチェーン！」

すぐに瞬はネビュラチェーンでノイズを迎撃し、了子の方もバリアでノイズの攻撃を防いだ。

瞬&響「了子さん？」

了子「しようがないわね！あなたのやりたい事をやりたいようにやりなさい！」

その言葉に響は立ち上がった。

響「私、歌います！」

響は戦いの歌を歌い、戦姫となった。そして、戦いの邪魔になるため、ヒールを破壊した。

瞬「後ろは僕に任せて、響は前の敵を頼む！」

響「わかりました、瞬さん！」

後ろからノイズが向かってきたが、次々とネビュラチェーンの防衛範囲に入っては餌食になっていった。そして、響の方は掌底や正拳、ひじ打ち、回し蹴りといったこれまでの修行で学んだ格闘技でノイズを次々と葬っていった。その様子にクリスは驚いていた。

クリス「こいつ、戦えるようになっていいのか…？」

戦闘の最中、ケースが開いた。それと同時に、チェーンがわずかな反応を見せた。

了子「この反応、まさか…！」

ノイズを蹴散らしている響の方へクリスが襲い掛かった。

クリス「今日こそはものにしてやる！」

響の顔面に蹴りを入れた。

響「（まだシンフォギアを使いこなせていない！どうすればアームドギアを…）」

響が地面に叩きつけられるのと同時にケースがブチ破られ、デュランダルが現れ、金色のオーラを纏って空に浮かんだ。

了子「覚醒？起動？」

それにチェーンが反応してかなり警戒した。

瞬「（これは、ギャラクシアンウォーズの時と同じだ！チェーンが警告している！）」

クリス「こいつがデュランダル…」

デュランダルを奪おうとしたクリスだったが、響に妨害された。

響「渡すものか〜！」

瞬「響、それを持っては」

瞬の警告も遅く、響はデュランダルを手にした。すると、金色のオーラはさらに強くなり、それと同時に響に異変が起き、空に金色の光が昇った。その場にいる全員が見る中、デュランダルは新品同然になったが、響は誰が見ても暴走している状態になっていた。

響「うううつ、ああああああ!!!!」

クリス「こいつ、何しやがった!?!」

クリスは了子の方へ視線を向けたが、了子の表情は歪んだ笑みになっっていた。

クリス「そんな力を見せびらかすな!」

クリスは杖からノイズを出して響にけしかけたが、暴走響はそれを本能で察知し、デュランダルを振り下ろそうとした。しかし、すぐにネビュラチェーンで拘束された。

瞬「やめるんだ、響!薬品工場を破壊したら、とんでもない事になるんだよ!」

響「ぐううううつ!!」

瞬「君、すぐにこの場から逃げるんだ!」

クリス「この状況で何言ってやがるんだよ!鎖女!」

瞬「僕は男だ!それに、君は何となく根っからの悪人には見えないんだ」

クリス「勝手に悪人じゃないとか決めつけんな!だったら、この前のネビュラ何とかでそいつをぶっ飛ばせよ!」

瞬「それはできない!響は暴走してるだけなんだ!そんな人にネビュラストームを使う事なんて」

優しすぎて争いを好まない瞬はノイズには容赦なくネビュラストームを撃てても、暴走している響には撃てなかった。暴走響はデュランダルのエネルギーを開放して瞬とクリスを吹っ飛ばし、チェーンの拘束を解いたのであった。

瞬「うわああああつ!!」

クリス「この野郎...!」

そのままクリスは攻撃しようとしたため、暴走響は大ジャンプして

そのままデュランダルを振り下ろそうとしたが、即座に瞬が突き飛ばした。

クリス「な、何を」

クリスを庇って瞬はデュランダルの光に吞まれ、爆発に巻き込まれた。

瞬「うわああああっ!!」

クリス「この……バカヤロー!!!」

敵なものにも関わらず、自分を庇って暴走響の攻撃に吞まれた瞬にクリスは叫ぶほかなかった。

クリス「鎖野郎はおかしな奴だけど、そいつを殺しやがって、このさつきまで敵だったのに自分を庇った瞬の仇をとろうとしたクリスだったが、以前にも感じた気配に驚いた。

クリス「何だ…、この気配…?」

それは、爆発の起こった所からだった。炎が火の鳥のような姿になった後、そこから瞬の兄、一輝が聖衣を纏った状態で間一髪で助け出した瞬を抱え、現れた。

クリス「てめえ、あの時の…」

瞬「兄さん、やっぱり来てくれたんだね!」

一輝「ああ、勿論だ」

クリス「てめえら…兄弟なのかよ!!」

以前、自分を打ち負かした一輝が瞬の兄である事にクリスは驚愕した。そして、暴走響は一輝と対峙した。

響「うわああああっ!!」

一輝「ふん…」

暴走響の攻撃を一輝は軽くあしらひ、一瞬で追い込んだ。

一輝「これで止めだ…! 鳳翼」

瞬「待って、兄さん! 響はデュランダルを手にして暴走しているだけなんだ!」

一輝「暴走だって?」

そうしている間にも暴走響は襲い掛かってきた。

一輝「心配するな。その響という奴は殺さん。俺には肉体を傷つけ

ずに無力化できる技があるからな」

瞬を安心させ、改めて一輝は暴走響と対峙した。

一輝「今からお前を正気に戻してやる！フェニックス鳳凰幻魔拳!!」

暴走響に幻魔拳が打ち込まれた。

幻覚

その幻覚は、リディアンの授業中から始まった。

教師「立花さん、また遅」

しかし、突如として暴徒化した人間達が押し寄せてきた。

暴徒A「てめえ、何で金を受け取ってやがるんだよ！」

暴徒B「人を殺しておいて、よく生きていられるわね！」

誹謗中傷をぶつけてくる暴徒達は次第にノイズへと姿を変え、誹謗中傷をぶつけるのを続けながら次々と響のクラスの生徒を炭素分解して殺していった。

未来「こ、怖いよ…!」

響「嫌…、こつちに来ないで！」

逃げ場がなく、未来と二人で追い詰められていく響であった。そして、ノイズの1体が襲い掛かり、未来が捕まってしまった。

未来「響くくくつ、死にたくない、死にたくないくく!!」

未来が悲鳴をあげながら炭素分解されて死んでいく姿に響はもう限界だった。

響「嫌くくくつ!!!」

響「ああああああつ!!!」

幻魔拳を受け、未来や同じクラスの生徒が響に誹謗中傷をぶつけるノイズに殺されるという恐ろしい幻覚を見てパニックになった響は激しく動き、力を暴発させてノイズを全滅させた後、力なく倒れた。

クリス「あの野郎…、何をしたんだ…？」

もう用はないと判断したクリスはその場を去った。弦十郎も現場が気になった。

弦十郎「一体、何が起こったんだ…？だが、薬品工場の被害は小さ

くて済んだな…」

それからしばらくしてから、響は起きようとした。

響「(何?今の力…。私、体が勝手に動いてから、未来がノイズに殺されるのを…)」

瞬「響、大丈夫?」

響「瞬さん、未来は!?!」

瞬「それは大丈夫、君が見たのは一輝兄さんが響を正気に戻すために見せた怖い幻なんだ」

響「幻…」

未来が殺された光景が幻であった事に響は安心した。

響「あの…これって…」

了子「これがデュランダル。あなたの歌声で起動した完全聖遺物よ」

響「あの、私、それに了子さんのあれ…」

了子「ん?いいんじゃないの?そんな事♪助かったんだし、ね♪」  
そんな了子を一輝は警戒していた。

一輝「(あの女が櫻井了子か…)」

響「あの…、助けてくれてありがとうございます、瞬さんのお兄さん!」

一輝「響、さっきの暴走はお前の心が半端だからこそ、強大な力を制御できずに引き起こした事だ。このままだとお前は大切なものを自分の手で失う事になるだろう。そうなりたくないのなら、何が何でも己を見失わずに力に吞まれるな」

一輝からの言葉は厳しいものだった。

瞬「兄さん、これからどうするの?」

一輝「まず、星矢達に伝えたい事がある。それを伝えるために、俺は帰ってきた」

自分がこれまで集めた情報を伝えるため、一輝は瞬と共に星矢達の所へ向かった。

## 8話 すれ違い

城戸邸

星矢達は報告のために帰ってきた一輝からこれまで手に入れたファイネに関する情報を聞いていた。

星矢「一輝はファイネに関する事を探るためにずっと聖遺物の研究所を回っていたのか!？」

一輝「ああ、そうだ。ノイズ襲撃から救出したある兵士から『ファイネ』というのを聞いて、それが何なのかを探っていた。そして、蛇遣座の黄金聖衣がファイネの手掛かりになると判断して、日本にやってきたというわけだ。その道中、アメリカの作業員共が仕掛けた殺人の現場にばったり遭遇してそれいづらからファイネに関する情報を幻魔拳で聞き出そうとしたが、その直後にファイネを知っているようだったリーダーや部下達はみんなノイズに殺されて口封じされたがな」

その言葉に沙織はピンと来た。

沙織「一輝、あなたが見た現場は広木防衛大臣暗殺の現場ではないでしょうか!？」

一輝「俺が見たのは政府要人暗殺の現場だったというのか!？」

美衣「沙織様、これで米国政府の弱みを握る事ができましたね」

沙織「それを突き付ければ、米国政府も聖遺物に関する事で日本政府に強く出る事はできなくなるでしょう。一輝、今回のあなたの行いは大手柄です」

一輝「ふっ、照れるな…」

瞬「でも、防衛大臣暗殺を米国政府に依頼した黒幕は誰なのかな?」

氷河「そこが引っかかるな…」

そんな中、紫龍は一輝の話である確信を得た。

紫龍「その防衛大臣暗殺の依頼主である黒幕で、口封じでノイズを使つて作業員達を殺した犯人は一輝の探しているファイネではないのか?」

氷河「そうか!ファイネが黒幕なら、邪魔になつていた防衛大臣を暗殺するために米国政府に依頼し、一輝に情報を漏らさないために口

封じで工作員達を殺したのも納得がいく！」

瞬「あと、この前の戦いではあのネフシユタンの鎧の子は僕を氣遣ったりするような事を言ってたから、あの子はノイズ事件の黒幕じゃなさそうな気がしたんだ」

星矢「とすれば、フィーネがリディアン周辺のノイズ事件の黒幕って事にもなるな」

一輝「星矢達の情報と俺の得た情報が合わさって、敵の正体も少しずつ判明してきたな」

星矢「なら、何で二課のメンバーと一緒に会議をしないんだ？ノイズ関連の専門家も一緒の方が」

紫龍「それは、櫻井了子が気になるからだ」

一輝「奇遇だな、紫龍。俺も櫻井了子が怪しいと思っっている。もしも、二課のメンバーにもフィーネの事を話せば、了子は何かしでかすだろう」

沙織「だから、私達だけでこの事を話したいと紫龍は言ったのですね？」

紫龍「はい」

星矢「一輝はこれからどうするんだ？」

一輝「引き続きフィーネの情報を集め、行方を探る。お前達もノイズを倒しながら別の方向でフィーネを探ってくれ」

瞬「だけど、気を付けてね、兄さん」

一輝「心配するな、俺は簡単にくたばりはしない」

そう言つて一輝は席を立ち、城戸邸を後にした。

???

湖の畔でクリスは佇んでいた。

クリス「(完全聖遺物の起動には相応のフォニックゲインか膨大な聖闘士の小宇宙が必要だとフィーネは言っていた…。あたしがソロモンの杖に半年も手古摺った事をあいつはあつという間に成し遂げた。そればかりか、無理矢理力をぶっ放して見せやがった…)」

それは、デユランダルを起動させて暴走した響の事であった。その



時は瞬が庇い、一輝が暴走した響に幻魔拳をかけて正気に戻したために事なきを得たが、クリスには屈辱だった。

クリス「くっ、化け物め！このあたしに身柄の確保なんてさせるくらい、フィーネはあいつにご執心つてわけかよ。あの金ピカ鎧と同じぐらいに」

金ピカ鎧とは、黄金聖衣の事であった。そして、クリスは両親の死、地獄の苦しみなどの思い出したくない忌まわしい過去を思い出していた。

クリス「(そしてまた…、あたしは一人ぼっちになるわけだ…)」

日の出を眺めていると、プラチナヘアの女で一輝が探している謎の人物、フィーネが背後にいた。

クリス「わかつている。自分に課せられた事くらいは。こんなものに頼らなくとも、あんたの言う事くらいやってやらあ！」

そう言つてクリスはソロモンの杖をフィーネに渡した。

クリス「あいつよりも、あたしの方が優秀だつてことを見せてやる！あたし以外に力を持つ奴は全部この手でぶちのめしてくれる！そいつがあたしの目的だからな！例え聖闘士であっても、女の面をした鎖野郎でも容赦しねえ！」

フィーネ「(この子もそろそろ用済みね。奴等もフェニックス相手にハマをやらかしてあの女に弱みを握られたし、所詮はこんなものよ。やはり信頼できるのは、あの聖衣だけだわ)」

クリスの態度にフィーネはそろそろ用済みだと判断しており、利用していた相手も一輝を相手に失態を犯したため、心の底から信頼しているのはいつも自分の傍に置いている聖衣だけだった。

## 病院

その頃、入院している翼は手術前に紫龍が小宇宙で応急処置をしてくれたため、歩行などの軽い運動はできていたが、まだ点滴はとる事ができなかった。

翼「(奏、私も見てみたい！見なければ奏と同じところに立てない。戦いの裏側、向こう側に何があるのか確かめたいんだ)」

??? 「あまり無理をするな、翼」  
声をかけたのは紫龍と氷河だった。

翼「紫龍、氷河：」

紫龍「司令から頼まれてお前の様子を見に来た」

氷河「きちんと大人しくしないと、治るものも治らなくなるぞ」

2人の言葉に翼は渋々戻る事にした。3人がふと外をみると、響と未来が走っているのを見た。響は先のデュランダール暴走の事を思い出していた。

響「(暴走するデュランダールの力。怖いのは制御できない事じゃない、ためらいもなくあの子や止めようとした瞬間さんに向かって振りぬいた事。一輝さんの言う通り、私がいつまでも弱いばかりに)くっ」  
未来は途中でへばったが、響はまだ走り続けていた。

響「私は、ゴールで終わっちゃダメだ!もつと遠くを目指さなきゃダメなんだ!もつと遠くへ、遠くへ!」  
焦る響を未来は悲しそうに見ていた。

リディアン 寮

走り込みが終わった響と未来はお風呂に入っていた。

未来「もう、張り切り過ぎだよ!」

響「ごめん、考え事したらつい：」

未来「やっぱり、響は変わった子!」

響「日曜の朝なのにごめんね、付き合わせちゃって」

未来「ううん、私も中学時代を思い出して気持ち良かったー」

響「あれだけ走ったのに?やっぱ流石だよ、元陸上部。こっちはヘトヘトのヘロヘロでトロトロだったのに：」

そんな響に未来は寄り添った。

未来「ひくびき!」

響「ん?」

未来「なんか、リディアンに入学してから変わったよね。前は何か頑張ったりとか好きじゃなかったでしょ?」

響「ん?そうかな?自分じゃ変わったつもりはないんだけど：」

未来「あれ？少し筋肉が付いてるんじゃない？あつ、よく見たら傷だらけじゃないの！」

「なんやかんやで騒ぐ未来と響はお風呂から上がった。」

未来「ねえ、今度フラワーでお好み焼き奢ってよ。日曜に付き合ってたお返しという事で」

響「えっ？そりゃ、おばちゃん、『渾身の一枚』はほっぺの急降下作戦と言われるくらいだけど……」

未来「んじゃ、契約成立ね！楽しみだなあ、フラワーのお好み焼き」  
響「ほんとにそんなのでいいの？」

未来「うん、そんなのがいいな！」

### 特異災害対策機動部二課

その頃、二課では弦十郎は喪服に着替えていた。

了子「亡くなられた広木防衛大臣の法要でしたね？」

弦十郎「ああ。ぶつかる事もあったが、それも俺達を庇ってくれての事だ。心強い後ろ盾を失ってしまったな……」

朔也「ですが、グレード財団総帥の沙織お嬢様や聖闘士という新しい後ろ盾もできました。亡くなられた防衛大臣のためにも、彼等と共に力を尽くしましょう」

弦十郎「そうだな……。こちらの進行はどうなっている？」

了子「予定よりプラス17%」

朔也「デュランダル移送計画が頓挫して、正直安心しましたよ」

あおい「その後本部の防衛システム、及び強度アップを行う事になるとは」

了子「ここは設計段階から限定解除でグレードアップしやすいように織り込んでいたの。それに、この案は随分昔から政府に提出してあったのよ」

あおい「でも確か、当たりの厳しい議員連に反対されていたと……」

弦十郎「その反対派の筆頭が、広木防衛大臣だった。非公開の存在に血税の対応や無制限の超法規措置は許されない、ってな。大臣が反対していたのは、俺達に法令を遵守させる事で余計な横槍が入ってこ

ないように取り計らっていたからだ」

「あおい「司令、広木防衛大臣の後任は？」」

弦十郎「副大臣がスライドだ。今回の本部改造を後押ししてくれた立役者でもある。あるんだが……」

「あおい「どうかしましたか？」」

弦十郎「協調路線を強く唱える親米派の防衛大臣の誕生。つまりは、日本の国防政策に対し米国政府の威光が通りやすくなったわけだ」

「あおい「まさか、防衛大臣暗殺の件にも米国政府が？」」

「???『その通りです』」

通信で沙織が連絡を入れた。

弦十郎「沙織お嬢様！」

沙織「一輝が偶然現場を目撃しましたが、広木防衛大臣暗殺の犯人は米国政府の工作員でした。それを一輝から聞いた私は米国政府に直接電話でその事実を突き付け、『今後、日本政府に聖遺物関連での余計な口出しを慎む事。それを守れない場合、広木防衛大臣暗殺等の暗躍を全て暴露し、それと共に聖闘士が裁きを下しに来ます』と警告して彼等の弱みを握りました。今後、表立って余計な干渉は控えるでしょう」

朔也「やはり、米国政府の仕業だったのか！」

弦十郎「行動が早いな。それに、その強い正義感と忽然とした態度は間違いなく育ての祖父の光政翁譲りだ。グラード財団の世界経済への影響力もあつて、米国政府も光政翁にはタジタジにされていたからな」

「あおい「沙織お嬢様の心強さは亡くなられた広木防衛大臣にも匹敵しますね！これで、今までのようにいけますよ！」」

弦十郎「ああ、その通りだ」

了子「それじゃ、ちよつと現場を見てくるわね」

少し現場を見に行こうとした了子だったが、冷たい視線を通信の先の沙織に向けていた。

リディアン

そして翌日、響の電話に連絡が入った。

響「はい、えっ？私がですか？」

慎次『ちよつと手が離せないんですよ。すみませんがお願いできませんか？こんな事頼めるの、響さんしかいなくて』

どうしても諜報部との活動で手が離せない慎次は響に依頼したのであった。

響「…はい、わかりました！ああ、それじゃあ、失礼します！」

ちよつと未来が来たため、響は電話を切った。

響「あれ？未来、どうしたの？」

未来「うん。今日これから買い物に行くんだけど、響も行かない？」

その後でフラワーに寄ってね」

響「ごめん、たつた今用事が入っちゃって…」

未来「…：…そっか」

響「せっかく未来が誘ってくれたのに、私呪われてるかも…」

未来「ううん、わかった。じゃあ、また今度」

断ってしまった事を申し訳なく思う響であった。

未来「気にしないで！私も図書室で借りたい本があるから、今日はそっちにする」

響「ごめんね」

謝ってから響はその場を離れた。しかし、二人の心には陰りができ始めていた。

## 病院

慎次に頼まれ、響は病院に来たが、病院には星矢達も待っていた。

響「星矢さんにみんな！」

星矢「待ってたぜ」

瞬「緒川さんから聞いて、僕達も待ってたよ」

響「あの…、一輝さんは…？」

星矢「一輝は群れるのが嫌だからある事で報告をしてからまたどこかへ行ったよ」

響「あんなに強いのなら、いつも一緒の方がいいのに…」

紫龍「響、人は違った性格の人がたくさんいるんだ。一輝みたいな生き方を好む奴がいても不思議ではない」

氷河「それに一輝は大事な時、特に瞬の危機には必ず駆け付けて俺達と共に戦うから、普段は一輝の好きにさせてやってくれ」

響「そうですか…」

そして、響は決意した様子で翼が入院している個室に佇み、深呼吸した。

星矢「別にそんな事をしなくても」

響「失礼します！」

翼の個室に入った響だったが、その有様に驚愕していた。

星矢「あちやゝ…」

紫龍「相変わらずだ…」

???「何をしているの?」

部屋の有様に響が驚愕し、星矢達が呆れていると、後ろに翼がいた。

響「大丈夫ですか!? 本当に無事なんですか!」

翼「入院患者に無事を聞くって、どういう事?」

響「だって…これは…!」

そう、翼の個室は強盗が入ったかのように物が散らかっていたのであった。

響「私、翼さんが誘拐されちゃったんじゃないかと思って! 二課のみんながどこかの国が陰謀を巡らせているかもしれないって言うってたし!」

紫龍「翼はそういうのが全然ダメな奴でな、俺達が来る度にこうなってるんだ」

星矢「仕方ねえな。俺達でお片付けしようぜ」

氷河「そうだな」

そう言つて、星矢達はマッハの動きであつという間にお片付けを終えてしまった。

瞬「はい、終わり!」

響「は、早すぎっ!!? 5秒で終わっちゃった!」

星矢「今のでも軽くだ。本気を出せば、光の速さで動けるぜ」

響「ひ、光の速さ!？」

翼「これ程のものとは…!」

聖闘士の圧倒的な動きの速さに2人は驚愕していた。

翼「もう、そんなのいいから…」

響「私、緒川さんからお見舞いを頼まれたんです。ほんとは、片付けたかったんですけど…」

星矢達にマッハの速さで先に片付けられて響はしょんぼりしていた。

翼「私はその…、こういう所に気が回らなくて…」

響「以外です。翼さんって、何でも完璧にこなすイメージがありましたから」

瞬「でも、それはあくまでもイメージでしかない。実際はどんなものかは、他の人が見てみなきゃわからないんだ」

翼「そう。真実は逆ね。私は戦う事しか知らないのよ」

星矢「奇遇だな。俺達もガキの頃から戦いの訓練に明け暮れていたんだぜ」

紫龍「もつとも、星矢の師の魔鈴さん、俺の師の老師、氷河の師の水晶聖闘士、瞬の師のアルビオレは戦い方以外にも人として大切な事も色々教えてくれたがな」

氷河「本来だったら、俺達も学校に行ってた年頃だけだな」

響「本当だったら、星矢さん達が学校に行っているイメージが思い浮かばない…」

星矢達はあまりにも大人びているため、響には制服姿の星矢達のイメージが思いつかかなかった。

翼「…今はこんな状態だけど、報告書は読ませてもらっているわ。私が抜けた穴をあなたが良く埋めている事もね」

響「そんな事は全然ありません!いつも星矢さん達や二課のみんなに助けられっぱなしです!」

その様子に響達の前で初めて翼は笑い、星矢達も一緒に笑ったのであった。

## 図書館

その頃、図書館では未来は『素直になって、自分』という本を手にとっていた。

未来「はあっ…」

ふと、窓を見ると、そこには楽しそうに会話している響と翼、そして星矢達の姿があった。その姿に未来はショックを受け、落ち込んだ。

## 病院

病院では話が続いていた。

響「嬉しいです。翼さんにそんな事、言ってもらえるなんて…」

翼「でも、だからこそ聞かせてほしいの。あなたの『戦う理由』を」

響「えっ?」

その言葉に響は驚愕した。

翼「ノイズとの戦いは遊びではない。それは今日まで視線を超えてきたあなたならわかるはず」

響「よくわかりません…。私、人助けが趣味みたいなものだから、それで…」

翼「それで?それだけで?」

響「だって、勉強とかスポーツは誰かと競い合って結果を出すしかないけど、人助けって誰かと競い合わなくていいじゃないですか。私には特技とか人に褒められるものがないから、せめてみんなの役に立てればいいかなあって、あはははは」

しばらく沈黙が続いた。

響「きっかけは、やっぱり『あの事件』かも知れません。私を救うために奏さんが命を燃やした2年前のライブ。奏さんだけじゃありません。あの日、たくさんの人がそこで亡くなりました。でも、私は生き残って今日も笑ってご飯を食べていたりしています。だから、せめて誰かの役に立ちたいんです。明日もまた笑ったりご飯を食べたりしたいから…、人助けがしたいんです」



星矢達の反応は微笑みを浮かべるものだった。

翼「あなたらしいポジティブな理由ねだけど、その思いは『前向きな自殺衝動』かも知れない」

響「自殺衝動!?!」

翼「誰かのために自分を犠牲にする事で古傷の痛みから救われたいという、自己断罪の現れかも」

星矢「(前向きな自殺衝動か…)」

響「あの…、私、変な事言っちゃいましたか?」

星矢「ん?」

その場で笑った後、一同は屋上へ移動した。

翼「変かどうかは私が決める事じゃないわ。自分で考え、自分で決める事ね」

響「考えても考えてもわからない事だらけなんです。デュランダルに触れて暗黒に吞まれました。気が付いたら、人に向かってあの力を…私がアームドギアをうまく扱えていれば、あんな事にならずに…」

翼「力の使い方を知るという事は即ち、戦士になるという事。それだけ、人としての生き方から遠ざかる事なのよ。力を身に付けるために数年間修行に明け暮れていた星矢達のように。あなたに、その覚悟はあるのかしら…?」

その問いに響ははっきり答えた。

響「守りたいものがあるんです。それは何でもない、ただの日常。そんな日常を大切にしたいと強く思うんです。だけど、思うばかりで空回りして…」

翼「戦いの中、あなたが思っている事は?」

響「ノイズに襲われている人がいるなら、1秒でも早く救い出したいです!最速で、最短で、まっすぐに、一直線に駆け付けたい!そして…」

響の頭にクリスの姿が思い浮かんだ。

響「もしも相手がノイズではなく誰かなら、どうしても戦わなくっちゃいけないのかっていう、胸の疑問を…私の想いを届けたいと考

えています！」

その答えに瞬が口を開いた。

瞬「僕も同じ考えだよ、響。あの子は完全に悪い子じゃないと思う。だから、君のやりたいようにしてみるんだ」

響「瞬さん…」

翼「今、あなたの胸にあるものをできるだけ強くはつきりと想い描きなさい。それがあなたの戦う力、『立花響のアームドギア』に他ならない」

フラワー

一方、未来は落ち込んだ様子で響とよく一緒に立ち寄るお好み焼き店フラワーに立ち寄った。

おばちゃん「いらっしやい！」

未来「こんにちわ」

おばちゃん「おや？いつも人の三倍は食べるあの子は一緒じゃないの？」

未来「今日は私一人です」

おばちゃん「そうかい」

おばちゃんは早速お好み焼きを作り始めた。

おばちゃん「んじや、今日はおばちゃんがあの子の分まで食べるとしようかね」

未来「食べなくていいから焼いてください」

おばちゃん「あはははっ」

未来「お腹空いてるんです。今日はおばちゃんのお好み焼きを食べたくて、朝から何も食べてないから」

おばちゃん「お腹空いたまま考え込むとね、嫌な答えばかり浮かんでくるもんだよ」

未来「（そうかも知れない。何もわからないまま私が勝手に思い込んでるだけなもの。ちゃんと話せばきつと…）ありがとう、おばちゃん」

おばちゃん「何かあったらまたいつでもおばちゃんの所においで」

病院

その頃、響は考え事をしていた。

響「うくん…、そう言われても、アームドギアの扱いなんてすぐには考え付きませんよ。ね、知ってますか、翼さん！お腹空いたまま考えてもろくな答えが出せないって事を」

翼「何よ、それ？」

星矢「腹が減ったのか？」

響「そうじゃなくて、前に私、言われたんです！お好み焼きのおばちゃんに。名言ですよ！」

翼「ああ、そう…」

響「そうだ、翼さん！私、フラワーのお好み焼きをお持ち帰りしてきます！お腹いっぱいになれば、ギアの使い方も閃くと思いますし、翼さん達も気に入ってくれると思いますよ！」

紫龍「響の言う通り、空腹ではろくな事も思いつかんからな」

星矢「だったら、それは軽く音速で動ける俺達に任せてくれないか？」

翼「待ちなさい、立花！」

氷河「初めて響の名前を呼んだようだな、翼」

お好み焼きを買いに行こうとした星矢と響だが、突如として連絡が入った。

星矢「沙織さん？」

沙織『星矢、ネフシユタンの鎧を纏った少女とノイズが出現しました。至急、響さんと一緒に出撃してください！』

星矢「わかったぜ」

響「星矢さん、そのネフシユタンの鎧の子は私に任せてください！」

星矢「ああ。俺はノイズを倒しに行く！」

星矢と響は出撃した。

翼「私も行かねば…！」

瞬「待って！翼さんはまだ戦える体じゃないんだ！僕の応急処置が終わるまで待ってて！」

「行こうとした翼を静止した後、瞬は小宇宙で翼が戦闘できるように応急処置を行った。」

公園

未来は帰宅途中であったが、ぼったり響と遭遇した。

未来「あつ、響！」

響「未来…」

???「お前はー！ー！！」

クリスの気配がしたため、響がその方向を向くと、クリスは攻撃を仕掛けてきた。

響「来ちゃダメだ！ここは」

伝えようとしたのも既に遅く、クリスの攻撃の余波で未来は吹っ飛ばされてしまった。

未来「あああああつ!!!」

クリス「しまった！あいつのほかにもいたのか!？」

未来に車が迫る中、響は戦いの歌を歌った。

響「♪くく♪くく♪」

そしてシンフォギアを纏い、車を粉碎した。

未来「響…?」

響「ごめん…」

響の鎧を纏った姿に未来は困惑していた。そして、響はクリスの元へ行った。

クリス「どんくせえのが一丁前に挑発するつもりかよ！」

未来が巻き添えにならないように響は誘導していた。

未来「何で響が…?」

特異災害対策機動部二課

指令室では響の戦闘の様子を追っていた。

「あおい「響ちゃん交戦に入りました！現在、市街地を避けて移動中！」」

弦十郎「そのままトレースしつつ、映像記録詳解！」

その様子は二課の面々だけでなく、少し前に来ていた沙織と美衣も見ていた。

森

改めて響は被害の出ない場所でクリスと対峙し、クリスは攻撃を仕掛けてきた。

クリス「どんくせえのがやってくれる！」

響「どんくさいって名前じゃない！私は立花響！15歳！誕生日は9月13日で血液型はO型！身長はこないだ測定では157センチ！体重は：もう少し仲良くなったら教えてあげる！趣味は人助けで！好きなものはご飯&ご飯！後、彼氏いない歴は年齢と同じ！」

クリス「な、何をトチ狂ってんだ？お前……。鎖野郎と同レベルじゃねえか！」

響「私達はノイズと違って言葉が通じるんだから、ちゃんと話し合いたい！」

クリス「なんて悠長、この期に及んで！」

鞭の攻撃を響はわかった。

クリス「（こいつ、何か変わった？覚悟か！）」

響「話し合おうよ！私達は戦っちゃいけないんだ！」

クリス「ちっ！」

響「だって、言葉が通じ合えば人間は」

クリス「うるさい！分かり合えるものかよ！人間が、そんな風になってきているものか！気に入らねえ、気に入らねえ、気に入らねえ!!!わかつちやいねえ事をペラペラと知った風にするお前がー!!!」

惨劇を目の当たりにし、地獄を味わったクリスには響が鬱陶しくて仕方なかった。

クリス「お前を引きずってこいと言われたが、もうそんな事はどうでもいい！お前を子の手でたたき潰す！今度こそお前の全てを踏み躪ってやる!!」

響「私だってやられるわけには」

クリス「あああああつ!!ぶっ飛べ！」

苛立ちがピークに達したクリスはNIRVANA GEDONをぶつ放した。それを響は受け止めたが、クリスはすぐに二発目を撃ち込んだ。

クリス「はあ、はあ、はあ…、お前なんかがいるから、あたしはまた…」

響「はあああつ!!!」

しかし、響は両掌でNIRVANA GEDONを圧縮させて打ち消した。

響「くっ、これじゃダメだ！翼さんのようにギアのエネルギーを固定できない！」

紫龍『武器に頼れば隙が生じる！己の肉体を武器に戦うんだ！』

クリス「この短期間にアームドギアまで手にしようつてののか？」

響「エネルギーはあるんだ。アームドギアで形成されないのなら、その分のエネルギーをぶつけるだけ！紫龍さんが言ったように、己の肉体を武器に！」

クリス「させるかよ！」

再び鞭の攻撃を行ったが、響は掴んだ。

響「雷を握り潰すように！」

そして、掴んだ鞭を引っ張ってクリスを自分の方へ引き寄せてから、バーニアで一気にクリスへ近づいた。

響「(最速で、最短で、まっすぐに、一直線に！胸の響きを、この想いを伝えるために!!)」

響は渾身のパンチをクリスに打ち込み、右手のパイルバンカーみたいなパーツが二発目を打ち込んだ。その衝撃でネフシユタンの鎧にヒビが入った。

クリス「(バカな…、ネフシユタンの鎧が…！)」

その衝撃で爆発が起こり、その光景を未来は泣きながら見ていた。

未来「響…」

## 9話 イチイバルの少女

公園

響の一撃は強烈でネフシユタンの鎧を砕いた拳句、クリスが吹っ飛ばされた衝撃で地面が削れるほどだった。

クリス「くっ！(なんて無理筋な力の使い方をしやがる！この力、あの女の絶唱の力に匹敵しかねない！)」

あの女とは翼の事であった。ネフシユタンの鎧は再生していたものの、クリスの体を蝕んでいた。

クリス「(食い破られる前にカタを付けなければ！)」

しかし、響は戦闘の構えを解いていた。

クリス「お前、バカにしてるのか!?このあたしを、雪音クリスを！」

響「そっか、クリスちゃんって言うんだ。ねえ、クリスちゃん！こんな戦いもうやめようよ。ノイズと違って私達は言葉をかわす事ができる、ちゃんと話をすればきつと分かり合えるはずだって、私達同じ人間だよ！」

クリス「お前くせえんだよ…。嘘くせえ、青くせえ！」

いつもの癖で響はクリスの地雷を踏んでしまつて激怒させてしまい、怒涛の反撃を受ける事となった。

響「クリスちゃん…」

クリス「吹っ飛ばよ、アーマーパージだ！」

怒りが臨界点に達したクリスはネフシユタンの鎧をパージし、歌を歌つた。

クリス「♪くくく♪くくく♪」

響「この歌って…」

クリス「見せてやるよ、イチイバルの力をな！」

特異災害対策機動部二課

失われたはずの第二聖遺物、イチイバルの出現で指令室は騒然となった。

弦十郎「イチイバルだと!？」

美衣「イチイバルと言えば、確か資料では10年前に紛失したとされる…」

沙織「まさか、敵の手に渡っていたとは…!」

公園

ネフシユタンの鎧を脱ぎ捨ててクリスはイチイバルを纏った。

響「クリスちゃん、私達と同じ…」

クリス「歌わせたな…、あたしに歌を歌わせたな! 教えてやる、あたしは歌が大っ嫌いだ!」

響「歌が嫌い…?」

クリスは歌を歌いながら響に向かってボウガンを発射し、かわし続ける響の逃げる先に先回りして蹴り飛ばした。しかも、次はボウガンがガトリング砲に姿を変え、左手にもガトリング砲を持ち、ガトリング砲を連射する技、『BILLION MAIDEN』で響に向かって連射した。

病院

瞬の応急処置はもうすぐ終わる所だった。ちょうど病院でも戦闘の様子が見えた。

翼「応急処置はまだか?」

瞬「あと数秒だ! 我慢して!」

そして、応急処置が終わった。

公園

一方、クリスは弾丸の嵐で響を追い詰めていた。そして、今度はミサイルを放つ技、『MEGA DEATH PARTY』を放った。そして、ガトリング砲も連射して辺り一面を爆発と炎で満たした。

クリス「はあ…、はあ…、はあ…、はあ…」

ところが、煙が晴れるとクリスの目の前に壁があった。

クリス「盾?」

??? 「剣だ!」



それは壁ではなく、巨大な剣であった。その上に立っていたのは、瞬の応急処置が終わって出撃した翼だった。紫龍達も翼の送迎で傍にいた。

クリス「ふん、死に体でおねんえだと聞いていたが、『足手まとい』を庇いに現れたのか？」

翼「もうなにも失うものかと決めたのだ！」

氷河「司令には既に俺達が伝えておいた」

紫龍「行ってこい、翼！」

瞬「でも、君はまだ僕の応急処置が終わったばかりで病み上がりだから無理はしないで」

紫龍達は余計な介入はせずに剣から降りて見守る事にした。

響「翼さん……」

翼「聞こえていたか？立花。私は病み上がりで十全ではない。力を貸してほしい」

クリスは狙いを翼に定めてガトリングを連射したが、翼は弾幕を軽々とかわしながら近づき、刀でガトリングを弾いて攻撃を封じてクリスの大勢を崩し、背後に回って首筋に刀を当てた。

クリス「(この女、以前とは動きがまるで……)」

紫龍「(迷いを超えたようだな)」

氷河「(動きにもキレが増しているぞ)」

翼が響を受け入れ、迷いを超えた事を紫龍と氷河は察していた。

響「翼さん、その子は」

翼「わかつている」

クリス「くそっ！」

そして、双方とも武器を構えた。

翼「(立花と瞬が言うように、刃を交える敵じゃないと信じたい。それに、十年前に失われた『第二号聖遺物』の事も質さなければ)」

突如としてノイズが襲来し、クリスにも攻撃を仕掛けてきた。クリスに攻撃を仕掛けてきたノイズのうち、1体は響がタックルで倒し、残りは紫龍達に瞬殺された。

翼「立花！」

すぐに翼は紫龍達と共にノイズの襲撃に備えた。

クリス「お前、何やってんだよ！」

響「ごめん…、クリスちゃんに当たりそうだったからつい…」

クリス「バカにして！余計なおせっかいだ！」

???「命じた事もできないなんて、あなたはどこまで私を失望させるのかしら？」

氷河「お前は何者だ!?姿を現せ！」

突然の声一同は驚き、瞬のチェーンが反応した。

瞬「声の主はあそこだ！」

チェーンが反応した先にはフィーネがいた。

クリス「フィーネ!？」

翼「(フィーネ?終わりの名を持つ者…?)」

瞬「(あの女が、兄さんが追っていたフィーネなのか?!)」

一輝が探していた謎の存在、フィーネが目の中の女だという事を知り、紫龍達は身構えていた。そして、クリスは響を放り出し、放り出された響は翼が抱えた。

クリス「こんな奴がいなくなっただって、戦争の火種ぐらいあたし一人で消してやる!そうすればあんだのいうように、人は呪いから解放されてバラバラになった世界に戻るんだろ!？」

フィーネ「もうあなたに用はないわ」

クリス「えっ?な、何だよそれ！」

氷河「お前は優しさが欠片もないのか!？」

紫龍「フィーネ、貴様という女はその雪音クリスという少女を何だと思ってる!?!今までお前を信じて戦ってきたんだぞ!そんな奴を平気で切り捨てるのか!？」

非常に義理堅い紫龍にとつて、あっさりとクリスを切り捨てたフィーネは許し難い存在だった。

フィーネ「お前達がどうほごこうが、私がどうしようと勝手だ。それにドラゴン、お前は師匠にそっくりだな。その義理堅さ、情の厚さを見てると、あのジジイの若い頃を見てるようだ」

紫龍「貴様、教師を知っているのか!？」

フィーネ「知っている。前の聖戦も、さらに前の聖戦もな」

紫龍「(どうなっているんだ？この女は老師が参加した前の聖戦も、そしてさらに前の聖戦まで知っていると…!?)」

瞬「(この人は本当に長生きしたのか…?)」

フィーネが童虎はおろか、前の聖戦やさらに前の聖戦まで知っていた事に紫龍達は戦慄していた。そんな中、フィーネの手が光るとクリスがパージしたネフシュタンの鎧が粒子状になって回収された。そして、ソロモンの杖を振るとゴールドノイズが複数出てきた。

氷河「ゴールドノイズ！」

紫龍「やはり、こいつが黒幕だったか！」

??「ペガサス、彗星拳！」

ゴールドノイズが後から駆け付けた星矢にあっけなく全滅した際にフィーネはどこかへ行った。

クリス「待てよ、フィーネ!!」

フィーネに見捨てられたクリスはフィーネを追いかけた。その痛々しい姿を星矢達は見ていた。

一輝「あの女が俺がずっと追いつけていたフィーネか…」

気配さえも消して隠れていた一輝はクリスの後を追った。

星矢「ゴールドノイズが多くて手間取ってしまった。遅れてすまん」

瞬「いや、僕達は大丈夫だよ」

紫龍「それよりも星矢、俺達や一輝が探していたフィーネが遂に姿を現した」

星矢「何だって!？」

氷河「とりあえず、今は戻って今後の事を考えよう」

特異災害対策機動部二課

クリスがイチイバルの奏者だと判明し、しかも黒幕のフィーネの出現で指令室は呆然としていた。

美衣「彼女がフィーネ…」

弦十郎「沙織お嬢様達はフィーネを知っていたのか？」

沙織「見るのは初めてですが、だいぶ前に一輝がその名前を聞き、行方を探っていたそうです」

弦十郎「そうか…」

あおい「反応ロスト、これ以上の追跡は不可能です」

朔也「こっちはビンゴです」

情報の照合が完了し、クリスの素性が明らかとなった。

弦十郎「あの少女だったのか…」

朔也「雪音クリス。現在16歳。二年前に行方知れずになった、過去に選抜されたギア装着候補の1人です」

説明に弦十郎は頷いた後、諜報部の元にいる未来の方を沙織と共に見ていた。

そして戦いの後、星矢達は帰還していた。

翼「(奏が何のために戦ってきたのか、今なら少しわかる気がする。だけど、それを理解するのは正直辛い。人の身ならざる私に受け入れられるのだろうか？自分で人間に戻ればいい、それだけの話じゃないか。いつも言ってるだろ？あんまりガチガチだとポツキリだって、なんてまた意地悪を言われそうだ。だが、今更戻った所で何ができるというのだ？いや、何をしていいのかすらわからないではないか)」

???'『好きな事すればいいんじゃないやねえの。簡単だろ?』

突如、奏の声がして振り向いたが、何もなかった。

氷河「何をしてるんだ?」

紫龍「指令室へ行くぞ」

星矢達と一緒に指令室に向かった。

翼「(好きな事、もうずっとそんな事考えてない気がする。遠い昔、私にも夢中になったものがあつたはずなのだが…)」

一方、響はメデイカルチェックを受けていた。

了子「外傷は多かつたけど、深刻なものがなくて助かったわ」

響「つまり、平気って事ですよね?」

了子「常軌を逸したエネルギー消費による、いわゆる過労ね。少し休めばいつも通り回復するわよ」

響「じゃあ、私…」

しかし、過労がとれておらず、響はふらついて倒れそうになった所を了子に支えてもらった。

了子「ああ、もう。だから、休息が必要なの」

響「私、呪われてるかも…」

了子「気になるの？お友達の事」

響「はい…」

了子「心配しなくても大丈夫よ。緒川君や沙織お嬢様から事情の説明を受けているはずだから」

響「そう…、ですか…」

了子「機密保護の説明を受けたら、すぐに解放されるわよ」

響「はい…、わかりました…」

その頃、指令室では…

朔也「まさか、イチイバルまでが敵の手に…。しかも、ギア装着者候補であった雪音クリス…」

あおい「聖闘士がいるとはいえ、聖遺物を力に変えて戦う技術を有する我々の優位性は完全に失われてしまいましたね…」

紫龍「いや、クリスは明確にフィーネに切り捨てられた。今後、俺達が余計な事をしなければクリスは敵に回るような事はない」

朔也「そう言えば、そうだったな…。敵の正体、フィーネの目的は…」

星矢「そこがわかれば困りはしないからな…」

そんな中、了子と響と翼が入ってきた。

了子「深刻になるのはわかるけど、シンフォギアの奏者は2人共健在だし、聖闘士もいる。頭を抱えるにはまだ早すぎるわよ」

弦十郎「翼、全く無茶しやがって」

翼「応急処置をしてももらったとはいえ、独断については謝ります。ですが、仲間の危機に臥せっているわけにはいきませんでした。立花は未熟な戦士です。半人前ではありませんが、戦士に相違ないと確信しています」

響「翼さん…」

その言葉に星矢は手を翼の肩に置いた。

星矢「やつと響を仲間と認めたな」

紫龍「晴れて俺達は完全たる仲間になったと言えよう」

翼「だが、星矢達には一輝という別行動をしている仲間がいると聞いている。完全とは…」

瞬「言い方は悪くても兄さんは認めてくれるよ」

氷河「だから、いつも一緒じゃないと思ってても気にする事はない。響、お前もよろしく頼むぞ」

響「はい！私、頑張ります！」

弦十郎「響君のメデイカルチックも気になる所だが」

響「ご飯をいっぱい食べて、ぐっすり眠れば元気回復です！（一番暖かい所で眠れば…未来）」

未来の事を考えている響に対し、了子は響の胸をつんつんした。

響「んのおおおおおおんて事を!?!」

了子「響ちゃんの心臓にあるガングニールの破片は前より体組織と融合しているみたいなの。驚異的なエネルギーと回復力はそのせいかもね♪」

響「融合、ですか？」

その事を翼は思い出し、星矢達もそのリスクがないか考えていた。

瞬「確かに響はガングニールの破片と融合してあの力を得たけど…」

紫龍「(聖遺物との融合のリスクはゼロとは言い切れん。何か、何か大きなリスクが後に起こるに違いない…)」

氷河「(もしそうなら、響の命に係わるだろう…)」

了子「大丈夫よ。あなたは可能性なんだから」

響「よかったー！」

その後、翼は星矢達と話をしていた。

星矢「翼も怪しいと思っていたのか？」

翼「そうだ。櫻井女史はどこか怪しいと思って…」

紫龍「俺達も怪しいと思っている。だが、下手に追求すると何かやらかすかも知れん。これは俺達だけの秘密としておこう」

リデイアン 寮

響は恐る恐る入った。

響「ねえ、未来…。何っていうか…。その…」

未来「お帰り」

未来の言葉は一見すると普通に見えるが、話し方にややトゲがあった。

響「あ、うん…。ただいま…。入って…。いいかな…。？」

未来「どうぞ…。あなたの部屋でもあるんだから」

響「あのね…」

未来「何？大体の事は沙織さん達から聞いたわ。今更聞く事なんてないと思うけど」

響「未来…」

未来「嘘つき！隠し事をしないって言ったくせに！」

その言葉に響はショックを受けた。

城戸邸

夜の城戸邸では、未来に真実を言わなければならなかった沙織は落ち込んでいた。

星矢「沙織さん、遂にこの時が来てしまったな…」

沙織「そうですね…」

星矢「確かにこう…。どうしようもない気分だけど、落ち込んだって何も始まらないからな…」

沙織「そうですね。私にできる事がないか、考えてみます」

互いに会話し、困っている事を打ち明ける事で2人は気分を前向きに切り替えたのであった。

沙織「そう言えば、盗まれるリスクを減らすために辰巳と貴鬼に黄金聖衣を金庫に隠すように頼んだのに報告に来ませんね」

???「うわああああっ!!」

2人の悲鳴が聞こえ、星矢達は金庫へ来た。すると、金庫の入り口でボロボロの辰巳と貴鬼を発見した。

星矢「辰巳、貴鬼、どうしたんだ!?!」

辰巳「も、申し訳ありません…、お嬢様…！独りで動く蛇遣座の黄金聖衣に…修復にすら入っていない獅子座と乙女座の黄金聖衣を聖衣箱ごと盗まれました…」

沙織「何ですって!?双子座に続き、獅子座と乙女座までも!?!」

貴鬼「ごめんよ…、敵は来ないと思つてたら急に現れた蛇遣座の黄金聖衣にボコボコにされて…。あいつには敵わなかつたんだ…。でも、何とか射手座と天秤座と水瓶座の3つは守り通したから…」

星矢「心配するな、貴鬼！俺達が必ず取り戻してやるからな！」

氷河「だから、泣き止むんだ」

沙織「(しかし、修復に入つてすらいらない二つをなぜ…?)」

紫龍「(死んだ状態の聖衣を何に使う気だ?)」

そこは沙織と紫龍も引つかかつていた疑問だった。

公園

その頃、クリスは夜の公園を彷徨っていた。

クリス「何だよ…、フィーネ…」

失意のクリスの脳裏に響と瞬の言葉が浮かんでいた。

瞬「君は何となく根っからの悪人には見えないんだ」

響「ちゃんと話をすれば、きっと分かり合えるはず！だって私達、同じ人間だよ！」

クリス「(あいつら、くそ！あたしの目的は戦いの意志と力を持つ人間を叩き潰し、戦争の火種をなくすことなんだ。例え、聖闘士が相手でも…！だけど…)」

そんな折、泣いている声がした。そこには、泣いている女の子と傍にいる男の子がいた。

少年「泣くなよ！泣いたってどうしようもないんだぞ！」

少女「だって…！」

クリス「おい、コラ！弱いものをいじめな！」

少年「いじめてなんかいないよ。妹が」

クリス「いじめるなっっていったらだろうが！」

少女「お兄ちゃんをいじめな！」

少年に手を上げようとしたクリスに少女が静止に入った。



クリス「お前が兄ちゃんからいじめられてたんだろ？」  
少女「違う！」

少年「父ちゃんがいなくなっただけだ…。一緒に探していたけど、妹がもう歩けないって言ってたから、それで…」

クリス「迷子かよ。だったら、ハナからそう言えよな」

少女「だって…、だって…」

クリス「おい、コラ！泣くなよ！」

今度は少年が静止に入った。

少年「妹を泣かしたな！」

クリス「ああつ、もうめんどくせえ！一緒に探してやるから大人しくしやがれ！」

### 繁華街

結局、クリスも迷子の兄妹の両親を探す事となった。そんな中、クリスは鼻歌を歌っていた。

クリス「…何だよ？」

少女「お姉ちゃんが、歌好きなの？」

クリス「歌なんて大嫌いだ。特に壊す事しかできないあたしの歌はな」

そんな中、交番に立ち寄っていた男性が出てきた。

少年「父ちゃん！」

父親「お前達、どこに行ってたんだ？」

少女「お姉ちゃんが一緒に迷子になってくれた！」

少年「違うだろ？一緒に父ちゃんを探してくれたんだ」

父親はクリスに頭を下げた。

父親「すみません、ご迷惑をかけました」

クリス「いや、成り行きだからその…」

父親「お姉ちゃんにお礼は言ったか？」

兄妹「ありがとう」

クリス「仲、いんだな…。なあ、そんな風に仲良くしたらどうしたらいいのか教えてくれよ」

その言葉に少女は兄の腕に抱き付いた。

少年「そんなのわからないよ。いつも喧嘩しちゃうし」

少女「喧嘩するけど仲直りするから仲良し！」

去って行くクリスを気配を消して一輝は追跡していた。

リディアン 寮

響と未来の方はとても気まずい状況だった。

響「未来、聞いてほしいんだ」

未来「どうせまた嘘つくんでしょ？」

未来は一度怒りに火が付いたら一気に燃え上がるのではなく、なかなかその怒りの火が消えないタイプであった。そして、寝たのであった。

響「ごめん…」

響は未来にどういった事を言えればいいのかわからなかった。

特異災害対策機動部二課

一方、了子は何やら考え事をしていた。

了子「(装着した適合者の身体機能を引き上げると同時に体表面をバリアコーティングする事によって、ノイズ浸食を阻止する防御機能、更には別世界にまたがったノイズをインパクトによる固有振動にて調律、強制的にこちら側の世界の物理法則下に固着させ、位相差障壁を無効化する力こそシンフォギアの特性である。と同時に、それが人のシンフォギアを扱える限界でもあった。シンフォギアから解放されるエネルギーの負荷は容赦なく奏者を蝕み、傷つけていく。その最たるものが絶唱。人とシンフォギアを構成する聖遺物に隔たりがある限り、負荷の軽減は見込めるものではないと、私の理論でも結論付けている)」

そんな中、響の写真を見ていた。

了子「(唯一、理を覆すならば、それは立花響。人と聖遺物の融合体第一号。天羽奏と風鳴翼のライブ形式を催した起動実験でオーディエンスから引き出され、更に引き上げられた事により、ネフシユタン

の起動は一応の成功を収めたのだが、立花響はそれに相応する完全聖遺物、デュランダルをただ一人の力で起動させる。人と聖遺物が一つになる事でさらなるパラダイムシフトが引き起こされようとしているのは、疑うべくもないだろう。人が負荷なくその身に絶唱を口に、聖遺物に秘められた力を自在に使いこなす事ができるのであれば、それは遙か過去に施されしカスタディアン呪縛から解放された証。真なる言の葉で語り合い、ルルアメルが自らの手で未来を築く時代の到来。過去からの超越。そのためにも…あの忌まわしい女神とその手下、特に神殺しのペガサスを…!」

そんな了子は目を眺めながら蛇遺座の黄金聖衣を撫でており、ゴミ箱には破り捨てた星矢と沙織が共に写った写真があった。

リディアン

翌日の授業中、響は未来に声をかける事ができなかった。

教師「立花さん!」

響「は、はいっ!」

教師「教科書の続きを読んでごらんさい!」

響「すみません、ぼんやりしてました…」

そして、教師からの説教を受けたのであった。そして昼食時、未来は1人食べていた。そこへ、響が来た。

響「ここ…、いいかな…?」

一応座ったものの、とても話するのがぎこちなかった。

響「あのね、未来。私…」

??? 「何だかいつもと雰囲気違いますわ」

そこへ、弓美と創世と詩織が来た。

弓美「よくわかんないから、アニメで例えてよ」

詩織「これはビツキーが悪いに違いない。ごめんね、未来。この子、バカだから許してあげてね」

創世「そう言えば、レポートの事、先生がおっしゃってましたが…」

弓美「提出してないの、あんた1人だってね。大した量じゃないのに、何やってんだか」

響「えへへ…」

詩織「ビツキーったら、内緒でバイトとかでもしてるんじゃない？」  
そんな話に未来は反応し、どこかへ行ってしまった。

響「未来！」

未来を追って響は屋上へ向かった。

響「（私が悪いんだ）」

未来は屋上にいた。

響「未来…、ごめんなさい…」

未来「…どうして響が謝ったりするの…？」

響「未来は私に隠し事をしないって言ってくれたのに、私は未来に  
ずっと隠し事してた。私は…」

未来「言わないで…。これ以上、私は響の友達でいられない…。ご  
めん…！」

涙を流して未来は走り去っていった。

響「どうして…こんな…、嫌だ…嫌だよ…！」

残酷な現実には響は涙したのであった。落ち込む未来はある人物と  
ばったり会ったのであった。

未来「あなたは…、沙織さん…！」

沙織「未来さん、響さんは最高の親友であるあなたに隠し事をしな  
ければいけない事にとても心を痛めていました。あなたも傷ついて  
いたように、響さんも傷ついていたのです。どうしても響さんの事が  
恋しくなった時は互いに腹を割って語り合ってください」

沙織の悲しそうな表情を見つめた未来は走り去っていった。

フィーネンのアジト

その頃、フィーネネは利用し合っている相手と電話をしていた。そこ  
へ、扉をブチ開けてクリスが入ってきた。

クリス「あたしが用済みって何だよ!? もういらなくて事かよ!? あ  
んたもあたしをもののように扱うのかよ! 頭ん中グチャグチャだ!  
何が正しくて、何が間違ってるのかわかんねえんだよ!!」

フィーネ「どうして誰も、私の想い通りに動いてくれないのかしら

？」

電話を切った後、フィーネは振り向いてソロモンの杖を構え、ノイズとゴールドノイズを複数出してきた。

フィーネ「流石に潮時かしら？そうね、あなたのやり方や争いをなくす事なんてできやしないわ。精々、一つ潰して新たな火種を二つ三つバラまくくらいかしら？」

クリス「あんたが言ったんじゃないか！痛みもギアもあんたがあたしにくれたも」

フィーネ「私の与えたシンフォギアを纏いながらも毛ほどの役にも立たないなんて、そろそろ幕を引きましょうか」

クリスの話を遮り、フィーネはネフシユタンの鎧を纏ったが、その色は金色であった。

フィーネ「私もこの鎧も不滅、未来は無限に続いて行くのよ『カ・デインギル』は完成しているも同然、上手くいけば『カ・デインギル』が壊れた時の予備策も成功するし、もうあなたの力に固執する理由はないわ」

クリス「『カ・デインギル』？予備策？そいつは…」

フィーネ「あなたは知り過ぎてしまったわ」

そう言っつてフィーネはソロモンの杖をクリスに向け、ノイズに襲わせようとした。しかし…、

フィーネ「さつきからクリスの後をつけていた途方もない攻撃的な気配の持ち主がいるようね。出てらっしゃい、フェニックス」

クリス「フェニックス？」

出てきたのは一輝であった。

クリス「てめえ、鎖野郎の兄貴じゃねえか！」

フィーネ「よくここがわかったわね」

一輝「簡単な事だ。クリスの後を追えば、いずれは貴様に会えると思っただからだ、フィーネ！」

フィーネ「あなたのせいで米国は動きを封じられたも同然よ。やってくれるじゃない」

一輝「言っておくが、俺は星矢達と違ってフェミニストじゃない。

女であつても容赦せん。特に貴様のような人を弄ぶ悪女にはな！」

そう言つて一輝はクリスを後ろに放り投げた。

クリス「何すん」

一輝「鳳翼天翔!!」

鳳翼天翔でノイズの群れとゴールドノイズはまとめて吹っ飛ばされたのであつた。しかし、フィーネは蛇遺座の黄金聖衣が阻んでおり、無傷だつた。

一輝「黄金聖衣がフィーネを守つただと!?（なぜだ？射手座の黄金聖衣が星矢を守つたのは星矢が正義の戦士であつたからだ。だが、なぜあの黄金聖衣はフィーネを？）」

フィーネ「驚いているようだな、フェニックス。この聖衣はアテナを守る気など全くない、私だけしか守らないからだ」

アテナを守る気が全くない聖衣に一輝は衝撃を受けた。傍にクリスもいるため、悩んでから一輝はこれからどうするのかを決めた。そして、一輝の指から放たれた閃光がフィーネの頭に直撃した。

一輝「鳳<sup>フェニックス</sup>凰幻魔拳」

フィーネ「ふふふ…、噂の幻魔拳とやらは大したものではなかつたわね。あなたも消えてもらうわよ！」

そう言つてフィーネは鞭で一輝とクリスを貫いた。

一輝「ぐあああつ!!」

クリス「くそおおつ!!」

鞭に貫かれた2人は倒れたのであつた。

フィーネ「伝説の青銅聖闘士もあつけなかつたわね」

勝ち誇つていると、一輝が起き上がった。

一輝「フィーネ、貴様は楽しい幻を見ていたんだよ。現実ほら！」

フィーネ「何？」

幻覚が解けると、クリスは無傷な上、無傷の一輝が目の前におり、フィーネの左胸を拳で貫いていた。

フィーネ「がはっ!!」

左胸を貫かれたフィーネは血を吐いて倒れ、辺り一面に血が広がつた。

クリス「やった…のか…？」

一輝「(何だ？この女に止めを刺したのに勝った気がしない。この違和感は何だ？それに、カ・ディングルとは一体…?)」

クリス「なあ、フィーネはこれで死んだのか？」

一輝「…確かに俺は奴に止めを刺した。だが、奴は以前から得体が知れない上、倒しても勝った実感が湧かん」

クリス「得体が知れないって…。それに…何であたしを…」

一輝「たまたまピンチになっていたから助けただけだ」

クリス「何だ?!?ずっとオツサン臭い事言いやがって！」

実際は助けようと思って助けたのであった。

一輝「まあ、しばらく俺についてこい」

行く当てもないため、クリスは渋々一輝と行動を共にする事にしてフィーネのアジトを後にした。しかし、一輝とクリスがいなくなつてしばらくした後、死んだはずのフィーネの腕がピクリと動き、ソロモンの杖でノイズを召喚したのであった。

## 10話 親友

### 路地裏

クリスはフィーネから見縊られたが、一輝に助けられて逃げ延びる事ができた。しかし、ノイズが襲い掛かってきた。

クリス「くそっ、フィーネは死んだんじゃないのかよ!？」

一輝「わからん。だが、あの得体の知れない奴だ。死んでない可能性も高いだろうな…」

結局、ノイズと応戦した。一輝がいてくれたものの、一晩中ノイズと戦い続けたクリスの心と体はボロボロで倒れ込んだ。

一輝「もうクリスは限界か…。早い所、匿ってもらおう場所を探さねば…」

そう考えていた矢先、ちょうどいい時に未来が通りかかった。

一輝「お前、こいつをどこか安全な場所へ匿ってくれるか？」

未来「あ、あなたは…?」

ちょうど聖衣箱があつたため、一輝が聖闘士である事が未来にもわかった。

一輝「俺の名は一輝。俺はもつと調べたい事があるからこいつを連れてはいけない。そしてこいつの目が覚めたらこう伝える、『飯や寝る所を求めるのなら、城戸沙織の屋敷へ行け』と」

未来「はい…」

一輝は頼み事をして立ち去ろうとしたが、立ち止まった。

一輝「今のお前の心はこの雨のようだ。俺の予想では、友と喧嘩していたのだろうな」

自分の心を見透かされ、未来は動揺した。

一輝「凶星のようだ。それくらいで壊れるようなら安っぽい友情だったと言える。それが嫌なら、その友と腹を割って互いの本音をぶちまけてみる。そうすれば、心が晴れるかも知れんぞ」

一輝の言葉に未来は反論できず、クリスを託して一輝はその場を去った。



## 城戸邸

一輝は再び城戸邸に来て星矢達に話していた。

星矢「何？ファイネを倒しただつて？」

一輝「ああ、左胸をブチ抜いてな。だが、しばらくして追っ手のノイズが来た。恐らく、あの女はまだ死んでないだろう」

氷河「俺の時のように何かお守りで助かったのは？」

一輝「いや、あの女は裸の上から鎧を纏っていた。そんなものは身に付けていない」

瞬「だつたら、何で…？」

紫龍「心臓を貫かれても死なない奴とは…。ファイネは得体の知れない奴だ…」

一輝「ずっと追いつけた黒幕の割にあっけなく倒せたから、倒した気がしなくてモヤモヤしていた所だ」

沙織「一体、ファイネは何者なのでしょう…？」

美衣「気になります…」

ファイネの謎は星矢達にわかるはずもなかった。

一輝「あと、『カ・ディングル』というのも気になる。そっちでも調べてほしい」

星矢「幻魔拳で聞きだせなかったのか？」

一輝「クリスの救助を優先させたから聞き出せなかった。人の命は失ったらもう戻らんからな」

氷河「確かにその通りだな…」

沙織「わかりました。一輝の方も気を付けて」

一輝「それと、クリスをしばらく屋敷に住ませてほしい。あいつには帰る場所がないからな」

沙織「わかりました」

話すべき事を話し、一輝はカ・ディングルが何なのかを調べに向かった。

リディアン

響は弦十郎から連絡を聞いていた。

響「ノイズですか？」

弦十郎『そうだ。市街地の第六区域にノイズのパターンの検知している。未明だった事もあり、人的被害がなかったのが救いだったが、ノイズと共にイチイバルのパターンの検知したんだ』

響「つて事は師匠、クリスちゃんがノイズと戦ったつて事でしようか？」

弦十郎『そうだろうな』

それから沈黙が続いた。

弦十郎『どうした？』

響「あの子、戻る所ないんじゃないかって」

弦十郎『そうかもな…、この件についてはこちらで捜査を引き続き行う。響君は指示があるまで待機してほしい』

響「はい、わかりました」

通話が終わった響は教室に入ったが、自分より先に登校したはずの未来の姿はなかった。

響「未来…」

未来が来ていない事に響は落ち込んでいた。

響「(未来、このままなんて私、嫌だよ…)」

フラワー

一方、未来は一輝からクリスを託されてお好み焼き店フラワーへ運んでから布団で寝かせ、クリスの介抱をしていた。そして、クリスが苦しそうにしていたため、タオルを冷やすために手に取った後にクリスが起き上がった。

未来「よかった、目が覚めたのね。びしょ濡れだったから着替えさせてもらったわ」

クリスは寝ている間に未来の体操服を着せられていた。未来と比べて胸の大きさに差があるため、胸元が窮屈そうだった。

クリス「か、勝手な事を！」

勝手に着替えさせられてクリスはカッとなって立ち上がったが、下は着ていなかった。

クリス「な、何でだ!？」

未来「流石に下着の替えまでは持つてなかったから…」  
慌ててクリスは布団を包んだ。

クリス「はっ!あの老けた面の奴はどこだ!？」

未来「一輝さんなら、『調べたい事があるから連れていけない』って  
言つて、私に後の事を任せてどこかへ行つてしまったわ。それに、『飯  
や寝る所を求めるのなら、城戸沙織の屋敷へ行け』だつて」

クリス「あの野郎…、どこまでオツサン臭くカッコつけやがって…  
!!」

一輝のクール且つ、年不相応な風格をクリスは『オツサン臭い』と  
評して怒りを燃やしていた。そこへ、店主のおばちゃんが来た。

おばちゃん「未来ちゃん、どう?お友達の具合は」

未来「目が覚めた所です。ありがとうございます、おばちゃん。布団まで貸し  
てもらっちゃつて」

おばちゃん「気にしないでいいんだよ。あ、お洋服、洗濯しておい  
たから」

クリス「えっ?」

未来「私、手伝います」

おばちゃん「あら、ありがとう」

その様子をクリスはじつと見つめていた。そして、未来は汗まみれ  
のクリスの体を拭いていた。

クリス「あ、ありがとう…」

雪のように白いクリスの背中には痣がたくさんあった。

クリス「何も聞かないんだな…」

未来「…:うん。わたしはそういうの、苦手みたい。今までの関係を  
壊したくなくて、なのに一番大切なものを壊してしまった…」

クリス「それって、誰かと喧嘩したって事なのか?」

未来「うん…」

リディアン

その頃、リディアンでは響は学校に来ない未来の事を考えていた。

響「未来…無断欠席するなんて一度もなかったのに…あつ！」

そこへ、瞬の応急処置で全快した翼が来た。

響「翼さん…」

2人でベンチに座った。

響「私、自分なりに覚悟を決めたつもりだったんです。守りたいものを守るため、シンフォギアの戦士になるんだって。でもダメですね。小さな事で気持ちが悪されて、なにも手につけません。私、もっと強くならなきゃいけないのに、かわりたいのに…」

翼「その小さなものが立花の本当に守りたいもののだとしたら、今のままでもいいんじゃないかな？立花はきつと立花のまま強くなれる」

響「翼さん…」

翼「奏のように人を元気づけるのは難しいな」

響「いえ、そんな事はありません。前にもここで同じような言葉で親友に励まされたんです！それでも私はまた落ち込んだじゃいました。ダメですよね」

自嘲し、響は空を眺めた。

響「翼さん、まだ傷むんですか？」

翼「瞬が最後の応急処置をしてくれたから大丈夫だ」

響「そっか、よかったです」

翼「絶唱による肉体への負荷は極大。まさに、他者も自分も滅ぼし尽くす滅びの歌。その代償と思えば、これくらい安いもの。星矢達がいってくれたから、治りも早くなった」

響「絶唱…、滅びの歌…。でも、でもですね、翼さん！二年前、私が辛いリハビリを乗り越えられたのは、翼さんの歌に励まされたからです！翼さんの歌が滅びの歌だけじゃないって事を聞く人に元気をくれる事を私は知っています！」

翼「立花…」

響「そして、それから1年後に私は星矢さんと沙織さんに助けってもらったんです。あの時の2人はまるで王子様と女神様で、挫けそうになった時はよくあの2人の姿が浮かんできました。でも、後で沙織さんが本物の女神様だと知って驚いちゃいました」

翼「王子様に女神様ね…」

響「だから、コンデイションを最高に整えてください！私、翼さんの歌、大好きです！」

翼「…ふっ、私が励まされたようだな」

響「えっ？あれ？」

フラワー

その頃、未来は着替えたクリスと話をしていた。

クリス「喧嘩か…、あたしにはよくわからない事だな」

未来「友達と喧嘩した事ないの？」

クリス「…友達いないんだ」

未来「え？」

クリス「地球の裏側でパパとママを殺されたあたしはずっと一人で生きてきたからな。友達どころじゃなかった」

未来「そんな…」

クリス「理解してくれると思った人もあたしを道具のように扱うばかりだった。誰もまともに相手してくれなかったのさ。大人はどいつもこいつもクズ揃いだ。痛いといってもきいてくれなかった。やめると言ってもきいてくれなかった。あたしの話なんてこれっぽっちもきいてくれなかった」

クリスの目は怒りに燃えていた。

未来「ごめんなさい…」

クリス「なあ、お前。その喧嘩の相手ぶっ飛ばしちまいな」

未来「えっ？」

クリス「どつちが強えのかはつきりさせればそれで終了。とつとと仲直り、そうだろ？」

未来「できないよ、そんな事」

クリス「ふん、わかんねえな」

未来「でも、ありがとう」

クリス「ん？あたしは何もしてないぞ」

未来「ううん、ほんとにありがとう、氣遣ってくれて…、えっと…」

クリス「クリス、雪音クリスだ」

未来「優しいんだね、クリスは」

クリス「…そうか？（そーういや、鎖野郎も似たような事言ってたな…）」

未来「私は小日向未来。もしもクリスがいいのなら、私はクリスの友達になりたい」

そう言つて未来はクリスの手をとったが、クリスは振り払った。

クリス「あたしはお前達にひどい事をしたんだぞ…」

そんな中、警報が鳴った。

リディアン

ノイズ出現の連絡が響と翼にも届いた。

翼「翼です。立花も一緒にいます」

弦十郎『ノイズを検知した。相当な数だ！恐らく、未明に検知されたノイズと関連があるはずだ』

翼「了解しました、現場に急行します！」

弦十郎『ダメだ！聖闘士の小宇宙で応急処置を受けてもらつたとはいえ、メデイカルチェックの結果の出ていない者を出すわけにはいかない！星矢達も出撃させている！翼、お前は待機だ！』

翼「ですが！」

響「翼さんはみんなを守ってください。だったら私、前だけを向いていられます」

市街地

一方、未来達はノイズ出現によつて騒然となつて避難している人達を目の当たりにしていた。

クリス「おい、一体何の騒ぎだ!？」

未来「何つて、ノイズが現れたのよ！警戒警報も知らないの？」  
自分が狙われていると判断したクリスはその場から走った。

未来「あつ、クリス！」



そして、イチイバルを纏った。そして、ボウガンを構えてノイズを撃ち落とした。

クリス「ご覧の通りさ！あたしの事はいいから他の奴等の救助に向かいな！」

弦十郎「だが…」

瞬「司令、この場は僕とクリスに任せてください！」

クリス「勝手に協力とかすんなよ！」

瞬「僕は兄さんにクリスの事を頼まれたんだ！だから、君がなんと言おうと僕は君と一緒に戦うよ！そして、戦いが終わったら沙織さんの屋敷に来てもらうよ！」

クリス「全く鎖野郎、てめえはあいつと同じぐらい調子が狂うじゃねえか！」

その苛立ちをノイズにぶつけるクリスであった。クリスはギアの特性の都合で接近戦が苦手なため、瞬がネビュラチェーンで接近するノイズを貫くなりしてクリスの死角をフォローし、即座とは思えない連携で次々とノイズを倒していった。

瞬「その場では思えないぐらい僕達の連携はできているね」

クリス「うるせえ！そんなつもりで戦ったんじゃねえぞ！」

反発するものの、やはり連携はできていた。

弦十郎「あの2人の連携はなかなかのものだ…。だが、俺はまたあの子を救えないのか？」

クリスの姿を見て弦十郎はそう思っていた。一方、星矢達はノイズを殲滅していた。

星矢「ペガサス、流星拳！」

紫龍「廬山、龍飛翔！」

氷河「ダイヤモンド、ダストオ！」

星矢達は広範囲での攻撃が可能な技で次々とノイズを蹴散らしていった。そして、響は通ろうとすると、未来の悲鳴が聞こえた。その悲鳴が聞こえた先の解体中のビルへ入った。

響「誰か、誰かいま…」

すると、頭上にいたタコみたいなノイズが反応して攻撃したが、身





返事をする余裕もなく、響はやりとりの事を思い出しながら未来の所へ向かっていた。

響「(未来、どこ?)」

ビルでのやりとりを思い出していた。

未来『響聞いて、私が囷になつてノイズの気を引くから、その間におばちゃんを助けて』

響『ダメだよ!そんな事、未来にはさせられない』

未来『元陸上部の逃げ足だから何とかなる』

響『何ともならない』

未来『じゃあ、何とかして』

響『!?!』

未来『危険なのはわかってる。だからお願いしてるの。私の全部を預けられるのは響だけなんだから』

そして、未来の言葉を思い出し、未来の願いが響を動かした。

響「(戦っているのは私一人だけじゃない。シンフォギアで誰かの助けになれると思っていたけど、それは思い上がりだ。助ける私だけが一生懸命なんじゃない、助けられる誰かも一生懸命)」

そして、奏の言葉を思い出した。

奏『生きるのを諦めるな!』

響「(本当の人助けは自分1人の力じゃ無理なんだ。だから、あの日あの時、奏さんは私に『生きるのを諦めるな』とさげんでいたんだ。今ならわかる気がする)」

そんな中、未来の悲鳴が聞こえて響は急いだ。

響「(そうだ、私が誰かを助けたいと思う気持ちは惨劇を生き残った負い目じゃない!奏さんから託されて、私が受け取った気持ちなんだ!!)」

逃げ続けていた未来の体力は限界だった。

未来「(もう走れない...)」

走れなくなった未来は倒れ、ノイズはゆっくり近寄っていた。

未来「(だけど、まだ響と流れ星を見ていない!)」

再び未来は走り出そうとしたが、落下したノイズの衝撃で崖から落

ちた。

未来「きやあああつ!!」

未来が落ちる中、響はノイズに拳をぶつけて撃破し、そのまま未来を抱きしめて着地しようとしたが上手く行かず、駆け付けた星矢に受け止めてもらった。

響「おとととつ…!」

星矢「どうやら、仲直りできたみたいだな、響」

響「せ、星矢さん…」

星矢「さ、沙織さんが言ったように未来と腹を割って話すんだ」

仲間達も来て見守っていた。

響「かっこよく着地するって、難しいんだな」

未来「少しからだが痛いけど、でも生きてるって感じがする。ありがとう、響なら絶対助けに来てくれるって信じてた」

響「ありがとう、未来なら絶対に最後まで諦めないって信じてた。だって私の友達だもん」

その言葉に未来は涙を流し、響に抱き付いた。

未来「恐かった…、恐いかったの…」

響「私もすごい恐かった…」

未来「私…響が黙っていた事に腹を立ててたんじゃないの…。誰かの役に立ちたいと思ってるのはいつもの響なんだから…。でも…、最近は辛い事、苦しい事全部背負い込もうとしていたじゃない…。w あたしはそれがたまらなく嫌だった…。また響が大きな怪我をするんじゃないかって心配してた…。だけど、それは響を失いたくなかった私のワガママだった…。そんな気持ちに気付いたのに…今までと同じにできなかったの」

響「未来、それでも未来は私の…」

そんな中、未来の顔をみて響は笑った。

未来「えっ?何?」

響「あはははーだ、だつてさ、髪の毛ボサボサ涙でグチャグチャ、なのにシリアスな事言ってるし!」

未来「もう、響だつて似たようなものじゃない!」

2人の様子を星矢達は微笑ましく見ていた。

氷河「仲直りできてよかったな」

星矢「そりゃあ、よかったに決まってるだろ？」

紫龍「この問題は本人達でないと解決できない問題だからな」

そして、一同は商店街に戻ってきて、未来は自分の鞆を慎次から受け取った。

響「あの…師匠…」

弦十郎「ん？」

響「この子にまた戦っている所をじっくり、ばっちり目の当たりにされてしまって…」

未来「違うんです！私が首を突っ込んでしまったから！」

弦十郎「…詳細は後で報告書の形で聞く。ま、不可抗力という奴だろ。それに、人命救助の立役者にうるさい子事は言えんだろうよ」

そんな中、了子がやってきた。

了子「ふっ、主役は遅れて登場よ。さて、どこから片付けようかしら？」

弦十郎「あとは頼りがいのある大人達の出番だ。響君達は帰って休んでくれ」

響「はい！」

未来「あ、あの…、私避難の途中で友達と逸れてしまって…。雪音クリスって言うんですけど…」

星矢「心配すんな、クリスは瞬と一緒に行動している。しばらく城戸邸に住ませるんだ」

未来「そうですか…」

そんな時、響にあるアイデアが思い浮かんだ。

響「星矢さん、沙織さんに頼んでクリスちゃんの歓迎パーティーでもしませんか!?!」

星矢「歓迎パーティー…?」

響「未来がクリスちゃんと友達になったみたいだから、それを記念してやりたいんです！」

星矢「パーティーか…、面白そうだし、やるか？」

響&未来「はい！」

紫龍「なら、すぐに沙織さんに知らせないとな」

氷河「そして、早く準備しないと！」

早速、星矢達はパーティーの準備をする事にした。

城戸邸

響からの提案の歓迎パーティーは沙織に知らされた。

沙織「パーティーですか…。わかりました、今から準備しましょう」

響「ありがとうございます！」

未来「私達も手伝いましょうか？」

沙織「指定の手伝いをしてください。美衣さんは料理をお願いします」

美衣「わかりました、沙織様」

春麗「私も料理を手伝います」

料理を美衣と春麗が、力仕事は主に星矢達が担当する事となり、星矢達はマッハで作業し、あつという間に準備を終えた。

未来「響、星矢さん達って凄いね。あつという間に準備が終わっちゃったし…」

響「でしょでしょ？それに、沙織さんは本物の神様なんだって！」

未来「ほ、本当の神様?!」

その事實は未来も驚いた。

沙織「そうです。私は女神アテナの化身。ですが、接し方は今までと同じでよろしいですよ」

未来「あ、ありがとうございます、沙織さん！」

そうしている間に夜になって準備も終わった。それと時を同じくして瞬がクリスを連れて帰ってきた。

クリス「ここが城戸沙織って女の住んでる屋敷か…」

瞬「遠慮せずに入っていいよ」

扉を開けると、そこにはテーブルが並び、クラッカーが鳴った。

クリス「へ？『歓迎パーティーへようこそ、クリスちゃん！』だど!?なんであたしを歓迎するんだよ!?!」

響「クリスちゃん、会いたかったよ〜!」

そう言つて響と未来はクリスに抱き付いた。

クリス「抱き付くな! 別にあたしは会いたがつてたわけじゃ」

未来「よかった! クリスが無事で…」

クリス「未来…」

瞬「クリスは友達ができていたんだね?」

氷河「素直になれないだけの寂しがりやな女の子だな」

クリス「か、勝手に決めつけんな! あたしはあんたら大人なんて信

用できねえ!」

星矢「言つとくが、この場にいる俺達は辰巳と貴鬼以外は全員10代なんだけ」

その言葉にクリスは衝撃を受けた。

クリス「何〜っ!! お前ら、そんな面で10代だつて!」

瞬「そうは見えないと思うけど、本当だよ。自己紹介がまだだったね。僕は瞬」

星矢「俺は星矢だ」

氷河「氷河だ」

紫龍「紫龍」

美衣「そして、私はアリシア・美衣・ベネトールと申します。クリスさん、お食事ができております。どんどん食べてくださいね」

クリス「飯だつて…?」

食事には流石のクリスも空腹を我慢しきれず、善意に甘える形で食べる事となった。

クリス「うめえ、メチャクチャうめえぞ!」

沙織「美衣さんの料理はお気に召していただけただけで何よりです」

美衣「ですが、テーブルマナーが悪いようですね。明日から私がご指導致しますよう」

クリスの辺りには食べかすが散らかっていた。一方の星矢達も食事をしていた。

紫龍「春麗の手料理はおいしいな」

春麗「褒められるとうれしいわ、紫龍」

星矢「一汗流した後の飯は格別だな！」

氷河「しつかり食べて、よく寝て、ノイズの襲撃に備えるぞ」

響「未来、美衣さんの料理はおいしいね！」

未来「うん！春麗さん手作りの中華料理もおいしい！」

響「あ、そうだ！ご飯を食べ終わったら私と未来とクリスちゃん  
で裸の付き合いをしようよ！」

クリス「は、裸の付き合い!？」

響の言う裸の付き合いにクリスは赤面していた。そして食事が終  
わり、響達は脱衣所で服を脱ぎ、一緒にお風呂に入る事となったが、ク  
リスは女同士でも一緒に入るのを嫌がっていた。

響「うわあ…、クリスちゃんって胸が大きいんだね…」

未来「不思議…」

クリス「そんな目であたしの胸をジロジロ見んな！」

響と未来の視線が自分の胸に向けられているのが恥ずかしいクリ  
スは女同士なのにも関わらず、胸を隠していた。

響「クリスちゃん、一緒にお風呂に入ろうよ！」

クリス「入れるわけねえだろ！」

響「私なんていつも未来と一緒に入ってるよ。クリスちゃんも一緒  
に入ろうよ！」

未来「背中を流すから、遠慮しないで」

クリス「…：…わかったよ。入ればいんだろ？入れば！」

結局断り切れず、クリスは一緒にお風呂に入る事となった。

響「うわっ、うわわわわわ！」

ところが、響はうっかり足を滑らせてしまい、クリスを押し倒して  
しまった。

響「いたたたたつ…、あれ？妙に柔らかいなあ…」

クリス「いてててつ…、何すん」

倒れ込んだ際に響はクリスの胸を触ってしまったのであった。そ  
の様子に未来は思わず顔を赤くし、クリスはそれ以上に赤くなって沸  
騰寸前のようになっていた。

クリス「あたしの胸を触んじやねえ!!」

響「ご、ごめん、クリスちゃん! わざとじゃなくて…!」

なんやかんやで騒ぎは一応は収まった。

未来「沙織さんの家のお風呂はとっても温まるね」

響「そうだね。未来とクリスちゃんも一緒だから、ぽかぽかだよ」

???「皆さん、私も裸の付き合いに混ぜていただけじゃないでしょうか?」

そんな時に沙織と一緒にお風呂に入りに来た。

響「うわあ…、沙織さんの裸って凄い…!」

未来「私達より年下なのに大人の女性のような雰囲気で、女神に恥  
じない美しさよ…」

沙織に見とれる響と未来に混ざり、クリスも見とれていた。

クリス「マジで女神みたいな美しさだな…。って、女神に恥じな  
いってどういう事だよ!」

未来「私も初めて聞いた時は驚いちゃったけど、沙織さんは本物の  
女神様なんだよ」

クリス「…マジかよ!! マジで本物の女神なのかよ!」

沙織「はい、その通りで私は女神アテナの化身なのです」

その事実にはクリスは仰天した。仰天続きの出来事が終わった後、響  
と未来は寮へ送迎してもらい、クリスは城戸邸の部屋で寝る事となっ  
た。

クリス「全く、マジで今日は最悪な日だ…」

ノイズの襲撃に歓迎パーティー、裸の付き合いとクリスには戦いと  
驚きの連続に疲れ、眠りについたのであった。その様子は口では最悪  
と言いつつも安心したような表情であった。



## 11話 翼の復帰ライブ

城戸邸

翌朝、クリスは今までにないほど気持ちよく起きられた。

クリス「あゝつ、よく寝た…！こんなにくつすり眠れたのはいつぐらいだろうか…？」

そんな時、ノックしてから美衣が入ってきた。

美衣「クリスさん、朝食の時間です。そして、あなたには必要最低限の礼儀とテーブルマナーを叩き込んで差し上げましょう！」

クリス「テ、テーブルマナー？」

城戸邸に住まわせてもらっているために食事と安心して寝る所には困らなかったが、その代償ともいえる地獄が待っていた。

美衣「あなたの礼儀やテーブルマナーは生い立ちの事情を差し引いても悪いと言わざるを得ません。ですので、この私がきっちりとしたの礼儀とテーブルマナーのご指導いたしますのでよろしくお願ひします」

クリス「テーブルマナー？そんなもん教えるより朝飯食わせろ！」  
美衣「いけません！レストランなどで食事をするとお店の人や他のお客さんに失礼なのですよ！きちんと指導を受けなさい！」

否応なしにクリスは美衣に引つ張られて指導を受ける羽目になった。黄金聖闘士クラスの星矢達に比べると大幅に劣るものの、美衣も常人に比べると身体能力はかなり高いため、クリスがいくら抵抗しても無駄であった。

クリス「くそくそつ、あの不死鳥野郎め！何が飯や寝る所に困らないだ!?!どう考えても地獄じゃねえか!!」

美衣的には一般人レベルの礼儀とテーブルマナーを教えているのだが、それはクリスにとつては地獄同然の苦痛であった。その様子を星矢達は見ていた。

星矢「クリスの奴、かなり苦戦してるみたいだな」

瞬「司令からクリスの経歴を見せてもらったんだけど、あんな過酷な境遇ではテーブルマナーとかが身に付いてなくても不思議じゃな

いよ」

紫龍「だが、必要な礼儀とテーブルマナーさえ身に付ければ食べる所と寝る所には困らないのだからな」

氷河「頑張れよ、クリス…」

テーブルマナーの習得に悪戦苦闘するクリスをそつと見守る星矢達であった。

星矢「それじゃあ瞬、クリスの事を頼むぜ」

氷河「俺達は二課で了子の行動を見てくる。あの女がけろつとしてるのなら、フィーネは死んでないって証だからな」

了子の行動に目を光らせるため、クリスの事を瞬に任せて星矢達は二課へ向かった。

### 特異災害対策機動部二課

響と共に二課に来ていた未来は学校の下にある二課の施設に驚いていた。

未来「うわあ、学校の真下にこんなシェルターや地下基地が…」

響「あつ、翼さーん！星矢さーん！」

自販機があるエリアで翼と星矢達が待っていた。

翼「立花か。そちらは確か、協力者の…」

未来「こんにちわ、小日向未来です」

響「えっへん！私の一番の親友です！」

星矢「以前から沙織さんは未来にこの事が知られた際の時を想定して協力者にしてもらえないかって検討してたんだ」

氷河「ノイズ関連で二人の関係が壊れる事に心を痛めていた沙織さんの計らいでもあるからな」

翼「確かにな。立花はこういった性格故、色々と迷惑をかけると思うが支えてやってほしい」

未来「いえ、響は残念な娘ですのでご迷惑をおかけしますが、よろしく願います」

響「えっ？何？どういう事？」

氷河「響を介して2人が意気投合してるんだ。ほんと、未来は響の

奥さんかママだな」

未来「ママ？」

星矢「氷河の奴、クールぶってるけど結構マザコンなんだぜ。マザコンだから師匠の師匠であるカミュに」

氷河「星矢、余計な事を言うな！お前だってシスコンじゃないか！」

紫龍「俺からしたらどっちもどっちだ」

星矢「紫龍だって『以前、老師から聞いた事がある』とか、自分の肉体美をアピールするみたいに聖衣はおろか上着まで脱ぐとか」

未来「あははははっ！」

氷河にとつて恥ずかしい事を星矢が言おうとしたために慌てて氷河が口を塞ぎ、紫龍も加わって更にカオスになった会話に未来は思わず笑った。

氷河「コラ、星矢が余計な事を言うから」

未来「違うの。星矢さん達ってノイズを素手で倒せる凄い人達って思ってたけど、意外と親しみやすくて」

響「だよね！星矢さん達は強くて優しくて、親しみやすいと未来も思うのは当然だよ」

星矢「いやあ、照れるなあ」

紫龍「そうか、それはよかった」

未来「はい。ところで、瞬さんと一輝さんは？」

紫龍「瞬は俺達の中ではクリスと接した時間が長いから護衛も兼ねて城戸邸にいる。一輝の方はいつもの別行動さ」

未来「そうですか…」

星矢「気にするなよ。一輝は大事な時は必ず来るし、瞬もきちんとクリスの護衛をやってくれるさ。だから、前向きに行こうぜ」

未来「そうですね」

楽しく会話する一同だった。そして、慎次は微笑む翼を見ていた。響「でも、未来と一緒にここにいるのはなんかこそばゆいですよ」

翼「小日向を外部協力者として二課に移植登録したのは司令と沙織お嬢様が手を回してくれた結果だ。それでも不都合を強いるかも知れないが」

未来「説明は聞きました。自分でも理解しているつもりです。不都合なんてそんな」

響「あつ、そういえば師匠は？」

翼「あつ、私達も探しているのだが…」

紫龍「(司令はクリスと面会したいと沙織さんと通信をしていたな)」

弦十郎が城戸邸に向かった事を星矢達は察していた。そこへ、了子がやってきた。

了子「あーら、いいわねえ。ガールズトーク♪」

慎次「どこから突っ込むべきか悩みますが、とりあえず僕達を無視しないでください」

響「了子さんもそういうの、興味ありますか？」

了子「モチのロン！私の恋バナ百物語聞いたら、夜眠れなくなるわよ…」

未来「まるで怪談みたいですね…」

響「了子さんの恋バナ!?!きつとおつとりメロメロ、銀座の恋の物語〜!」

その様子に翼は呆れていた。

了子「そうね、遠い昔の話になるわね…。こう見えて呆れちゃうぐらい一途なんだから…」

響&未来「「おおおっ!!」」

翼「意外でした。櫻井女史は恋より研究一筋であると」

了子「命短し恋せよ乙女というじゃない。それに、女の子の恋するパワーって凄いんだから!」

慎次「女の子ですか…」

余計な事を言う慎次に了子は裏拳をかました。

了子「私が聖遺物の研究をするようになったのも」

響&未来「「うんうん、それで!」」

了子「……ま、まあ私も忙しいからここで油を売ってられないわ」

慎次「自分から割り込んで来たたくせに」

今度は了子の蹴りを入れられた。

星矢「大丈夫か？」

了子「とにもかくにも、できる女な条件はどれだけいい恋してるかに尽きるわけなのよ。ガールズたちもいい恋、なさいね。んじゃ、ばはは〜い」

そう言つて了子は通り過ぎたが、通り過ぎる際に星矢に鋭く冷たい視線を向けた。その様子は紫龍も察していた。

未来「紫龍さん、どうしたのですか？」

紫龍「あ、いや、何でもない（あの女の冷たい視線、時々沙織さんに向けてのと同じものだ。それをなぜ星矢に…？）」

そんな中、了子は通路を歩いていた。

了子「らしくない事言っちゃったかもね…。変わったのか、それとも…変えられたのか…？」

そして、星矢と沙織の事を思い出して立ち止まった。

了子「（あの2人…、本当に…）」

普段からは考えられないほど了子の表情は怒りに満ちており、握り締めた手から血が出るほどだった。

城戸邸

その頃、城戸邸では美衣の指導にクリスはヘトヘトだった。

クリス「ちつくししょう…、どう転んでも地獄じゃねえか…」

クリスとしてはテーブルマナー等の指導は地獄同然であったが、戻る場所のない生活も地獄であった。そんなクリスは医者勉強をしている瞬の方へ視線がいった。

クリス「なあ、瞬は」

???「邪魔するぞ」

そんな時、ノックする音がして美衣が弦十郎を部屋に入れた。その様子にクリスは警戒した。

瞬「司令じゃないですか」

弦十郎「マナー習得の休憩中で失礼したな。応援は連れてきていない。訪問したのは俺一人だ。君の保護を命じられたのはもう俺一人になってしまったからな」

クリスは星矢達には同じ10代同士という事もあり、多少は心を開いていたが、大人には未だに心を許していなかった。

クリス「そう言えば、あの女神様とあんたらは協力体制にあったな」  
弦十郎「それもあがあるが、元公安の御用機関でね、慣れた仕事さ。差し入れだ」

弦十郎はアンパンをクリスに渡した。なかなか食べようとしないうクリスだったが、瞬がつまんで食べ、毒がないのを証明した。

瞬「大丈夫だよ」

瞬のお人好しぶりに頭があまり上がらないクリスは受け取って食べた。

弦十郎「バイオリン奏者の雪音正典とその妻吹奏楽家のソレット・M・雪音が難民救済のNGO活動中に戦火に巻き込まれて死亡したのが8年前。残った一人娘も行方不明になった。その後、国連軍のバルベルデ介入によって事態は急転する。現地の組織に囚われていた娘は発見されて保護、日本に移送される事になった」

クリス「よく調べているじゃねえか。そういう詮索はヘドが出る！」

瞬「(クリスのあのような態度は戦火に巻き込まれて両親を亡くしたのが原因だったのか…。麻森博士はシンフォギアシステムは奏者の心の状態に左右されると言ってたけど、クリスの戦い方から考えたら戦火によるトラウマがギアに影響されているのかも知れない…)」

瞬は本来は弓の聖遺物のイチイバルがなぜガトリングやミサイルを放つギアになったのかを疑問に思っていたが、クリスの過去を聞いて疑問がようやくわかったのであった。

弦十郎「当時の俺達は適合者を探すために音楽界のサラブレッドに注目していたね、天涯孤独となった少女の身元引き受け先として手上げたのさ。ところが少女は帰国直後に消息不明、俺達も慌てたよ。二課からも相当数の捜査員が駆り出されたが、この件に関わった多くの者が死亡、あるいは行方不明という最悪の結末で幕を引く事になった」

瞬「その犯人はフィーネに違いない。フィーネは最初から意のままに動く駒としてクリスを欲していたんだ」

クリス「何がしたい、オッサン！」

弦十郎「俺がやりたいのは君を救い出す事だ。引き受けた仕事をやる遂げるのは、大人の務めだからな」

クリス「ふん！大人の務めと来たか！余計な事以外はいつも安易もしてくれない大人が偉そうに！」

怒りを露わにしたクリスだが、瞬に制止された。

瞬「司令、クリスは機嫌がよくありません。次の機会にお願いします」

弦十郎「それもそうだな……」

瞬「そして、了子さんに気を付けてください。あの人には裏の顔があるようなんです」

瞬からの言葉を聞いた弦十郎は部屋を後にした。

クリス「なあ、瞬はなんでいつも一緒にいてくれない兄貴を信じられるんだ……？」

瞬「クリスも見たはずだよ、僕の兄さんは僕がどうしようもないピッチになった時はいつも助けに来てくれる事を」

クリス「……瞬ってあたしとは逆でお人好しだな」

瞬「そうだね……。司令が君の過去を言っただけど、僕と兄さんは両親がいなくて小さい時からずっと2人きりの兄弟として育ったんだ。僕が挫折そうになった時はいつも兄さんが助けてくれた。そして、聖闘士になるために6年間兄さんと離れ離れになって、再会した時に兄さんが生き地獄を経験して憎しみに囚われ、僕達を攻撃した時も僕はずっと兄さんが昔の兄さんに戻ってくれるのを信じ続けていたんだ。そして、兄さんは昔の優しい兄さんに戻っていざという時に僕達を助けてくれるんだ」

クリス「……ほんと、兄貴に拳を向けられても信じ続けた瞬はあたしよりもずっと強いんだな……」

例え憎しみに囚われた兄に拳を向けられてもずっと兄を信じ続けていた瞬にクリスは自分との心の清らかさと優しさ、強さの違いを悟

り、涙を流していた。

クリス「バカ正直に人を信じて守る事ができる瞬と違って信じきる事ができないし、壊す事しかできないあたしは…あたしは…」

涙を流すクリスの肩に瞬はそっと手を置いた。

瞬「クリス、君は僕達と違って歌があるじゃないか？」

クリス「歌…？」

瞬「僕達は身寄りも財産もなく、生きていくためには体を鍛えぬき、聖闘士になるしか道はなかったんだ。でも、君には歌がある。そして、新しくできた友達もいるんだ」

クリス「でも、あたしの歌は壊す事しか」

瞬「僕達聖闘士の力も君の歌と同じで使い方を間違えれば守るべきものさえも壊しかねない強大なものだ。でも、僕達は守りたいものを守るためにそれを振るっている。君のいう壊す事しかできない歌も自分の大切なものを壊そうとする敵を倒し、守るために使う事ができるはずだよ」

クリス「守りたいものを守る…」

瞬「これからどうしたいのかはクリス自身が迷いながら答えを出せばいいよ」

クリス「なあ、さつきから聞きたかったんだが、あんたは何の勉強をしてるんだ？」

瞬「医者になるための勉強だよ。僕は聖闘士として守るためだったとはいえ、多くの人の命を奪ってきたからその償いとして助けられる人の命を助けたいんだ」

クリス「ほんと、あんたは途方もなく優しすぎる上にお人好しだよ…」

## 公園

そして次の日、翼は響達を待っていた。一方の星矢達はクリスの護衛等をやっている瞬以外は翼の視線の届かない場所で様子を見ていた。

翼「あの子達は何をやってるのよ…」





響「翼さんがへばりすぎなんですよ」

未来「今日は慣れない事ばかりだったから」

翼「防人であるこの身は常に戦場にあつたからな。本当に今日は知らない世界ばかりを見てきた気分だ」

響「そんな事ありません」

響は街を一望できる所へ翼を連れて行った。それは、翼は見た事もない光景だった。

響「あそこが待ち合わせした公園です。みんなと一緒に遊んだ所も遊んでない所もたくさんぶ翼さんの知ってる世界です。昨日に翼さんが戦ってくれたから今日にみんなが暮らせている世界です。だから、知らないなんて言わないでください」

そんな響の言葉に翼は奏が言った事を思い出した。

奏『戦いの裏側とか、その向こう側にはまた違ったものがあるんじゃないかな？あたしはそう考えてきたし、そいつを見てきた』

翼「そうか、これが奏の見てきた世界なんだな…」

夕焼けの景色を見る翼の笑顔はとても澄み切ったものだった。

リディアン

お出かけから数日経ち、響と未来はチケットをもらった。

響「えっ、復帰ステージ!？」

翼「アーティストふえすが10日後に開催されるのだが、そこに急遽ねじ込んでもらったんだ」

未来「なるほど」

翼「倒れて中止になったライブの代わりというわけだな」

チケットの裏側に載ったフェスの会場は二年前にノイズに襲撃され、奏が死亡して響の運命が大きく変わった場所でもあった。

響「翼さん…、ここって…」

翼「立花にとっても、辛い思い出のある場所だな」

響「ありがとうございます！翼さん！いくら辛くても過去は絶対に乗り越えていきます！そうですね、翼さん！」

翼「そうありたいと私も思っている」

辛い思い出を乗り越えようとした2人であった。その様子を星矢達は見つめていた。

## 聖域

その頃、魔鈴とシャイナは奪われた黄金聖衣の行方を追っていたが、一向に手掛かりが掴めなかった。

シャイナ「まいったねえ、こんなにも見つからないなんて」

魔鈴「敵が一体、何の目的で黄金聖衣を盗み出したのかがわかればね。そういうシャイナもやけに気合が入っているじゃない」

シャイナ「気合が入ってるも何も、蛇遣座の聖闘士として黄金聖衣が盗まれたり、蛇遣座の黄金聖衣が見つかるなりして一連の事件が何だか気になるんだよ」

魔鈴「それにしても蛇遣座の黄金聖衣は不思議な黄金聖衣だよ。サガでさえ完璧に本物だと信じずに放置していた程だし、盗もうとした人間はみんな呪われて死ぬっていう噂まである程だよ」

シャイナ「黄金聖衣は代々の装着者の思念が宿ってるから星矢達と縁のある黄金聖闘士の黄金聖衣は度々星矢達を助けてたけど、盗もうとした奴がみんな死ぬなんて話しは一度も聞いた事がないよ」

魔鈴「もし、それが聖衣の仕業なら、過去の蛇遣座の黄金聖闘士はよっぽど自分の聖衣を誰かに盗まれるのが嫌だったんじゃないのかい?」

そんな中、雑兵の1人が知らせに来た。

雑兵「アテナより伝言です。10日ほどした後には青銅聖闘士5人を連れて日本へ向かってほしいそうです」

魔鈴「日本へ?」

シャイナ「もしかすると、盗まれた黄金聖衣が見つかるかも知れないよ」

魔鈴「10日後に邪武達を連れて行くしかないようだね」

## ライブ会場

そして、翼の復帰ライブ当日、翼は海外進出を持ち掛けてきたメト

ロミュージックのプロデューサーに『もう少し時間がほしい』と頼み、ステージに臨んだ。そして、開演に送っていた響は星矢達に送迎してもらっていた。

響「すみません、星矢さん！」

星矢「何、気にすんなよ」

紫龍「俺達は翼のライブにノイズが襲撃した時に備えて待機しておけという指令が下されてな」

氷河「だから、偶然響と通り道が一緒になった」

そんな折、ノイズ出現の連絡が入った。

特異災害対策機動部二課

ノイズ出現が検知されたのであった。

響『はい、響です』

弦十郎「ノイズの出現パターンが検知された。翼にもこれから」

紫龍『司令、この場は俺達に任せていただけませんか？』

弦十郎「何？」

響『今日の翼さんは自分の戦いに臨んでほしいんです。あの会場で最後まで歌いきってほしいんです。お願いします！』

その言葉に弦十郎は驚きつつも、ふっと笑った。

城戸邸

ノイズ出現は城戸邸にいるクリスにも知らされた。

瞬「行くのかい？」

クリス「決まってるだろ!？」

瞬「なら、行こうか！」

クリスは瞬と共に出撃した。

ライブ会場

フィーネの追っ手のノイズは無関係の人間を襲撃してクリスをおびき出そうとしたが、そこに現れたのは星矢達であった。

星矢「ノイズ、お前達の好きにはさせないぜ！」

響「今日は翼さんの大事なライブです！」

氷河「そして、この先のライブ会場は歌姫が歌う神聖な舞台だ！」

紫龍「そこを汚し、人々を炭に変えてしまう化け物は一歩たりとも先へ進ません！ここで俺達が倒す！」

そう言つて星矢達はノイズの群れに突っ込んでいった。翼のライブも始まったが、離れているのに翼のライブに合わせるかのように星矢達はノイズと戦っていた。

星矢「何だ？曲のノリと共に俺達の小宇宙が燃え上がってきたぞ！」

紫龍「それだけ、翼の歌は観客に元気を与える歌なのだろう！」

氷河「俺達も負けてられないぞ！」

星矢「そうだな！ペガサス、流星拳！」

曲のリズムと共に放たれた流星拳でノイズの群れを掃討した。

響「でりやあああつ!!」

紫龍「廬山、龍飛翔！」

氷河「ダイヤモンドダストオ！」

紫龍と氷河もリズムに乗り、それぞれの技でノイズを一掃していた。そんな中、鎖と銃弾が飛んできた。

響「この攻撃って…」

その攻撃の主はクリスと瞬であった。

星矢「瞬にクリスじゃねえか！」

瞬「どうしてもクリスが行きたいって言ったから、一緒に来たよ！早く片付けよう！」

クリスの銃火器攻撃と瞬のチェーンさばきも加わり、あつという間にノイズは全滅した。

氷河「終わったな」

瞬「それじゃあ、僕とクリスは先に帰るね」

瞬はクリスと共に先に帰る事となった。

瞬「クリスはまだ響と一緒に戦う決心がつかないのかい？」

クリス「…ああ。まだ、どうしたいのかわかんねえ…」

瞬「焦らずにじっくり悩んで考えようか」

そんな瞬と共にクリスは先に帰った。

そして、戦いの終了と共に翼の歌も終わった。

翼「ありがとうみんな！今日は思いつきり歌を歌えて気持ち良かった！」

観客の喜びを戦いが終わった星矢達は天井から見ている。

氷河「紫龍、ようやく翼は迷いを吹っ切れたようだな」

紫龍「ああ。今まで以上にいい歌だ」

そんな翼の様子に星矢達も笑みを浮かべていた。

翼「こんな想いは久しぶり、忘れていた。でも思い出した！私はこんなにも歌が好きだったんだ。聴いてくれるみんなの前で歌うのが大好きなんだ！……もう知ってるかも知れないけど、海の向こうで歌ってみないかとオフアアが来ている。自分が何のために歌うのかずっと迷っていたんだけど、今の私はもつとたくさんの人に歌を聴いてもらいたいと思っている。言葉は通じなくても、歌で伝えられる事があるのあんらば、世界中の人達に私の歌を聴いてもらいたい！」

翼の言葉に観客の興奮は大いに高まった。

翼「私の歌が誰かの助けになると信じて、みんなに向けて歌い続けてきた。だけど、これからはみんなの中に自分を加えていきたい！だって、私はこんなにも歌が好きなのだから！たった一つのワガママだから聴いてほしい、許してほしい！」

???「許すさ、当たり前だろう？」

そんな中、翼の耳に奏の声が聞こえた。しかし、奏の姿はなかった。

翼「(奏……)」

一方、グレイザーはステージを離れていた。

慎次「Mrグレイザー！」

グレイザー「君か……。少し早いけど、今夜は引き上げさせてもらうよ。これから忙しくなりそうだからね」

そのグレイザーの出した答えに慎次はお辞儀した。

慎次「風鳴翼の夢をよろしくお願ひします」

グレイザー「ははははっ！」

グレイザーは笑いながら去って行った。

城戸邸

翼のライブの様子は星矢達を通して沙織も知る事となった。

沙織「翼さんの復帰ライブは成功したようですね」

氷河「ああ、大成功だ」

紫龍「俺達も元気をもらったよ」

星矢「沙織さんも一緒に行ってライブを聴きたかった？」

沙織「うふふ、どうでしょうね？」

貴鬼「おいらはライブなんて知らないから、興味あるなあ……」

しばらく笑ったが、すぐに表情を引き締めた。

瞬「兄さんの言ってた『カ・ディングル』って、何なのかな？」

沙織「わかりません。ですが、放っておくわけにはいきません」

星矢「見つけ出してぶっ壊さないと……」

疑っている了子がけろつとしてるためにまだフィーネは死んでいないと星矢達は判断し、いずれは訪れるフィーネとの戦いに闘志を燃やしていた。

## 12話 手と手を取り合つて

城戸邸

翼のライブからしばらくした後、星矢達は『カ・デインギル』を探していたが、見つからなかった。

星矢「あれだけ探してもカ・デインギルが見つからないなんてよ」  
氷河「そもそも、カ・デインギルとはなんだ？」

沙織「わかりません。それと、グラード財団の情報網にある情報がありました」

沙織はその情報を見せた。

紫龍「米政府が特殊部隊にソロモンの杖を回収せよ、だど？」

美衣「どうやら、米政府は私達に弱みを握られた上、痺れを切らしたようです」

星矢「紫龍や一輝が怪しんでいた了子が何事もなかったかのようにしてるから薄々そうだったが、これを聞けばフィーネが生きてるのは確定だな」

それに乱入するかのようにクリスが入ってきた。

クリス「フィーネがまだ生きてるっていうの、本当なのか!？」

沙織「はい。米政府のとある命令から察すれば生きてるのは確定しているでしょう。何より、了さんが普通にしているのが何よりの証拠です」

クリス「だったら、今からフィーネのアジトに行く!行かせてくれ!」

瞬「僕も一緒でお願いします」

沙織「わかりました。瞬、あなたはクリスと共にフィーネのアジトに向かってください」

瞬「はい」

早速、瞬は聖衣を纏い、クリスを連れてフィーネのアジトへ向かった。

瞬「クリスはフィーネと戦うのは躊躇してる?」

クリス「……ちよつとな……。でも、このままだと関係ない奴等まで



巻き添えになっちまう！」

瞬「わかった。そうならないためにも、行こう！」

ファイネのアジト

ファイネのアジトではいかにも工作人員と思わしき男達が潜んでおり、コンピュータを弄っているファイネの元へ来た。

ファイネ「ふふふ…、私を消そうとしても無駄よ」

男達に銃を向けられてもファイネは驚きもせず、それに恐れをなした男達は銃弾を撃ち込みまくった。しかし、突如として蛇遣座の黄金聖衣が阻んだ。

兵士A「な、何だ!?あの黄金の鎧は？」

兵士B「構うな!そんな鎧はロケット弾でぶっ壊せ！」

銃がダメなら、今度はロケット弾を放った。しかし、それでも黄金聖衣にはかすり傷一つつかなかった。

兵士リーダー「ど、どうなっているんだ!?あの鎧は!」

ファイネ「簡単よ。この鎧は私の危機に反応して守ろうとする鎧なの。そして、私の半身であり、相棒なのよ」

兵士リーダー「ひ、怯むな!全弾撃ち尽くしてでもぶっ壊せ!!」

傷1つつかない黄金聖衣に恐れをなした兵士達は怯えて銃やロケット弾を連射した。しかし、弾を撃ち尽くしても傷1つつかなかった。

兵士リーダー「ば、化け物鎧め…!」

ファイネ「ムダよ。その鎧はそんなチンケな武器じゃ壊せない。それに、掠める準備ができたら用済みとして始末しようとするなんて徹底しているわ…。それも、わざと痕跡を残して立ち回るあたりが品性下劣な米国政府らしい。ブラックアートの深淵、覗いてすらもいない青二才のアンクルサムに用はないわ。さっさと死にな!」

そして、反撃といわんばかりに蛇遣座の黄金聖衣が勝手に動き出した。

兵士リーダー「ひ、ひいいいいっ!!」

兵士達は恐怖で逃げようと思っても逃げきれず、次々と蛇遣座の黄

金聖衣に首を撥ね飛ばされたり、心臓を貫かれたりして殺されていた。

フィーネ「あははははっ！所詮は愚かな奴等よ！もう誰も私を止める事はできないのよ、あゝっはははははっ!!」

死体を蔑む目で見つめながらフィーネの邪悪な笑いが木霊したのであった。

リディアン

用件を済ませて職員室を出ていた響は未来と共に教室に向かっていったが、合唱部が歌っている校歌を鼻歌で歌っていた。

未来「何？合唱部に即発されちゃった？」

響「んゝ、リディアンの校歌を聞いてるとまったりするっていうか、凄く落ち着くっていうか、みんながいる所って考えると安心する。自分の場所って気がするんだ。入学してまだ2か月ちよつとなのにな」  
未来「でも、色々あった2か月だよ」

響「うん、そうだね」

シンフォギアを初めて纏い、恩人の星矢と沙織の2人と再会し、憧れの翼と衝突を経て仲良くなったりとあまりにも多くの出来事がその間に起こっていた。

フィーネのアジト

瞬とクリスはアジトに到着した。

クリス「どうだ？瞬」

瞬「チェーンには何の反応もない」

クリス「なら、進むしかねえな」

クリスは瞬と共にフィーネのいるホールへ向かったが、そこには機械は壊されている上、首をはねられたり心臓を貫かれたりして無残な死体と化していた米国の工作員達の姿があった。その姿に瞬はショックを受けていた。

瞬「なんて惨い殺され方なんだ…!」

クリス「一体、何がどうなってるやがんだ!」

そんな時、後ろには弦十郎がいた。

クリス「違う、あたし達じゃない！」

瞬「心配いらないよ、クリス」

クリス「瞬……」

瞬の言う通り、二課の諜報部はクリスと瞬に疑いはおろか見向きもせずに無残な死体となった米国工作員の方へ向かった。無言で近づいた弦十郎はクリスの頭を撫でた。

弦十郎「誰もお前らがやったなどと疑ってはいない。特に瞬はそういった殺し方を嫌うからな。全ては君や俺達の側にいた彼女の仕業だ」

クリス「え？」

瞬「司令も気付いていたのですか？」

弦十郎「ある程度はな」

部下「風鳴司令」

部下の1人が殺された工作員の死体に置かれた『I LOVE YOU SAYONARAへさよなら、愛してるわ』と書かれた紙をとった。すると、糸を使った罫が作動した。

瞬「これは」

瞬が叫ぼうとした時に爆発が起こった。その爆発で天井や壁が崩れたが瞬がすぐにネビュラチェーンで誰にも落ちてこないように瓦礫を弾き、弦十郎は瞬とクリスの上に落ちてきた瓦礫を片手で止めた。

クリス「どうなってんだよ、こいつは……」

弦十郎「衝撃は八割で掻き消した。後は瞬がその鎖で瓦礫を弾くなりして破壊した」

瞬「(この人、小宇宙が使えれば黄金聖闘士に間違いなくなれる)」  
クリス「何でだよ、何でギアも聖衣とかいう鎧も纏えない奴があたり達を守ってんだよ！」

弦十郎「俺がお前を守るのはギアのあるなしじゃなくて、お前よか少しばかり大人だからだ」

瓦礫を放り投げ、そう言った弦十郎にクリスは敵視した。

クリス「大人：あたしは大人が嫌いだ！死んだパパとママも大嫌いだ！とんだ夢想家で臆病者！あたしはあいつらと違う！戦地で難民救済？歌で世界を救う？いい大人が夢なんて見てんじゃねえよ！」

弦十郎「大人が夢を…ねえ…」

クリス「本当に戦争をなくしたいのなら、戦う意志と力を持つ奴等を片っ端からぶっ潰すしかないじゃないか！それが一番合理的で現実撃だから…だからあたしは…」

瞬「クリス、そんなやり方では戦争はなくならない！ノイズのような存在ならまだしも、その戦う意志と力を持つ人を殺してもその人の家族や友人、仲間が君を憎み、力をつけて殺しに来る。そして君がその人に殺されれば、君と親しい人が彼等を憎む。君のやり方ではフイーネの言う通り、憎しみの連鎖によって戦争を拡大させるだけだ！」

クリス「だけど…だけど…」

争いを好まない瞬のいう『憎しみの連鎖』にクリスは反論する事もできなかった。

弦十郎「瞬に言いたい事を言われてしまったな。いい大人は夢を見ないと言ったな。だがそうじゃない。大人だからこそ夢を見るんだ。大人になったら背も伸びるし、力も強くなる。財布の中の小遣いだつてちったあ増える。子供の頃はただ見るだけだった夢も大人になったら叶えるチャンスが大きくなる。夢を見る意味が大きくなるお前の両親はただ夢を見るために戦場に行ったのか？違うな。歌で世界を平和にするっていう夢を叶えるために自ら望んでこの世の地獄に踏み込んだんじゃないのか？」

クリス「なんでこんな事を…」

弦十郎「お前に見せたかったのだろう。夢は叶えらるという揺るがない現実をな。お前は嫌いだと吐き捨てたが、お前の両親は本当に大切に思ってたんだろうな…。瞬の兄貴の一輝が普段は離れていてもいつも弟を見守り、危機に陥ったらすぐに駆け付けるように」

弦十郎の言葉を聞いて泣きそうになるクリスを瞬が優しく抱き締めた。

クリス「うっ…、ううっ…」

崩れたフィーネのアジトにクリスの泣き声が響いたのであった。そして、弦十郎達は撤収しようとした。

クリス「やっぱりあたしは…」

弦十郎「一緒には来られないか」

瞬「司令、クリスは僕と行動を一緒にさせてください」

瞬が手を握ってくれた事にクリスは少し安心した。瞬の年齢はクリスより年下なのにも関わらず、見た人からすれば瞬の方がクリスの兄のようであった。

弦十郎「お前はお前が思っているほど一人ぼっちじゃない。瞬達もいるんだ。そいつらと一緒に道を歩いて行くとしてもその道は遠からず俺達の道と交わる」

クリス「今まで戦ってきた者同士が一緒になれるというのか？世慣れた大人がそんな綺麗事言えるのかよ」

弦十郎「ほんと、捻てんなお前。瞬達や沙織お嬢様も割と手を焼くわけだ」

そんなクリスに弦十郎は通信機を投げ渡した。

クリス「通信機…」

弦十郎「そうだ。限度額内なら公共交通機関が利用できるし、自販機で買える物もできる代物だ。便利だぞ」

クリス「『カ・ディングル』！」

弦十郎「ん？」

クリス「フィーネが言ってたんだ。『カ・ディングル』って。それが何なのかわからないけど、そいつはもう完成しているみたいな事を」  
弦十郎「カ・ディングル…。後手に回るのは終いだ。こちらから打って出てやる！」

諜報部と一緒に弦十郎は本部に戻った。

クリス「これからどうするんだ？瞬」

瞬「あのコンピュータを調べてみる。そうすれば、カ・ディングルとか、フィーネの更なる手掛かりとか、兄さんに倒されたはずのフィーネがまだ生きている原因がわかるかも知れない」

瞬はホールに戻り、コンピュータをマツハの速度で捜査して見れるデータを見ていた。

クリス「ろくな勉強もしてねえのによく操作できるな…」

瞬「医者勉強をやってる過程でコンピュータの扱いも沙織さんから教えてもらってね」

そう言っただけデータを見てみたが、驚きのもものばかりだった。

瞬「何だっ!?」

クリス「どうしたんだよ!」

瞬「そうか…、そうやってフィーネは兄さんに左胸を貫かれても死ななかったのか…!」

クリス「瞬、これって…」

そのデータには、響のデータもあった。そして何より、フィーネの恐ろしい予備策まであったのであったに2人は戦慄した。

クリス「おい、これって…」

瞬「なんて事だ!フィーネはカ・デインギルが破壊された時まで想定してこんな事を考えていたのか!?クリス、急いで行こう!」

クリスを連れて瞬は急いだ。

特異災害対策機動部二課

弦十郎は響と翼、そして城戸邸にいる星矢達に通信を入れた。

翼『はい、翼です』

響『響です!』

星矢『何かあったのか?』

弦十郎「収穫があった。了子君は?」

あおい「まだ出勤してません。朝から連絡不通でして」

弦十郎「そうか…」

響『了子さんならきつと大丈夫です!何が来たって私を守ってくれた時のようにドカーンとやってくれます!』

翼『いや、戦闘訓練もろくに受講していない櫻井女史にそのような事は…』

響『えっ?師匠とか了子さんって、星矢さん達のような人間離れし

た特技とか持つてるんじゃないんですか？」

そんな中、紫龍は瞬から聞いた事を思い出していた。

紫龍『あの女は小宇宙は扱えないし、聖遺物の力も持っていない。一体、なぜあのような力を…』

そんな中、音声だけではあるものの、了子からの通信が入った。

了子『やーつと繋がった♪ごめんね、寝坊しちゃったけど通信機の調子がよくなって…』

了子の声に弦十郎と星矢達は視線を鋭くした。

弦十郎「無事か、了子君？そっちに何も問題は」

了子『寝坊してゴミを出せなかったけど、何かあったの？』

響『よかった』

弦十郎「ならばいい。それより、聞きたい事がある」

了子『せっかちなね。何かしら？』

弦十郎「カ・ディングル。この言葉が意味するものは？」

了子『カ・ディングルとは古代シユメールの言葉で高みの存在。転じて天を仰ぐほどの塔を意味しているわね』

弦十郎「何者かがそんな塔を建造していたとして、なぜ俺達は見過ごしてきたのだ？」

響『確かにそう言われちゃうと…』

弦十郎「だが、ようやく掴んだ敵の尻尾。このまま情報を集めれば勝利は同然。相手の隙にこちらの全力を叩き込むんだ。最終決戦、仕掛けるからには仕損じるな！」

響&翼『了解です！』

星矢達『任しとけ！』

了子『ちよつと野暮用を済ませてから私も急いでそっちに向かうわ』

それぞれ通信を切った。

リディアン

響は隣にいる未来と一緒にカ・ディングルについて調べていた。

響「カ・ディングル…誰も知らない秘密の塔…」

未来「検索してみても引つかかるのはゲームの攻略サイトばかり…」

城戸邸

城戸邸でもカ・ディングルに関する情報を検索していた。

美衣「やはり、簡単には見つからないようですね」

沙織「聖域と同様に結界が張られていて見えないようになっていて可能性もあります」

氷河「だが、そんな技術はその建造した連中にあるのか？」

星矢「俺がカ・ディングルを建てる立場なら、海とか地下とかに建造していざって時に地上に出るようになるぜ」

星矢の何気ない一言に紫龍は閃いた。

紫龍「星矢、さっきお前はカ・ディングルを建造するなら、海とか地下と言ってたな」

星矢「それがどうしたんだ？」

紫龍「お前のさっきの一言で俺は閃いたんだ。カ・ディングルのある場所が」

美衣「何ですって!？」

カ・ディングルのあると推測される場所に星矢達は驚いた。

沙織「まさか、あそこだったとは…!」

紫龍「そう、バカでかい建物を誰にも気づかれる事なく建造するには、あそこしかない!星矢の何気ない一言がなければ見落としていた」

そんな中、瞬がクリスと共に帰ってきた。

瞬「みんな、カ・ディングルが破壊された際のフィーネの恐ろしい予備策がわかったんだ!」

氷河「予備策だと!？」

その予備策を聞き、またしても星矢達は驚いた。

氷河「黄金聖衣強奪の犯人がフィーネだと!？」

星矢「そんな事のために黄金聖衣を盗んでいたのか…!それより、黄金聖衣の修復状況はどうなんだ?」



沙織「今は9割を超えています。もうすぐ終わるとの事です」  
紫龍「万一の時のために、今日のうちに終わればいいのだがな…」

特異災害対策機動部二課

二課でもカ・デインギルの情報を検索していた。

弦十郎「些末な事でも構わん、カ・デインギルについての情報をかき集めろ！」

そんな折、ノイズ出現の警報が鳴った。

弦十郎「どうした!？」

朔也「飛行タイプの超大型ノイズが一度に3体、いえ、もう1体出現！」

弦十郎「何だと!？」

朔也「さらに少し離れた場所に50体もの大型ノイズ、海側に6体もの超大型ノイズ出現！」

そこへ、沙織から連絡が来た。

沙織『司令、海側のノイズは星矢達が迎撃を担当します』

弦十郎「済まない、沙織お嬢様」

空き地

50体のゴールドノイズは一輝の行く手を阻んでいた。

一輝「なるほど、俺をここから先へは通さないという訳か…。ならば、貴様ら全員を倒して進むまでだ！」

そう言つて一輝はゴールドノイズに向かっていった。

市街地

空飛ぶ超大型ノイズの出現で街はパニックになっていた。

翼「合計4体。すぐに追いかけます！」

連絡を受けた翼はすぐに向かい、響の方にも連絡が入った。

響「今は人を襲うというよりも、ただ移動していると。はい、はい、これからそっちに向かいます」

そう言つて通信を切った。

未来「響…」

響「平気、平気。私達で何とかするから！だから未来は学校に戻って」

未来「リディアンに？」

響「いざとなつたら、地価のシエルターを開放してこの辺の人達を避難させないといけない。未来にはそれを手伝ってもらいたいんだ」

未来「う、うん。わかった…」

響「ごめん、未来を巻き込んだじゃって」

未来「ううん、巻き込まれたなんて思つてないよ。私がリディアンに戻るのは、響がどんなに遠くへ行つたとしてもちゃんと戻つて来れるように響の居場所、帰る場所を守つてあげる事でもあるんだから」

響「私の帰る場所…」

未来「そ、だから行つて。私も響のように大切なものを守れるように強くなるから」

優しい笑みを浮かべる未来の手を響は握つた。

響「小日向未来は私にとつての陽だまりなの。未来の傍が一番暖かいところで私が絶対に帰ってくる場所！これまでもそうだし、これからもそう！だから私は絶対帰ってくる！」

未来「響…」

響「一緒に流れ星見る約束、まだだしね！」

未来「うん！」

響を見送つた未来だったが、ある不安があった。

未来「(何だか、もう一緒に流れ星を見れない気がする…)」

その頃、翼はバイクで移動していた。

特異災害対策機動部二課

移動中の奏者2人に連絡をとっていた。

翼『翼です』

弦十郎「ノイズ進行方向に関する最新情報だ」

響『はい！』

弦十郎「第41区域に発生したノイズは第33区域を經由しつつ、



そしてギアを纏い、そのまま超大型ノイズの1体を倒したのであった。翼の方もギアを纏って蒼ノ一閃を放ったが、小型ノイズの群れに阻まれて届かなかった。

翼「くっ、相手に頭上を取られる事がこうも立ち回りにくいとは……」  
響「へりを使って私達も空から」

しかし、既にへりは小型ノイズに襲われて爆散していた。

響「そんな……」

翼「よくも！」

響達は応戦したが、空からの敵には苦戦していた。

響「空飛ぶノイズ、星矢さん達は別のノイズとの応戦でいないし、どうすれば……」

翼「臆するな、立花！防人が後ずされれば、それだけ戦線が後退するという事だ」

そうしている間にもノイズが次々と襲撃して来た。しかし、銃弾とチェーンによって次々と倒されていった。2人が後ろを向くと、そこには瞬とクリスがいた。

瞬「みんな、遅くなって済まない！」

響「瞬さん！」

クリス「ちっ、こいつがピーチクパーチクやかましいからちよつと出張ってみただけ。それに勘違いするなよ、お前達の助っ人になったわけじゃ」

瞬「クリス、今はそんな事を言ってる場合じゃないんだ！」

瞬相手にはクリスもあまり反論できなかった。

弦十郎『助っ人は少々到着が遅くなったかも知れないがな』

翼「助っ人？瞬ならわかりますが……」

弦十郎『そうだ。第2の聖遺物イチイバルのシンフォギアを纏う戦士、雪音クリスだ！』

響「クリスちやくん！歓迎パーティー以来だね！あの時みたいに戦いでも力を合わせていこうよ！」

クリス「このバカ！あたしの話を聞いてねえのかよ！」

翼「歓迎パーティー？」

瞬「実は、少し前に響の提案で僕達でクリスの歓迎パーティーをしたんだ」

翼「はあ…。と、とにかく今は連携してノイズを」

クリス「あたしは勝手にやらせてもらう！邪魔だけはすんなよな！」

そうやってクリスは空中のノイズを狙撃し、瞬もチェーンで次々とノイズをなぎ倒していった。クリスは瞬に頭が上がらないため、瞬の加勢は黙認していた。

翼「空中のノイズは2人に任せて私達は地上のノイズを」

響「は、はいっ！」

響達もノイズを倒していたが、翼とクリスは途中で背中同士がぶつかった。

クリス「何しやがる！すっこんでな！」

翼「あなたこそいい加減にして！あなただけで戦えるつもり？」

クリス「あたしはいっただって1人だ。こちとら仲間と馴れ合ったつもりはこれっぽっちもねえよ！」

元々敵同士で出会った2人がいきなり連携をとるのは不可能も同然であった。

瞬「(まずい！今の状況では勝てる戦いにも勝てなくなる！)」

クリス「確かにあたし達が争う理由なんてないのかもな。だからって、争わない理由もあるものかよ！この間まで殺り合ってたんだぞ！そんなに簡単に人と人が」

クリスの言葉を遮り、響がクリスの手を握った。

響「できるよ。誰とだって仲良くなれる」

そうやって響は翼の手も握った。

響「どうして私にはアームドギアがないんだろってずっと考えていた。いつまでも半人前はやだなーって。でも今は思わない。何もこの手に握ってないから2人とこうして手を握り合える！仲良くなれるからね！」

翼「立花…」

響の態度に翼は待っていた刀を地面に突き立て、クリスに向けて手

を差し出した。その様子にクリスは握るのを拒否したが、照れ隠しができずに翼の手を握ったものの、慌ててひっこめた。

クリス「このバカに当てられたのか!？」

翼「そうだと思う。そしてあなたもきつと」

クリス「冗談だろ…」

3人が手を取り合えた事に瞬は微笑んでいた。そこへ、ノイズの影が映った。

瞬「そろそろ戦いに戻った方がいいみたいだよ」

翼「親玉をやらないとキリがない」

クリス「だつたらあたしに考えがある。あたしでなきゃできない事だ。イチイバルの特性は長射程広域攻撃、派手にぶっぱなしてやる!」

翼「まさか絶唱を?」

クリス「バーカ!あたしの命は安物じゃねえ!何かあると絶唱を使いたがるあんたに言われたくねえよ!」

翼「ならばどうやって?」

クリス「ギアの出力を引き上げつつも放出を抑える。行き場のなくなったエネルギーを限界まで取りこみ、一気に解き放つてやる!」

翼「だが、チャージ中は丸裸も同然。これだけの数を相手にする状況では危険すぎる」

瞬「いや、その間はクリスに向かう攻撃を全て防御すればいいんだ」

響「そうですね。瞬さんの言う通り、私達がクリスちゃんを守ればいいだけの事!」

そう言つて翼と響はノイズの群れへ向かつていった。

クリス「頼まれてもいない事を」

瞬「そうなたら引き下がれないね、クリス。チャージ中は僕が守るから、チャージに専念してくれ!」

いつもの激しい歌とは違う歌をクリスは歌った。そして、残りの3人は次々と敵をなぎ倒していた。

響「誰もが繋ぎ、繋がる手を持っている。私の戦いは誰かと手を繋ぐ事!」

翼「砕いて壊すのも、束ねて繋ぐも力。ふっ、立花らしいアームドギアだ」

そうしている間にもクリスのチャージは終わり、ノイズを殲滅する準備ができた。

瞬「さあ、チャンスは1回きりだ！」

それに応え、クリスは全火力を叩き込む技、MEGA DEATH QUARTETを放った。放たれたミサイルや銃弾は空中のノイズを一掃し、響達も地上のノイズを一掃したのであった。

翼「やったのか…？」

クリス「つたりめえだ！」

響「やったやったく！」

クリス「やめろバカ！何しやがるんだ！」

急に響が抱き付いたため、クリスは引き離れた。それと同時にギアも解除された。

響「勝てたのはクリスちゃんのお陰だよ！」

また響はクリスに抱き付いた。

クリス「だからって言うてるだろうが！いいか、お前らの仲間になった覚えはない！あたしはただ、フィーネと決着を着けてやっと思つた本当の夢を果たしたいだけだ！」

響「夢？クリスちゃんのどんな夢？聞かせてよ！」

クリス「うるさいバカ！お前、本当のバカ！」

ノイズの殲滅に喜ぶ響達だが、瞬はチェーンでフィーネがいなくて探っていた。

瞬「やっぱり、フィーネは小宇宙が扱えないからチェーンで探るのも難しいか…」

そんな中、通信が入った。

響「はい？」

未来『響、学校が！リディアンがノイズの襲われ…』

突然通信が途切れた事に響は戸惑っていた。

瞬「みんな、急いでリディアンに向かうんだ！」

翼「どういう事なんだ？瞬！」

瞬「海から来たノイズも、君達が戦ったノイズも僕達をおびき出すための囮だったんだ！それに、カ・ディングルはスカイタワーじゃない、二課の本部なんだ！」

その事実には響達は衝撃を受けたのであった。



## 13話　フィーネの正体

市街地

リディアンに戻っている途中、カ・ディングルが二課本部だという事実には響達は衝撃を受けた。

翼「二課本部が…カ・ディングルだと…？」

瞬「星矢が偶然、『カ・ディングルを建てる立場なら、海とか地下に造り、いざという時に地上に出せるようにする』って言った事で紫龍が閃いたんだ。カ・ディングルを建造するには地下に造るしかないって」

クリス「じゃあ、あたし達はまんまと陽動に引っかけたっていうのかよ！」

瞬「そう言わざるを得ない…。それに、沙織さんも陽動だとわかっていたようなんだ」

翼「確かに、陽動であつてもノイズが出たとなれば動かざるを得ないな…」

響「急いでリディアンに戻りましょう！そうしないと、未来や他のみんなが！」

瞬「それに関してはよほどの事がなければ大丈夫だよ。こんな時に備えて沙織さんは伏兵を用意していたんだ」

響「伏兵？」

そう言ってるうちにゴールドノイズの大群が押し寄せてきた。

クリス「またかよ！」

瞬「3人とも先へ行つて！ここは僕が何とかする！」

響「でも…」

翼「立花、瞬はそう簡単にやられはしない。私達は防人としての使命を優先しなければならぬのだ！」

少し納得がいかなかったが、響はその場を瞬に任せ、翼とクリスと共にリディアンへ急いだ。

瞬「このノイズも僕を足止めするための罠だろう。だけど、野放しにはできない！」

戦おうとした途端、星矢達が駆け付けた。

瞬「星矢、紫龍、氷河！」

星矢「遅くなってすまん！」

紫龍「敵が予想以上に頑丈で手間取った」

氷河「どうやら、こいつらも俺達を足止めするためのノイズのようだな」

星矢「さっさと倒して響達と合流しようぜ！」

星矢達はゴールドノイズに向かっていった。

市街地

それは少し前の事だった。慎次の車と共に沙織と美衣を乗せた高級車もリディアンに向かっていた。

沙織「邪武、今ほどのような状況ですか？」

邪武「建物はかなり壊されてるが、幸いにも犠牲者は誰一人として出ちやいない！」

沙織「今の状況では自衛隊と連携し、人命尊重を最優先に考えてください！建物の事はいくら壊されようがかまいません！」

邪武「わかってるぜ、お嬢さん！」

そこで邪武は通信を切った。

美衣「この状況を想定して邪武達青銅聖闘士5人と白銀聖闘士2人を呼び寄せたのが幸いしましたね」

沙織「ですが、私達も急がなくてはなりません！」

そう言っつてニケの杖を手にする沙織であった。

リディアン

響達がノイズと戦っている間、リディアンにノイズが出現し、自衛隊と交戦していた。自衛隊ではノイズになすすべもなかったはずであつたが：

邪武「ユニコーン・ギャロップ！」

星矢達不在の状況でノイズのリディアン襲撃を想定した沙織はあらかじめ邪武達青銅聖闘士5人と魔鈴とシャイナを聖域から呼び寄

せていたのであった。このため、ノイズとの戦闘は聖闘士に任せ、自衛隊はリディアン生徒の避難誘導を行っていた。そして、慎次と沙織、美衣も到着した。そんな中、未来は避難誘導を行っていた。

未来「落ち着いて、シエルターに避難してください！落ち着いてね」  
そんな中、創世達3人が来た。

創世「ヒナ！」

未来「みんな!？」

弓美「どうなってるわけ？学校が襲われるなんて、アニメじゃないんだから」

未来「みんなも早く避難を」

詩織「小日向さんも一緒に」

未来「先に行つて。私、他に人がいないか見てくる！」

そう言つて未来は先へ向かった。

創世「ヒナ！」

自衛隊員「君達、急いでシエルターに向かってください！校舎内にもノイズが」

そう言つてるうちにノイズが現れ、自衛隊員を貫こうとした。しかし、『何か』に阻まれた。

弓美「な、何？」

そして、沙織と聖衣を纏った美衣が現れ、美衣はノイズを蹴りで倒してしまった。

自衛隊員「あなたは…沙織お嬢様！」

弓美「沙織さんの秘書が鎧を…」

美衣「今は緊急事態で説明している暇はありません！自衛官のあなた、急いでこの子達の避難を！」

詩織「沙織さん、校舎に小日向さんが！」

沙織「未来さんが!?!わかりました、未来さんは私と美衣さんが探します！あなた達は避難してください！」

自衛隊員「わかりました」

創世「でも、ノイズ相手に大丈夫？」

美衣「ノイズが相手でも問題はありません。では、行ってきます！」

そう言つて沙織は美衣と共に向かった。すると、ノイズの群れが出てきた。

美衣「ここは私に任せてください！エンジェル・スプラッシュ！」  
美衣の技でノイズの群れは消滅し、沙織と美衣は先を急いだ。そして、外では邪武達5人と魔鈴、シャイナがノイズ相手に大暴れしていた。

蛮「数が多すぎる！」

市「全く、ノイズは倒しても倒してもキリがないぞんすよ！」

檄「市、弱音を吐く暇があるのなら体を動かして倒さんか！」

那智「俺達はノイズからこの学校の生徒や避難誘導をしてる自衛隊を守らなきゃならないんだ！」

邪武「そうだぜ！小宇宙で守られてる俺達はともかく、普通の人間がノイズに触れたら即死だからな！」

そう言つて邪武達はノイズに向かっていった。一方の魔鈴とシャイナは完全にノイズを圧倒して蹴散らしていた。

魔鈴「ノイズは聞いた事はあるけど、戦つたのはこれが初めてだよ」

シャイナ「(何だ？この妙な胸騒ぎは…?)」

魔鈴「どうしたんだい？シャイナ！」

シャイナ「魔鈴、邪武達の事を頼んだよ。あたしは妙な胸騒ぎがするからリディアンの中に行く」

魔鈴「気を付けるんだよ！」

シャイナ「わかつてるよ！(蛇遣い座の聖闘士としての直感が何かを告げている…。何かを…)」

自身の直感に従い、邪武達の指揮を魔鈴に任せてシャイナはリディアンに入り込んだ。

## 市街地

市街地では、はぐれノイズが徘徊し、フラワーのおばちゃんを襲おうとしていた。ところが…

男「いかにも強くて骨のありそうなノイズだな…。わざわざ日本へ来た甲斐があったぜ」

普通、ノイズは人々からは恐怖の存在でしかなかった。しかし、この男はノイズを恐れていなかった。

男「おい、死にたくないならさっさとどっか避難しろ！そのまま死にてえのか!？」

おばちゃん「あ、ありがとね!」

男に言われ、おばちゃんは逃げた。

男「さて、とことんやり合えるな。懸命に生きてる人間を虫けらみたいに殺すてめえらは許せねえんだよ！そして聞かせてくれよ、てめえらノイズの骨の碎ける旋律を!」

ノイズへの怒りと自身の闘争本能を露わにし、男はノイズに向かっていった。普通の人間がノイズに触れると死ぬのだが、男はノイズを殴つても死ぬどころか、ノイズの方が炭になって消えていった。

男「さあ、どんどん来やがれ!」

そう言つて男ははぐれノイズ軍団に向かっていった。

リディアン

一方、未来は逃げ遅れた生徒がいなか探していた。

未来「誰かく、残っている人はいませんか!」

そんな中、突然の振動に未来は怯え、窓を見るとノイズ達と聖闘士の戦いが繰り広げられているのを目の当たりにした。

未来「学校が…響の帰ってくる所が…」

そこへ、ノイズが窓を突き破つて侵入し、未来に襲い掛かってきた。しかし、慎次が駆け付けて未来を押し倒してノイズの攻撃をかわした。

未来「緒川さん!？」

慎次「ギリギリでした。次、うまくやれる自信はないですよ。走ります!」

慎次は急いで起き上がり、未来の手を引いて走った。

慎次「三十六計逃げるに如かずと言います!」

二課本部へ続くエレベーターに2人は乗り込んだが、ノイズが襲い掛かった。しかし、美衣と沙織が駆け付けた事で事なきを得た。

未来「沙織さん！」

沙織「この場は私達が死守します！急いでください！」  
襲い掛かるノイズを美衣が蹴散らし、無事にエレベーターは下へ降りた。

美衣「沙織様、これからどうされますか？」

沙織「私達も地下へ向かいます。そして、邪武達にはノイズとの戦いが済み次第、リディアンの子供の護衛をしてもらいます」

美衣「わかりました」

2人は別ルートから地下へ向かった。沙織や美衣、邪武達のお陰で助かった未来はほっとした。

慎次「沙織さん達のお陰で何とかなりましたね…」

未来「はい…」

それから、慎次は弦十郎に報告していた。

慎次「はい、リディアン破壊は以前拡大中です。ですが、未来さん達や沙織お嬢様が呼び寄せた聖闘士のお陰で何とか人的被害は0に抑えられています。これから未来さんをシエルターまで案内します」

弦十郎『わかった、気を付けろよ』

慎次「それよりも司令、沙織お嬢様らのお陰でカ・ディンギルの正体が判明しました」

弦十郎『何だと!?!』

慎次「物証はありません。ですがカ・ディンギルとは恐らく」

しかし、エレベーターに何か落ちてきた。それから、未来の悲鳴が通信機から聞こえた。

弦十郎「どうした!?!緒川！」

一方、リディアンに入ったシャイナは慎次と未来が乗り込んだエレベーターの前に来ていた。

シャイナ「(何だか嫌な予感がするよ…!!)」

そう思い、シャイナは扉を破壊して壁蹴りの要領で降りていった。エレベーターでは、屋根を突き破って出てきたネフシユタンの鎧を纏ったファイネに首を掴まれ、エレベーターの扉に押し付けられてい

た。

フィーネ「こうも早く悟られるとは。何がきっかけだ？」

慎次「塔なんて目立つものを誰にも知られる事なく建造するには地下へと伸ばすしかありません。そんな事が行われているとすれば、特異災害対策機動部二課本部、そのエレベーターシャフトこそカ・ディングル。そして、それを可能とするのが」

フィーネ「漏洩した情報を逆手にうまくいなせたと思っていたが……」

下の階へエレベーターが到着して扉が開いた後、フィーネの手から逃れた慎次はすぐに銃でフィーネの心臓目掛けて銃弾を撃ち込んだが、効果はなかった。鎧の色は違っていたものの、慎次にはすぐにはわかった。

慎次「ネフシユタン……」

そして、慎次は鞭で拘束された。

慎次「うわああっ！」

未来「緒川さん！」

慎次「未来さん……逃げて……」

逃げるように促された未来だが、逃げずにフィーネの後ろから体当たりした。しかし、フィーネは全く動かず、慎次を放り投げて未来の方へ向き、未来の顎を掴んだ。

フィーネ「麗しいな、お前達を利用して来た者を守ろうというのか？」

未来「利用？」

フィーネ「なぜ二課本部がリディアン地下にあるのか。聖遺物に関する歌や音楽のデータをお前達被験者から集めていたのだ。その点、風鳴翼という偶像は生徒を集めるのによく役立ってくれたよ。ふふふ、はははははっ！」

未来「嘘についても、本当の事が言えなくても誰かの命を守るために自分の命を危険に晒している人がいます！私はそんな人を、そんな人達を信じてる！」

一度は未来から離れたものの、未来の言葉を不快に感じたフィーネ

は未来にビンタした。

フィーネ「まるで興が冷める！」

不快に思ったフィーネは扉を開けようとしたが、端末を慎次に破壊された。

慎次「アユランダルの元へは行かせません！この命に代えてもです！」

「邪魔をした慎次を殺そうとフィーネは鞭を構えたが…

???「待ちな、了子」

突如としてフィーネ達がいる区画の天井が破壊され、弦十郎が現れた。

フィーネ「…私をまだその名で呼ぶか？」

弦十郎「女に手を上げるのは気が引けるが、2人に手を出せばお前をぶつ倒す！」

慎次「司令…」

弦十郎「調査部だつて無能じゃない。米政府のご丁寧な道案内でお前の行動にはとづくに気付いていた。もつとも、沙織お嬢様達の方がお前の正体を先に突き止めていたんだがなあとはいぶりだすため、あえてお前の策に乗り、シンフォギア装者と伝説の青銅聖闘士達を全員動かしてみせたのさ」

フィーネ「陽動には陽動をぶつけ、伏兵まで用意して被害を抑えたか、食えない男と憎き女神だ。だが、聖闘士でもない貴様がこの私を止められるとでも」

弦十郎「おおとも！一汗かいた後で話を聞かせてもらおうか！」

フィーネは鞭で弦十郎を攻撃したが弦十郎は臆せず突っ込み、もう一本の鞭も天井に移動してからかわしてフィーネにとびかかった。

フィーネ「くっ！」

咄嗟にフィーネはかわしたが、肩の部分にヒビが入った。

フィーネ「何!？」

慌ててフィーネは弦十郎から距離をとった。

フィーネ「くっ、肉を削いでくれる！」

再び鞭で攻撃したが弦十郎は鞭を掴んでフィーネを引き寄せ、腹に



拳を叩きつけて吹っ飛ばした。

フィーネ「ぐはっ！小宇宙が扱えないのに、聖衣を纏っているわけでもないのに…完全聖遺物を退ける…。どういう事だ？」

弦十郎「しないでか！飯食って映画見て寝る！男の鍛錬はそいつで十分よ！」

とても常人には理解できない理論を持ち出しす弦十郎だが、状況であるためツツコミが入らなかった。

フィーネ「くっ、聖闘士や海闘士、冥闘士に神闘士などがいなければ貴様が人類最強であつたらうな。だがなれど、人の身である限りは！」

弦十郎「させるか！」

弦十郎はフィーネにノイズ召喚さえも許さず、ソロモンの杖を弾き飛ばした。そして、殴りかかってきた。

弦十郎「ノイズさえ出てこなければ！」

フィーネ「弦十郎君！」

フィーネは了子の顔と声で弦十郎を油断させ、不意討ちしようとした。

フィーネ「ふっ」

???「ちあああっ！」

しかし、思わぬ乱入者に妨害されてフィーネは吹っ飛ばされた。

フィーネ「おのれ…、何者だ!？」

出てきたのはシャイナだった。

シャイナ「あんたがこの一連の事件の黒幕かい？敵わないから揺さぶりをかけるなんて随分と卑怯な奴じゃないか」

未来「あなたは…」

シャイナ「あたしは蛇遣座の白銀聖闘士、オピュクスのシャイナ。あんたが二課の司令かい？敵が元同僚だからといって心を揺るがされすぎさ。あたしが来なかったら今頃死んでただろうよ」

弦十郎「…これは手厳しい事を言われたな…」

シャイナ「この場はあたしに任せてさっさと避難しな」

未来「わかりました！」

3人ともその場をシャイナに任せ、避難した。

フィーネ「貴様が今の蛇遣座の聖闘士か。ふっふっふっ…、流石は聖闘士同士の内乱や海底神殿の戦い、ハーデスとの聖戦で生き残っただけあるな」

シャイナ「アテナからあんたの正体も聞かされたよ。幻の蛇遣座の黄金聖衣はおろか、他の3つの黄金聖衣を盗んだ盗人だってね！蛇遣座の聖闘士としてお前の悪行、特に蛇遣座の黄金聖衣を盗んだ事は許しちゃおけないよ！」

フィーネ「ふふふ、ははははっ！私が蛇遣座の黄金聖衣を盗んだ？違うな、もともと蛇遣座の黄金聖衣は私の持ち物にして、相棒なのだ。あくまでも私の手元に戻しただけにすぎない」

シャイナ「そんな話は信じられないよ。さっさと聖衣の在り処を教えて私に討たれな！」

そう言っつてシャイナは弦十郎にも劣らぬ動きでフィーネに近づいた。

フィーネ「何!?!」

シャイナ「遅い!」

そして、フィーネの腹にパンチを打ち込んだ。

フィーネ「ぐはっ!」

シャイナ「これで終わりだと思ったら大間違いさ！」

そう言っつてシャイナは攻撃の手を休める事なくフィーネを攻撃し続けた。

その頃、弦十郎達は本部へ向かっていたが、そこをノイズが阻んでいた。

未来「ノイズ…」

弦十郎「聖闘士も奏者もない今、あれを使うしかないな…」

慎次「ですが司令…」

弦十郎「何、数分あれば十分だ！」

そう言っつて沙織からもらった靴からベアナックルとグローブが一体化したものと靴の上から装着できるブーツを取り出し、装着した。

弦十郎「行くぞ！」

そう言うのと機械の起動音が聞こえ、弦十郎がノイズを殴るとノイズだけが消滅した。

未来「緒川さん、あれは何ですか!？」

慎次「あれは奏者不在の状況にノイズが出現した際に備えて麻森博士に開発してもらった司令専用の装備、カイザーナツクルとカイザーフットです」

未来「カイザーナツクルとカイザーフット…?」

慎次「鋼鉄聖衣とシンフォギアシステムの技術を用いて造られた代物です。これを装着すればノイズと応戦できます。しかし、同時に肉体に絶大な負荷をかけるので司令以外では扱えない上、一度の稼働時間は5分間で連続使用する際は稼働時間終了後、10分のインターバルが必要となります」

説明の間に弦十郎はノイズを蹴散らし、全滅した頃には5分が経過して強制停止した。

弦十郎「よし、一丁あがり!」

再び3人は本部を目指した。フィーネとシャイナの方はフィーネが押されていた。

シャイナ「ちあつ、ちああああつ!!」

フィーネ「うわああああつ!!」

連続で殴られ、そして渾身のパンチでフィーネは吹っ飛ばされた。フィーネ「おのれ…、小宇宙が使えない肉体だと完全聖遺物だけでは白銀聖闘士にさえここまで不覚をとるとは…」

シャイナ「小宇宙が使えない肉体? あんた、随分とおかしな事を言うじゃないか。さっきの言い方といい、まるであんたは昔は聖闘士だったように聞こえるよ」

フィーネ「…ふふふ、その通りだ。私はかつては聖闘士だったのだよ」

シャイナ「あんたのような奴が元聖闘士だって? そんな話は信じられないよ。さっさとくたばりな! サンダークロウ!!」

シャイナの技、サンダークロウが炸裂し、フィーネは盛大に吹っ飛ばされた。

フィーネ「うわああああっ!!」

盛大に吹っ飛んだ後、フィーネは頭から地面に叩きつけられた。

シャイナ「こいつで止めだ!」

猛攻を受けて再生が追いつかず、まともに動けないフィーネに止めを刺そうとしたシャイナだったが、フィーネの心臓を貫こうとした手は何かにつつかった。

シャイナ「何!?!」

フィーネへの止めを妨害したのは蛇遺座の黄金聖衣だった。

シャイナ「バカな!黄金聖衣がフィーネを守っただど!?!」

フィーネ「ふははははっ!だから言っただろう、この蛇遺座の黄金聖衣は私の相棒だと。私に危機が迫るとこの聖衣はいつでも私の傍に現れ、私に危害を加えようとしたら、聖衣を盗もうとする輩を殺すのだ!」

シャイナ「まさか、あんたは…」

フィーネ「そう、私は神話の時代では蛇遺座の黄金聖闘士だったのだよ!」

シャイナ「神話の時代の人間がなんで現代まで生きていられるんだい!?!」

フィーネ「それを答える必要はない。なぜなら、お前はここで死ぬのだからな!」

シャイナ「小宇宙を扱えない奴には聖衣はただの重りにしかならないよ。それを忘れるとは、長生きしすぎて物忘れしてしまったようだね」

フィーネ「ふははははっ!私がそれを忘れていても思っていたのか?私はこれまで小宇宙なしでどのようになれば聖衣の力を扱えるようになるのかを研究してきた。そして、見つけた。このネフシユタンの鎧に黄金聖衣を取り込ませれば小宇宙が扱えずとも、聖衣の力を引き出せると!」

シャイナ「何だって!?!」

フィーネ「光栄に思え、本来ならカ・ディングルが万一破壊された際の予備策にして、憎きペガサスと仲間達の抹殺に使う予定だったも

のを貴様に使ってやる事をな！我が相棒よ、ネフシユタンと一体化するのだ！」

そう言うのと蛇遣座の黄金聖衣が各パーツに分離し、聖衣の方からネフシユタンの鎧に取り込まれていった。

シャイナ「そんなバカな……！」

蛇遣座の黄金聖衣を取り込んだネフシユタンの鎧は禍々しい金色から黄金聖衣のような黄金に変わり、所々に蛇遣座の黄金聖衣の趣向が入った形状となった。

フィーネ「ネフシユタンの鎧に取り込む形ではあるが、黄金聖衣をこの身に纏うのは何千年ぶりであろうか……」

シャイナ「あたしは白銀聖闘士だけど、蛇遣座の黄金聖衣をあんたの私利私欲に使われるのは同じ蛇遣座の聖闘士として許せないよ！息の根を止めてやる！サンダークロウ！」

再びフィーネにサンダークロウを放ったシャイナだが、フィーネはよける動作もせず、サンダークロウをまともにうけたが、無傷であった。

シャイナ「何っ……！」

フィーネ「サンダークロウは私の技の劣化版だな。白銀聖衣を纏った所でせいぜい数十万Vぐらいが限界だ。だが、私の技は貴様のサンダークロウとは比較にならないぞ！」

そう言うってフィーネは凄まじい電撃を溜め始めた。

シャイナ「あれは……」

フィーネ「喰らうがいい！我が雷、プラズマクロウ!!」

雷のような凄まじい電撃の拳がシャイナを襲った。

シャイナ「うわあああああっ!!」

サンダークロウとは比較にならない威力のプラズマクロウを受け、シャイナは大きく吹っ飛んで壁に叩き付けられて気を失い、あまりの技の威力に仮面さえ粉々になってしまった。

フィーネ「仕留め損ねたか……、完全聖遺物一つだけでは黄金聖闘士の頃の力を引き出せない上、その状態で撃てるプラズマクロウの最大電圧は数千万Vが限界のようだ。やはり、念には念を入れて他の黄金

聖衣を取り込む必要があるな」

そう判断したフィーネはソロモンの杖で盗んだ黄金聖衣を持たせたノイズを召喚し、今度は鞭から双子座の黄金聖衣と砕かれた獅子座と乙女座の黄金聖衣を取り込んだのであった。

フィーネ「あははははっ！力が、力が漲る！」

3つの黄金聖衣をさらに取り込み、フィーネは狂った笑みを浮かべていた。そして、扉を力で強引に破壊してデュランダルの保管場所に入った。フィーネがいなくなった後、魔鈴が来た。

魔鈴「シャイナ、何があっただい!？」

シャイナ「魔鈴、フィーネにやられた…！奴はネフシユタンの鎧に黄金聖衣を取り込ませ、あたしとの力の差をひっくり返したんだ…！」

魔鈴「黄金聖衣を取り込んだって!？」

シャイナ「どうやら、盗んだ黄金聖衣もそのためだろうよ…！」

魔鈴「とにかく、地上に戻るよ！」

魔鈴はシャイナと共に地上へ戻った。一方、フィーネはデュランダルの封印を解除したのであった。

フィーネ「目覚めよ、天を衝く魔刀。彼方から此方より現れ出でよ！」

その頃、二課のオペレーター達は響の活躍を見ていた。そこへ、弦十郎達が来た。

あおい「司令！」

弦十郎「本部に侵入者だ！狙いはデュランダルの敵の正体は櫻井了子だ！」

あおい「そんな…」

慎次「響さん達に回線をつなぎました」

未来「響、学校が、リディアンがノイズに襲われてるの！」  
ところが、電源が落ちた。

弦十郎「何だ？」

朔也「本部内からのハッキングです！」

あおい「こちらからの操作を受け付けません！」

弦十郎「そんな事ができるのは了子君だけか…。状況は？」

朔也「本部機能はほとんどが制御を受け付けません。地上、及び地下施設内の様子も不明です」

未来「響…」

弦十郎「こうしてはおれん。俺達も行くぞ！」

弦十郎達は指令室を出て外へ急いだ。今、ファイーンの邪悪な野望が本格的に動き出したのであった。

## 14話 カ・デインギル発射!

リディアン

その頃、響達はリディアンに到着した。リディアンはノイズによって破壊され、面影はなくなっていた。

響「未来く、みんなくくく!」

翼「リディアンが…」

そんな中、響達が上を向くとそこには了子が屋上の上に立っていた。

翼「櫻井女史?」

クリス「フィーネ、お前の仕業か!」

その問いに肯定するよう到了子は邪悪な笑いをした。

翼「そうなのか!? その笑いが応えなのか、櫻井女史!」

クリス「あいつこそ、あたしが決着を着けなければならぬくそつたれ! フィーネだ!」

了子は眼鏡をはずし、髪をほどくと黄金の光に包まれ、4つの黄金聖衣を取り込んだネフシユタンの鎧を纏ったプラチナヘアの女、フィーネへと姿を変えた。

響「嘘…」

特異災害対策機動部二課

その頃、弦十郎達は急いで停電した二課本部の通路を進んでいた。

弦十郎「防衛大臣殺害の手引きとデュランダルの狂言強奪、そして本部にカモフラージュして建造されたカ・デインギル。俺達は全て櫻井了子の掌の上で踊らされていた」

慎次「イチイバルの紛失を始め、他にも疑わしい暗躍もありそうです」

弦十郎「それでも、同じ時間を過ごしてきたんだ。その全てが嘘だったと俺には…。甘いのはわかっている。だが、これが俺の性分だ」



リディアン

響は目の前の現実を受け入れられずにいた。

響「嘘ですよ？そんなの嘘ですよ！だって了子さん、私を守ってくれました」

フィーネ「あれはデュランダルを守っただけの事。希少な完全聖遺物を失う訳にはいかないからね」

響「嘘ですよ…了さんがフィーネというのなら、じゃあ本当の了子さんは？」

フィーネ「櫻井了子の肉体は先だつて食い尽くされた。いや、意識は12年前に死んだとっていい。超先史文明の巫女フィーネは遺伝子に己が意識を刻印し、自身の血を引くものがアウフバヘン波形に接触した際、その身にフィーネとしての記憶・能力が再起動する仕組みを施していたのだ。12年前、風鳴翼が偶然引き起こした天羽々斬の覚醒は同時に実験に立ち合った櫻井了子の内に眠る意識を目覚めさせた。その目覚めし者の意識が私なのだ」

響「あなたが了さんを塗りつぶして…」

翼「まるで、過去から蘇る亡霊！」

フィーネ「ふふふ、フィーネとして覚醒したのは私一人ではない。歴史に記される偉人、英雄、世界中に散った私達はパラダイムシフトと呼ばれる技術の大きな転換期にいつも立ち会ってきた」

その言葉に翼は閃いた。

翼「シンフォギアシステム…」

フィーネ「そのような玩具、為政者からコストをねん出するための福寿品に過ぎぬ」

翼「お前の戯れに奏は命を散らせたのか！」

クリス「あたしを拾ったり、米国の連中とつるんでいたのもそいつが理由かよ!?!」

フィーネ「そう！全てはカ・ディンギルのため！そして私は復讐する、私のあの方への愛を否定したアテナと、私に恥をかかせて殺したペガサスの生まれ変わりをこの世から肉片たりとも残さず消し去る！」

クリス「アテナ？ペガサス？何をほざいてやがる!？」

フィーネ「十数年程度しか生きていない貴様らには到底理解できないだろう、何千年経つても忘れた事がない私のアテナとペガサスへの恨みが、怒りが、憎しみが!!」

フィーネの『アテナ』と『ペガサス』を聞き、翼は沙織と星矢だと判断した。

翼「(あの女、沙織お嬢様と星矢に何の因縁があるんだ…!?)」

すると、突如地面が揺れた。避難シェルターに避難していた創世達もその揺れに弱音を吐き、護衛にあたっている邪武達も驚いたほどであり、揺れが大きくなるに従ってエレベーターシャフトと同じ模様の巨大な塔が姿を現した。その姿はゴールドノイズと交戦している星矢達にも見えていた。

星矢「あれは何だ!？」

紫龍「あれこそがカ・デインギルだろうな」

氷河「急ぐぞ!」

ゴールドノイズも残り数体であり、急いで星矢達は倒そうとした。

フィーネ「これこそが地より屹立し天にも届く一撃を放つ荷電粒子砲、カ・デインギル!」

クリス「カ・デインギル、こいつでバラバラになった世界が一つになる?!？」

フィーネ「ああ、今宵の突きを穿つ事によってな」

響「月を!？」

翼「穿つと言ったのか?」

クリス「何でさ?」

フィーネ「私はただ、あのお方と並びたかった。そのためにあのお方へと届く塔をシニアルの世に建てようとした。だが、あのお方は人の身が同じ高みに至る事を許しはしなかった。あのお方の怒りを買って、雷帝に塔が砕かれたばかりか、人類は交わす言葉まで砕かれる果てしなき罰、バラルの呪詛をかけられてしまったのだ。月がなぜ不和の象徴として伝えられてきたか、それは月こそがバラルの呪詛の源だからだ! 人類の相互理解を妨げるこの呪いを月を破壊する事で解い

てくれる！そして再び世界を一つに束ねる！」

その叫びに合わせ、カ・ディングルが発射のためのエネルギーをチャージしていた。

クリス「呪いを解く？それはお前が世界を支配するって事なのか！？安い、安さが爆発しすぎている!!」

フィーネ「ふつ、永遠を生きる私が余人に歩みを止められる事などあり得ない。それに…今の私と貴様ら奏者共では神と虫けらも同然だ」

クリス「何を根拠のねえ事を言ってるやがる!？」

翼「それは私達に勝ってから言うんだな！」

響「行くよ、みんな！」

そして、3人は戦いの歌を歌い、シンフォギアを纏った。

翼「行くぞ！」

先陣を切ったのは翼で、刀でフィーネに斬りかかったが、フィーネはよけようともせずにもたもたに受けたが、鎧を斬る事ができなかった上、微動だにもしなかった。

翼「(まともに受けて微動だにしないだど!?)」

フィーネ「お前の刀の切れ味はこの程度か？」

翼「くっ！」

クリス「刀がダメなら、銃弾とかはどうなんだよ！」

次はクリスが銃弾やミサイルをフィーネ目掛けて放った。しかし、フィーネはまたしてもよけずにもたもたに受けたがノーダメージであつた。

クリス「くそつ、あんなに撃ち込んだのになんであいつに全く効いてないんだよ!？」

奏者達の攻撃を全く寄せ付けないフィーネの絶大な防御力に奏者達は戦慄していた。

シエルター

一方、未来達はシエルターに来ていた。

詩織「小日向さん！」

未来「みんな！よかった！」

朔也はシエルターの電源が生きているか確かめた。

朔也「この区画の電力は生きているようです」

弦十郎「よし、緒川は他に電力が生きてる場所がないか調べろ。そして、俺達は出口を確保する」

慎次「了解しました！」

二課のメンバーは電力が生きている場所がないか調べに行つた。

創世「未来、あの人は？」

未来「あのね……」

弦十郎「我々は特異災害対策機動部。一連の事態の収束にあたって  
いる」

弓美「それって政府の……」

朔也「モニターの再接続完了。こちらから操作できそうです」

そう言つて朔也は操作し、映像を出した。

未来「響！それにクリスマスも」

一方で了子の正体に二課のメンバーは驚いていた。

朔也「これが……」

あおい「了子さん……？」

弓美「どうなってるの……？こんなの、まるでアニメじゃない……」

創世「ヒナはビツキーの事を知ってたの？」

未来「うん……」

創世「前にヒナとビツキーが喧嘩したのって……、そっか、これに関  
係する事なのね……」

そんな中、一同はファイネの攻撃を見て驚いていた。それは、指が  
光つただけで響達は吹っ飛ばされたのであった。

弓美「何？このアニメみたいな攻撃……」

弦十郎「……あれは恐らく、光速拳だ……！」

朔也「光速拳って、あの黄金聖闘士レベルの聖闘士にしかできない  
技じゃないですか……！」

弦十郎「あの鎧の輝きはネフシュタンの鎧のものではない、恐らく、  
黄金聖衣をネフシュタンの鎧に取り込んであのような形と色になつ

たのだろう…！そうだとすれば、鎧の強度は…」

未来「司令、急いで響の所へ」

弦十郎「そのようだな…」

リディアン

フィーネと奏者の力の差は残酷なまでに絶大なものであり、フィーネが言った通りに『神と虫けら』ほどの差であった。

クリス「くそっ、フィーネの指が光ったら急に吹っ飛びやがる！」

響「まるで…星矢さんの技みたい…」

フィーネ「そう、今の私は光の速さで動く事ができるのだ。貴様らの攻撃はスローモーションに見える」

クリス「光の速さだっ!?冗談だろ！」

翼「光の速さであろうと、お前を叩き斬る！」

そう言っつて翼は刀を巨大化させてフィーネを斬ろうとしたが、無防備なフィーネを斬れるどころか刀の方が折れてしまった。

翼「なっ…！」

フィーネ「やはり貴様の剣は鈍でしかないな」

啞然とする翼の前にフィーネは一瞬で移動し、今度はわざとスピードを落として見えるような速さで翼の腹部を蹴り、吹っ飛ばした。

響「翼さん！」

翼「げほっ、がはっ！」

フィーネの蹴りは手を抜いていても威力は絶大であり、内臓にまでダメージがいつて翼は血を吐いていた。

クリス「フィーネ、てめえ！」

クリスは再び銃弾やミサイルをありったけフィーネに打ち込んだ。しかし、弾幕を閃光が貫き、クリスに襲い掛かった。

クリス「嘘…だろ…？」

いくつもの閃光…何万発ものフィーネの拳がクリスに叩き込まれ、一気に立てなくなるほどのダメージを受けた。

響「クリスちゃん！」

翼「立花、1人では…」

響「うおおおおおっ！」

今度は響が向かい、よける動作さえしないフィーネの腹部にパンチを打ち込んだ。しかし…

響「うっ、うああああ！」

フィーネにパンチを打ち込んだものの、フィーネはダメージを受けるどころか逆に攻撃した響の腕のアーマーに亀裂が走り、響は傷む右手を左手で押さえた。

響「何で？攻撃したのにどうして…？」

攻撃したのに自分がダメージを受けた事に戸惑う響にフィーネは指一本を響の頭に乗せてその理由を語った。

フィーネ「簡単な事だ。このネフシユタンの鎧は蛇遣座、双子座、獅子座、乙女座の計4つの黄金聖衣を取り込んだ事により、黄金聖衣の4倍もの強度を手に入れたのだ。そんな鎧に攻撃したら自らの力の反動で碎けるのは当然であろう」

翼「その圧倒的な防御力は黄金聖衣を取り込んだ事によるものだよ！？」

そのままフィーネは指一本で響を頭から地面に叩きつけた。

響「…ううっ…」

フィーネ「まだ動くのか？」

立ち上がろうとする響の頭にフィーネは足で軽く踏んで押さえた。

響「うぐぐっ…」

フィーネ「どうした？私を倒さねばカ・ディングルは発射されるのだぞ。さっさと立ち上がってこい」

響「うっ、ううううう！！」

絶大な力の差を見せつけてフィーネは煽るように語り、響は歯を食いしばって立ち上がろうとしたが、どんなに力を込めてもフィーネはピクリとも動かなかった。

フィーネ「これでわかったであろう、私と貴様らでは神と虫けらに等しい力の差があるという事を」

そう言ってフィーネは響を蹴り飛ばした。

響「とても強すぎる…！」

クリス「どうする事もできねえのかよ…」

シエルター

あまりにも絶大なフィーネの強さと蹂躪される響達の姿は未来達にも絶望を与えていた。

朔也「これ程の力の差なんて…」

弦十郎「既に黄金聖闘士レベルの強さと言える…。もう俺では手に負えん…！」

未来「嫌…、このままだと響が、響が死んじゃう！司令！」

弦十郎「仕方がない、シエルターから出るぞ！」

少しでも未来が響の力になればと判断した弦十郎はシエルターから出る事にした。

リディアン

絶大な力を得たフィーネは最早響達を相手にしておらず、準備運動程度にしか思っていなかった。

フィーネ「もう実力も確かめ、貴様らの相手をするのも飽きたな」

クリス「勝手に戦いを終わらせるんじゃないやねえ…！」

翼「私達の剣は…まだ折れておらぬぞ…！」

響「力を合わせれば…絶対に負けない…！」

フィーネ「無駄だ。いくら力を合わせた所で私に敵うものか」

そう言わせている間にクリスは響達と作戦のアイコンタクトをした。そして、響と翼が突っ込んで来た。

フィーネ「また向かってくるのか。懲りない奴等だ」

まともに相手にしようとしめない態度で応戦し、絶大な力の差で2人を叩きのめした。

翼「(後は頼むぞ…、雪音…)」

フィーネの注意を引き付けた隙にカ・ディングル発射を阻止するためにクリスはミサイルで移動していた。ところが…

フィーネ「なかなか考えたな。だが、私を出し抜けるとでも思っていたのか…？」

クリスの背後からフィーネの声が聞こえ、振り向くとそこにはフィーネがいた。その間にクリスは叩き落とされ、地面に叩きつけられた。

響「そんな…」

クリス「ここまで…なのか…」

翼「狼狽えるな…、我々防人が戦わなければ世界はフィーネの思うがままにされるのだぞ…」

ギアも体もボロボロで途方もない絶望感で心が折れかかっている響とクリスを翼は奮い立たせようとしていた。

フィーネ「これ程までに力の差を見せつけられてもまだ抗うというのか？無様や愚かを通り越して衰れみすら感じるぞ。正直言ってもう貴様らと戦うのも飽きた。これで終わりにしてやろう」

そう言つてフィーネはわざとスローモーションで電撃を溜め始めた。

フィーネ「受けるがいい、わが雷！プラズマクロウ！」

シャイナを倒した自身が現役の聖闘士だった頃に使っていた雷の拳、プラズマクロウを広域放出させ、一気に3人とも葬ろうとした。3人ともよけようとしたが、間に合わなかった。

翼「立花！」

クリス「お前だけでも生き延びろ！」

響「えっ？」

そう言つて翼とクリスは響を放り投げた。

響「翼さん、クリスちゃん！」

2人はフィーネの雷に吞まれていった。

クリス「(ずっとあたしは…パパとママの事が好きだった…。素直になれたのが遅すぎた…)」

翼「(私はここで死ぬのだろう…。だが、私の志を、奏の力を引き継いでくれる存在がいる。立花、これからはお前がノイズの魔の手から人々を守る剣となれ…！)」

フィーネの雷をまともに受けた2人はボロボロになり、シエルターの前まで吹っ飛ばされた。



響「そ、そんな…翼さん、クリスちやーん!!」

ちやうど未来達もシエルターから出てきてファイネの雷を受けてボロボロになり、ギアの装着が解除された翼とクリスの姿を目の当たりにした。

弦十郎「しつかりしろ、翼、クリス君!」

声をかけたものの、返事はなかった。いかにも死んだような目をしていたため、慎次が脈があるかどうか確かめた。

慎次「…司令…、二人は…：…心臓と肺が…止まっています…!」

その言葉に一同は凍り付いた。

弓美「そんな…そんなのって…!」

未来「嘘だと言ってください!翼さんとクリスの心臓と肺が止まっているなんて!きつと、声をかければ!」

ファイネ「無駄だ。私の雷を受けた際に2人の心臓と肺は止まり、同時にあまりにも強すぎる電撃で五感も破壊された。もう2人は何も見えず、聞こえず、感じないまま本当の死を待ただけだ!」

弦十郎「五感が破壊されただ?!」

五感が破壊され、死を待ただけとなった2人が死んだと解釈した響は非情な現実には打ちのめされていた。

ファイネ「仲間を1人残して先立つとは愚かな。残された仲間が悲しむぐらいなら、共に死んでおけばいいものを。全く持って2人は無駄な事をしたものだな!」

そのファイネの言葉に響は怒りと力に支配され、全身が真っ黒になつて暴走した。

暴走響「うるあああああつ!!」

暴走した響は野獣のようにファイネに襲い掛かるが、ファイネとの力の差は神と虫けらに等しく、虫けら同然にファイネに圧倒された。

ファイネ「どうした?私を殺したいのではないのか?」

暴走状態の響でも踏みつけているファイネの足をピクリとも動かす事はできなかった。

ファイネ「所詮はこの程度…」

冷めた視線でファイネは暴走響を蹴り飛ばし、追い討ちに放った何

万発もの光速拳で暴走響を徹底的に打ちのめし、再起不能にしてしまった。その光景に未来達は途方もない絶望感でいっぱいだった。

弓美「何よ…あいつはアニメに出てくるような化け物じゃない!どうやったって勝てるわけないわよ!」

未来「響…」

光速拳で徹底的にボロボロにされた響は立ち上がろうとした。だが、フィーネは瞬時に響の前に現れ、頭を掴んだ。

フィーネ「もう風鳴翼と雪音クリスを失って悲しむ事もない。お前も2人の後を追わせるからな。プラズマクロウ!!」

響を掴んだ状態でフィーネはプラズマクロウを放ち、直接響に電撃を流し込んだ。

暴走響「うわあああああつ!!!」

暴走響は悲鳴をあげた。凄まじい電撃を流し続け、ある程度流して止めた後、響の暴走は止まり、ギアの装着も解除された。そして、フィーネはゴミのように響を未来達の方へ投げ捨てた。

未来「響、目を開けてよ!響!」

しかし、プラズマクロウをまともに受けた響も翼とクリスのように目が死んでおり、返事もしなかった。そして、心臓と肺が止まっていた。

未来「そんな…、こんなので…響…!!!」

2人と同じように五感を破壊され、死を待つだけとなった響に未来の涙ながらの悲しい叫びが木霊するのであった。

弦十郎「まだ死んだわけではない!急いで心臓を動かせば蘇生できるはずだ!急いで3人の心臓マッサージと人工呼吸を!」

フィーネ「また3人の心臓と肺を動かした所で五感はまだ破壊されている。だから、蘇生しても無駄だ。そんなお前達に特等席で見せてやろう。このカ・ディンギルが月を破壊する瞬間を!」

戦いの間にチャージは終わり、カ・ディンギルは月目掛けて放たれようとしていた。未来達にはもはやどうする事もできず、月の破壊によってフィーネが勝利する瞬間を目の当たりにする事しかできなかった。

フィーネ「さあ、カ・ディングルの光を見よ！」

ところが、傲り高ぶるフィーネへの神罰が下ったかのようにカ・ディングルは発射される際にエネルギーが暴走し、あちこちからエネルギーが漏れ出してカ・ディングルは崩壊し、発射された1発もエネルギーが拡散され、狙いもズレた事で月を一部しか破壊する事ができなかった。

フィーネ「そんなバカな！伝説の青銅聖闘士はまだ到着していない！伏兵の聖闘士もシエルターの防衛についているはず！なのに、なぜカ・ディングルが!?!」

思わぬ奇跡に未来達は絶望感が少しだが薄れた。

弓美「こんなアニメみたいな奇跡って…」

弦十郎「一体、誰がカ・ディングルを…?」

未来「カ・ディングルを壊した人って、まさか…」

フィーネ「ええ、誰だ!?!誰がカ・ディングルを破壊した!?!」

???「フィーネ、私を忘れていたようですね」

突如、声がしてフィーネや未来達がその方向を向くと、そこには力を使い過ぎたのか、美衣に支えてもらっている沙織の姿があった。

フィーネ「貴様は…、アテナア!!!」

何千年も憎んでいる存在、アテナの登場にフィーネは憎しみで声を荒げたのであった。

## 15話 不屈の闘志

リディアン

沙織の登場でそれまで圧倒的な力の差で終始余裕を保っていた  
フィーネは怒りと憎しみを露わにした。

フィーネ「アテナア、カ・ディングルを破壊したのは貴様だったの  
か!？」

沙織「その通り、あなたの目を欺くために私はこっそりリディアン  
に入り込んでいたのです！」

回想

それは、二課本部に入り、カ・ディングルの心臓部を探していた時  
だった。沙織は美衣と共にカ・ディングルの心臓部を見つけた。

美衣「あれはデュランダル！」

沙織「どうやら、ここがカ・ディングルの心臓部ようですね」

美衣「もうエネルギーが最終チャージ段階に入っています!どうな  
されるおつもりで」

沙織「最終チャージに入っているのであれば、私の小宇宙を注ぎ、一  
気にエネルギーの過剰供給でカ・ディングルを破壊します！」

美衣「いけません!と言っても、沙織様はそれをなされるおつもり  
ですね?」

沙織「付き合わせてすみません、美衣さん…!」

美衣「いえ、アテナ様に付き従うのが聖闘少女の役目。この緊急事  
態では沙織様の判断もやむを得ないでしょう」

沙織「では、行きますよ!」

沙織は杖を機械に突き刺し、自分の小宇宙を注ぎ込んだ。

沙織「はあああああつ!!!」

沙織はカ・ディングルの許容量を超えるまで小宇宙を注ぎ込んだ。  
その結果、カ・ディングルのシステムからエネルギー過剰供給の警報  
が鳴ってあちこちが爆発し始めた。

沙織「どうやら、過剰供給による破壊は成功のようです!」

それと共に小宇宙を使い過ぎて沙織はふらつき、美衣に支えても  
らった。

美衣「では沙織様、この場から脱出しましょう！」  
そう言つて美衣は沙織を連れ、その場を後にした。

フィーネ「何という突撃癖だ！今までのアテナにこれ程の突撃する  
性格のアテナはいなかった！」

沙織「こうでもしなければあなたの目を欺いてカ・ディングルを破  
壊する事はできなかつたからです！」

フィーネ「おのれえ!!貴様はまたしても私の邪魔をするというのか  
!!月を破壊して統一言語である方への想いを伝えるという私のあ  
方への愛を否定するといふのか!!」

美衣「(この女、なぜこれほどの怒りと憎しみをアテナ様に…?)」  
フィーネ「幸い、カ・ディングルの破壊で力を使い過ぎているよう  
だ！私のあの方への愛を否定した報復としてここで死ぬ、アテナア  
!!」

???「フィーネ、お前の相手は俺達だ！」

沙織を殺そうとしたフィーネだったが、突然の声に動きが止まっ  
た。

沙織「星矢！」

声の主は星矢で、仲間達も到着した。

未来「星矢さん！」

弦十郎「全く、主役は遅れてやってくるというがな！」

星矢「相変わらずの無鉄砲ぶりだな、沙織さん。でも、それが幸い  
したのはこれが初めてか？」

沙織「どうでしょうね？」

弦十郎「よし、敵が聖闘士に気を取られている間に奏者3人の心臓  
マッサージと人工呼吸を始めろ！」

慎次「わかりました！」

未来「響は私が担当します！」

創世「そっか。ヒナはビツキーの奥さんだもんね」

詩織「だったら、私達はあの2人を担当しますので、よろしく願います」

人工呼吸は女同士がいいと判断して創世達が翼とクリスの心臓マツサージと人工呼吸を担当し、未来が響を担当した。

未来「響、死んじややだ！流れ星を見る約束をまだ果たせてないんだよ！だから、死んじややだ！」

悲痛な胸の内を露わにして未来は響の心臓マツサージと人工呼吸を行い、他の面々も翼とクリスの心臓マツサージと人工呼吸を行っていた。

フィーネ「五感が破壊されているというのに無駄な事を」

氷河「どうかな？死んでいなければ意外とどうとでもなるかも知れないぞ」

フィーネ「ふん、フェミニスト揃いで色々甘い所のある貴様らが私に勝てるでも思っているのか？」

星矢「俺は女の人を殴れない。だけど…お前のような悪女は別だ！響達をあんな目に遭わせたからには、仕返しで徹底的にタコ殴りにしてやる！」

フィーネ「生意気な事を言うな、ペガサスめ！私はアテナとペガサスが許せんのだ！特に貴様ら2人は念入りに殺す!!」

瞬「沙織さんは下がって」

紫龍「フィーネは俺達が奴を倒す！」

沙織は美衣と共に下がり、星矢達が前に出た。

フィーネ「双子座のサガ、神闘士、ポセイドン、ハーデスを退けた伝説の青銅聖闘士共よ、この私が貴様らの伝説をここで終わらせてやろう！」

瞬「その前に聞きたい事がある。あなたがデュランダル護送の際に話した伝説は全部嘘だったのか？」

フィーネ「ご先祖様という所だけな。後は全て本当だ」

瞬「なぜそういった嘘をついたんだ？」

フィーネ「嘘をつく際は多少は真実を混ぜた方が自然と信じられるであろう。もっとも、私の話した事は大半が真実でほんの少しだけ嘘

だったがな」

瞬「だとすると、あなたはなぜ復活できたんだ!？」

フィーネは奏者達に話した事を再度星矢達にも説明した。

氷河「まさに過去から蘇る亡霊……！」

フィーネ「そう。私は神話の時代において蛇遣座の黄金聖闘士になるまで様々な形で聖域と関わってきた。医者、聖衣の修復師としても」

氷河「聖衣の修復師だと? そう言えば、貴鬼の聖衣の修復スピードが早くなつたのは子がコツを教えたとか……」

フィーネ「ほんの余興と早く黄金聖衣を直してほしいという実益も兼ねてコツを教えたのだよ。話の続きだが、私はあの方にもう一度会うためには人の身を捨て、神になるしかないと悟った。だから、私は聖衣の修復師の経験を積んでから次の目覚めの時に必死に修行を積んで黄金聖闘士となり、医者や修復師の経験も活かして病や怪我に苦しむ人々を救い、聖衣が壊れて困っている同僚を助けるなりして周囲から神のようだと言われていた。そんな人々の姿に私も心を癒され、神になるために精進せねばと思った……」

紫龍「神になろうとした? まさかフィーネ、お前は……」

フィーネ「そう、私こそ蛇遣座の黄金聖闘士の伝説に登場する黄金聖闘士、蛇遣座のアスクレピオスの正体なのだよ!」

その事実には星矢達は衝撃を受けた。

紫龍「超先史文明の巫女のお前が伝説に伝わる蛇遣座の黄金聖闘士で、伝説と違って最初から神になろうとしていたというのか!？」

フィーネ「そうだ。私は他人に迷惑などかけず、むしろ積極的に助けていた。それだというのに、人の身から神になろうとするのをアテナを始めとする神々は許さなかった! そんな私をアテナは聖衣共々追放し、しかも追っ手としてペガサスを差し向け、私を殺したのだ!」

氷河「だから、沙織さんと星矢にあれ程の憎しみを向けていたのか」  
フィーネ「殺されてから再び目覚めた後、私は歴史の転換期以外にも聖戦にも関わってきた。ある時はハーデスの冥闘士、ある時はアスガルドの神闘士、ある時はポセイダンの海闘士として様々な勢力の戦

士として戦った。だが、黄金聖闘士の頃のような充実感は今と違っていいほどなかった。特にアスガルドはつまらん風習に囚われ、苦しまなくていい苦しみを味わう輩がたくさんいる下らん国だからな」

星矢「何だと!?アスガルドを下らない国だと!?俺達が戦った神闘士はほとんどが誇り高い戦士達だったのだぞ!お前はそれでもかつてはアスガルドの神闘士だった身なのか!」

ファイネ「貴様らの視点ではそうでも、私からしたら下らん国だ。聖闘士の頃は人格と実力が認められ、素顔のままでも誰も咎めはしなかったが、神闘士の頃は女の神闘士は前例がないとしてアスガルドの民はおろか、同僚の神闘士でさえ私に白目を向けてきたのだ。そんな国を下らん国と言って何が悪い?たかが十数年生きてきただけのガキと何千年も様々な視点から見てきた私とでは見てきた世界が違う!」

他人の体に乗っ取りながら何千年も生きてきたファイネの言葉に星矢達は反論のしようがなかった。

紫龍「だが理由がどうであれ、お前の悪行は今亡き天秤座の童虎の弟子、このドラゴン紫龍が絶対に許さん!」

星矢「そして、俺達が必ず倒す!」

ファイネ「やってみるがいい、伝説の青銅聖闘士よ!」

そう言っつてファイネはカ・ディンギルの中からサイコキネシスでデュランダルを取り出し、ネフシュタンの鎧に取り込んだ。

氷河「デュランダルを吸収した?」

ファイネ「これで私は無限のエネルギーと再生能力、全盛期を超えるパワーと耐久力を手に入れた!例えば黄金聖闘士レベルの聖闘士が何人束になってかかってこようとも、私には勝てない!」

氷河「それを勝手に決めつけるのは早いぜ!」

瞬「僕達は今まで普通に戦っても勝てない敵と戦い、勝利してきた!」

紫龍「例えお前が完全聖遺物と黄金聖衣の力で黄金聖闘士が束になっつてかかっても勝てないとしても!」

星矢「俺達は必ず倒してみせる!」



そう言つて星矢達は小宇宙を燃やし、聖衣が黄金に輝いた。

未来「星矢さん達の鎧が金色に！」

弦十郎「本気で挑むようだな」

星矢達が本気である事を弦十郎は悟っていた。そして、フィーネは光速拳を放つたが、星矢達は軽々とかわした。

星矢「お前の光速拳はそれだけか？」

フィーネ「これはほんの小手調べだ。この技を見て驚け、ライトニングプラズマ！」

アイオリアが使っていた光速拳、ライトニングプラズマが星矢を襲つたが、星矢は軽々とかわした。

星矢「フィーネ、聖闘士に一度見た技は通用しない！そして何より、そんな魂のこもっていないそのライトニングプラズマはアイオリアのものよりもずっと遅い！」

フィーネ「やはり、アイオリアの技は通用しないか……」

星矢「今度はこつちの番だ！ペガサス、流星拳！」

光速拳と化した流星拳がフィーネ目掛けて放たれるが、あまり効いていなかった。

フィーネ「その程度の技は私には通用しない！」

再びフィーネは至近距離から星矢目掛けて光速拳を放とうとした。

紫龍「危ない！」

咄嗟に紫龍は盾でフィーネの光速拳を防ぎ、カウンターでパンチを打ち込もうとしたが、フィーネの拳の前には黄金聖衣に限りなく近づいたドラゴンの盾はあつけなく砕け、同時にフィーネを殴つたドラゴンの拳も砕けてしまった。

紫龍「(そんなバカな！黄金聖衣に限りなく近づけたドラゴンの盾と拳があつけなく砕けただど!?まさか、予備策にあつた4つも黄金聖衣を取り込んだ影響なのか!?)」

フィーネ「驚いているようだな、ドラゴン。このネフシユタンの鎧は黄金聖衣を4つも取り込み、黄金聖衣の4倍もの強度を得ている。例え88の聖衣の中で最硬を誇るドラゴンの盾と拳をいかに黄金聖衣に近づけようとも、黄金聖衣の4倍もの強度の前では無力だ！」

驚いた紫龍の隙を突き、フィーネは光速拳を放とうとした。

瞬「ネビュラチェーン！」

氷河「ダイヤモンドダストオ！」

瞬と氷河は同時に技を放ったが、チェーンはネフシユタンの鎧の鞭とのぶつかり合いにあっけなく負けて碎け、ダイヤモンドダストを受けても表面が凍っただけだった。

フィーネ「無駄な事を。この鎧の鞭も黄金聖衣の4倍の強度だ。だから、そんな鎖は通用しない。そして、そんな凍気ではこのネフシユタンの鎧を凍結させる事は不可能だ」

星矢「フィーネめ…、攻撃も防御も全く隙がない…！」

瞬「なぜ、双子座と獅子座と乙女座の聖衣を奪ったんだ？」

フィーネ「簡単な事だ。その3つの聖衣をそれぞれ纏っていたアリオア、シャカ、サガは黄金聖闘士は指折りの実力者だからだ。そして、聖衣に宿る意思への嫌がらせも兼ねて奪ったのだよ。デスマスクやアフロディーテのような聖衣に見放されたり、青銅如きに手加減された愚か者の聖衣など纏うに値しない！」

星矢「どうやら、聖闘士としてのプライドだけは何千年経っても持っているようだな」

フィーネ「当たり前だ。黄金聖闘士の頃が私にとってあの方といった頃に並ぶ充実感があったのだからな。それ故に、青銅如きに負けて死んだ事が我慢ならないのだ!!」

再びフィーネは光速拳を放ってきて、星矢達は何とかかわした。

フィーネ「最早貴様らに勝ち目はないのだ！」

紫龍「それは違うぞ、フィーネ！聖闘士の戦いは聖衣で決まるものではない、小宇宙を高めた者が勝つのだ！」

そう言っつて紫龍は聖衣を脱ぎ捨てた。

フィーネ「お得意の脱衣とききたか」

紫龍「フィーネ、老師直伝の奥義を受けてみる！廬山昇龍覇!!」

自身を追い込み、小宇宙を高めて紫龍は廬山昇龍覇をフィーネに放った。しかし、昇龍覇をまともに受けてもネフシユタンの鎧はほんのちよつとヒビが入っただけだった。

紫龍「昇龍覇を受けても微動だにしない上、これだけしかヒビが入らないだ?!」

フィーネ「これが貴様らの限界だ。どれだけ頑張って黄金聖衣の4倍の強度を持つ私の鎧を砕くほど小宇宙を高めてもこの程度しかヒビは入らないのだ。そして、その苦勞も無駄に終わるのだよ!」

そして、紫龍の渾身の一撃がムダであるかのように鎧が再生していた。

星矢「再生した!?!」

瞬「紫龍、離れて!」

フィーネ「もう遅い!」

驚いている紫龍にフィーネは光速拳を放ち、吹っ飛ばした。

紫龍「うわあああつ!!」

星矢「紫龍!」

星矢は勢いに任せ、突っ込んでいった。

星矢「これならどうだ!?!ペガサス、彗星拳!」

流星拳を一点に集中させた彗星拳でも結果は同じであり、ネフシユタンの鎧にとても小さなヒビしか入らず、逆にフィーネの反撃で吹っ飛ばされた。

瞬「なんて防御力なんだ!」

星矢「くそつ、どうしたらいいんだ!?!」

紫龍「星矢、フィーネに迂闊に突っ込んでいっても反撃されるだけだ」

星矢「じゃあ、どうすりゃいいんだよ?」

氷河「星矢、紫龍、俺が奴の鎧を凍らせる。いくら再生する鎧でも凍結すれば再生できないはずだ。例え一部しか完全に凍結させる事ができなくても、そこを攻撃すれば何とかなるはずだ」

紫龍「よし、頼むぞ!」

氷河が前に出た。

フィーネ「作戦会議は終わったのか?」

氷河「フィーネ、お前の鎧は頑丈さと再生能力が自慢のようだが、それを俺の凍気で全て無効化してやろう!凍結リング!」

時間稼ぎのため、凍結リングでフィーネの動きを封じたが、氷河本人も考えた通り、数秒でフィーネは破った。

フィーネ「そんな技で」

しかし、ほんの少しだけでも時間を稼げたため、小宇宙を高め、カミュとの戦いで会得した奥義の構えをとった。

氷河「受けてみる、我が師カミュ最大の奥義、オーロラエクスキューション!!」

絶対零度の凍気が放たれた。フィーネは鞭で防御しようとしたが、ネフシユタンの鎧は凍結し始めていた。

フィーネ「これは絶対零度!?だが、それ以上の熱を出せば凍りはしない!」

星矢「うおおおっ!!」

フィーネはデュランダルの無限のエネルギーで鎧は凍っても何とか体だけは凍らないように抵抗していたが、即座に星矢が彗星拳を放ってきた。完全に凍り付いた左胸の部分に彗星拳を受けたため、命中した箇所はあっけなく砕かれ、心臓部が無防備になった。

星矢「紫龍、締めは頼むぞ!」

紫龍「任せろ、星矢!受けよ、シユラから授かりし聖剣、エクスカリバー!」

シユラから授けられたエクスカリバーで紫龍は無防備になったフィーネの左胸の部分を貫いた。

フィーネ「うわあああああっ!!」

心臓をエクスカリバーで貫かれたフィーネは動かなくなった。

星矢「やった、やったぞ!」

紫龍「やつと一矢報いたな!」

それと時を同じくし、心臓マツサージと人工呼吸をした事で奏者達の心臓は動き出した。

慎次「3人の心臓が動き出したようです」

未来「よかった…」

創世「人工呼吸という形だけど、未来は響とキスできたもんね」  
未来「そ、それは…」

弦十郎「これでひとまず安心だな」

3人の一命をとりとめる事ができた事に未来達は安心した。

瞬「まだ終わってないよ！急いで」

瞬が呼びかけようとしたその時、鞭が動いて氷河を拘束し、近くにいた星矢と紫龍は心臓を貫かれたはずのフィーネに掴まれた。

氷河「うわっ！」

瞬「星矢、紫龍、氷河！」

心臓を貫かれたフィーネが動いた事に未来達も衝撃を受けていた。

弦十郎「何だと!？」

弓美「心臓を貫かれても生きているなんて！」

美衣「やはり、そうになりましたか…」

未来「そうなったって、どういう事なんですか!？」

沙織「フィーネは再生能力を持つ完全聖遺物、ネフシユタンの鎧と一体化していたのです。だから、フィーネは心臓を貫かれても死ぬことがないんです」

未来「そんな…!」

星矢達が苦労してやっとフィーネを倒したと思いきや、死んでいなかった事に未来達は衝撃を受けた。

フィーネ「これで心臓を貫かれたのは2回目だな。ネフシユタンの鎧と一体化していなければ貴様らが勝っていただろう」

紫龍「瞬が手に入れた情報を聞いていたが、やはりフィーネは響のケースを参考にしてネフシユタンの鎧と一体化していたから、一輝に心臓を貫かれても死ななかつたのか！」

フィーネ「そう！だが、もつとデータ集めと時間をかけてから融合をやりたいかったが、予想以上に一輝が私の元に来ていたから賭けでやらざるを得なかつたがな。しかし、私は賭けに勝った！もはや貴様らが鎧を砕こうが、心臓を貫こうが私を殺す事はできない！私の勝利は確定したも同然だ！」

そう言つてフィーネは鞭や手から電撃を流した。

星矢達「ぐああああっ!!」

フィーネの電撃はかなりの威力であり、まともに受けた星矢達はふ

らついていた。

星矢「この電撃はシャイナさんのサンダークロウとは比較にならない威力だ…！」

紫龍「まだ…体が痺れているようだ…」

ファイネ「貴様らは我が最大の技にして、一千億Vの拳で葬ってくれよう。プラズマクロウ！」

自然の雷を軽く凌駕する一千億Vの電撃の拳、プラズマクロウが放たれ、電撃を受けてふらついている星矢達はよけられずに直撃した。

星矢達「うわあああつ!!」

ファイネの電撃の拳は黄金聖衣に限りなく近づけた星矢達の聖衣さえ簡単に砕き、猛烈な電撃をまともに受けた星矢達はまともに立っていないほどのダメージを受けた。

瞬「星矢、紫龍、氷河！」

星矢達が倒された事に未来達は衝撃を受けていた。

未来「星矢さーん!!」

星矢達を立てない状態にした後、ファイネは憎んでいる星矢に狙いを定めた。

ファイネ「ペガサス、まず貴様から殺してやる…！」

ところが、風がファイネの体に絡みつくように拘束していた。

ファイネ「これは…」

瞬「ファイネ、あなたは二課のみんなを完全にだましたわけじゃないはずだ。だから、もう一度了子さんとして」

ファイネ「ふん、貴様は兄に勝るとも劣らぬ才能を持ちながら、その甘さで全く生かせていない。その程度の技で私の動きを封じる事ができたと思うな！」

突如瞬の足元からネフシユタンの鎧の鞭が出てきて瞬を拘束した。

瞬「そんな！地面から出てくるなんて！」

ファイネ「立場逆転だな。貴様は本当に甘い。今まで見てきた聖闘士の中でも最も甘い！」

そう言った後、もう片方の鞭で瞬の脇腹を貫いた。

瞬「がはっ…！」

ファイネ「邪魔をしたから貴様を殺す！」

ファイネは片方の鞭で瞬の首を締め、両方の鞭で首を落とし、体を引き裂こうとした。

瞬「うわっ、うわああああっ!!」

ファイネ「ふはははっ!ちよつとでも力を入れれば貴様の首は落ち、体は引き裂かれるぞ。行くかな?ポトリと」

そのままファイネは瞬の首を落そうとした。ところが、ある乱入者により、鞭は焼き切られたのであった。

ファイネ「何!?(それに…この攻撃的な小宇宙は…)」

小宇宙が使えない了子の肉体でも小宇宙を感じる能力は使えたのか、感じた事のある小宇宙に気付いた。

???「ファイネ、星矢達を…特に瞬を殺そうとしたことは絶対に許さんぞ!」

攻撃的な小宇宙と共に一輝が姿を現した。

ファイネ「貴様は…フェニックス!」

瞬「兄さん、やつぱり来てくれたんだね……」

一輝「ああ、勿論だ」

今度は一輝がファイネと対峙した。

瞬「兄さん、ファイネはネフシユタンの鎧と一体化しているから心臓を貫いても死なないんだ!」

一輝「何だ?!?では、あの時の違和感の正体がネフシユタンの鎧とやらと一体化していた事だったのか!」

ファイネ「そう、貴様が予想以上に早く来たから賭けでやったのだがな。フェニックスよ、貴様の幻魔拳とやらもい夢を見せてもらった。貴様は聖衣だけが永久の存在でどうされても生きて帰れる悪運が強いだけの人間。しかし、ネフシユタンの鎧と一体化した私は文字通り不死身の存在だ。貴様の技は二つとも不死身の私には通用しない。私の勝利は既に確定している」

一輝「どうかな?貴様が再生するのなら、俺は小宇宙を高め、貴様が再生できないように完全に焼き尽くすだけだ!」

ファイネ「フェニックスよ、双子座のサガとカノンの兄弟にボコボ

コにされたのを思い出すがいい、ギャラクシアンエクスプロージョン！」

フィーネはギャラクシアンエクスプロージョンを放ったが、一輝は防ぎ切った。

一輝「貴様のギャラクシアンエクスプロージョンなど、カノンの足元にも及ばん」

反撃に一輝は指先から光速の幻魔拳を放ち、フィーネに幻覚をかけた。

フィーネ「ふつ、そんな攻撃で」

一輝の光速拳が飛んできてフィーネはよけずに受け、再生させようとした。しかし、光速拳を受けた箇所は再生するどころか、どんどん朽ち果てていった。

フィーネ「そ、そんな！ネフシユタンの鎧と一体化した私が朽ち果てていくだど!?うわあああっ!!」

どンドンフィーネの体は朽ち果てていった。しかし、これは幻覚であり、それはフィーネもわかっていた。

フィーネ「フェニックス、幻魔拳は通用しないと云ったはずだ」

一輝「ふつ、これは単なる時間稼ぎ。俺の小宇宙を高めるためのなもの！」

一輝は小宇宙を高め、聖衣が黄金に輝いた。

フィーネ「面白い！ならば、我が雷で迎え撃ってくれる！プラズマクロウ！」

一輝「喰らえ、鳳翼天翔!!」

炎の拳と雷の拳がぶつかり、激しいぶつかり合いの末、どっちも吹っ飛んだ。しかし、フィーネの鎧は少しのヒビしか入らず、一輝の聖衣の方は完全に砕けてしまった。

一輝「何という威力だ…、ぶつかり合った際に黄金に限りなく近づけた鳳凰の聖衣が砕けてしまうとは…」

フィーネ「貴様は悪運が強くて最もしぶといから、サガやカノンでも送り込めない別のより複雑な異次元の迷路へ送り込んでくれるわ！アナザーデイメンション！」



一輝「うわああああっ!!」

一輝はアナザーディメンションで異次元へ飛ばされた。

瞬「兄さくくん!!」

フィーネ「お前も邪魔だ!」

瞬「うわああっ!」

ついででフィーネは瞬を吹っ飛ばした。

弦十郎「伝説の青銅聖闘士が全員倒されたとは…」

星矢達が全員倒された事に未来達はショックを受けていた。

フィーネ「さて、改めてペガサスの抹殺に専念できるな。おっと、その前に邪魔が入らんようにしなければ」

フィーネは五感を潰す光速拳で紫龍と氷河の五感を潰し、改めて星矢を抹殺することにした。

フィーネ「ペガサス…私は貴様が憎かった…!腸が煮えくり返るほど憎く思っていたぞ!!」

フィーネは何千年も抱いていたペガサスの聖闘士への憎悪を露わにし、鞭で拘束してから星矢に殴るけるの容赦のない攻撃を浴びせた。

星矢「ぐはっ!」

フィーネ「私は神話の時代のペガサスの聖闘士に負けて殺された!黄金聖闘士たる私が青銅に負けたのだぞ!それだけなら私はアテナへの憎悪を優先させただろう。だが…私が青銅に負けたという事実以外に最も許せん事がある…。それは…、貴様がアテナに想いを寄せている事だ!!」

星矢「沙織さんに…?」

フィーネ「アテナは私のあの方への愛を否定したのだぞ!それだというのに、今のアテナはペガサスを愛し、貴様もアテナを愛しているではないか!!私の神と人の愛を否定しておきながら、自分は人間と相思相愛になっている!そんなアテナとペガサスを許しておけるものか!!」

猛烈な怒りと憎しみと嫉妬でフィーネは星矢を攻撃し続けた。

沙織「星矢…!」

美衣「いけません、沙織様！」

美衣の制止を振り切り、沙織は星矢の元へ向かった。

星矢「…いくら自分の愛を否定されたからといって他人の愛に嫉妬するなんてみっともないぜ…。俺も沙織さんも辛い事や苦しい戦いを乗り越えてきたんだ…」

フィーネ「貴様という男は…！ならばアテナへの報復としてこの場で命を絶つてやる！」

???「おやめなさい！」

星矢に止めを刺そうとするフィーネに響いたのは沙織の声だった。

沙織「フィーネ、星矢を殺させはしません！そんなに私が憎いのであれば、星矢ではなく私の命を奪いなさい！」

フィーネ「わざわざ愛する男を守るために殺されにきたのか…。ならば貴様が死ねえ、アテナア!!」

拘束している星矢を放り投げ、フィーネは鞭で沙織を貫いて殺そうとした。

星矢「ぐはっ…！」

沙織「星矢！」

しかし、星矢が盾になって鞭に貫かれた事で沙織は貫かれる事はなかった。

沙織「星矢、なぜ私の盾に…？」

星矢「…俺は女の人を盾にする事はできない…。それに…、沙織さんを盾にするのはもっと嫌なんだ…。女の人になるのが…男の役目だ…」

沙織「星矢…」

フィーネ「貴様ら…、私の前で愛に燃えているばかりか、月の破壊まで邪魔して!!月の破壊はバラルの呪詛を解くと同時に重力崩壊を引き起こす惑星規模の天変地異に人類は恐怖し狼狽え、そして聖遺物の力を振るう私の元に帰順するはずであった！痛みだけが人の心を繋ぐ絆！たった一つの真実のなの…！それを、それを貴様らは、貴様らはあ!!!」

沙織「痛みが人の心を繋ぐ絆というのは間違いです！人の心を繋ぐ

絆は勇気、友情、優しき、そして愛なのです！愛なき絆は強くありません！」

フィーネ「何だと!？」

星矢「それにな…、俺と沙織さんは最初は仲は最悪だったんだぜ…。色々反発し合ったりもした…。けどな…、互いを気遣ったり、共に戦う中でお互いが特別な存在だと想い合うようになったんだ…」

フィーネ「そいつが女神だからか？」

星矢「違うぞ、フィーネ…。俺は沙織さんが女神アテナだから従ってるんじゃない…。女神である前に…俺にとつてとても大切な人だから共に戦うんだ…。聖闘士は地上の愛と平和を守るのが使命だが…、身近にいる大切な人を守れないようじゃ地上の愛と平和なんて守れないんだ!!」

星矢の小宇宙の高まりにフィーネは怯んだ。

フィーネ「な、何だ!?!ペガサスの小宇宙はまだ高まるというのか!？」

星矢「フィーネ…、お前は昔は聖闘士でありながら、聖闘士の神髄を忘れてしまったようだな…。聖闘士の戦いは聖衣で決まるんじゃない…、小宇宙で決まるんだ！例えばエネルギーが無限の聖遺物を得たとしても、本物の小宇宙には及ばない!!」

そのまま星矢は自身を貫いている鞭を握り潰し、抜いたのであった。

フィーネ「この光景…、神話の時代に私がペガサスに殺された時と同じだ！それに、あの小宇宙は何だ!?!」

星矢「ペガサス、流星拳！」

セブンセンチズを超えた小宇宙にフィーネは理解できないままペガサス流星拳で吹っ飛ばされた。

フィーネ「ぶ、分散させているのにヒビが…！だが、いくら小宇宙を高めようとも私を倒す事はできないのだ！」

星矢「それでも俺は諦めない…。俺達は今まで神が相手でも最後まで諦めずに戦い、勝ってきたんだ…！例え本当に不死身の敵であっても…、俺は…、俺は絶対にあきらめない…！」

星矢に感化されるように五感を破壊された紫龍と氷河も立ち上

がった。

フィーネ「そんなバカな！五感を破壊したはずなのになぜ…!？」

紫龍「フィーネ、セブンセンスは五感を補完できるのを忘れたのか…?」

氷河「俺達も星矢と同じだ…。例えば体が粉々にされようとも…、五感を破壊されようとも…、俺達は最後まで戦う！」

星矢「燃えろ、俺達の小宇宙よ!!」

城戸邸

同じ頃、3つの黄金聖衣の修復が完了したのと同時に星矢達の小宇宙の高まりに反応し、黄金聖衣は飛んでいった。

貴鬼「黄金聖衣が！」

急に飛んでいった黄金聖衣に貴鬼は驚いた。

リディアン

飛んでいった黄金聖衣は星矢達の元に来た。

フィーネ「黄金聖衣だ?!」

星矢「貴鬼の奴、修復が完了したんだな！」

紫龍「それに、この小宇宙は懐かしい…」

黄金聖衣が近くに来たのと同時にそれぞれの黄金聖衣の後ろにアイオロス、童虎、カミュの幻影が出た。

紫龍「老師…」

氷河「カミュ…」

星矢「アイオロス…」

童虎『紫龍よ、お前は幾多の戦いを経てわしの後継者に相応しくなったな』

カミュ『セブンセンスの維持ができた今、氷河よ、お前を正当な水瓶座の黄金聖闘士として認めよう!』

アイオロス『立派になったな、星矢。今こそ新たな射手座の黄金聖闘士と認め、共に戦おう!』

各黄金聖衣に宿る前任者の魂は星矢達を正当な黄金聖闘士と認め、

それぞれに装着された。

フィーネ「ふん、今更黄金聖衣を纏った所で」

星矢「アイオロス、お前から受け継いだ技を使わせてもらうぞ！アトミック・サンダーボルト！」

聖衣を通してアイオロスから継承した技、アトミックサンダーボルトが放たれた。

フィーネ「うわあああっ!!」

アトミックサンダーボルトをまともに受けたフィーネは大きく吹っ飛ばされ、ネフシュタンの鎧も今まで以上に破壊されていた。

フィーネ「そ、そんなバカな！黄金聖衣を纏っただけで黄金聖衣の4倍もの強度になったネフシュタンの鎧が！」

紫龍「さつきも言ったはずだ、フィーネ！聖闘士の戦いは小宇宙で決まると！」

星矢「その様子ではお前は聖闘士の頃はエイトセンスには至らなかったようだな」

フィーネ「エイトセンスだと!？」

氷河「それを身に付けたからこそ、俺達は生身で冥界へ行き、ハーデスとの戦いを完全に終わらせる事ができたんだ！」

フィーネ「おのれ！だが、私は不滅だ！ネフシュタンの鎧の神髄は再生にある！」

星矢の攻撃による鎧の破損が再生してしまった。

星矢「再生するのなら、再生が追いつかなくなるほどの攻撃を加えればいいだけだ！仕切り直しだ、フィーネ！」

新たな黄金聖闘士となった星矢達とフィーネの戦いが再び始まった。

## 16話 最終決戦

リディアン

エイトセンシズまで小宇宙を高め、黄金聖衣を纏った星矢達の猛攻にファイネは押されていた。

ファイネ「これが…私が達する事ができなかったエイトセンシズなのか!？」

紫龍「その通りだ!」

氷河「小宇宙を使えない肉体に慣れ過ぎたせいで小宇宙の事を割と忘れていたようだな!」

ファイネ「だが…貴様らが」

???「俺も忘れてもらったら困るな」

その声と共に一輝が姿を現した。

星矢「一輝!」

ファイネ「そんなバカな!より複雑な異次元の迷路からどうやって脱出できた!？」

一輝「甘いな、ファイネ。俺はかつて、サガのアナザーディメンションやカノンのゴールドデントライアングルから生還した事のある男だ。それに、聖闘士に一度見た技は通用しないのだ!」

ファイネ「おのれ…!」

瞬「兄さん…、僕も戦うよ…。みんなが戦っているのに、僕だけへばってたら笑われるからね…」

一輝が異次元から帰還し、瞬も立ち上がって伝説の青銅聖闘士は集結し、反撃が始まった。星矢達の猛攻に未来達は希望に溢れていた。

弓美「凄い、凄いよ!これこそアニメである大逆転よ!」

創世「これなら、あいつを倒せるんじゃない?」

これなら勝てると喜ぶ一同であったが、沙織と美衣は喜んでいなかった。

未来「沙織さん、どうしたんですか?」

沙織「…この場で星矢達が勝っても一時しのぎにしかありません」

弓美「えっ?どういいう事?」

沙織「例えファイネをここで倒したとしても、別のファイネの血を引く人間が新たなファイネとして目覚め、更に増幅された怒りと憎しみを私達に向けてくるでしょう」

詩織「では、どうにもならないじゃないですか!」

弦十郎「この場で勝っても負けても戦いは終わらないというのか…」

沙織「星矢達では倒す事しかできないでしょう。この戦いを終わらせるカギは…響さんしかいません!」

その言葉に衝撃が走った。

未来「響が…?」

沙織「響さんはこれまで一人で戦い続けてきた翼さんや敵であったクリスと手を取り合い、共に戦う事ができたのです。響さんなら神話の時代から続くファイネの私と星矢に対する激しい憎しみに満ちた心を救い、戦いを終わらせる事ができるはずです」

慎次「ですが、響さん達は五感を破壊されて何も伝える事ができないんです」

???「あつ、あの時のお姉ちゃんだ!」

すると、シエルターから響が助けた少女やその母親、生存者達が出てきた。

創世「ビッキーの事、知ってるんですか?」

母親「詳しくは言えませんが、うちの子はあの子に助けていただいたんです。自分の危険も顧みずに助けてくれたんです。きっとそのほかにもそういう人達が…」

少女は五感を破壊されて動けない響をゆすった。

少女「お姉ちゃん、起きてよ。起きてったら」

詩織「ごめんなさい、響さんは五感を破壊されて何も聞こえず、見えず、感じないんです…」

少女「五感?よくわからない。お姉ちゃんを応援して立ち上がらせようよ」

弓美「でも…」

沙織「この子の言う通り、そうしましょう」

弓美「でも沙織さん、ビッキー達は五感が…」

未来「こうなつたら、沙織さんに頼むしかないよ。沙織さん、何とかならないのでしょうか？」

沙織「五感が破壊されているのであれば、私が小宇宙を通してあなた達の伝えたい事を伝えます」

未来「お願いします！」

沙織「司令達はシエルターから何か響さん達を勇気づけるための歌か何かを流していただけじゃないでしょうか？」

弦十郎「歌？それは…」

創世「リディアンの校歌でどうかな？」

弓美「賛成！それしかないよ！」

弦十郎「わかった。俺達はリディアンの校歌を流す準備をする」

美衣「未来さん、あなたは沙織お嬢様と共に小宇宙を通して響さん達に語り掛けてください」

未来「わかりました！」

創世達は校歌を流す準備に向かい、美衣は五感を破壊されて動けない響の傍に同じく五感を破壊されて動けない翼とクリスを安置させ、手を握らせた。未来は沙織の元へ来た。

沙織「何も複雑な作業などは必要ありません。私が伝えるのであなたは私の手を握り、念じてください」

未来「はい」

未来は沙織の手を握り、念じたのであった。そして、弦十郎達はリディアンの校歌を流す準備を行い、弓美達が歌う校歌を流したのであった。

???

フィーネになすすべもなく負け、五感を破壊された響は現実に打ちのめされ、戦う意志を失っていた。

響「何も見えない…、何も聞こえない…、何も感じない…。翼さん…、クリスちゃん…、2人とももういない…。学校も壊れて…みんないなくなつて…私…、私はなんのために…、なんのために戦っている…



?みんな…」

??? 『あなたは何も失ってなどいません』

響の精神世界に沙織が現れた。

響 「沙織さん…。何も聞こえないし、見えないのにどうして…?」

沙織 『あなたの五感が破壊されているので、小宇宙を通して話しかけています。未来さん達は私達が助けたお陰で無事です。五感を破壊されたあなたが立ち上がるのを待っています』

沙織の隣に未来が出てきた。

響 「未来…」

未来 『響、私達は無事だよ。響が戻ってくるのを待っている』

響 「みんな無事なんだ…。でも…、翼さんとクリスちゃんが…」

沙織 『2人もあなたと同じように五感を破壊されて動けないだけです。2人と共に立ち上がるのです』

響 「でも…、私達は了子さんに全く勝てなかった…」

沙織 『確かにあなた達の力はフィーネには遠く及ばないのでしよう。ですが、星矢達がフィーネを倒したとしても、フィーネは再び復活を遂げて私達を更に憎みます。その連鎖を断ち切り、この戦いを終わらせるためにも響さんの力が必要なのです』

響 「私の…力が…?」

未来 『響の人助けで救われた人は初めて響がシンフォギアの力を使った時に助けた子を始めとして多くいるのよ』

沙織 『だからこそ、あなたの人助けでフィーネの心を救ってください。あなたがやるべき戦いは敵を倒すための戦いではありません、止めるための戦いなのです』

響 「止めるための…戦い…?」

未来 『聞こえる?リディアン』の校歌が』

耳を澄ましてみると、沙織の小宇宙を通して弓美達が歌うリディアンの校歌が聞こえてきた。

響 「聞こえる…、みんなが歌う校歌が…」

未来 『みんな響や翼さん達のためにできる事をしているの。そして、星矢さん達は傷つきながらも戦い続けている。だから…、響も負

けないで!』

校歌に励まされた響は未来が差し出した手を握り、立ち上がった。翼とクリスも五感を破壊され、打ちのめされていた。2人の精神世界に響と未来を連れ、沙織が来た。

翼「立花…」

響「翼さん、クリスちゃん、行こう。みんなを守りに」

クリス「そんな事言っちゃって、あの化け物にどうやって勝つんだよ…?」

翼「勝つ秘策はあるのか…?」

響「それはわからない…。でも…、倒すための戦いじゃなくて、止めるための戦いをしたいんだ」

翼「止めるため…」

響「私達は星矢さん達のような力はないのかも知れない。でも、このまま星矢さん達が了子さんを倒しても憎しみの連鎖は続くだけで沙織さんが言ってたんだ」

クリス「憎しみの連鎖…、瞬もそんな事言ってたな…」

響「だから、私は了子さんを止めたい。こんな争いを終わらせたいから」

そんな響の手を翼とクリスは握った。

翼「私も防人だ。力なき人々を守るためにも、こんな戦いを終わらせるためにも共に戦おう」

クリス「もうこうなったらとことん付き合おうぜ」

響「翼さん…、クリスちゃん…!」

3人は円を描くように手を繋いだ。

翼「私達1人1人では力は弱いだろう」

クリス「けど、力を合わせりやどうにかなるかも知れねえ」

響「私達も星矢さん達と一緒に戦いたい。了子さんを止めるために!」

そんな3人に反応するかのように3人の体が眩い光を発し始めた。

クリス「何なんだよ、これ!」

翼「今まで感じた事もない不思議な力だ…」

響「体の中に…宇宙を感じるみたい…！」  
その光はさらに輝きを増していった。

リディアン

星矢達とファイネの戦いの最中にリディアンの校歌が流れた。

ファイネ「何だ、こんな時に聞こえてくる不快な歌は?！」

ただでさえ星矢達に押されて余裕がないファイネはリディアンの校歌が聞こえて不機嫌になっていた。

ファイネ「歌…、だと…?！」

そんな時、五感を破壊されて倒れていた響達の体が眩い光に覆われた。

ファイネ「な、何だ!?!」

光を発してから、響達は立ち上がった。

未来「響!！」

響「沙織さん、未来、それにみんな、私に声を届けてくれてありがとう!おかげで私は戦えるよ!」

翼「さっきまでと違って目も見えるし、耳も聞こえたりするようになったぞ!」

クリス「それに、シンフォギアとも違う不思議でとてつもない力が漲ってくるぜ!」

死の淵から蘇った響達は新たな力が目覚めていた。

ファイネ「そんなバカな!あの3人は小宇宙に目覚めたともいえるのか!?!私がかつて黄金聖闘士になる時でさえ、セブンセンスへの覚醒と維持で何年もかかったのだぞ!それなのに、まだ奴等は小宇宙を扱う訓練さえしていないのになぜ目覚めた!?!」

星矢「よそ見をしている場合か!?!」

そう言われてファイネは攻撃を受けた。

ファイネ「おのれ…!こうならば貴様ら全員の五感をまた破壊してくれるっ!今こそシャカの最大奥義を使う時だ!」

一輝「シャカの最大奥義だ?!?もしかや…!」

ファイネ「受けよ、天舞…ううっ…!」

ところが、突如としてネフシユタンの鎧に異変が起き、鎧の一部が勝手に抜け出すように離れ、その鎧の一部は黄金の輝きを放ち、タナトスに壊される前の乙女座の黄金聖衣へと姿を変えた。

瞬「あれは乙女座の黄金聖衣！」

紫龍「取り込まれている間に直っていたのか？」

ファイネ「なぜだ!? 乙女座と獅子座の黄金聖衣は砕けた状態から取り込んだのに、なぜこんなに完全な状態に!？」

???『ふっふっふっ、君は私に利用されていたのだよ』

ネフシユタンの鎧から分離した乙女座の黄金聖衣の背後に前任者、乙女座のシャカの幻影が現れた。

ファイネ「貴様は…シャカ！」

シャカ『聖遺物で聖衣を取り込むのはなかなかのアイデアであったが、君に従順な蛇遺座の黄金聖衣はともかく、そうでない黄金聖衣を3つも取り込んだのは失敗であったな。君に尽くしている蛇遺座の黄金聖衣は獅子座と双子座の二つまでしか押さえつけられていなかったのだよ』

ファイネ「まさか、聖衣を再生させるためにわざと抜け出さなかったとしてもいいのか!？」

シャカ『その通り。さて、本来であれば私の後継者の瞬に力を貸したい所だが、今回は特別に私と同じ守護星座を持つ者に力を貸すとしてしよう』

そう言つて乙女座の黄金聖衣は響の所に来た。

シャカ『立花響よ、君と仲間達は五感を破壊され、心肺停止に追い込まれるという極限状態から復活した事により、私や星矢達も知らない未知の強大な小宇宙に目覚めた。よって、力を貸すとしてしよう』

響「ええっ!?! この不思議な力って星矢さん達が使っている小宇宙!?!」

シャカ『いかにも。それに、他にも力を貸しに来た黄金聖衣が来ているぞ』

その言葉と共に山羊座の黄金聖衣と牡羊座の黄金聖衣が来た。

翼「黄金聖衣が二つも！」

そして、前任者の幻影が出てきた。

シユラ『お前の剣や防人とやらの姿勢が気に入った。力を貸すぞ』  
翼「済まない」

ムウ『あなたの戦闘スタイルは肉体を武器に戦う聖闘士と全く異なりますが、力を貸しましょう』

クリス「てめえと戦闘のスタイルが違ってて悪かったな！」

フィーネ「そのまま纏うというのか？ペガサス達と違ってそいつらは小宇宙の扱った経験さえないのだ。纏えるはずがない」

シユラ『確かに、あの3人は小宇宙を扱う訓練を受けていない』

ムウ『ですが、ある方法で纏う事ができます』

シヤカ『奏者達よ、今こそ戦いの歌を歌いたまえ！』

響「はい！」

3人は手を握った。すると、響からオレンジの光が、翼から青い光が、クリスから赤い光が放たれた。

フィーネ「な、何だ!?何が起ころうとしている!?何を支えに立ち上がった!?何を握って力と変える!?先程の不快感のしわざか?そうだ、お前が纏っているものはなんだ?五感は破壊し、心は降り砕いたはず…なのに…、何を纏っている!?それは私が造ったものか!?お前の纏うそれは何だ!?何だのだ!?!」

そう言っている間に乙女座の黄金聖衣は響の光に、山羊座の黄金聖衣は翼の光に、牡羊座の黄金聖衣はクリスの光に取り込まれ、3人はパーソナルカラーの部分以外は黄金に輝く新たな姿と化したギアを纏った。

響「シンフォギアーーーーー!!!」

新たなギアの姿に一同は見とれていた。

少女「お姉ちゃん、かっこいい!」

美衣「まるで、太陽のようです…!」

弓美「やっぱ、あたしらがついてないとダメだなあ」

詩織「助け、助けられてこそナイスです」

創世「私達も一緒に戦ってるんだ」

その言葉に未来と沙織は頷いた。

フィーネ「シンフォギアと黄金聖衣の融合だ?!?そんな機能はないはずだ!」

シャカ『ふつつつつ、聖遺物と聖衣の融合が信じられないようだが、君自身が既に聖遺物と聖衣の融合をしたではないか』

フィーネ「な…!」

シンフォギアと聖衣の融合が信じられないフィーネだったが、聖遺物と聖衣の融合は既に自分がやったという事実フィーネは返す言葉もなかった。

星矢「響達の小宇宙の覚醒とシャカの言葉を聞いてもまだ信じられないのか?響達がセブセンシズでもエイトセンシズでもない未知の強大な小宇宙に目覚めたのは響達だけの奇跡じゃない、沙織さんや未来を始めとするみんなの力で起こした奇跡なんだ!そして、もう一つの奇跡がシンフォギアと黄金聖衣の融合だ!」

フィーネ「高レベルのフォニックゲインによる限定解除と黄金聖衣の融合である姿…!私も知らない未知の小宇宙に目覚めたからといって凶に乗るな!」

そう言つてフィーネはソロモンの杖でノイズを召喚した。

クリス「いい加減芸が乏しいんだよ!」

翼「世界に尽きぬノイズの災禍も全てお前の仕業なのか!」

フィーネ「ノイズとは、バラルの呪詛によつて相互理解を失った人類が同じ人類を殺戮するために作り上げた自律兵器」

響「人が…、人を殺すために…?」

紫龍「なるほど、それで人間だけを殺すのか」

フィーネ「バビロニアの宝物庫は扉が開け放たれたままでな、そこからまるびいずる10年に1度の偶然を私は必然と変え、純粹に力と使役しているだけの事」

クリス「またわけわからねえ事を!」

ノイズが襲ってきたが、小宇宙を少し解放ただけで消滅した。

フィーネ「落ちろ!」

フィーネは今までとは比較にならないほどノイズを大量に召喚した。

翼「あちこちからノイズが！」

氷河「ノイズの群れは俺達に任せて、お前達はフィーネへのリベンジを果たせ！」

クリス「何でだよ!？」

星矢「お前らはフィーネにボロ負けしたのが悔しくないのか？」

クリス「ああ、とても悔しいさ！そこまでリベンジをしてほしいのなら、やってやらあ！」

響「ノイズの方は頼みます！」

瞬「任せて！」

一輝「では、行くぞ！」

星矢達は光の速さでノイズの方へ向かった。

星矢「まずは俺からだ！ペガサス、流星拳！」

流星拳でノイズは蹴散らされた。

氷河「聖衣を通して代々の水瓶座の聖闘士が受け継いできた技を使うぞ！グランカリツオー！」

聖衣を通して歴代の水瓶座の聖闘士の技を継承した氷河は新たな技、グランカリツオーで蹴散らしていった。瞬の方はチェーンさばきで、紫龍と一輝は光速拳で次々とノイズ達を一掃していった。

一方、響達はフィーネと対峙していた。

フィーネ「貴様ら…、まさか本気で私に勝てるとも思っているのか…？」

クリス「ああ、本気さ！」

翼「さっきのようにはいかんぞ！」

響「了子さん、私達が了さんの憎しみの連鎖を止めます！」

フィーネ「またさっきのようにしてくれるっ！」

フィーネは光速拳を放った。

響「（見える…、さっきまでと違って了さんの拳が見える…!）」

未知の強大な小宇宙に目覚めた事で響達はフィーネの光速拳を見切る事ができた。

フィーネ「私の光速拳をかわしただど!？」

響「ガングニール流星拳!!」

フィーネの光速拳をかわして響は星矢のペガサス流星拳を真似た技、ガングニール流星拳を放った。光速拳と化したその拳は乙女座の黄金聖衣が抜けて強度が黄金聖衣の3倍に低下したネフシユタンの鎧にも大きなヒビを入れ、フィーネを吹っ飛ばした。

フィーネ「うわあああつ!!」

ガングニール流星拳をまともに受けたフィーネを大きく吹っ飛ばされ、壊されたカ・ディングルにぶつけられた。その体は鎧のあちこちが砕け、フィーネも血を吐いていた。

フィーネ「わ…、私がダメージを…!?おのれえ!」

さつきまでは攻撃を受けてもノーダメージだったフィーネはダメージを受けた事に衝撃を受けていた。そして、反撃で鞭を振るった。

響「(何だろう?今まで習得した事のない技が頭の中に浮かんでくる…!)カーン!」

シャカの技、カーンで響は自分に向けられたネフシユタンの鎧の鞭を跳ね返し、跳ね返った鞭はフィーネを貫いた。

フィーネ「がはっ…!私の攻撃が…跳ね返された…!」

今度は翼が迫った。

シユラ『翼よ、自分を剣と称するのなら、己の肉体を刃と化せ!』

翼「心得た!」

フィーネ「切り刻んでくれる!」

翼「切り刻まれるのはお前の方だ!聖剣抜刀!」

翼はシユラの技エクスカリバーを漢字に訳し、小宇宙で自分の腕を聖剣のような切れ味の鋭い手刀へと変え、ネフシユタンの鎧の鞭を容易く切断し、次は足の装備を小宇宙で更に鋭利にし、フィーネを切り裂いた。

フィーネ「うわあああつ!!」

切り裂かれたフィーネだが、すぐに再生して元通りになった。

フィーネ「我が雷に焼かれるがいい!」

激怒したフィーネは電撃を放った。

クリス「こんなもんはこうしてやる!クリスタルウォール!」



ギアの装備からビットを放ち、そのビットが小宇宙による防御壁を発生させ、電撃を跳ね返した。

フィーネ「また跳ね返されただ?!」

慌ててフィーネは跳ね返った電撃を防いだ。

クリス「これも持っていきな! スターダストレポリューション!」  
ビーム砲を構えて膨大な小宇宙をチャージし、強力なビームを発射した。

フィーネ「こんなもの…、うわあああああ!!!」

強力なビームの前にフィーネは弾く事もできずに吞まれていった。

クリス「どんなもんだい!」

煙が晴れるとそこにはネフシュタンの鎧があちこちヒビだらけで砕けており、ボロボロのフィーネの姿があった。

クリス「へつ、さつきと立場が逆転した気分はどうだ? 今度はあたらがあんたを頭を踏んづけてやる!」

そんな時に星矢達もノイズを始末し終わって帰ってきた。

星矢「やったな、響! 初めて小宇宙を使った感想はどうだ?」

響「はい、とても不思議な感覚です! ようやく星矢さんと肩を並べて戦えるようになった気分です!」

もう勝負は終わったも同然だと一同は思っていた。ところが…

フィーネ「凶に乗るな、小僧と小娘共が! こうなれば最後の手段だ…!」

完全に激怒したフィーネは自らの体にソロモンの杖を突き刺した。

翼「何!?!」

氷河「一体、何をやる気だ?」

すると、ノイズ達が次々とフィーネを覆っていった。そして、新たに召喚されたノイズも覆っていった。

響「ノイズに取り込まれている…?」

クリス「そうじゃねえ、あいつがノイズを取り込んでるんだ!」

大量のノイズを吸収したフィーネは巨大な竜の姿、黙示録にある赤き竜ヒウンベイバロンとなり、塔のような箇所にはフィーネがデュランダルを持った状態で佇んでいた。

弦十郎「黙示録の赤き竜、ヒウンベイバロン。だが、黄金の姿をしている…」

しかし、色は黄金聖衣やゴールドノイズを取り込んでいるため、まさしく黄金だった。

創世「そんな…今度は黄金の化け物になるなんて…!」

未来「それでも、響や星矢さん達は負けない…!」

未来は沙織や美衣と共に響達の勝利を信じていた。

星矢「なんてデカさなんだ!」

そして、竜がビームを発射すると、街やその近くの山が一瞬で吹っ飛んでしまった。

響「街が!」

一輝「これは恐ろしい化け物だ…!」

フィーネ「貴様らは私の逆さ鱗に触れまくったのだ。相応の覚悟はできておろうな…?」

紫龍「悪党の逆鱗などに興味はない!」

星矢「そんな鱗なんてはぎ取ってやるぜ!アトミックサンダーボルト!」

響「ガングニール流星拳!」

星矢はアトミックサンダーボルトを、響はガングニール流星拳を放ったが、黄金の竜と化したフィーネにはあまり効いておらず、すぐに再生した。

星矢「あまり効いてないだど!?」

響「どうして?」

フィーネ「当然だ。ゴールドノイズを取り込んだから、貴様ら自慢の小宇宙への耐性もついた。さっきのようにはいかんぞ!」

プラズマクロウの最大出力の一千億Vもの電撃をビーム状に収束させ、竜は放った。星矢と一輝は聖衣の翼を広げて空を飛んでかわし、紫龍達もかわしたが、竜は星矢と一輝、奏者達には電撃のビームを連射してきた上、紫龍達は鞭で阻んできた。

一輝「あれに当たるな!あの一千億Vもの電撃に当たったら俺や星矢達はともかく、お前達だと1発で感電死するぞ!」

クリス「くそっ！あたしらはあれに当たったら1発でアウトかよ！」

星矢と一輝、奏者一同は必死でかわしており、紫龍達も苦戦していた。

瞬「これじゃ近づけないよ！」

ファイネ「いくら未知の小宇宙に目覚めて黄金聖衣と融合して限定解除されたギアを纏った所で聖遺物の欠片から作られた玩具。黄金聖衣3つと融合した完全聖遺物に対抗できると思うな！」

その言葉に翼とクリスはある打開策が閃いた。

星矢「何か奴を倒す秘策でも閃いたのか？」

翼「ああ。だが、そのためには……」

翼とクリスは響の方を見た。

響「あ、えつと……やってみます！」

一輝「失敗は許されないぞ。心してかかれ！」

そう言つて一輝は星矢、翼、クリスと共に前に出た。

翼「我々で露を払う！」

クリス「手加減なしだぜ！」

ファイネ「そう上手く行くかな？」

???「オーロラエクスキューション!!」

ファイネは再びビームや鞭での攻撃を始めた。ところが、鞭の攻撃を行おうとした所、猛烈な凍気で完全に凍ってしまった。

ファイネ「これは……明らかに絶対零度を超えた凍気……」

その絶対零度を超えた凍気を放って援護してくれたのは氷河だった。

氷河「俺達もアシストするぞ！」

紫龍「廬山百龍覇!!」

瞬「ネビュラストーム！」

凍った鞭を紫龍と瞬が砕いて星矢達の進行をアシストした。

星矢「一輝、俺達は道を開けるぞ！」

一輝「ああ、鳳翼天翔!!」

星矢「もう一つのアイオロスの技を見せてやる！インフィニティブ

レイク!!」

生前にアイオロスが使用した技、インフィニティブレイクを放ち、一輝の鳳翼天翔と共に竜にぶつけて風穴を開けた。

一輝「次は俺だ!」

風穴を開けた隙に一輝はフィーネに幻魔拳を放った。

フィーネ「そんな幻覚が今更:」

一輝「さっきの幻魔拳の意図がわかってないようだな」

フィーネに放った幻魔拳はあくまでも時間稼ぎに過ぎず、本当の狙いはクリスと翼を懐に入れさせるためだった。そして、翼の蒼ノ一閃とクリスのビームを受けて爆発し、デュランダルが吹っ飛んだ。

翼「そいつが切り札だ!勝機をこぼすな、掴みとれ!」

響の元へデュランダルが行くようにクリスが射撃でコントロールしてくれた。それから響はデュランダルをキャッチした。

フィーネ「デュランダルを!」

ところが、以前と同じように破壊衝動に吞まれて暴走しようとしていた。

未来「沙織さん、さっきのように響に私の声を届けてください!」

沙織「わかりました。皆さんも響さんに声を届けてください!」

沙織の指示に従い、一同は響に声を届けた。

弦十郎「正念場だ、踏ん張りどころだろうが!」

慎次「強く自分を意識してください!」

朔也「昨日までの自分を!」

あおい「これからとりたい自分を!」

響「みんな:」

何とか破壊衝動に抗っているが、いつ暴走してもおかしくなかった。そこへ、翼とクリスが傍に来た。

翼「屈するな、立花!お前が見せてくれた胸の覚悟、見せてくれ!」

クリス「お前を信じ、お前に全部賭けてんだ!お前が自分を信じなくてどうすんだよ!」

詩織「あなたのお節介を!」

弓美「あんたの人助けを!」

創世「今日はあたし達が！」

美衣「だから響さん、負けないでください！」

そうしている間にも黄金の竜は再生していた。

フィーネ「おのれ！こうなれば最大出力の一兆Vの電撃で葬ってくれるっ!!」

その様子は星矢達も気付いていた。

紫龍「まずいぞ！一兆Vもの電撃が放たれたら響達でも持たん！」

氷河「俺達で食い止めるぞ！」

瞬「兄さん、星矢！」

星矢と一輝は地上に降り、集合した。

紫龍「みんな、フィーネの一兆Vもの電撃に対抗するには……」

一輝「俺達の小宇宙を高めて放つしかないな」

瞬「その撃ち手となるのは……」

4人の視線は星矢に集まった。

星矢「撃ち手は俺に任しとけ！俺達の小宇宙を込めた黄金の矢で一兆Vもの電撃を打ち破る！」

紫龍達は弓矢を構える星矢の元に集まり、星矢は黄金の竜へ狙いを定めていた。

フィーネ「貴様らから死にたいのか？よかろう、一兆Vの電撃でペガサスと仲間達から死ね！」

フィーネは狙いを響から星矢へ変更し、ビーム状に収束させた一兆Vもの電撃を放った。

星矢達「燃え上がれ、俺達の小宇宙!!」

星矢達は声を合わせ、小宇宙を更に高めた。

星矢「受ける、フィーネ！コズミックスターアロー!!」

5人の高まった小宇宙を込めて放たれた星矢の新しい技、コズミックスターアローは一兆Vの電撃を打ち破って黄金の竜をも貫き、大ダメージを与えた。

フィーネ「うわああああっ!!」

星矢「今だ、響!!」

沙織「響さん！」

未来「響ー！！」

響の陽だまりと恩人2人の声が響に届いた。

響『そうだ、今の私は…私だけの力じゃない!』

創世「ビツキー!」

弓美「響!」

詩織「立花さん!」

響「そうだ…この衝動に、塗りつぶされてなるものか!」

それと共に響の暴走は止まり、小宇宙の高まりと共に翼が生えた。

響「翼さん、クリスちゃん、私達の小宇宙を燃やすよ!」

デュランダルを上上げると、デュランダル自体のエネルギーと響達の小宇宙で更にエネルギーの刀身が太くなり、長さも宇宙まで届くほどになった。

フィーネ「その力、何を束ねた!?!」

響「響き合うみんなの歌声がくれた、この小宇宙とシンフォギアでー！！！！」

小宇宙との相乗効果で更に光輝くデュランダルを振り下ろす技、Synchrorgazerを放った。

フィーネ「舐めるなあ!!」

最後のあがきでフィーネは再び一兆Vもの電撃を放ったが、振り下ろされた刀身は電撃を打ち破り、黄金の竜を一刀両断した。

フィーネ「完全聖遺物同士の対消滅…!どうしたネフシユタン!?!再生だ!この身が砕けてなるものかー！！！！」

両断された黄金の竜は大爆発を起こした。戦いは響達の勝利に終わったのであった。

## エピローグ 新たなる黄金聖闘士

リディアン

ファイネとの戦いが終わり、金色の竜が爆散した場所に星矢達は集まっていた。

一輝「ふつ、あのような悪党に対しても分かり合えると考えている響は相変わらず甘いな」

瞬「でも、それがあの子のいい所でもあるんだよ、兄さん」

一輝「お人好しな瞬に言われると納得せざるを得ないな…」

瞬の言葉には一輝も納得して微笑んでいた。

響「了子さん、もう終わりにしましょう。それに…何で沙織さんと星矢さんをあんなに」

ファイネ「アテナとペガサスを憎んで何が悪い!? 奴等は…私のあの方への愛を否定し、自分達は神と人間の愛を育てていたのだぞ! 神話の時代でも…現代でも…」

憎しみと怒りを露わにしながらも、ファイネは泣いていた。そんなファイネの手を響は握った。

響「私、恋なんてよくわからないけど…このように手を取り合う事はできるはずですよ」

ファイネ「ノイズを作り出したのは先史文明期の人間。統一言語を失った我々は手を繋ぐ事よりも相手を殺す事を選んだ。そんな人間が分かり合えるものか…」

響とファイネの手を今度は沙織が握った。

沙織「分かり合える可能性はゼロではありません。あなたの言う通り、バラルの呪詛によって統一言語を失った人類は古来から今に至るまで憎み合い、争い続けてきたでしょう。しかし、平和を愛し、分かり合うため、争いを止めるために尽力してきた人達も歴史の中に多数いたはずですよ。そうでなければ、人類は争いの中で死に絶えていたのですから」

ファイネ「統一言語がなくても分かり合える可能性がゼロではないだど? 楽観的な神だな…」

響「でも、沙織さんの言ってる事は間違ってるんですよ、了子さん。統一なんかなくても分かり合おうとする人達は必ずいますから」

フィーネ「その代表的な存在がお前か…」

星矢「人付き合いも初めの頃は仲が悪いつてもよくあるもんだぜ。何しろ、聖闘士としての戦いが始まった当初は俺と沙織の仲なんて最悪だったからな。けど、ぶつかり合ったり、気遣い合ったりするうちに今みたいになったって事さ。分かり合うのは難しいかも知れねえけど、諦めたらそれこそ叶わない夢じゃないのか？」

フィーネ「諦めたら…叶わない夢…？」

沙織「それに…、あなたの胸の内は痛い程わかります。私も星矢が傷つく度に心を痛めていたのですから…。本来でしたら私と星矢は神と人間である以上、隔たりがある上にいつかはあなたと同じような出来事が訪れるのかも知れません」

星矢「だけど、俺は例えどんな事があっても沙織さんの傍にいたい。それは沙織さんが女神アテナだからじゃない、神様である以前に俺の大切な人だからだ。結ばれない運命であつても、俺はそれに抗って沙織さんの傍に居続けようと思う」

フィーネ「お前達は…結ばれないのではとわかっていても傍に居続けようと思ってるのか…」

幾多の衝突や戦いを乗り越え、神と人間の間に隔たりがあるとわかっていても相手の傍に居続けたいと思ってる星矢と沙織の互いの想いが通じ合った強い愛にフィーネは自分の『あの方』への想いが片想いである事、勝手に嫉妬した自分の身勝手さ、弱さを痛感したのであつた。

沙織「そして、本当はあなたの恋を応援したかったのですが、『神に恋心を抱いている上、神になろうとしていてる愚か者の蛇遣座の黄金聖闘士を殺せ』というゼウスを始めとする神々の命令もあつたとはいえ、あなたを裏切つて殺してしまい、何千年も私を恨み続ける原因を作った事をお詫びします…」

フィーネ「…他の神々からの…。あれは本音ではなかったのか…。そう言えば、私を抹殺する際にアテナは泣いていたな…」



フィーネは激しい憎しみで自分の心の奥底に押し込めていた過去の記憶を思い出していた。自分の恋を否定し、ペガサスを差し向けて抹殺しようとした際にアテナが涙を流していた事を。アテナが他の神からの命令とはいえ、自分の恋を否定してペガサスを差し向けて殺した事を謝罪した事にフィーネは自分を裏切り、自分の恋心を否定した事はアテナの独断ではなく他の神から命令されて立場上そうせざるを得ず、押し込めていた過去の記憶でも涙を流していて本音を隠していなかった事を知り、響が手を取り合い、沙織と星矢の2人と想いをぶつけ合った事で二人を許したのであった。

氷河「星矢の奴、いつの間に愛を語る柄になってるんだ？」

紫龍「氷河こそ、フレアとかにモテモテじゃないか」

氷河「そういう紫龍だつて春麗というかわいい彼女がいるじゃないか」

恋バナに盛り上がる紫龍と氷河であった。ところが、ネフシユタンの鎧とデュランダルに異変が起こった。

瞬「ネフシユタンとデュランダルが!？」

フィーネ「完全聖遺物同士が対消滅を始めたのだ。ネフシユタンと一体化している私の体も……」

しかし、フィーネの体には何も異変は起こらなかった。

響「何も起きませんよ」

クリス「ボケたんじゃねえか？」

フィーネ「なぜだ!?!なぜ、私の体は……」

一輝「その答えがあれじゃないのか？」

一輝が指差した方向には解放された双子座の黄金聖衣と乙女座と同じく取り込まれてからネフシユタンの鎧の中で元通りになった獅子座の黄金聖衣、そして砕けた蛇遺座の黄金聖衣があった。

フィーネ「蛇遺座の黄金聖衣が……」

紫龍「恐らく、あの聖衣がフィーネを対消滅させずに守るためにデュランダルの攻撃が来た際に最後の力を振り絞ってフィーネとネフシユタンの鎧を分離させたのではないのか？」

星矢「神話の時代から主人を待ち続け、主人に危害を加えようとし

たら襲い掛かってくるほどとんでもなく主人想いな聖衣だな」

フィーネ「：最後まで私を守ってくれたんだな：」

神話の時代に離れ離れになってからずっと自分を待ち続け、幾度となく自分を守り、そして自分とネフシユタンの鎧を分離させて対消滅から免れさせてくれた蛇遣座の黄金聖衣にフィーネは感謝の気持ちでいっぱいだった。そんな中、とある連絡が来て、美衣は驚いていた。

美衣「沙織様、NASAより緊急連絡です！このままだとカ・ディンギルによって砕かれた月の破片が地上に落下するそうです！」

沙織「何ですって!？」

フィーネ「どうする？このままだと：ごほっ！」

突如としてフィーネは血を吐いた。

響「了子さん!？」

フィーネ「気にするな：、この体の命が尽きようとしている：。だが、ここで死んで眠りについたとしても、私の血を引く者がアウフバヘン波形に触れれば何度でも復活できる：。だから：、そう悲しむ事はない：」

響「了子さん、死ぬ前に沙織さんと分かり合えてよかったですね：」

フィーネ「そうだな：。今思えば、お前達と過ごした日々も悪くなかった：。お前達が生きている間にまた会えるかどうかはわからんがな：。それからアテナよ、蛇遣座の黄金聖衣は修復したらそれを纏うのに相応しい者が現れた時、その聖衣を与えてくれ。そして、これから様々な困難が待ち受けているかも知れないが：ペガサスと末永く幸せにな：」

そう言つてフィーネの命は尽きた。しかし、その表情は神話の時代に殺された時の憎しみや悲しみに満ちたものではなく、憑き物が落ちた安らかなものだった。

翼「フィーネの命が尽きたのか：」

響「でも、了さんの表情、とつても安らかですよ：」

沙織「何千年にも及ぶ憎しみから解放されたのでしょう。氷河」

沙織に呼ばれ、氷河が出てきた。そして、フィーネの遺体を氷漬けにしたのであった。

弓美「ねえ、あれってアニメのような幻想的な光景だよな？」

未来「うん。自分がああされるのは嫌だけど…」

弦十郎「これは…？」

氷河「フリージングゴフィン。特殊な方法でなければ砕く事ができず、自然では永久に溶けない氷の棺だ」

翼「（氷河の言っていた永久に溶けない氷の棺というのはこの事だったのか…）」

フリージングゴフィンを見て、響との仲が悪かった頃に氷河の言っていた事がようやく理解できた翼であった。

クリス「これって…いわゆる氷葬って奴か？」

氷河「その通りだ。後は墓の下に埋めればそれで終わりだ」

美衣「それよりも、月の破片を破壊しなければなりません」

響「それ、私達にやらせてください！」

未来「響…」

響「心配しないで、未来。光速で向かって、素早く壊してくるから！」

紫龍「月の破片の破壊に行くなら、これを持っていけ！」

紫龍は響達に天秤座の武器を渡した。

翼「これは…？」

紫龍「天秤座の武器だ。本来、聖闘士は武器の使用が禁じられているが、アテナや天秤座の聖闘士の許しがあった時だけこの天秤座の武器を使用できる。今回は月の破片の破壊だから、それを使って破片の破壊してこい！」

クリス「ありがとな！」

響「それじゃあ、行ってくるよ！」

そう言っつて響達は光速で月の破片へ向かい、未知の小宇宙の力や天秤座の武器であつという間に月の破片を破壊して戻ってきた。

未来「ほんとにあつという間に破壊して戻って来ちゃった…」

響「未来、これで約束の…うわっ！」

突如として響達の体が光り、ギアから黄金聖衣が分離して去ってしまい、ギアはエクストライブの状態になった。

クリス「おい、何で黄金聖衣は分離したんだよ！」

一輝「あくまでもあの黄金聖衣は力を貸しただけだ。お前達を持ち主とは認めていない」

翼「そう言えば、そうだったな…」

弦十郎「これにて、一件落着だな」

一連の事件が終わり、一同はほっとした表情になった。

城戸邸

翌日、フィーネとの戦いでボロボロになったペガサス、ドラゴン、キグナスの3つの聖衣を見た貴鬼はため息をついた。

貴鬼「はあ、せつかく直した聖衣をまたこんなにも壊したなんて…」  
紫龍「すまん、貴鬼。敵が強すぎてせつかく直してもらった聖衣をまたこんなにも壊してしまった」

貴鬼「でも、きちんと直すから安心しな」

氷河「それと、俺と星矢と紫龍は沙織さんから黄金昇格を認められた。その3つの聖衣は直した後新しい世代に継がせたいと思う」

貴鬼「新しい世代か…。わかった、オイラが責任を持って直してやるからな」

星矢「それと、蛇遣い座の黄金聖衣の修復も頼むぜ」

星矢の頼みに貴鬼は頷いて修復を引き受けたのであった。

野原

そして数日後、響は未来、星矢、沙織と共に琴座流星群を見る事となった。

響「やっと未来と一緒に見れたね」

未来「うん。それに、星矢さんと沙織さんも一緒に見に来てくれたし」

星矢「それにしても、流れ星の眺めがいい特等席を見つけてるとはな」

未来「いえ、そういう訳じゃ…」

響「私の守護星座は乙女座だったけど、未来も守護星座があるのな

ら、何がいい？」

未来「私は…琴座がいい！」

その発言に星矢達は笑ったのであった。

沙織「星矢、私は家庭を持ってみたいになりました」

響「ええっ!?!沙織さんが家庭を持ちたい!?!」

星矢「けど、無理に人間と交わろうとすると他の神様が黙っちゃいないぜ」

沙織「子供を産みたいのではありません。私は…特別な運命の元に生まれた孤児の母親になりたいのです」

星矢「特別な運命か…」

沙織「そして、その子に星矢が今まで使っていたペガサスの聖衣を継がせようと思います」

未来「その子って現れるのかな?」

響「きつと現れますよ」

沙織のささやかな今後を響は肯定したのであった。

## 城戸邸

同じ頃、一輝はまたいつもの単独行動をとろうとしていたが、突如として一輝と瞬の前に乙女座の黄金聖衣が現れ、シャカの幻影が出た。

一輝「シャカ!」

瞬「死んでいるのにどうして?聖衣の宿る魂が」

シャカ『死後の世界から私が纏っていた黄金聖衣を通して話しかけているのだよ』

一輝「では、あの時喋っていたのはあの世にいるシャカ本人だったのか!?!」

シャカ『いかにも。初めはフィーネを利用してから傍観する予定だったが、私と同じ守護星座を持つ立花響の特異な小宇宙に興味を湧いて彼女に力を貸す事にした。それに、彼女には私のある技を授けた。聖遺物の力を使わない技だから、例え聖遺物に有効な攻撃が来ても防げるだろう』

瞬「その響達の特異な小宇宙って何？」

シヤカ『そこは私にもよくわからない。だが、もしかするとあの3人が覚醒した特異な小宇宙は噂に聞いた究極の小宇宙、Ωなのかも知れない』

一輝「Ωだと？」

シヤカ『実際はあの3人の特異な小宇宙がΩなのかどうかは私にもわからん。それと、立花響と小日向未来には目を光らせておけ。あの2人は何やら過酷な宿命がいずれ訪れるようなのだからな』

瞬「過酷な宿命？」

シヤカ『私の神に最も近い男としての勘なのだが、立花響と小日向未来は神に最も近い女になるばかりか、神そのものになりかねないような気がしてな』

瞬「神そのものには!？」

シヤカ『だからこそ、目を光らせておくのだ。頼んだぞ』

そう言つてシヤカの幻影は消え、乙女座の黄金聖衣は聖域へ戻つて行つた。

一輝「あの2人が…神そのものになるだと…?」

シヤカの勘に2人は衝撃を受けていた。

## 聖域

月の欠片を破壊してからしばらくした後、そして、聖域では正式に星矢、紫龍、氷河の黄金聖闘士昇格の式典が執り行われており、特別に響達も聖域に来ていた。

響「ここが聖域かあ…。そう言えば、あれから小宇宙が使えなくなっちゃった。光速で動いたら遅刻なんかしないで済むのに…!!」

美衣「響さん、あの時は奇跡が起きたからこそ、あなた達はとてつもなく大きな小宇宙が使えたのです。本来であれば、小宇宙を扱えるようになるには数年もの厳しい修行が必要なのですよ。力は楽しんで身に付くものではありません」

響「そんな事言われても…!」

未来「何だか古代のギリシヤに来たみたい…。私達も来てよろしかったのですか？」

美衣「沙織様からあなた達も来てよいとおっしゃっていたので、呼びました」

クリス「わざわざこんな事をしなくてもいいんじゃないのか？」

翼「雪音、形式においてもきちんと執り行わなければならない事だつてあるのだぞ」

そんな所へアテナとしての正装をしている沙織と射手座の黄金聖衣を纏っている星矢が来た。

沙織「私の招待に応じていただき、ありがとうございます」

響「おおつ、沙織さんのこの恰好はまさに女神様そのものだよ！」  
とても14歳とは思えない美貌とスタイルの良さ、そしてそれらを引き立たせるアテナとしての正装に響達は釘付けだった。翼の方は年下の沙織と自分のある部分の大きさの差を気にしていたが。

響「そう言えば、瞬さんと一輝さんも黄金聖闘士に昇格するのですか？」

星矢「いや、2人は昇格の話は蹴った。言い分はどっちも『今の聖衣の方が気に入ってるから、黄金聖闘士に昇格しなくてもいい』ってさ」

翼「確かに、あの二つの聖衣は星矢と紫龍と氷河の聖衣と比べても特殊だ。だからこそ、愛着があるのだろうな」

星矢「それじゃあ、指定の場所で式典を見てくれよ」

翼「心得た」

響達は指定の場所へ行き、式典が執り行われる事となった。

沙織「星矢、紫龍、氷河、あなた達は幾多の戦いの中で邪悪な敵を打ち倒していき、そして力をつけて黄金聖衣に認められました。よって女神アテナの名において、3人の新たな黄金聖闘士の誕生をここに宣言します！」

沙織の宣言にあちこちから歓声が飛び交った。

邪武「星矢の野郎、お嬢様のハートを射止めた挙句、黄金に上り詰めるなんてな…」

魔鈴「(流石だよ、星矢。まさか黄金にまで上り詰めるとはね。私もお前の師匠になれたのを光栄に思うよ)」

魔鈴は仮面の裏は弟子が黄金にまで上り詰めた事に微笑んでいるのをシャイナは察していた。

氷河「(我が師カミュ、あなたの聖衣は俺が受け継ぎます)」

紫龍「(老師、あなたからすれば俺はまだヒョッコでしょう。ですが、全身全霊で取り組んでいきます…)」

??? A『私もお前が継いでくれて嬉しいぞ、氷河。これからも地上の愛と平和のために戦うのだ』

??? B『紫龍、わしだって黄金になりたての頃はお前みたいだったぞ。だから、色々経験を積むのじゃ』

突如、懐かしい声がして紫龍と氷河は見回していたが、どこにも声の主はいなかった。

沙織「これからも地上の愛と平和のために、その力を振るって邪悪と戦ってください」

星矢「ああ！」

その星矢の返事に周囲は拍手し、響達も新しい黄金聖闘士誕生に喜んでいたのであった。